新潟県巻町

南　赤　坂　遺　跡

—縄文時代前期～中期・古墳時代前期を
主とする集落跡の調査—

2002

巻町教育委員会

序　文

巻町は国指定史跡菖蒲塚古墳を始めとして数多くの遺跡が分布するところとして知られています。巻町のシンボル角田山は、西を日本海に接し、東の麓にはなだらかな山裾台地が広がります。原始・古代の人々は、豊かな自然に恵まれたこの山麓に生活の場を求め、活発な活動をくりひろげてきました。

巻町教育委員会では、昭和45年以来埋蔵文化財の調査に取り組み、現在までに20箇所近い遺跡で発掘調査を行なっています。菖蒲塚古墳にほど近い台地の一角に営まれた南赤坂遺跡もその一つで、農地造成に伴う事業として平成５年に調査を実施しました。概要については、既に『巻町史』などの各種刊行物で公表してきたところですが、本書は発掘調査の正式報告となるものです。

南赤坂遺跡は、主として縄文時代と古墳時代に営まれた集落跡です。今回の発掘調査では、いくつかの貴重な発見がありました。縄文時代前期終末～中期初頭の「の」字状石製品は全国的にも稀な例であり、古墳時代の北方系土器は、当地での古墳文化との接触を示す優れた資料となっています。これらはいずれも平成11年に巻町文化財に指定されました。

遺跡の重要性は発掘調査の段階から注目されるところとなり、町内外の関係者からの高い関心を呼びました。本書では、実測図の提示に努めながら調査成果をまとめました。これをつうじ南赤坂遺跡が広く理解されるとともに、学術資料として活用されるよう期待します。

発掘調査では、多くの方々からご支援を賜りました。実施にあたりご理解いただいた角田山麓土地改良区、現地調査に携わった皆様、報告書作成までの間に種々のご指導・ご教示をいただいた方々に対し、深甚なる謝意を表します。

平成14年３月31日

巻町教育委員会

教育長　植　村　　敏

例　言

1　本書は、新潟県西蒲原郡巻町大字竹野町字南馬坂5348番地に所在する南赤坂（みなみあかさか）遺跡の発掘調査報告書である

2　発掘調査は農地造成に伴うもので、角田山ろく土地改良区の依頼により巻町教育委員会が実施した。

3　野外調査は、範囲確認（１次調査）を1992年８月17日～８月25日、これに基づく本発掘（２次調査）を1993年４月12日～12月27日の間に実施した。

4　発掘調査の体制は次のとおり。

調査主体：陶山朝幸（巻町教育委員会教育長）

調査担当：前山精明（巻町教育委員会学芸員）

事務局（１次調査）：富井秋雄（巻町教育委員会文化行政課課長）・若林満雄（同課参事）

〃　（２次調査）：石塚　力（巻町教育委員会文化行政課課長）

近藤義衛（同課課長補佐）・若林満雄（同課参事）

5　室内作業は、1993年５月～1994年３月に基礎的整理を行なった後、2000年５月～2002年３月の間に報告書作成に関わる本格整理に従事した。

6　本書で提示した遺物は、原則として１次・２次調査の出土資料としたが、既存資料の一部も掲載した。第８図および第93図30は、『巻町史考古資料編』からの転載である。

7　比較資料として、天神遺跡採集の「の」字状石製品（第52図166）と越王遺跡採集の管玉製作工程資料（第97図16～18）を掲載した。前者は田代ミツ氏、後者の17・18は真島伝次氏所蔵品である。

8　前掲６・７以外の資料は、巻町教育委員会が一括保管する。

9　石材および土器の胎土混入物の一部については、宮島宏氏・竹ノ内耕氏（フォッサマグナミュージアム）からご教示いただいた。

10　本書作成に際しては、前山精明と相田泰臣（巻町教育委員会社会教育課主事）が作業を分担し、矢島静江・本間慶子・設楽ちづる・朝平陽子の助力をうけた。

11　執筆分担は、序章Ⅱ－2･3・古墳時代Ⅱ－1・古代が相田、古墳時代Ⅱ－２が前山・相田、これ以外は前山である。

12　実測図版の作成は、古墳時代の土師器と古代遺物を相田、これ以外を前山が行なった。

13　発掘調査から本書作成に至るまで、下記の方々からご教示を賜った（五十音順）。

甘粕　健・石井久美子・石井　淳・石川日出志・石野　博信・井上　雅孝・上野　秀一・大沼　忠春・小野　昭・岡村　道雄・春日　真実・川崎　保・川村　浩司・菊池　徹夫・木島　勉・桑野　一幸・小嶋　芳孝・小杉　康・小林　達雄・小林　克・齋藤　基生・佐藤　信行・沢田　敦・鈴木　正男・滝沢　規朗・田中　耕作・辻本　崇夫・中野　純・中村　五郎・野村　崇・橋本　博文・橋本真紀夫・秦　光次郎・林　謙作・平口　哲夫・藤本　強・渡辺　誠

目　　次

序　　章

扉（越佐海峡から見た弥彦山と角田山）
Ⅰ　遺跡の地理…… 1
Ⅱ　遺跡群概観…… 4
1　縄文時代…… 4
2　古墳時代…… 8
3　古　　代…… 11
Ⅲ　調　　査…… 14
1　発掘調査以前…… 14
2　調査に至る経緯…… 14
3　１次調査…… 14
4　２次調査…… 17
Ⅳ　微地形と層序…… 19
1　微 地 形…… 19
2　基本層序…… 19

縄文時代

扉（南赤坂遺跡出土の「の」字状石製品）
縄文時代の概要
Ⅰ　遺　　構…… 21
1　建 物 跡…… 21
2　柱穴状ピット…… 21
3　陥穴状土坑…… 21
4　埋設土器…… 21
Ⅱ　遺　　物…… 25
1　縄文土器…… 25
（1）Ⅰ群土器…… 25
A　分類（25）．B　底部（27）．C　地文の様相（27）
D　Ⅰ群土器の位置づけ（30）
（2）Ⅱ群土器…… 30
A　分類（30）．B　底部（32）．C　地文の様相（32）
D　Ⅱ群土器の位置づけ（33）
（3）Ⅲ群土器…… 34
A　分類（34）．B　底部（57）．C　地文の様相（57）
D　Ⅲ群土器の位置づけ（57）
2　土 製 品…… 68
（1）土製玦状耳飾…… 68
（2）焼成粘土塊…… 68
3　石　　器…… 68
（1）Ⅰ群石器…… 68
A　個別用具について（68）．B Ⅰ群石器の位置づけ（77）
（2）Ⅱ群石器…… 81
A　個別用具について（81）．B Ⅱ群石器の位置づけ（88）
（3）Ⅲ群石器…… 88
A　個別用具について（88）．B Ⅲ群石器の位置づけ（90）
（4）黒 曜 石…… 91
（5）搬 入 礫…… 91
Ⅲ　結　　語…… 96

古墳時代

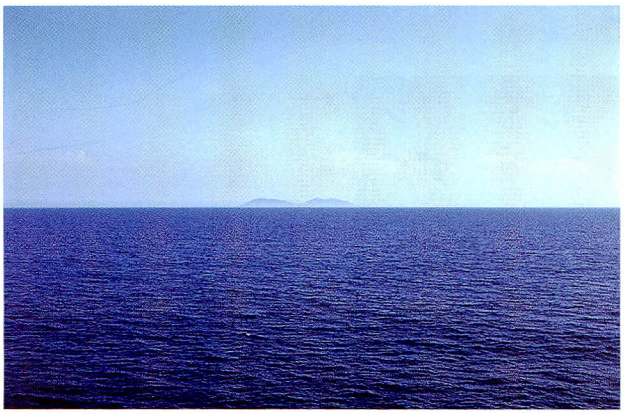
扉（西側小テラスにおける続縄文土器と土師器の出土状態）
古墳時代の概要
Ⅰ　遺　　構……99
1　西側緩斜面の遺構……99
A　1号住居址（99）．B　4号住居址（99）．C　畝状遺構（99）
2　東側尾根の遺構……103
（1）テラス遺構……103
A　下段テラス遺構（103）．B　上段テラス（104）．C　西側小テラス（104）
（2）上段テラス下土坑群……112
（3）木炭分布域……112
3　遺構の年代……114
Ⅱ　遺　　物……115
1　土 師 器……115
（1）器種分類……115
（2）遺物各説……118
A　1号住居址（118）．B　4号住居址（120）．C　テラス遺構と上段テラス下土坑群（124）
D　テラス遺構周辺斜面（131）．E　遺構外（135）
（3）土器の位置づけ……143
A　編年（143）．B 胎土（146）．C　他地域との比較（147）
D　下段テラスにおける土器の分布（153）
2　北方系土器……158
A　分類（158）．B　北方系土器の位置づけ（163）
3　管玉と製作工程資料……166
A　分類（166）．B　所属時期（168）
4　打製石器……169
A　分類（169）．B　打製石器の位置づけ（176）
5　生業関連資料……179
A　炭化種子（179）．B　籾痕土器（179）
Ⅲ　結　　語……180
参考文献……184

古　　代

扉（前平野窯跡出土の須恵器）
古代の概要
Ⅰ　遺　　構……185
Ⅱ　遺　　物……186
1　土器各説……186
A　土師器（186）．B　須恵器（190）
2　土器の位置づけ……191
Ⅲ　結　　語……193
参考文献……194

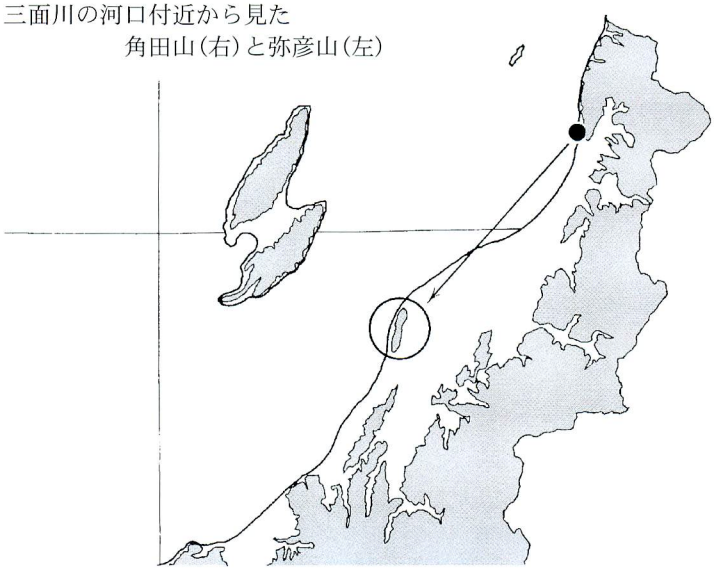
報告書抄録……195

序　　章



越佐海峡から見た弥彦山（右）と角田山（左）

三面川の河口付近から見た
角田山(右)と弥彦山(左)



角田山近景

Ⅰ　遺跡の地理

新潟平野の西縁に連なる「弥彦・角田山塊」は、角田山（481m）・多宝山（633m）・弥彦山（644m）・国上山（313m）の４主峰からなる山地帯で、その広がりは南北24km、東西4kmあまりにわたる。南赤坂遺跡は、北端角田山の東麓に所在する（第１図）。角田山麓における年平均気温は13.3度、暖かさの指数はW100度で、潜在植生としては冷温帯落葉広葉樹林帯（ブナ林）と常緑落葉広葉樹林帯（カシ林）の推移帯に位置する。冬季の最大積雪量は50cmに充たない年が多く、新潟県内では典型的な小雪地帯にあたる。

遺跡中心半径５km圏内には、多様な環境が箱庭的に展開する（第２図）。角田山は、東・西で地形を大きく異にしており、急傾斜をなして日本海に降下する西麓部に対し、新潟平野に面した東麓では、海抜30mたらずの低台地が南北４km・東西1.5kmにわたる広がりをみせる。南赤坂はこの中ほどに位置し、旧石器～古墳時代遺跡の大半も同一台地上に分布する。現在付近一帯は農地（柿畑）や植林地として利用されているが、一部に落葉広葉樹と常緑広葉樹の混成林が残存する。花粉分析に基づけば、同一様相をもつ植生の形成は縄文時代中期以前に遡ることが判明している［藤田ほか1988］。

台地下の沖積地には、山麓北東部に「新潟砂丘」が形成される。当地はこの南端にあたり、内陸側から新砂丘Ⅰ・Ⅱ・Ⅲが並走する。新砂丘Ⅰの成立は、縄文時代前期以前に求められるが、砂丘列の発達は外海からの海水を遮断し、現在の沖積地内に広大な沼沢地を展開させていった。北東麓での調査によれば、台地直下における淡水化の時期は、前期後半を下らないものと推定されている［小野編1982］。東麓台地の周辺一帯は、後背低地をなす。田面下には未分解有機物層が広範囲にわたり堆積しており、層内からは弥生時代～古代を主とする遺物が時おり確認できる。

背後に広がる海浜地帯は、角田岬を境に南部の岩礁海岸と北部の砂丘海岸に二分される。本遺跡から海岸部までの行程は、山裾ルートで徒歩１時間程度である。波打ち際には、対馬海流の北上に伴う遠距離漂着物も数多く見られ、椰子の実や韓国製品が代表的なものである。

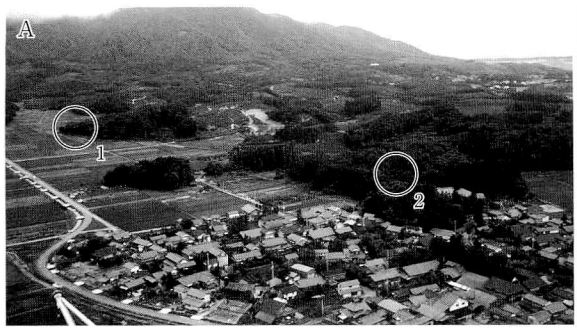
弥彦と角田の山並は、弧状をなして張り出す新潟平野の頂点に位置するところから、遠方からの眺望に優れている。海からの眺めはとりわけ印象的で、二つの島をなして望むことができる（本章扉写真）。こうした景観は日本海のランドマークにふさわしく、当地における遺跡群の形成に関わる重要な地理的背景と考えられる。

文　献

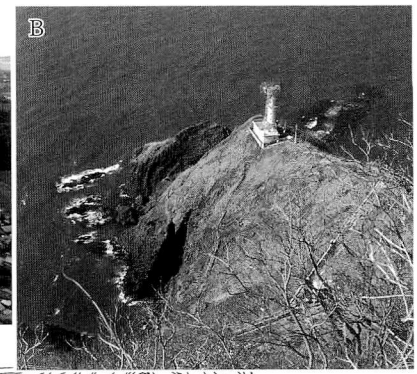
小野　昭　編　1982　『大沢遺跡・Ⅱ』　新潟大学考古学研究室

藤田英忠ほか　1988　「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究』Ⅳ　巻町

第１図　南赤坂遺跡の位置と関連主要遺跡

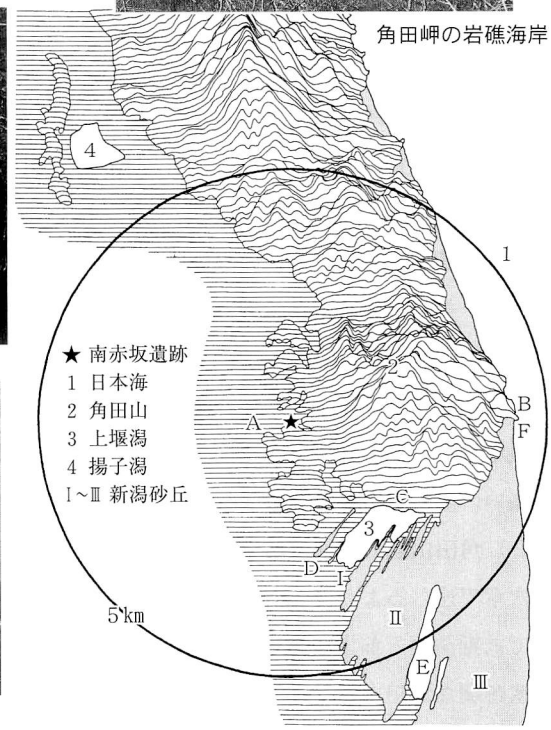


角田山東麓の低台地：南赤坂遺跡(1)と菖蒲塚古墳(2)



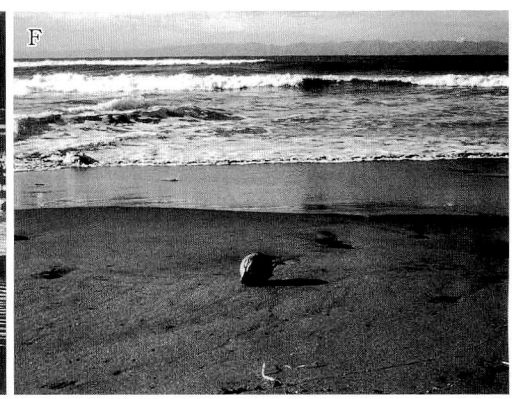
角田岬の岩礁海岸

山裾のツバキ群落



新砂丘Ⅰa（最も内陸に形成された新潟砂丘）

佐潟の渡鳥



椰子の実の漂着

第２図　角田山周辺の自然

Ⅱ　遺跡群概観

南赤坂遺跡は、縄文時代前期～後期、古墳時代前期・後期、古代（奈良・平安時代）の時期において断続的な利用が確認できる集落跡である。具体的な記述に先立ち、周辺に分布する各時代の遺跡を概観し、本遺跡が置かれた歴史環境を明確にしておく。

1　縄文時代

（1）弥彦・角田山周辺の遺跡

弥彦・角田山の周辺（大河津分水路以南の山裾５km圏内）には、大別６期区分の帰属が明らかな縄文時代遺跡が49箇所存在する。これらは地形と位置関係から７つのゾーンに区分され、角田山東麓低台地（ゾーンⅠ）と同北東麓の新潟砂丘（ゾーンⅡ）が主要な分布域をなしている（第３図中段）。

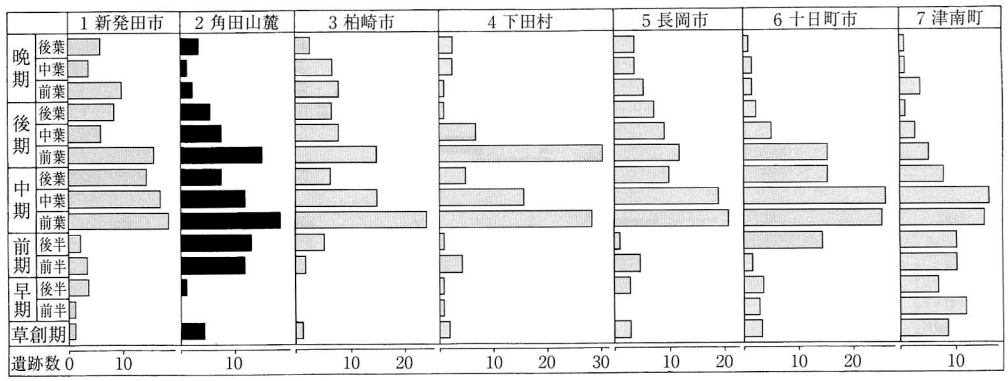
角田山麓（Ⅰ～Ⅲゾーンおよび Ⅳゾーン北部）の遺跡を時期別に見ると、中期前葉と後期前葉にピークを認める。比較例として、県内６市町村の動向を第３図上段に示した。各エリアでは、中期に至る遺跡数の増加と後期中葉以降の減少化という点で共通した動きをみせる。しかし変動パターンは様々で、それぞれが置かれた地理的条件の異なりをうかがわせる。波形の上で最も類似するのは海岸部に位置する柏崎市域であるが、これに較べ前期段階での遺跡占有率が高いのが角田山麓の特徴である。

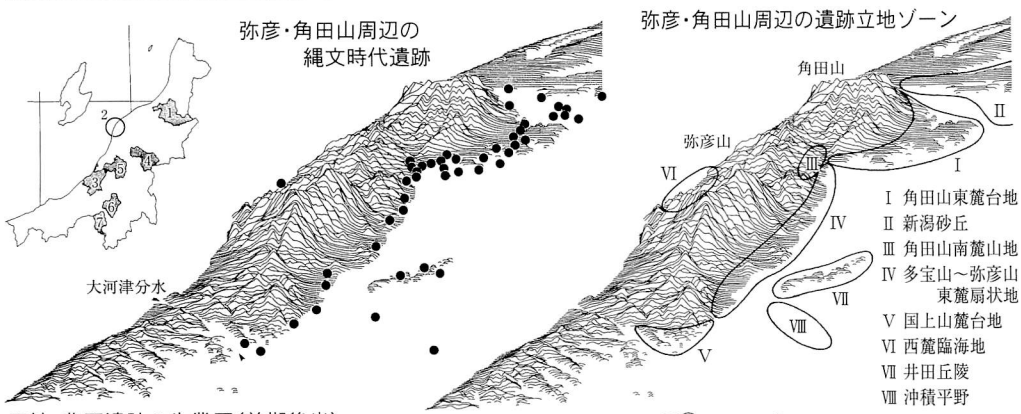
（2）角田山麓の前期前葉～中期初頭遺跡群

次章で述べるように、南赤坂遺跡では前期終末～中期初頭に利用の最盛期を迎え、これに次いで前期前葉と前期後葉の遺物も比較的多く出土した。角田山麓では、1983年以来この時期の遺跡調査が相次いで行なわれ、新潟県内でも最重要フィールドの一つと位置づけられる。主な発掘調査としては、新谷遺跡（1983年）・布目遺跡（1984年）・豊原遺跡（1986年）・大沢遺跡Ａ地区（1989年）・重稲場第３遺跡（1991年）があげられ、主要な成果が『巻町史考古資料編』に収録されている。また、2000年に存在が明らかになった岩室村干納遺跡は、遺存状態の上で注目すべき内容をもち、本地域の重要性を決定的なものとした。以下に前期初頭～中期初頭遺跡の様相を項目別に紹介する。

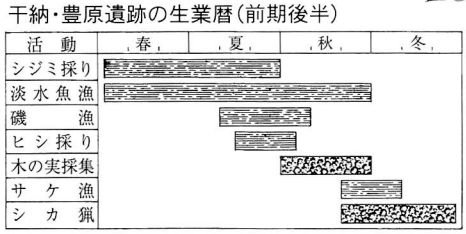
土器の変遷　上記６遺跡の相互比較と層位データに基づき、新谷Ⅰ群（花積下層式期）から豊原Ⅴ群（五領ケ台Ⅰ式期）に至る11段階の変遷を辿ることができる（第4図下：括弧内関東編年）。このうち、布目・新谷Ⅱ～Ⅲ群・重稲場Ⅰ群・同Ⅱ群の各資料は、新潟県内における標式資料に位置づけられている。豊原遺跡でえられた層位データ（第4図上）はとりわけ重要で、前期後葉～中期初頭編年の基準資料を提供した。

遺跡数の変動

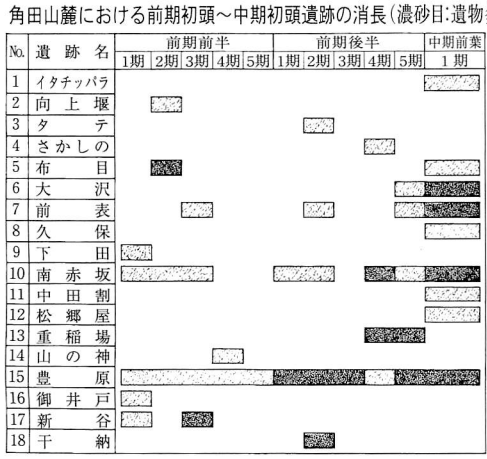


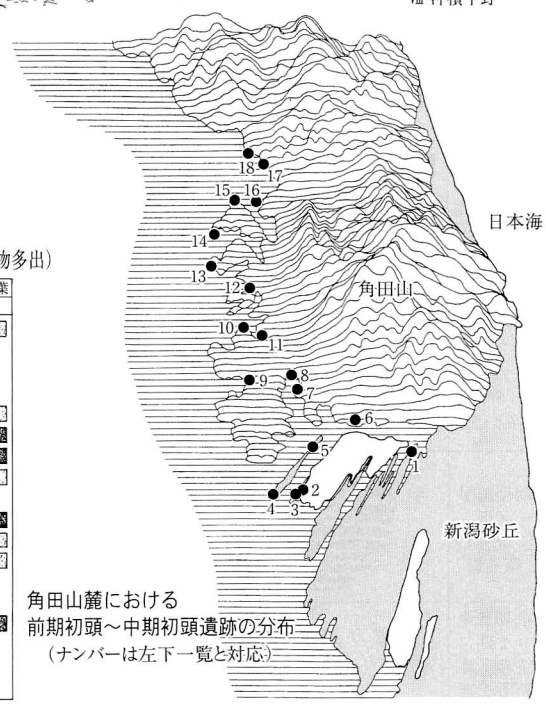


干納・豊原遺跡の生業暦（前期後半）



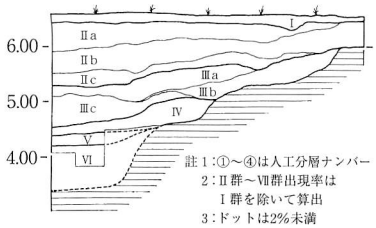
角田山麓における前期初頭～中期初頭遺跡の消長（濃砂目:遺物多出）

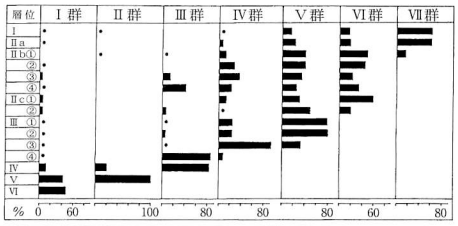




角田山麓における
前期初頭～中期初頭遺跡の分布
（ナンバーは左下一覧と対応）

第３図　縄文時代遺跡の分布と生業





豊原遺跡における層位別土器出現率

Ⅰ群：前期前半
Ⅱ群：前期後半１期
Ⅲ群：　〃　２期
Ⅳ群：　〃　3期～5期
Ⅴ群：中期前葉古段階
Ⅵ群：　〃　中段階
Ⅶ群：中期前葉新段階
～中期中葉

第４図　角田山麓における縄文時代前期初頭～中期初頭土器群の変遷（縮尺不同）

遺跡群の形成　この間における遺跡は18箇所を数える（第３図下段）。遺物量が明確に増加するのは布目段階（二ツ木式前半段階）からである。現在のところ、前期中葉（黒浜式期）の遺物多出遺跡は確認されていないが、豊原Ⅱ群段階（諸磯ａ式期）に至るまで拠点的な集落は各時期１箇所に限定される。重稲場Ⅰ群段階（十三菩提式中葉段階）までの遺跡は、いずれも沖積地に面した台地低域に立地する。

遺物多出遺跡は、前期最終末になると３箇所に増加し、居住域も台地高域部へと拡大する。角田山麓における中期中葉～後期後葉遺跡の多くは、台地の奥部や高域に分布する。上記の現象はその初源となるもので、立地上の転機をなしている。なお、各遺跡の調査はいずれも小範囲に限定されており、集落構成の把握には至っていないのが現状である。

石器組成　前期前葉～晩期終末における生産用具の在り方は、食料の調達・加工に関わる用具（Ⅰ群石器）が大きく変動しており、前・中期を境に礫石錘と石鏃の割合が逆転する。この現象は遺跡立地の変化とも符合し、狩猟・漁撈の依存比の違いを反映した可能性が高い。工具類（Ⅱ群石器）は時間的な変化に乏しいが、同時期段階の遺跡間での砥石出現率に大きな変異が存在する。特定集落における磨製石斧の製作に関連するものである。

生業活動　豊原遺跡（前期終末層準）と干納遺跡（前期後葉：諸磯ｂ式期）から多量の動植物遺体（食料残渣）が出土している。至近距離にあるため、両遺跡の構成は類似性が高く、２遺跡を合わせた内訳は、獣類（シカ主体）・淡水魚（トゲウオ主体）・海水～淡水魚（サケなど）・海水魚（ヒラメ・サメ・クロダイ・スズキなど）、海棲哺乳類（クジラ）、汽水～淡水産貝類（シジミ）、海水産貝類（サザエ）・種子（ヒシ・クルミ主体）からなる。

豊原遺跡のシカから推定された狩猟季節、動・植物の生態、民俗事例に基づけば、第３図下のような生業暦の復元が可能であり、水産資源の活発利用に大きな特徴が見いだせる。海産物の入手経路の一つとしては、徒歩にして１時間たらずの「峠越えルート」が想定できる。

豊原遺跡と大沢遺跡Ａ地区では、中期初頭層準の花粉構成が明らかになっている。前者ではクリ属出現率がきわめて高く、後者ではユリもしくはヒガンバナ科・ゼンマイ属・ヤマイモ科の順に卓越種が目まぐるしく変化する、という内容である。干納遺跡ではヒョウタンの果皮・種子も出土しており、植物管理の在り方を考える上で興味深い事例となっている。

生産と流通　角田山麓では、前期前葉から中期前葉にかけて磨製石斧の製作が行なわれていた。西頚城産の蛇紋岩などを原石の状態で入手するもので、同様の遺跡が信濃川河口以南の海岸部に点在する。新谷・豊原では、多量の砥石と比較的まとまった量の未製品が出土しており、自給量を上回る製作が行なわれた可能性もある。

前期終末～中期初頭の遺跡では、信州産黒曜石が高頻度で利用される。県内海岸部の中では異例の存在と言ってよく、石材流通に関わる主導的な役割が推定できる。

2　古墳時代

（1）古墳時代前期

古墳　蒲原平野の古墳は古墳時代前期に県内で数・規模ともに他地域を圧倒しており、その中で角田山麓は蒲原平野の信濃川左岸における中核的な地域であったと考えられる。角田山麓の古墳は、前方後方墳の山谷古墳（墳長37m）と前方後円墳と考えられる菖蒲塚古墳（墳長約53m）、菖蒲塚古墳に隣接し、円墳と考えられる隼人塚古墳（径約15m）、そして葺石をもち円墳と考えられる観音山古墳（径約26m）がある。このうち発掘調査が行われたのは山谷古墳だけであるが、墳形・遺物などから山谷古墳（８期：以下新潟シンポ編年）→菖蒲塚古墳（９期？）といった変遷が推測され、観音山古墳は菖蒲塚古墳の前後の可能性が指摘されている［甘粕1994］。また隼人塚古墳は時期が不明であるものの、規模や位置からは菖蒲塚古墳の陪冢となる可能性が考えられる。しかし、これに続く古墳は現在のところ確認されていない。また、角田山麓の古墳集中地域から南へ約６㎞離れた弥彦山麓には前方後円墳と考えらえる稲場塚古墳（墳長約26.3m）が存在する。発掘調査は行われていないが、表採資料や箸墓古墳に類似する墳形などから山谷古墳に先行（７期）して築かれたと考えられている[稲場塚古墳測量調査団1993]。この古墳は角田山麓の古墳と同一水系である矢川上流域に位置しており、首長系譜が角田山麓と同じである可能性もある。一方北へ約15㎞行った信濃川右岸の砂丘地には、葺石をもつ円墳の緒立八幡神社古墳（径約35m）が位置する。古墳に伴うと考えられる壷からは７・８期頃の時期が推測される［川村1989］。また天神遺跡からは古墳時代前期の土師器の他に、勾玉１点・ガラス小玉18点が採集されている。これらの玉類は限定された範囲に分布が認められ、古墳が存在していた可能性も考えられる。

集落　山谷古墳の眼下の沖積地に御井戸遺跡、観音山古墳の丘陵下に高見高島遺跡、稲場塚古墳の近くには蒲田遺跡がそれぞれ存在しており、古墳との関わりが注目される。この中で御井戸遺跡からはこれまで多量の土師器と少量の須恵器が出土している。遺物からは古墳時代前期が中心で古墳時代中期になると数が減少していき、古墳時代中期後半（TK208型式～TK47型式並行期頃）になるとほとんど確認できなくなる。角田・弥彦山麓ではこのように前期から中期にかけて一定量の土器を出土する遺跡は他に認められず、この地域で最大規模の核となった集落と考えられる。高見高島遺跡はこれまで表採された土器からは、10期頃のものが多く、６～10期頃の時期幅が推測される［相田2002］。蒲田遺跡の表採土器からは、おおむね６～８期を主体とし、一部９期以降を含むと考えられている［吉田町2000］。他には菖蒲塚古墳の西方約140mの所に位置する越王遺跡では、表面採集であるが緑色凝灰岩の管玉製作工程を示す資料が155点報告されている。また五ヶ浜の日本海に面した砂丘の先端部には穴口遺跡があり、６・７期頃と考えられる土器が出土している。

1. 緒立八幡神社古墳・緒立遺跡
2. 菖蒲塚古墳・隼人塚古墳・越王遺跡
3. 天神遺跡
4. 穴口遺跡
5. 山谷古墳
6. 御井戸遺跡
7. 観音山古墳
8. 高見高島遺跡
9. 稲場塚古墳
10. 蒲田遺跡
11. 大久保古墳群
12. 奈良崎遺跡
13. 下小島谷古墳群
14. 古津八幡山古墳
15. 蝦夷塚古墳
16. 宮ノ浦古墳
17. 保内三王山古墳群
18. 山崎１号墳
19. 麻生田古墳群

阿賀野川　西川　信濃川

0　20km

蒲原平野における古墳時代前期の主要遺跡の分布

主要遺跡消長

新潟シンポ編年[1993]	6期	7期	8期	9期	10期	11期
緒立遺跡	――	――	- - -			
御井戸遺跡	――	――	――	――	――	――
高見高島遺跡	- - -	- - -	- - -	- - -	――	
蒲田遺跡	――	――	――	- - -	- - -	- - -
奈良崎遺跡	――	――	――	- - -	- - -	- - -

菖蒲塚古墳・隼人塚古墳

伝菖蒲塚古墳出土鏡

0　10cm

0　20m

第５図　蒲原平野の古墳時代前期の遺跡

（2）古墳時代中期以降

角田山麓では中期になると集落の衰退が認められ、古墳の築造も断絶すると考えられる。このような状況は角田・弥彦山麓に限らず蒲原平野全域に該当する。そして蒲原平野の衰退からわずかして、それまで首長墓系列の基盤のない魚沼地域で飯綱山古墳群などの初期群集墳が築かれるようになる。しかし遺跡数だけに限れば中期になると逆に増加する。前期の遺跡が稀薄であった角田山北麓の砂丘上に位置する古囲遺跡・上堰潟Ａ遺跡・下稲場遺跡など、数は微量ながらも中期の土器を出す遺跡が認められるようになる。

中期の断絶後、蒲原平野に再び古墳が認められるようになるのは現在のところMT15型式併行期以降と考えられる。海岸部では県内における横穴式石室を内部主体とした初現期の古墳である村上市の浦田山２号墳がそれまで首長墓の認められなかった地域に出現する。また信濃川左岸では、古墳時代前期において首長墓の変遷が追えた保内三王山古墳群中に、木棺直葬を内部主体とした該期の古墳が再び築造されはじめる。一方、信濃川右岸の角田・弥彦山麓では該期の古墳は現在確認できない。しかし文献からは弥彦村の夷塚古墳で石室の可能性を示唆する記述があり、夷塚遺跡からは古墳時代後期の土器片が認められる［吉田町2000］など、信濃川右岸の弥彦地域でも前述の流れの中で古墳時代後期前半に再び古墳が築造された可能性が高い。ただし、角田山麓では該期の古墳は認められない。

集落では中期の遺跡のほとんどで６世紀代に入り遺物は認められなくなる。現状では南赤坂遺跡と御井戸遺跡で断片的にうかがえるに過ぎない。７世紀の資料も同様で、角田山麓では高畑遺跡やヤチ遺跡で７世紀後半と考えられるものがわずかに認められるのみである。しかし一方で、７世紀を前後する時期は、山麓から離れた平野側のそれまで全く基盤のなかった場所に新たに集落が認められ始める時期でもあり、旧鎧潟湖底の大島橋遺跡や大橋遺跡・三角田遺跡が出現する。角田山麓で遺跡・遺物の増加が認められるようになるのは７世紀末以降である。また、６世紀代に再び古墳が認められるようになる蒲原平野であるが、それらが７世紀まで存続するのかは不明である。古墳の数からはいずれも長期の築造でなかった可能性が高く、浦田山古墳群を除いてこれまで横穴式石室が確認されていない点をあわせると、７世紀の古墳はあっても少数と推測される。

文　献

相田泰臣　2002　「岩室村高見高島遺跡採集の土師器について」『越佐補遺些』第7号　越佐補遺些の会

甘粕　健　1994　「第5章　古墳時代」『巻町史 通史編上巻』　巻町

稲場塚古墳測量調査団　1993　「新潟県弥彦村稲場塚古墳測量調査報告」
『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』

川村浩司　1989　「緒立八幡神社古墳の編年的位置」
『新潟考古学談話会会報』第4号　新潟考古学談話会

日本考古学協会新潟大会実行委員会　1993　『東日本における古墳出現過程の再検討』

吉 田 町　2000　「蒲田遺跡」『吉田町史　資料編１　考古・古代・中世』

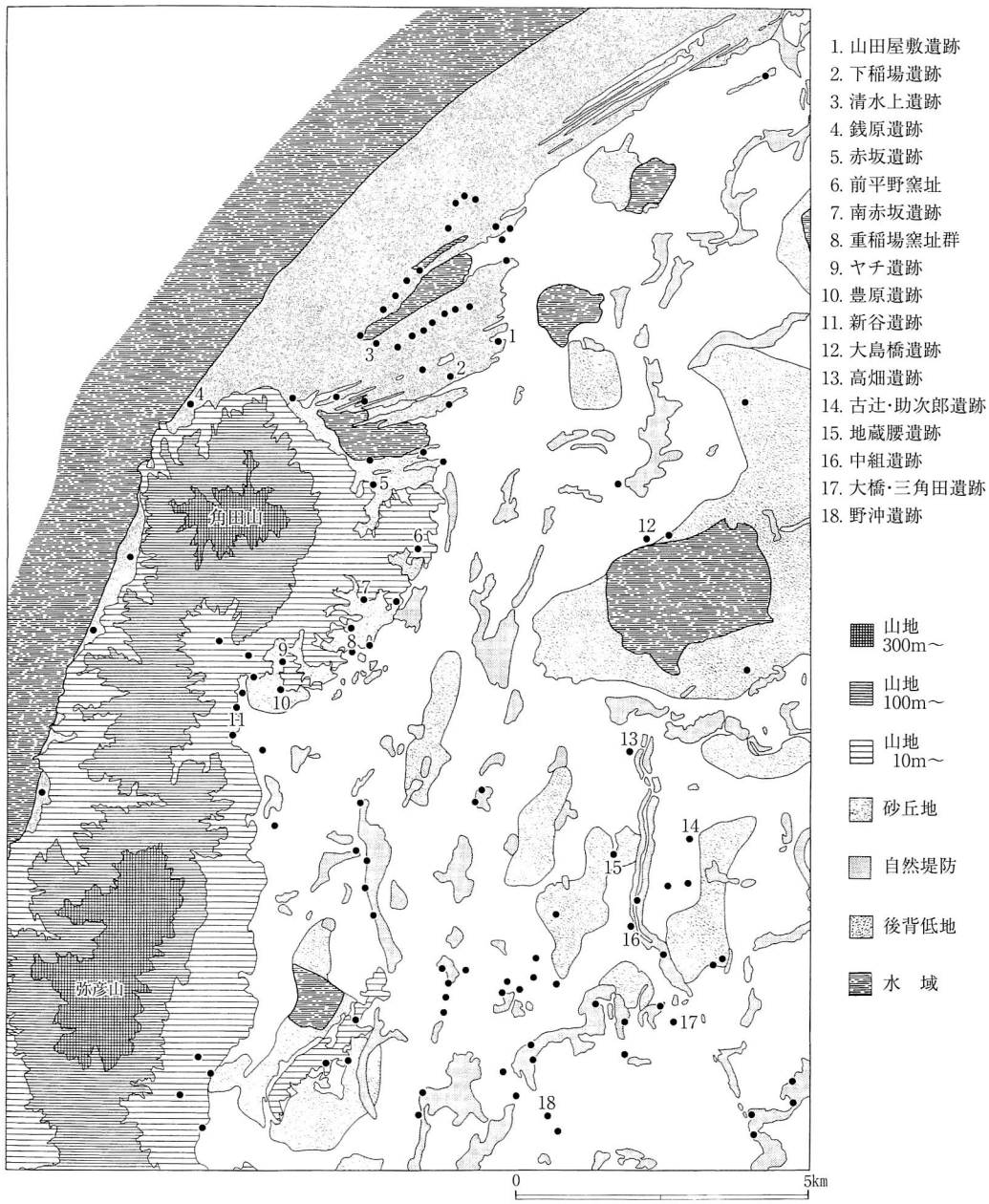
3　古　　代

7世紀末以降県内では遺跡・遺物が飛躍的に増加する。巻町内の該期の資料は、これまで新潟大学考古学研究部などの精力的な活動によりかなりの蓄積があるが、表面採集資料が多く遺跡の性格に関しては不明な点が多い。資料についてはこれまで新潟大学考古学研究部、山口栄一［1994a・b］、春日真実［2000］らにより論じられてきており、これらの成果をもとに以下では弥彦・角田山周辺を中心とした遺跡の分布について記す。

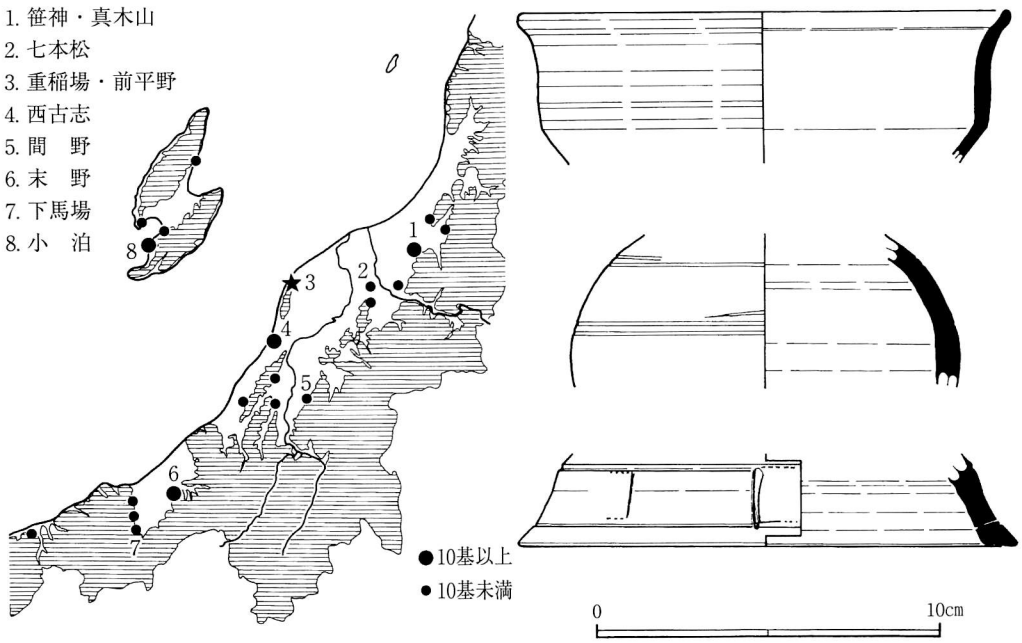
当地では6世紀以降遺物がほとんど認められなくなるが、高畑遺跡・大島橋遺跡・大橋遺跡・三角田遺跡などから7世紀に入り平野側へ進出する遺跡の存在が確認できる。そして8世紀を前後する時期には遺跡のさらなる増加がうかがえる。平野側では古辻・助次郎遺跡が、丘陵側では7世紀後半からヤチ遺跡が、海岸部では銭原遺跡などがあげられる。そして8世紀後半には角田山麓において重稲場窯跡群が、8世紀末には前平野窯跡がそれぞれ操業を開始する。しかし両者とも9世紀前半には操業を停止していた可能性が高い。ちなみに両窯跡とも土採りのため消滅してしまったが、重稲場窯跡群に関しては複数の窯跡の断面が目撃されている。このように不明な点が多いものの、窯跡の数や操業期間、流通の面からは短期の小規模な経営であったと考えられている［春日2000］。また、9世紀は越後・佐渡の須恵器生産・流通の大きな画期にあたり、9世紀中頃以降越後の須恵器生産が衰退する一方で、小泊窯跡群を中心とした佐渡産須恵器の広域流通がおこなわれるようになる。

続く9世紀前半から10世紀初頭は遺跡数が急増する時期にあたる。注目されるのは、角田山北麓の砂丘地に遺跡の分布が多く認められるようになることである。さらにその遺跡自体も、これまで多くの土器や墨書土器が採集されている下稲場遺跡や山田屋敷遺跡など、町内の他の遺跡と比べて大規模かつ有力と推測される遺跡が認められるようになる。ちなみに下稲場遺跡の資料には硯や製塩土器、清水上遺跡では土錘が認められる。一方角田山東麓では赤坂遺跡・南赤坂遺跡・豊原遺跡などで該期の資料が出土しているが、いずれも小規模であったと考えられる。また沖積地では高畑遺跡・地蔵腰遺跡・古辻・助次郎遺跡などが存在する。いずれも全体像は不明であるが、高畑遺跡からは墨書土器が採集されている。

春日は土器と集落の消長から9世紀前半は角田山麓の集団を核とした様々な生産・流通体制が解体し、沖積地の集団が生産・流通に関する多くの分野を掌握し始める時期であった可能性が高いとする［春日2000］。また、春日が西蒲原地域の拠点の一つとなる可能性が高いと指摘する野沖遺跡や中組遺跡は沖積地に位置しており、町内では高畑遺跡や地蔵越遺跡などがそれらと立地を同じくする。ただし、現時点において町内で最も有力な集落と推測される下稲場遺跡や山田屋敷遺跡などは山麓側に位置し、立地を異にしている。それらの砂丘上の遺跡は、所



第６図　角田・弥彦山周辺の遺跡分布



県内の主要窯跡　　下稲場遺跡出土須恵器

第７図　県内の主要窯跡分布と下稲場遺跡出土須恵器

在する位置や製塩土器、土錘などから漁業を主要な生業としていたことが推測され、さらに硯の資料からは平野側の流通に対して海岸線や河川の流通に従事していた可能性が高いと考えられる。ちなみに、角田浜の10km程沖合いのタラ場と呼称される海底からは、土師器・須恵器など相当数の土器がこれまで底曳き網によって揚陸されている［山口1978・1994a］。

文　献

春日真実　2000　「第5章　まとめ」
『吉田町史　資料編１　考古・古代・中世』　吉田町

山口栄一　1978　「角田浜沖タラバの揚陸土器」
『まきの木』第２号　巻町郷土資料館友の会

山口栄一　1994a　「角田浜沖タラ場」
『巻町史　資料編１　考古』　巻町

山口栄一　1994b　「考古学が捉える巻町の古代」
『巻町史　通史編上巻』　巻町

Ⅲ 調　　査

1　発掘調査以前

南赤坂遺跡は、昭和20年代に巻町在住の考古学研究者、上原甲子郎氏（故人）によって発見された。調査初期になされた同氏の報告によれば、遺物はさほど多くないとされ、５個体の古式土師器と敲石１点が図示されている。当時は弥生時代の遺跡と認識されていたため、同時に採集された黒曜石製剥片を含め、石器使用の存続が指摘されている［上原1956］。

大きな転機の訪れは、1971年に行なわれた柿畑の造成である。そのおり対象となった造成区域は、遺跡西部の緩斜面700㎡あまりにわたり、ブルトーザーによる整地作業が全域で行なわれた。上原氏所蔵資料に含まれる縄文土器はその際の採集品で、縄文時代と古墳時代の複合遺跡であることがこの時点で判明した。

その後は、地元採集家や新潟大学考古学部によって表面採集が行なわれ、一定の資料蓄積がはかられてきた［新潟大学考古学研究部1986・1990］。採集遺物の中で注目を集めたのは、１点の続縄文土器である（第93図30）。新潟県内では西山町内越遺跡に次いで２例目の発見となり、本遺跡の存在が俄に脚光を浴びるところとなった。

2　調査に至る経緯

南赤坂遺跡が所在する竹野町地内の山林で、総面積19.95haの農地造成事業が角田山麓土地改良区によって計画された。柿栽培面積の拡大をはかると共に、農業従事者の高齢化に対応すべく、緩傾斜地の造成によって作業負担を軽減しようというものである。

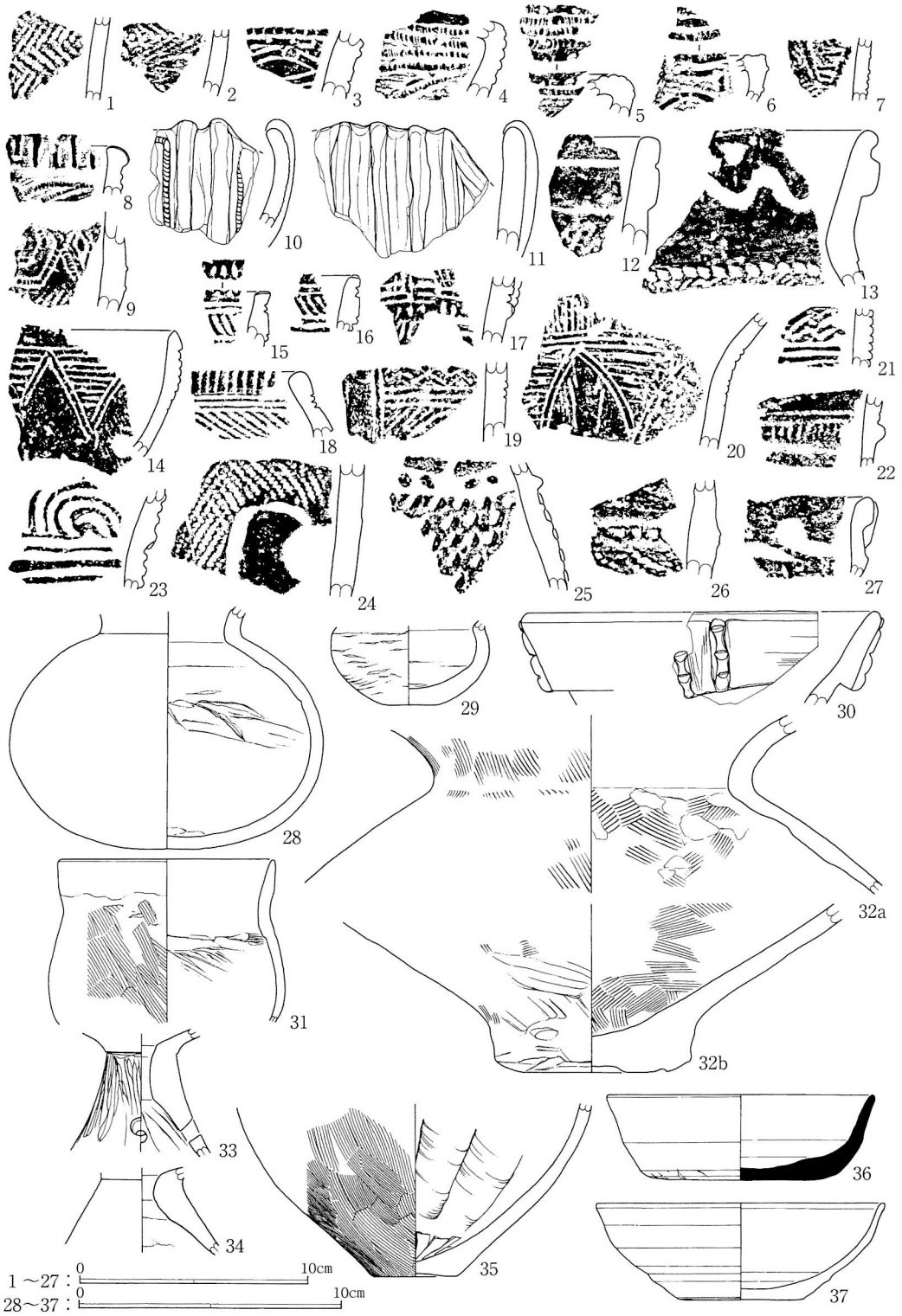
造成予定地内における埋蔵文化財包蔵地は南赤坂遺跡のみであった。しかし、大半が山林に覆われるため遺跡分布の実態が明らかでなく、樹木伐採完了後の1990年10月に全域を対象とした分布調査を実施した。踏査をつうじて発見できた遺跡は皆無であったが、南赤坂遺跡の登録区域外東側に存在する削平面において遺物包含層の広がりが確認され（第10図１－C)、遺跡範囲の見直しが必要であることが明らかになった。

3　１次調査：1992年８月17日～８月25日

遺跡登録区域にあたる西側緩斜面から遺物包含層の残存が予想される東側尾根までを対象とした確認調査である。作業はすべて手掘とし、１m四方のテストピットをほぼ均等に設定するよう努めた。調査に際しては、新潟大学考古学研究部員を動員した。

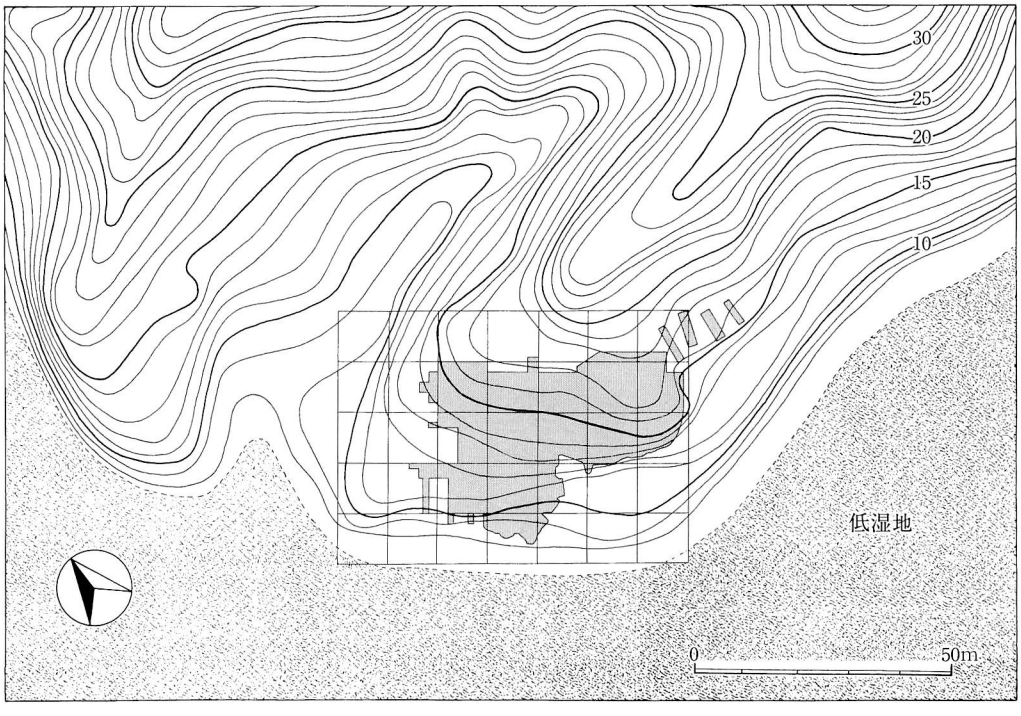
調査時点の遺跡周辺は、西部の柿畑（第９図下段Ａ～Ｃ区）を含む全域が伐採によって開地化していた（第10図１)。しかし東部の旧山林区域（Ｄ～Ｇ区）では、低木の生育などにより調査困難な部分が多く、最終的な面積は39㎡にとどまった（第９図下)。

柿畑の造成区域では、Ｃ区で遺物包含層の部分的な残存を認めたが、Ａ～Ｂ区の全域が既に

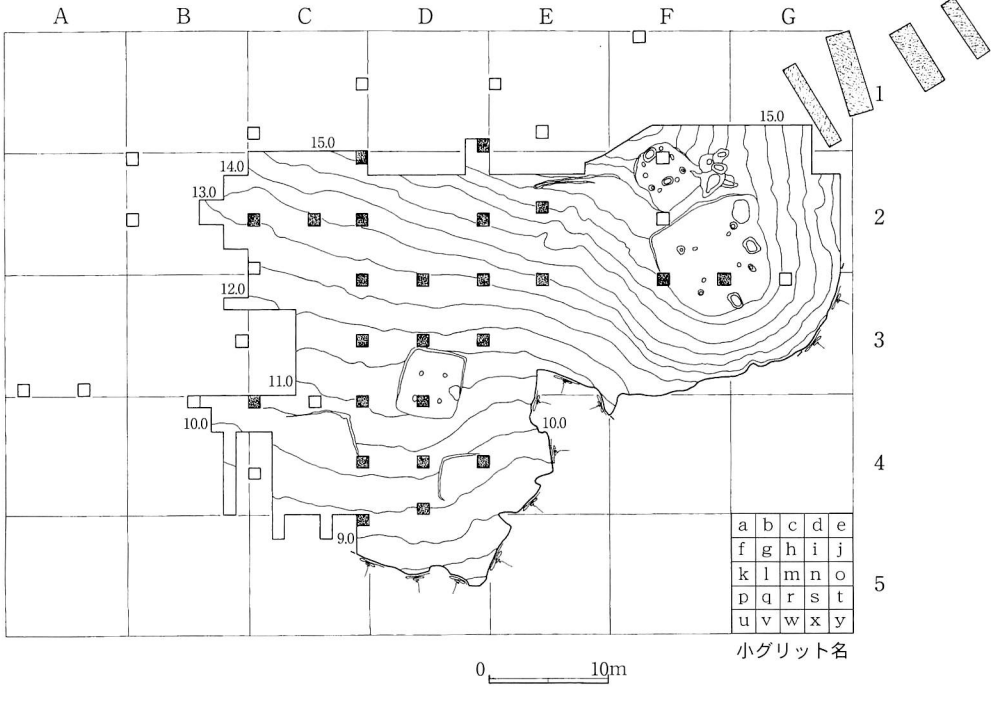


第８図　発掘調査以前の採集遺物（28・29・34・36：関田遺跡）

南赤坂遺跡周辺の地形と調査区



調査区の設定（濃砂目：１次調査遺物出土地　淡砂目：1993年12月確認調査区）



第９図　南赤坂遺跡周辺の微地形と調査区（1mスクエアーは１次調査地）

削平されていた。遺物包含層の良好な遺存が確認できたのは、Ｄ・Ｅ－２～４区である。東側の尾根では先端部が平坦地をなしており、人為的な削平の形跡が明瞭にうかがえた。区域内の出土遺物は古墳時代に限定され、この時点で特殊遺構の存在が予想されていた。

４　２次調査：1993年４月12日～12月27日

１次調査の結果に基づく本調査で、８月末までの間を予定した。作業員は地元竹野町在住の10名を主力とし、５月からは記録要員として新潟大学考古学研究部学生の助力をえた。

遺物出土位置の記録方法としては、遺物包含層を層位毎のグリッド単位、遺構内をドット方式とした。前者については、表土層を一辺２m、それ以下ではこれを４分割した１m四方の細分グリッドを単位として作業の迅速化をはかった。

発掘調査は西側緩斜面のＥ列から着手したが、全体概要の早期把握を意図し、東側尾根の調査も併行して進めていった。しかし、旧山林区域の植根除去は容易でなく、高域部での傾斜の強まりも作業を困難にした。７月以降は、これに伴う参加者の減少も加わり、調査の遅れが確実な状況となった。

８月には西側緩斜面に位置する１号住居址の記録作業が完了し、尾根上平坦面と周辺斜面の遺物包含層調査もほぼ終了した。しかし、後者の過程において尾根上平坦地の北側に小規模な平坦地と土壙が存在することが明らかになり、作業の延長を決定した。この間、尾根上平坦面を中心に続縄文土器などの北方系遺物が相次いで出土し、９月初旬には特異な構造をもつ「テラス遺構」が全容を現した。

こうした状況の中、新聞報道（９月10日付新潟日報）を一つの発端として本遺跡に対する関心が急速な高まりを見せ、保存に向けての動きが活発に展開されるに至った。巻町教育委員会では、これをうけて現地説明会を９月19に実施し、町当局としても保存の道を探るべく角田山ろく土地改良区ならびに地元地権者との交渉に入った。

現地調査は、９月末をもって遺構精査が終わり、10月中旬には全域の地形測量も終了した。その後作業は中断したが、12月に入り保存が困難であるとの決定が下された。これに伴い、保存の可能性を考慮し完掘を避けた１号住居址下の遺物包含層およびテラス遺構東斜面延長部の調査、東部の範囲確認を12月16日から再開し、12月27日をもって全作業を完了した。

文　献

上原甲子郎　1956　「弥彦角田山周辺古文化遺跡概観」
『弥彦角田山周辺綜合調査報告書』　新潟県教育委員会

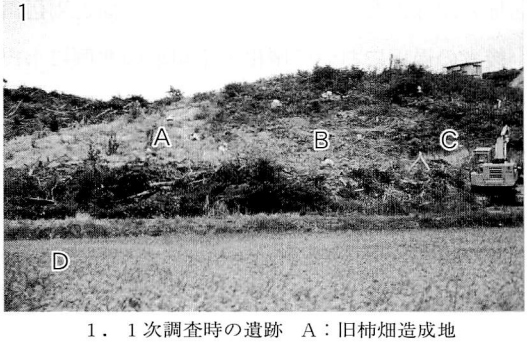
新潟大学考古学研究部　1986・1990
「角田山東麓および佐潟周辺の遺跡調査報告Ⅱ」『ＦＩＥＬＤＮＯＴＥ』　第４号
「角田山東麓および佐潟周辺の遺跡調査報告Ⅳ」『ＦＩＥＬＤＮＯＴＥ』　第６号

発掘調査・整理作業参加者（五十音順）

１次調査：伊藤啓雄・片桐昭彦・櫻井千恵子・菅井美加・萩野野正宏・長谷川裕恭・東山信治
丸山　仁・柳田昌宏・吉門千賀（新潟大学考古学研究部部員）

２次調査：有坂アヤ・上原シズ・上原フミ・遠藤陽一・大沢キチ・大沢タネ・大沢忠次・金子八重子・桑原光子・小林英敏・玉川与一郎・玉川ワウ・堀之内キミ・堀之内竹司・本間　文・本間洋祐　本間ヨキエ・山本ヨキエ（竹野町・越前浜・巻在住）
赤田雅彦・五十嵐岳樹・磯貝洋介・伊藤啓雄・片桐昭彦・近藤雄也・櫻井智恵子・佐藤康子・佐藤由紀・菅井美加・高橋泉・高橋淳・辰元舞香・萩野谷悟・東山信治・藤巻和也・増子哲平・光山仁鉄・柳田昌宏・吉門千賀（新潟大学考古学研究部員）

室内作業：長谷川知子・本間慶子・八木静江・矢島静江・吉門千賀



１．１次調査時の遺跡　Ａ：旧柿畑造成地
Ｂ：旧山林
Ｃ：E-3・4区削平地
Ｄ：関田遺跡
２．２次調査の着手　（4月12日）
３．報道機関への発表（9月13日）
４．現地説明会　（9月19日）

第10図　調査時の南赤坂遺跡

Ⅳ　微地形と層序

1　微地形（第１図・９図・11図）

角田山の東麓～東南麓に広がる低台地は、大きく４つのゾーンに区分できる。東麓の山裾から派生する北部・中部・南部支丘、東南麓に位置する峰岡台地の別である（第１図上）。南赤坂遺跡は、中部支丘の中ほどから南へ張り出す支脈の先端部に位置する。この小支丘は、海抜41mを最高点とし急傾斜をなして沖積地に接するが、先端西部の小範囲に緩傾斜地が形成されており、限定された区域を利用する形で南赤坂遺跡が営まれていた（第９図上）。

遺跡の広がりは、南に面した緩斜面一帯と東に続く尾根上にまたがる。海抜は前者で９～16m、後者で17～13mを測る。推定範囲は、東西70m・南北40mである。なお、南に隣接する水田（海抜７m）下からも古墳時代前期の遺物が出土しており、現在「関田遺跡」として登録されている。位置関係からして本遺跡の延長部とみるべきであるが、具体的な広がりは明確でないのが現状である。

発掘調査時の遺跡周辺は、既に後世の地形改変を少なからずうけており、柿畑の造成による平坦地化や農道の建設などに伴う山裾の削平化がみられた。そのため、西側斜面全体の本来的な地形は明らかでない。発掘区で確認された基盤層上面での斜度は、低域の緩斜面で５°前後、高域部の最大傾斜は20°ほどである。東側尾根では先端部が大規模に削平されているが、縦走斜度は鞍部で10°あまりと推定される。山裾斜面は急傾斜をなしており、尾根南端で25°以上を記録する。

2　基本層序（第11図）

西側斜面の東部、Ｄ列東側における層序と幅１mのセクションベルト内での遺物出現率を第11図に示す。東側尾根では表土層下で様相を異にするが、これについては古墳時代の項で記述する。本遺跡の基本層序は、次の４層である。

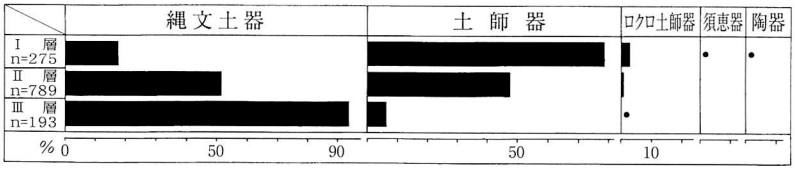
第Ⅰ層　植根が多く軟質な暗褐色腐植土。旧山林区域では平均30cmほどの厚さをもつ。層内には古墳時代を主とする遺物が若干包含され、陶磁器類の出土は本層に限られる。

第Ⅱ層　明褐色腐植土。Ⅰ層に較べ明らかに明色化する。軟質でしまりに欠ける。調査区のほぼ全域に分布し、層厚は最大20cm程度。古墳時代前期の主要包含層である。

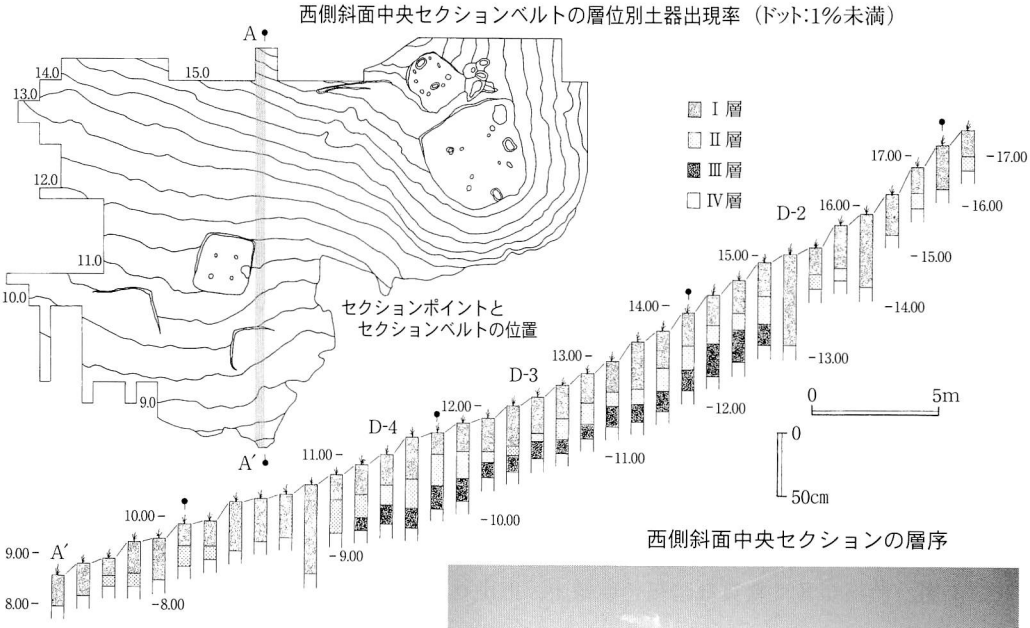
第Ⅲ層　黒褐色腐植土。暗色かつ硬質な堆積土で、Ⅱ層との識別は容易である。最大層厚は25cm。本層には縄文時代の遺物がほぼ純粋に包含される。西側斜面の15～11m域にのみ分布しており、低域部での欠落は古墳時代以降の地形改変による可能性がある。

第Ⅳ層　灰褐色～赤褐色粘土。基盤層である。層内には、酸化鉄が若干含まれるのみで、自然礫は含有されない。したがって、発掘区内の出土礫は、すべて搬入品と判断した。

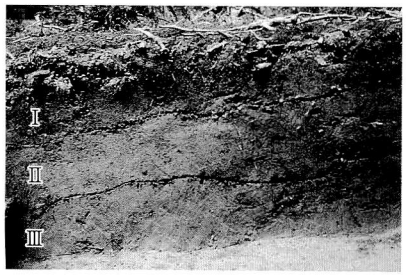
西側斜面中央セクション



西側斜面中央セクションベルトの層位別土器出現率（ドット:1%未満）



西側斜面中央セクションの層序



基本層序(D−3区)

南西から見た西側斜面(左)と東側尾根(右)

第11図　西側斜面の層序

縄文時代

南赤坂遺跡出土の「の」字状石製品

縄文時代の概要

● 形成時期　縄文時代前期終末～中期初頭を中心とする

● 遺　　構　掘立柱建物１　（前期終末～中期初頭）
柱穴状ピット119（前期終末～中期初頭主体）
陥穴状土坑１　（前期終末以降）
埋設土器２　（前期終末～中期初頭）

● 土　　器　前期初頭～中期初頭（Ⅰ群～Ⅲ群）主体
Ⅰ群土器（前期前葉）：布目式主体
Ⅱ群土器（前期後葉）：格子目文土器を主とする特異な組成
Ⅲ群土器（前期終末～中期初頭）：３～４期に細分可能

● 土 製 品　玦状耳飾（前期終末～中期初頭）・焼成粘土塊

● 石　　器　Ⅰ群（食料調達・加工具）：礫石錘と磨石・敲石類主体
Ⅱ群（工具類）：磨製石斧と砥石主体
磨製石斧の製作が行なわれる
Ⅲ群（装身具）：玦状耳飾・「の」字状垂飾・玉斧など
垂飾製作が行なわれる

● 遺跡の性格　竪穴住居址は確認できなかったが、前期終末～中期初頭段階の遺物は質・量ともに拠点集落的な様相を示す。

「の」字状石製品の出土

Ⅰ 遺　構

西側緩斜面から多数の落込みと建物跡・陥穴状土坑・埋設土器をみいだした。しかし竪穴住居や炉址は確認できず、東側の尾根については、古墳時代の削平（テラス遺構の造成）により遺構の有無を明らかにすることができなかった。

1　建物跡（第12図・13図）

斜面高域（13m前後）のD－2区から1棟が確認された（第13図左上）。掘込み深度50cm以上の大型ピット4箇所をもって長方形プランをなすもので、掘立柱建物と考えられる。傾斜方向に長軸をもち、3･8m×2･1mの規模を有する。基盤上面の高低差は50cmあまりである。ピット内から前期終末～中期初頭の土器が出土した。

2　柱穴状ピット（第12図～14図）

西側斜面に分布する柱穴状ピットは120あまりにのぼる。掘込み規模は概して小さく、短軸幅15cm～30cm、最大深度10cm～30cmの範囲内に大半が含まれる（第14図）。これらは、分布が稀薄なC－3区をとり巻くように帯状の広がりをみせる（第12図）。西部の削平域が同様な姿であったとすれば、環状にめぐる全体構成が推定できることになる。共伴土器から時期の推定が可能なものは18基を数える。内訳は前期前葉：2・前期終末～中期初頭：16である。

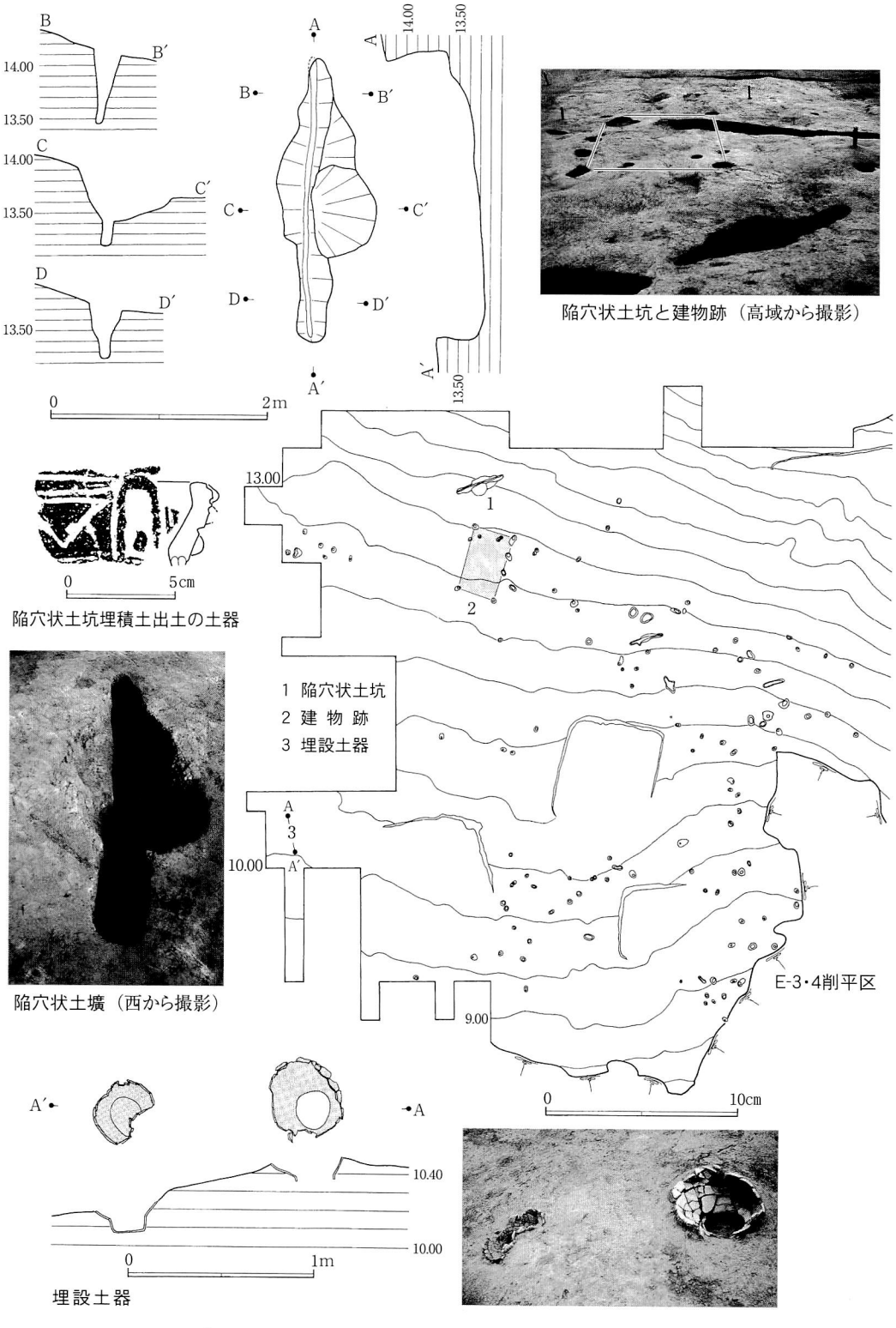
これらの分布をいかに捉えるかは、幾とおりかのケースが想定できる。第13図は方形プランを仮定した場合の一例で、高低差50cm以内での有意な配列を求めたものである。しかし調査区内で4つのピットが完結するケースは皆無であり、説得力をもった想定とは言い難い。ちなみに各々の規模を列記すると、プランB：1.4m×1.1m・C：2.9m×2.0m・D：2.2×2.1m・E：2.9m×1.4m・F：2.2×1.9m・G：1.7m×1.1m・H：3.6m×2.0mとなる。D～Gで前期終末～中期初頭遺物が共伴した。

3　陥穴状土坑（第12図左）

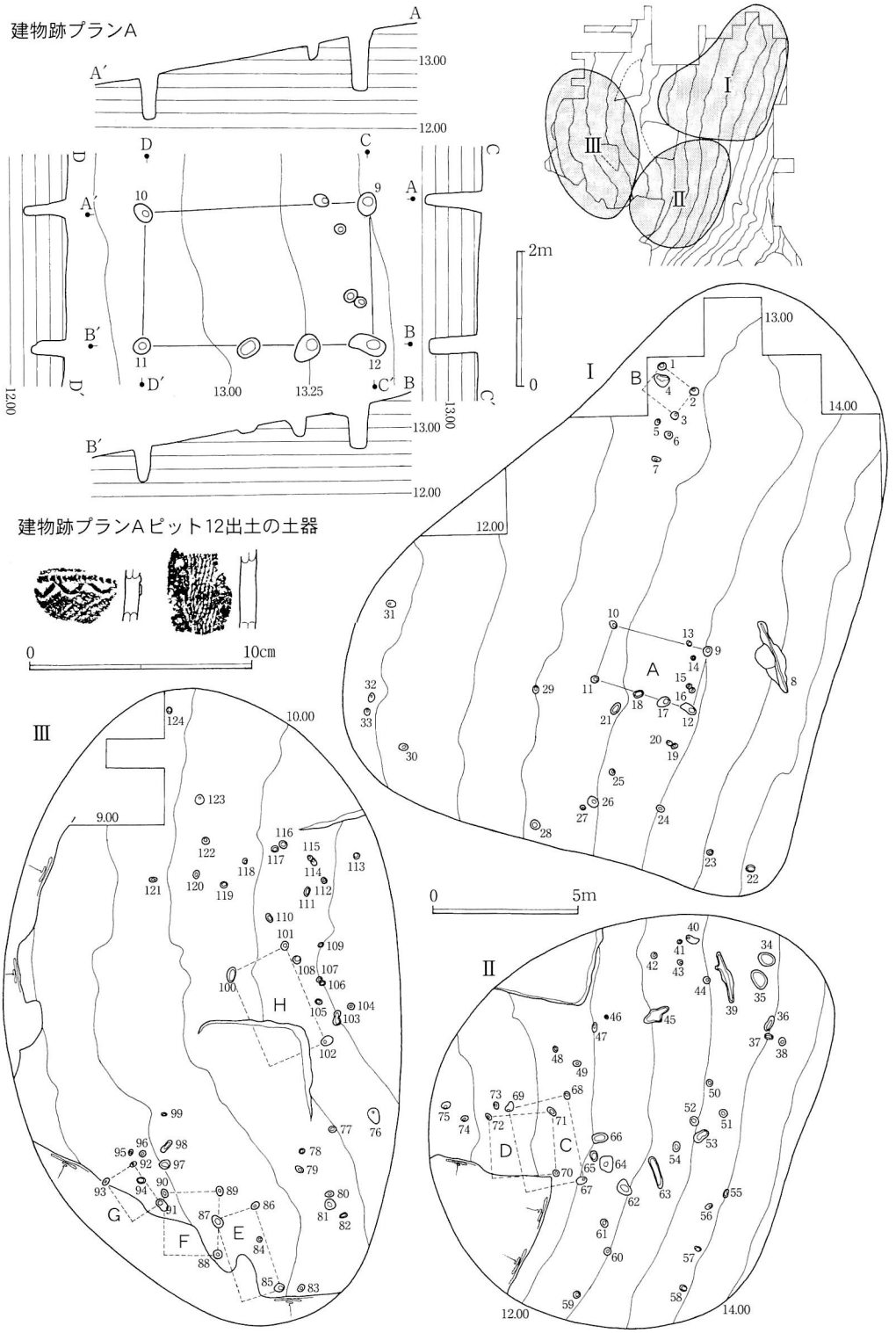
西側斜面高域の14mライン上から単独で発見された。上面の形状は中央が膨らむ不整楕円形、下面は直線的な溝をなす。底面は平坦で、長軸両壁面のオーバーハングと「漏斗形」の短軸断面も特徴的である。長軸幅は2･6m、最大深度は85cmを測る。覆土内から前期終末土器が出土しており、構築時期はそれ以降と推定できる。本土坑は、今村啓爾分類によるE型の典型例で、シカ猟に使用された可能性が指摘されている［今村1976］。

4　埋設土器（第12図下）

低域斜面の10m付近から、65cmの間隔をおいて埋設土器2基が確認された。柿畑造成時の削平をかろうじてまぬがれたもので、上部の欠失や変形がみられた。ともに前期終末～中期初頭に属し（第31図425・426）、北側の個体は底部を欠いた状態で埋設されていた。



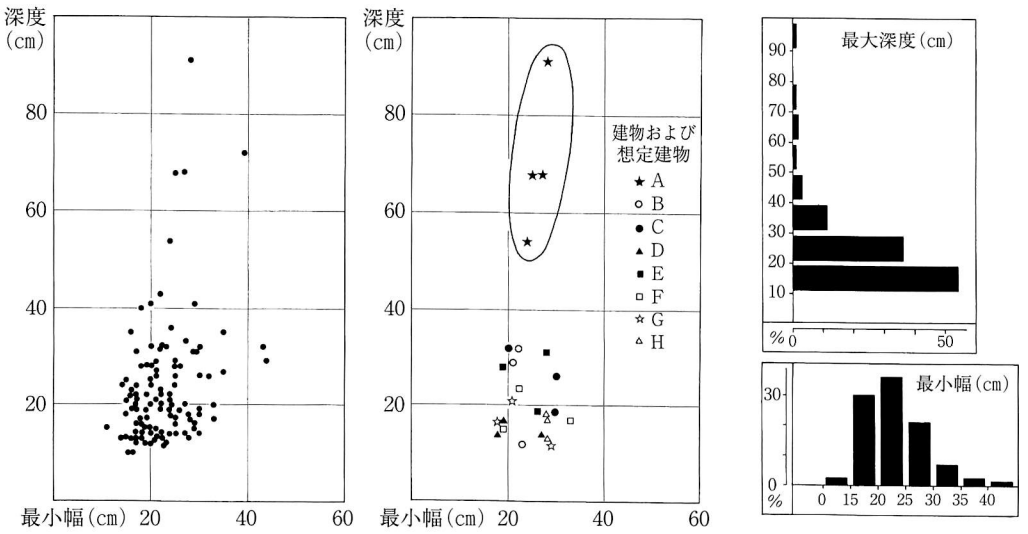
第12図　縄文時代の遺構分布と陥穴状土坑・埋設土器



第13図　ピットの分布と建物跡

縄文時代ピット一覧

No.	区分	長	幅	深(cm)	遺物
1	推定建物B	26	23	12	
2	〃	29	21	29	
3	〃	26	22	32	
4	柱穴状ピット	53	35	27	
5	〃	23	20	20	
6	〃	26	22	32	
7	〃	24	15	21	
8	陥穴状土坑	260	86	85	Ⅲ群土器
9	建物跡A	36	28	91	Ⅲ群土器
10	〃	30	27	68	
11	〃	29	24	54	Ⅲ群土器
12	〃	48	25	68	Ⅲ群土器
13	柱穴状ピット	19	16	22	
14	〃	19	17	24	
15	〃	16	16	13	
16	〃	15	15	18	
17	〃	29	29	31	
18	〃	37	21	13	
19	〃	23	18	16	
20	〃	21	16	35	
21	〃	42	25	24	Ⅲ群土器
22	〃	32	24	21	
23	〃	23	21	26	
24	〃	33	22	20	
25	〃	28	24	18	
26	〃	45	39	72	
27	〃	19	18	28	
28	〃	35	22	20	
29	〃	18	18	40	Ⅲ群土器
30	〃	27	25	29	Ⅰ群土器
31	〃	34	24	22	
32	〃	27	20	28	
33	〃	23	20	28	
34		57	46	24	
35		71	46	24	
36	柱穴状ピット	54	25	26	
37	〃	33	21	15	
38	〃	28	23	22	
39		190	27	29	Ⅲ群土器
40	柱穴状ピット	52	22	24	
41	〃	17	17	16	
42	〃	29	21	27	
43	柱穴状ピット	22	20	20	
44	〃	28	22	22	
45		93	52	12	
46	柱穴状ピット	20	20	12	
47	〃	28	20	14	
48	〃	18	17	31	
49	〃	24	22	19	
50	〃	20	19	12	
51	〃	28	25	16	
52	〃	29	25	14	
53	〃	51	29	15	
54	〃	29	22	13	
55	〃	35	17	13	
56	〃	23	19	16	
57	〃	35	25	17	
58	〃	24	24	22	
59	〃	25	24	20	
60	〃	26	26	28	
61	〃	30	27	33	
62	〃	47	44	29	
63	〃	114	26	13	
64	柱穴状ピット	56	43	32	
65	〃	32	30	14	
66	〃	48	30	18	
67	推定建物C	38	30	19	
68	〃	22	20	32	
69	〃	39	30	26	
70	推定建物D	22	19	17	
71	〃	33	27	14	Ⅲ群土器
72	〃	23	18	14	
73	柱穴状ピット	18	16	23	
74	〃	29	14	13	
75	〃	29	24	19	
76	〃	54	35	35	Ⅲ群土器
77	〃	23	22	14	
78	〃	19	16	22	
79	〃	32	29	16	
80	〃	28	25	14	
81	〃	40	32	26	
82	〃	32	22	13	
83	〃	22	22	43	
84	〃	20	17	20	Ⅲ群土器
85	推定建物E	31	26	19	Ⅲ群土器
86	〃	22	19	28	Ⅲ群土器・玦状耳飾
87	〃	35	28	31	
88	推定建物F	49	33	17	Ⅲ群土器
89	〃	25	22	23	
90	〃	21	19	15	
91	推定建物G	42	29	12	Ⅲ群土器・磨石
92	〃	23	18	17	
93	〃	24	21	21	
94	柱穴状ピット	30	24	19	
95	〃	19	19	15	
96	〃	22	21	13	
97	〃	32	25	28	
98	〃	46	16	10	
99	〃	18	11	15	
100	推定建物H	52	28	13	
101	〃	29	28	18	Ⅲ群土器
102	〃	38	28	17	
103	柱穴状ピット	49	23	32	
104	〃	20	15	13	
105	〃	21	20	15	
106	〃	20	20	24	
107	〃	19	15	25	
108	〃	29	28	18	
109	〃	18	16	10	
110	〃	30	17	21	
111	〃	27	27	20	Ⅲ群土器
112	〃	21	17	14	
113	〃	22	18	13	
114	〃	15	14	24	
115	〃	17	17	12	
116	〃	26	19	19	
117	〃	24	21	15	
118	〃	19	17	22	
119	〃	22	19	22	
120	〃	25	24	19	
121	〃	21	19	17	
122	〃	24	24	14	
123	〃	32	30	32	Ⅰ群土器
124	〃	28	24	36	



第14図　柱穴状ピットの規模

Ⅱ 遺　物

1　縄文土器

前期初頭から後期前葉に至る資料が出土した。全体量は口縁部集計にして600個体あまりにのぼる。前期初頭～中期初頭（Ⅰ～Ⅲ群）が99％を占めており、それ以降は断片的な資料が出土したのみである。本項では、量的主体を占めるⅠ～Ⅲ群土器について記述し、Ⅳ群以降は図示と観察表の提示にとどめる。第15図掲載資料は、547・548がⅣ群（中期前葉）、550～553がⅤ群（中期中葉）、554がⅥ群（中期後葉）、555～557がⅦ群土器（後期前葉）である。

Ⅰ～Ⅲ群土器の分布としては、いずれも西側斜面を中心としているが、Ⅲ群段階に至り東側尾根へも面的に拡大する。使用胎土については各群共通分類とし、石英・長石粒などを多量に混入（a）、これに雲母が付加（b）、鉱物の混入稀薄（c）に大別した。

（1）Ⅰ群土器（第16図・17図）

前期前葉土器群である。出土量は口端遺存資料で41個体、体部有文資料で36個体を数える。いずれも深鉢で、器面上部に小さな段をもつもの、これを欠くもの、の別がある。胎土中には全点植物繊維が含まれる。

A　分類

ⅠA類（第16図１～10）

器面上部に装飾的な文様帯をもつグループ。16個体を数え、口縁部集計にして10％を占る。文様の在り方から４種に細分できる。使用胎土はａとｂがほぼ同量である。

Ａ１類（１）　縄（無節Ｌ）の側面圧痕と楔状の刻目を施すもの。１点のみ。

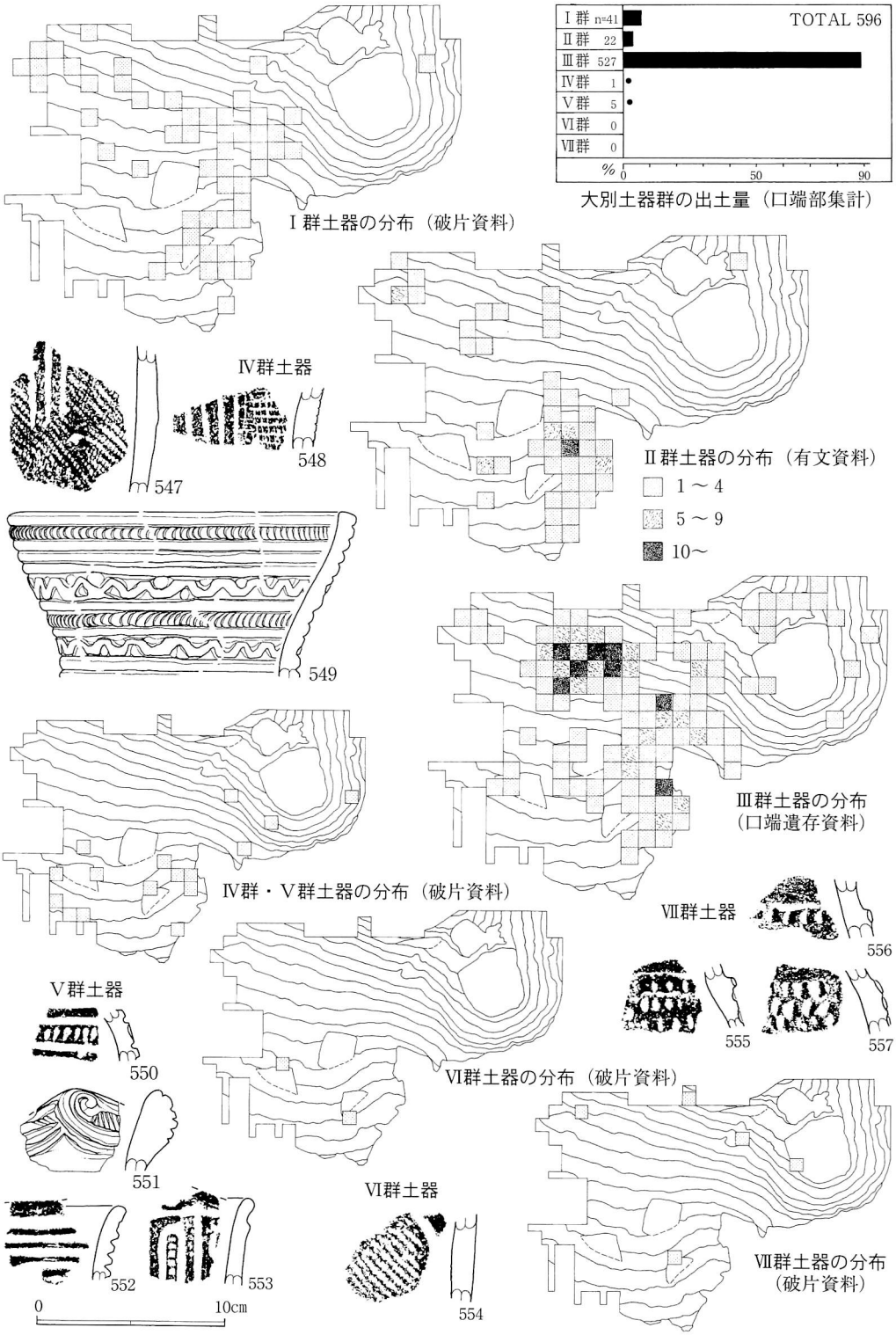
Ａ２類（２～４）　縄文地上に横位ないしは斜位の平行沈線を描くグループ。７個体あり、Ａ類の中では最多にあたる。２・４の口端には刺突が加えられる。４は口縁部文様帯下に小段をもち、Ｖ字刺突（内部が削りとられる）が施される。

Ａ３類（５～７）　格子目沈線が描かれるグループで、出土量は５個体。５・６は文様帯が多重化しており、描出文様が上下で異なる。５は上部文様が矢羽状をなす例である。６の口端と５の文様帯区画部分には刺突、６の有段部にはＶ字刺突が施される。

Ａ4類（８・９）　２列程度を単位とした帯状刺突列によって横位・斜位文様を描くもの。施文の際には、平行沈線によるレイアウトがあらかじめ行なわれる。９は沈線間に竹管腹面による爪形刺突、８は先端が尖った工具の背面を用い沈線上に刺突を加える例である。

Ａ5類（10）　文様帯下にコンパス文が施されるもの。１点のみ。

ⅠＢ類（第16図11～第17図45）



第15図　大別土器群の分布とⅣ群～Ⅶ群土器

口端や体部区画に刺突列を加えるグループ。口端遺存資料で23個体を数え、本群の主体を占める。胎土はａを主体とする。Ａ類に欠落するｃの存在とｂの乏しさも特徴的である。

刺突の施文は、口端と体部区画の両者におよぶもの（11・18）と区画部分に限定される場合（27）に分けられる。区画部分が小段をなす個体（27～36）が11例あり、27の直下には、コンパス文風の凹線が施される。

刺突の在り方としては、縦位・斜位・横位・矢羽・Ｖ字・爪形竹管・円形竹管・列点のバラエティーがある。口端の場合は縦位が主体で（11～16）、施文が痕跡的なものが多い傾向にある。区画部分では段の有無によって異なっており、有段個体ではＶ字（29～34）、無段個体では斜位・横位併用施文（37～41）が一般的なようである。

ＩＣ類（第17図48～55）

縄文のみが施されるグループ。口端の断面形は、各類同様、内面が削がれた形状が多い。胎土はＢ類に似た傾向を示す。

Ｂ　底部（第17図46・47）

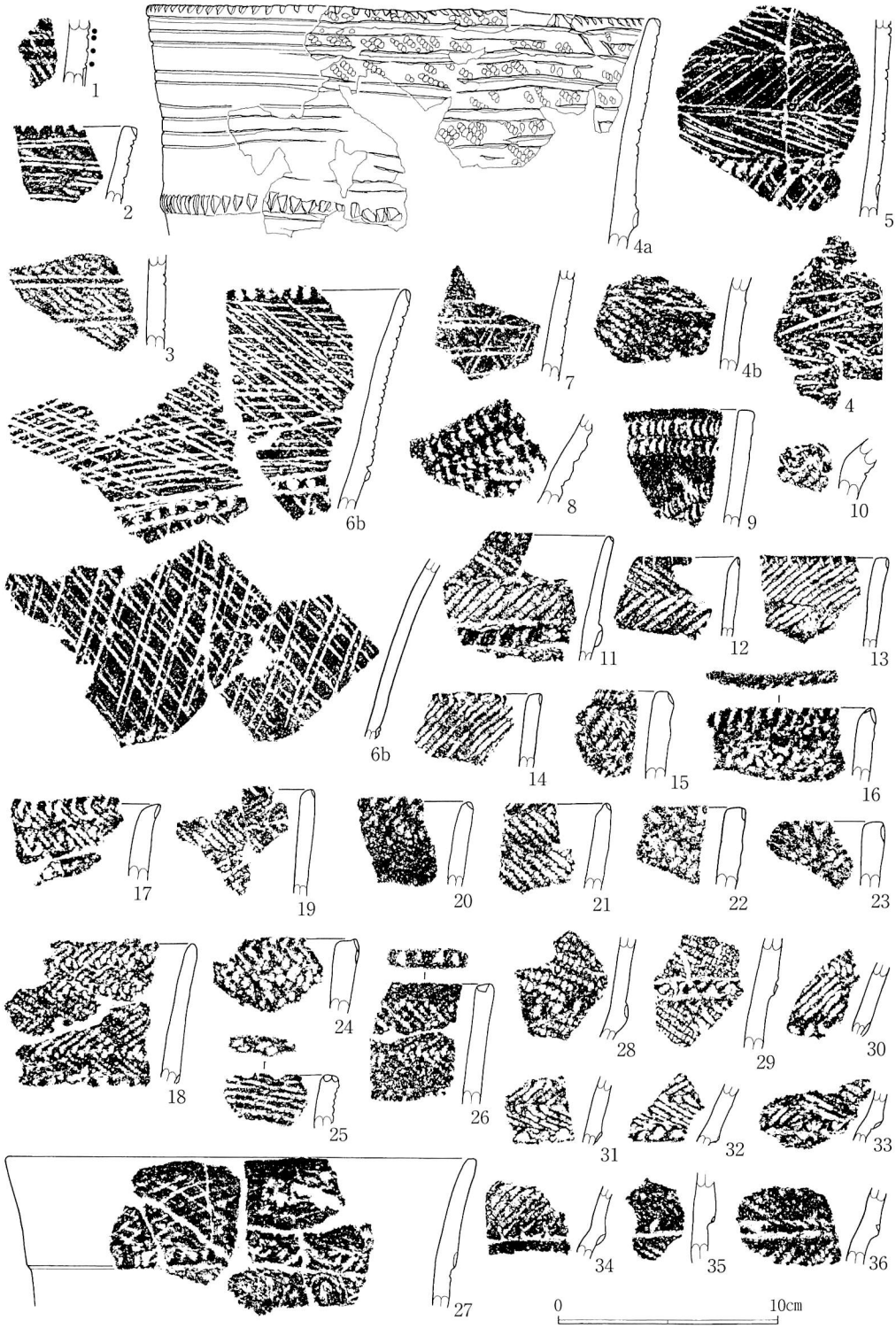
２個体の出土にとどまる。平底は皆無である。46は縄文が施された丸底土器。47は同じく丸底の可能性が高く、８列程度の連続刺突がラフなタッチで施される。

Ｃ　地文の様相

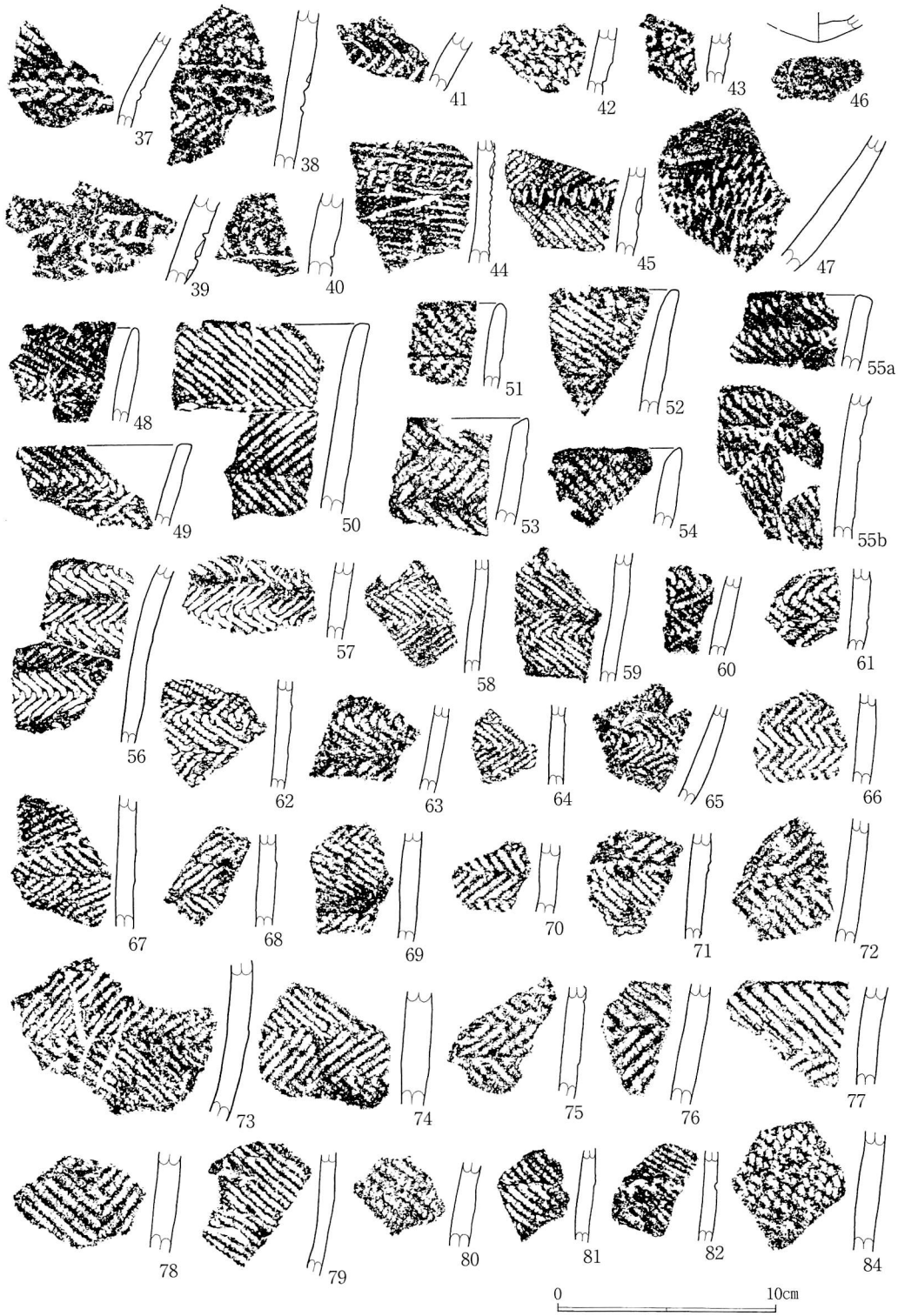
縄文の施文構成が明らかな資料は、体部破片を加えると200点あまりにのぼる。条の走行は羽状が７割を占める。結束（56～65など）・非結束（66～77など）の比率は、後者がいくぶん優勢（57％）である。斜行縄文の中で環付原体（55）は２個体にとどまる。

分類	口端遺存数	体部数	胎土ａ	ｂ	ｃ	結束羽状縄文	非結束羽状縄文	原体不明羽状	斜行縄文	環付斜行縄文	撚糸文	網目状撚糸文	不　明	TOTAL
A1	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
A2	2	5	4	3	—	—	—	—	2	—	—	—	—	7
A3	1	4	3	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5
A4	1	1	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
A5	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
B	23	24	31	3	13	6	8	2	5	1	2	1	2	45
C	12	—	6	2	4	2	4	—	3	—	—	—	—	12
不 明	—	—	—	—	—	43	55	31	56	1	—	—	1	187
TOTAL	39	36	—	—	—	51	67	33	64	2	2	1	3	263

第１表　Ｉ群土器一覧



第16図　Ⅰ群土器－1（ドット：縄圧痕）


37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55a
55b
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
84
0
10cm

第17図　Ⅰ群土器－2

料として撚糸文（25・44）、網目状撚糸文（27）・結節回転文（17）が存在する。

一回あたりの施文幅は、結束羽状縄文が1.1～2.7㎝、非結束羽状縄文が1.1～3.9㎝、斜行縄文が1.5～3.1㎝を測る。結束羽状縄文では「幅狭等間隔施文」にほぼ限定されるが、非結束羽状縄文では「幅広等間隔施文」資料がこれに加わる点が特徴である。

D　Ⅰ群土器の位置づけ

角田山麓は、新潟県内の中ではこの時期の資料に恵まれており、新谷Ⅰ群・布目・新谷Ⅱ群～Ⅲ群・豊原Ⅰ群４期・豊原Ⅰ群５期の５段階にわたる変遷を辿ることができる（第４図下）。以上を１～５期とし、本遺跡出土資料と対比する。

Ａ１類は関東の花積下層式に類似し、１期の典型資料である。Ａ２類もこれに伴う可能性が高く、本群最古のグループとみなされる。Ａ３類は布目に類例があり、２期（二ツ木Ⅰ式併行）の指標となる。底部形態は２期までが丸底を主体とする。46は１～２期、47は２期の資料であろう。Ｂ類は１期～４期の段階に存在するが、１～２期を特徴づけるＶ字刺突付有段部の存在と３期（二ツ木Ⅱ式～関山Ⅰ式併行）以降に多用される爪形竹管の乏しさからして、１～２期を中心とする資料とみられる。Ａ4類・Ａ5類は３期の特徴を備える。平底土器が確認できなかった点も合わせ、個体量の減少化が指摘できる。

地文の構成は、２期と３期を境に大きく変化する。両者の特徴は、２期が結束羽状縄文の卓越、３期が非結束羽状縄文と環付斜行縄文の高い割合に求められる。本遺跡においては、環付原体が１例にすぎず、全体的な様相としては２期に最も近似すると言える。布目に較べ結束羽状縄文の割合が少ない点については、１期資料（幅広等間隔施文）が相当量含まれるためと考えるのが妥当であろう。

（２）Ⅱ群土器（第18図）

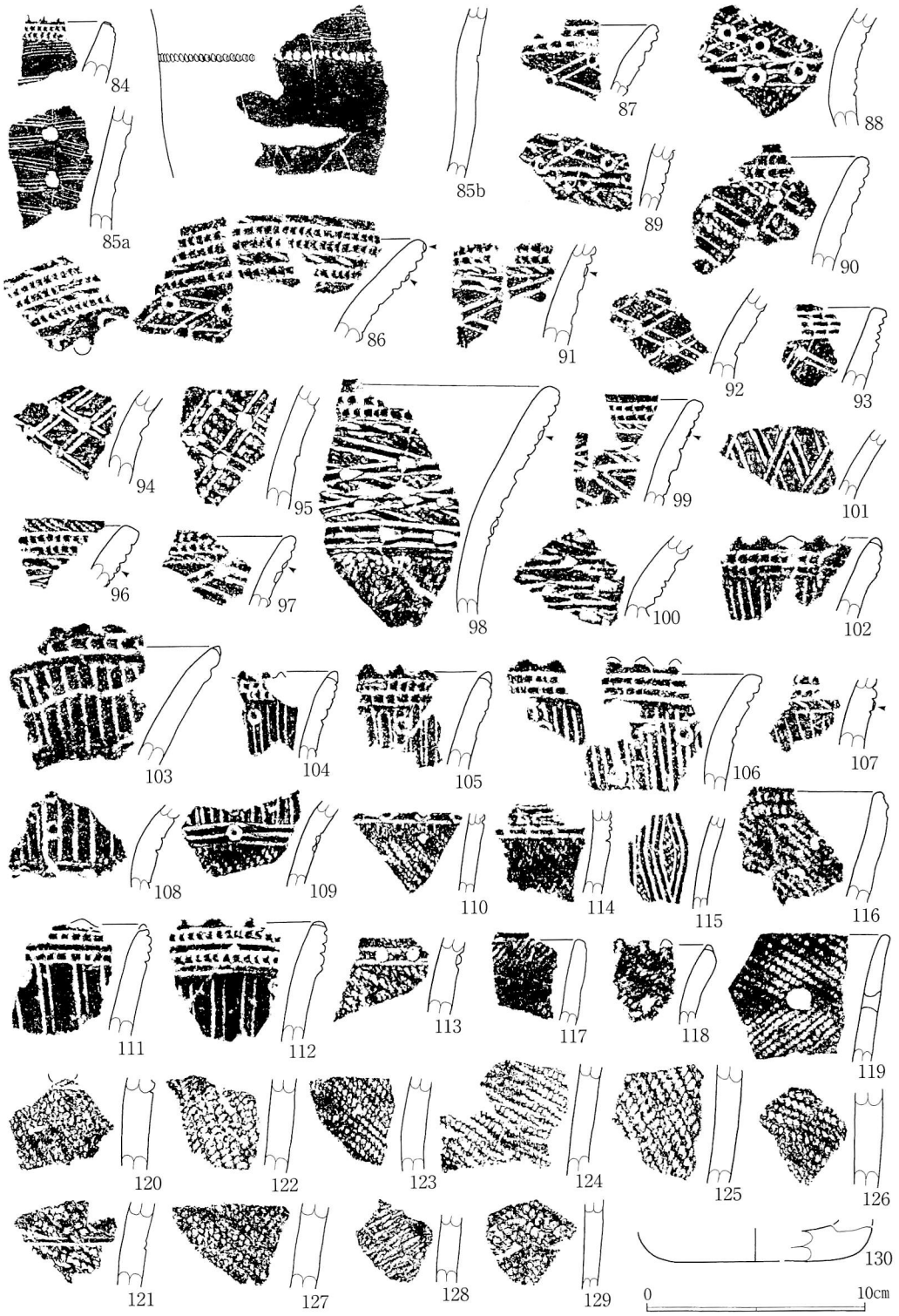
関東編年による諸磯ａ式～ｂ式に併行する土器群を本群とする。出土量は、口端遺存資料で22個体にとどまる。器種はすべて深鉢で、この時期特有の浅鉢は出土しなかった。本群の胎土は、白色もしくは赤褐色を呈し混入物が極めて乏しいもの（胎土ｃ）が大半を占めており、体部破片の場合でも識別が容易である。胎土と文様の関係も以下にように明瞭である。

Ａ　分類

ⅡＡ類（第18図84・85）

口端や口縁部文様帯の下端に一施文幅３㎜の連続刺突を施し、区画内に櫛歯状工具による「肋骨文」を描くもの。２個体に限られる。84の口端には波状の小突起が付され、85の肋骨文交点には円形刺突が配される。

ⅡＢ類（第18図86～101）



第18図　Ⅱ群土器（◀：斜位刻目）

口縁部文様帯に格子目文を描くグループ。30個体程度を数える。胎土は、下記のＣ類と共にｃに限定される。口端遺存資料はすべて平縁である。文様の特徴から３種に区分できる。

Ｂ1類（86～95）　連続爪形文・平行沈線文・刻目による口端部文様下に斜格子平行沈線を描き、その交点に円形竹管（86～89）や円形刺突（90～95）を配すもの。竹管・刺突の施文割合に差はみられない。

Ｂ2類（96～100）　口縁部文様はＢ1類とほぼ同一であるが、格子目沈線が左右非対称であったり（98～100）、格子目交点の刺突が異なるもの。97～100の刺突は不整三角形を呈し、本類にのみ使用される手法である。96は、口端に縄文を施す唯一の例。

Ｂ3類（101）　格子目沈線の交点に文様が欠落するもの。本例のみである。

ⅡＣ類（第18図102～113）

Ｂ類と同様の口縁部文様下に縦位平行沈線を施すもの。Ｂ類とほぼ同数の29個体を数える。口端には、いくぶん粗大な波状小突起が付けられる。縦位平行沈線の施文間隔は、密なもの（102～109）と疎らなもの（111・112）があり、量的には前者主体である。刺突は縦位沈線上および下端の横位区画沈線上に主として円形竹管が施される。

ⅡＤ類（第18図114・115）

竹管平行沈線による幅広い口縁部文様帯をもつグループのうち、胎土ａに該当する２点を本類とする。114は、文様帯下端の横位沈線上に爪形刺突が間隔をおいて施される。115は、縦構成の弧状平行沈線が凸レンズ風に描かれたものである。

ⅡＥ類（第18図116）

口端に１～数列の刺突を加え、以下を地文帯とするもの。胎土ａ・ｃ各１点を数えるのみである。116は後者に属し、２列の刺突が施される。

ⅡＦ類（第18図117～119）

地文のみのもの。本類に属することが確実な資料は３個体に限定される。胎土は、117・118がｃ、119がａ。118の口端にはＣ類同様の小突起が付される。

Ｂ　**底部**（第18図130）

本群の底部と見られる資料は、胎土ｃに属する２点に限定される。ともに底面縁辺が丸味をおび、この時期特有の形態をなしている。

Ｃ　**地文の様相**

本群の主体を占めるＢ・Ｃ類では、口縁部文様帯下における地文構成が判別できる資料がほとんどない。そこで、同様の胎土をもつ体部資料の在り方を見ると、42点中40点までが単節斜行縄文ＲＬによって占められる（120～127）。羽状縄文（129）はＦ類の119（胎土ｂ）を含めてもわずか２点しか存在しておらず、他は無節Ｌ（128）のみである。左撚りによる縄文

分類	口端遺存数	体部数	胎土c	a	斜位刻目	円形竹管	円形刺突	三角形刺突	羽状縄文	単節斜行縄文	無節斜行縄文	TOTAL
A	1	1	1	1	—	—	1	—	—	—	—	2
B1	4	12	16	—	1	8	8	—	—	—	—	16
B2	4	2	6	—	4	—	1	4	—	—	—	6
B3	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
C	9	21	30	—	1	7	2	—	—	1	—	30
D	—	2	—	2	—	—	—	—	—	—	—	2
E	1	1	1	1	—	—	—	—	—	1	—	2
F	3	—	2	1	—	—	—	—	1	1	1	3
不明	—	—	44	—	—	—	—	—	1	42	1	44
TOTAL	22	39	101	5	6	15	12	4	2	45	2	106

第２表　Ⅱ群土器一覧

原体の盛んな使用が大きな特徴と言える。

D　Ⅱ群土器の位置づけ

Ａ類は本群中最も古様相をもち、諸磯ａ式段階に比定できる。Ｂ類以下は、新潟県内における同ｂ式併行「刈羽式」の範疇に含まれる。これらは新旧要素が含まれており、以下のような前後関係が想定できる。

Ｂ１類・Ｂ３類は、従来の編年観［中野1999］に従えば刈羽式古段階（諸磯ｂ式古段階併行）に相当する。しかし近隣の豊原遺跡においては、類似胎土がⅡ群（諸磯ａ式併行）～Ⅲ群古段階（同ｂ式古段階～中段階併行）に使用され、Ⅲ群段階に至りようやく羽状縄文の急増を認める現象が確認されている［小野・前山ほか1988］。豊原Ⅱ群における地文の主体は、本遺跡と同様に斜行縄文ＲＬである。上記の地文様相は主としてＢ１類・Ｂ２類の在り方を示すだけに、諸磯ｂ式直前～古段階の時期幅の中で捉えておくのが妥当であろう。

Ｂ２類・Ｂ４類は、変形・省略がみられる点で後出的要素をもつ。胎土ａのＣ類・Ｅ２類は施文手法にも異なりを認める。前者は刈羽式中段階、後者は同新段階に比定しておく。

なお、刈羽式古段階～中段階の土器組成では、口端刺突グループが主体をなしながら、これに諸磯系の竹管沈線文グループが共伴する（第４図下：豊原Ⅲ群）。それに対し、本群で後者が欠落し、前者もわずか２個体にとどまることは重要な相違点である。Ｄ類の乏しさについては、近隣の分水町有馬崎でも確認されており［分水町教育委員会1997］、外郭に位置する地理的特性と考えられる。しかし、本遺跡と類似組成を示す事例は現時点で全く知られておらず、きわめて特異な土器群とみなすことができる。

（3）Ⅲ群土器

前期終末～中期初頭土器を本群とする。全体の89％を占める主体資料である。後述のように新旧４段階ほどの区分が可能であるが、前・中期の峻別が困難な資料も含まれるため、便宜上一括する。本群の胎土には、特筆すべき点が二つある。第１点は、粗大な植物繊維を混入するものが存在することである。しかしⅠ群土器に較べれば含有量は僅少で、意図的混入とみなすべきか判断に苦しむ個体も含まれる。第２点は、黒曜石の含有である。第28図364は最も明瞭な資料で、信州産石材とみられる小形剥片が器壁内に確認できる。それ以外は微細な砕片であるが、焼成時の溶解による表面の平滑化や発泡が特徴的である。ただし石英との峻別が肉眼的に困難な資料が多く数量的な把握が難しいため、ここでは存在の指摘にとどめておく。

Ａ　分類

ⅢＡ類

細い粘土紐の貼付による各種浮線を文様要素とするグループ。使用される浮線には７種の別があり、粘土紐を貼付した後、竹管腹面で連続的な刺突を加えるもの（ａ種）、浮線の上を竹管腹面で押引くもの（ｂ種）、浮線の端を竹管背面でなぞるもの（ｃ種）、ソーメン状の浮線を貼付するだけのもの（ｄ種）、波状に施すもの（ｅ種）、指頭で押圧するもの（ｆ種）に分けられる。ａ種はいわゆる結節状浮線文で、施文角度が器面に対し鋭角的なａ１種、鈍角的なａ２種に分けられる（第19図上）。本類では浮線ｄ種による連続山形文様がしばしば施される。施文手法には二種の別があり、長めの粘土紐を波状に貼付するＡ種、短かい粘土紐を波状もしくは鋸歯状に貼付するＢ種、に区分する（第19図下）。

Ａ１類（第20図131～22図204）

縄文地上に浮線ａ１種とｄ種　を施すグループ。使用胎土は、Ａ２・Ａ３類に較べｂが多い傾向にある。本類では大波状口縁をなし、口端が内面に屈折する個体（131～148・189～194）が43例存在する。その量は口端遺存個体で66％にも達し、器形面での大きな特徴となる。

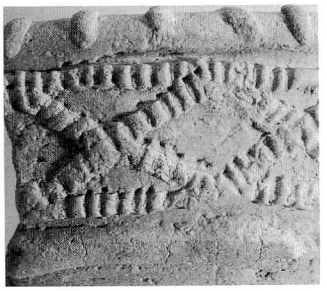
本類の中にはａ１種に限定される可能性をもつ個体（132・155など）も存在するが、一般にはｄ種を併用する場合が多い。これを１ａ類（131～188）とし、ｄ種だけで文様を描くグループ（189～204）を１ｂ類として分離する。結節浮線の施文に使用される工具幅は４㎜台にピークをもつ。本類では少数ながらａ２種の共存も認めるが、施文部位は、屈折口縁の内面や縦位文様の一部に留まっており、偶発的な要因によって生じたと考えるべきである。

１ａ類に限定される文様としては、浮線ａ種による帯状密接施文（161など）、これに添える隆線（161～168）、鋸歯状文様（135など）、菱形文様（170・171など）があげられる。

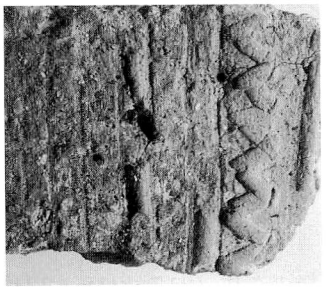
１ｂ類は例数に乏しいが、概して横位・曲線文様を基本とする。体部文様には、１ｂ類を含め連続山形浮線が多用される（147～149・151・182～189・195～199）。施文手法は大多

浮線文のバラエティー

a1種：A1類—131

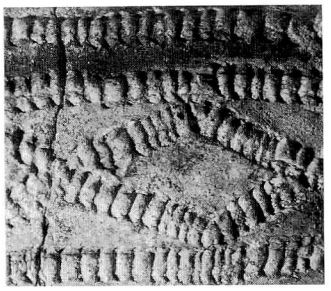


a2種：A3類—241



b種：A2類—222

a1種：A1類—168

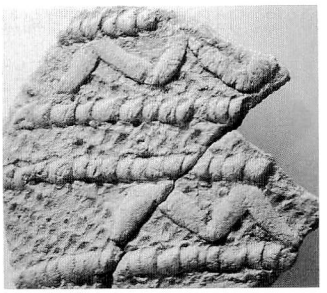


a2種：A3類—233

c種：A3類—284

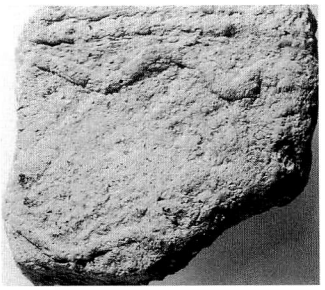
連続山形浮線文のバラエティー

A種波状貼付：A1類—149
(浮線a1種)



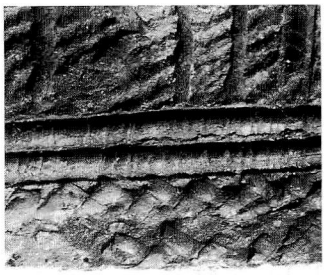
B種波状貼付：A1類—184
(浮線a1種)

B種鋸歯状貼付：A3類—253
(浮線a2種・d種)



A種波状貼付：A1類—185
(浮線a1種)

B種波状貼付：A3類—264
(浮線c種)



B種鋸歯状貼付：A2類—222
(浮線a1種・d種)

第19図　Ⅲ群土器Ａ類の浮線文様

数がＡ種に該当する。浮線の施文範囲は器面全体におよぶケースが一般的なようである。本類分類資料において体部破片が目立って多い点は、これに由来するものであろう。少数例としては、口端に浮線ｅ種、内面に縄文を施す156、体部にＶ字区画を配す180があげられる。後者は、口縁部文様帯が圧縮される点においてもＡ２類的な色彩をもつ資料である。

Ａ２類（第23図217～229）

浮線ｂ種の多用（226・227など）、竹管平行沈線との複合施文（218～220・223）、内屈口縁の存在（217・218・221）などによって特徴づけられるグループ。胎土に多量の鉱物を含む点に特徴があり、ｃに該当するのは219のみである。

浮線の貼付は、Ａ１類と同様に縄文施文がなされた体部全体に及ぶとみられるが、口縁部文様帯が明確に区分され、その幅が著しく圧縮される点が特徴的である。本類の連続山形浮線文は全点Ｂ種に該当し、幅の狭い鋸歯状をなす（220・222・224～226）。浮線ａ１種やｂ種の工具幅は３㎜台に集中しており、Ａ類の中では最も繊細である。

Ａ３類（第22図208・第23図230～320）

浮線ａ２種の多用とｃ種の併用を認めるグループ。口縁部集計にして107個体にのぼり、Ａ類の最多資料をなす。本類の中には、植物繊維を微量ながら含むものが少なからず存在する。器形としては、外傾する口縁下に頸部を有し、体部に膨らみをもつものが大多数を占める。単純外反器形の230、直立器形の208は、口縁部資料の中で稀な例である。

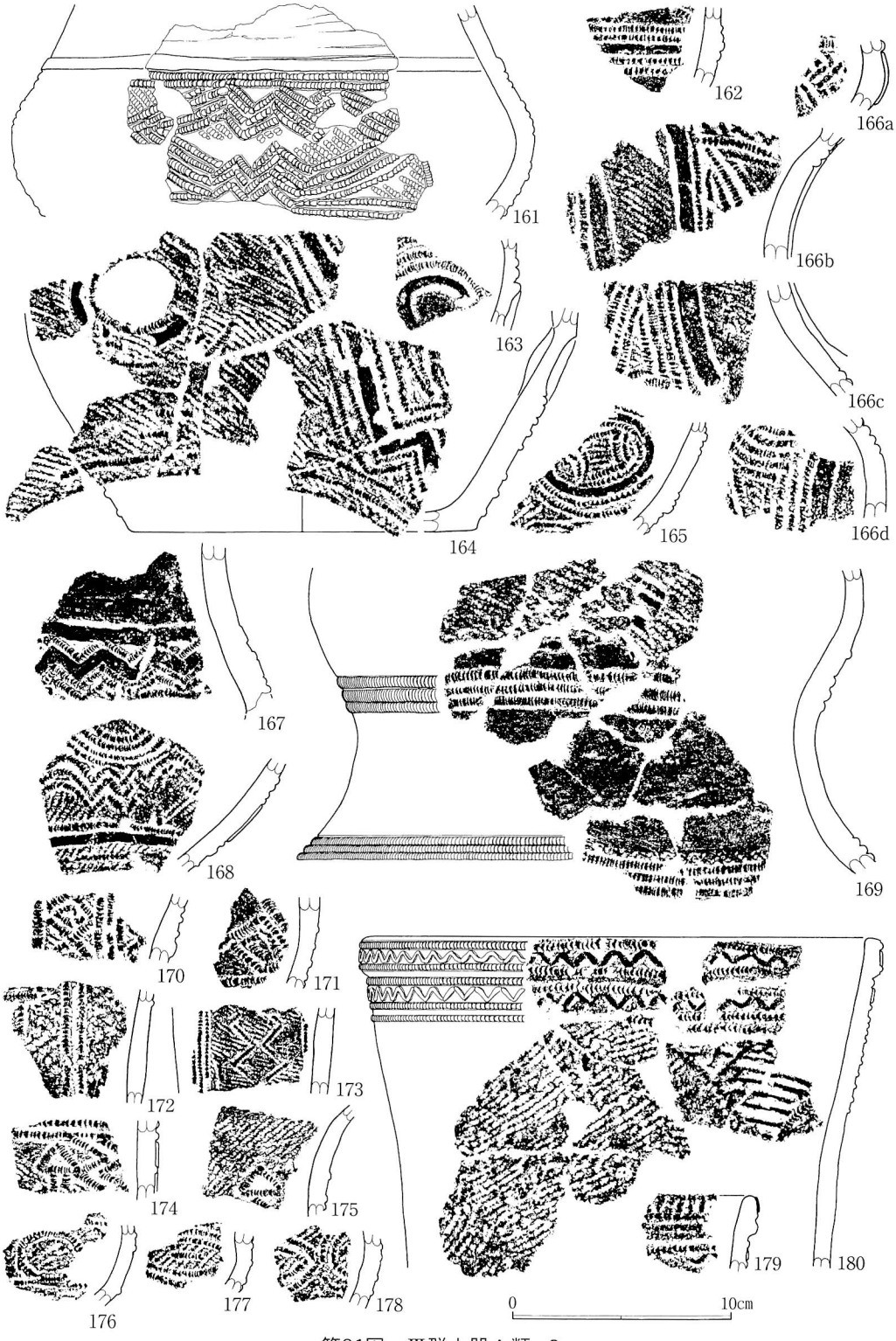
浮線ａ種の施文工具幅は、Ａ１類と同じく４㎜台を中心とする。本類に特徴的な浮線ｃ種は横位区画内の充填文様にほぼ限定されており、それ自体が独立文様をなした314のような例は稀である。浮線の施文部位は口端～頸部下に限定され、それ以下に縄文が施される。

文様は頸部を境に２帯に分かれる場合が一般的である。口縁部文様には、菱形（231～243）

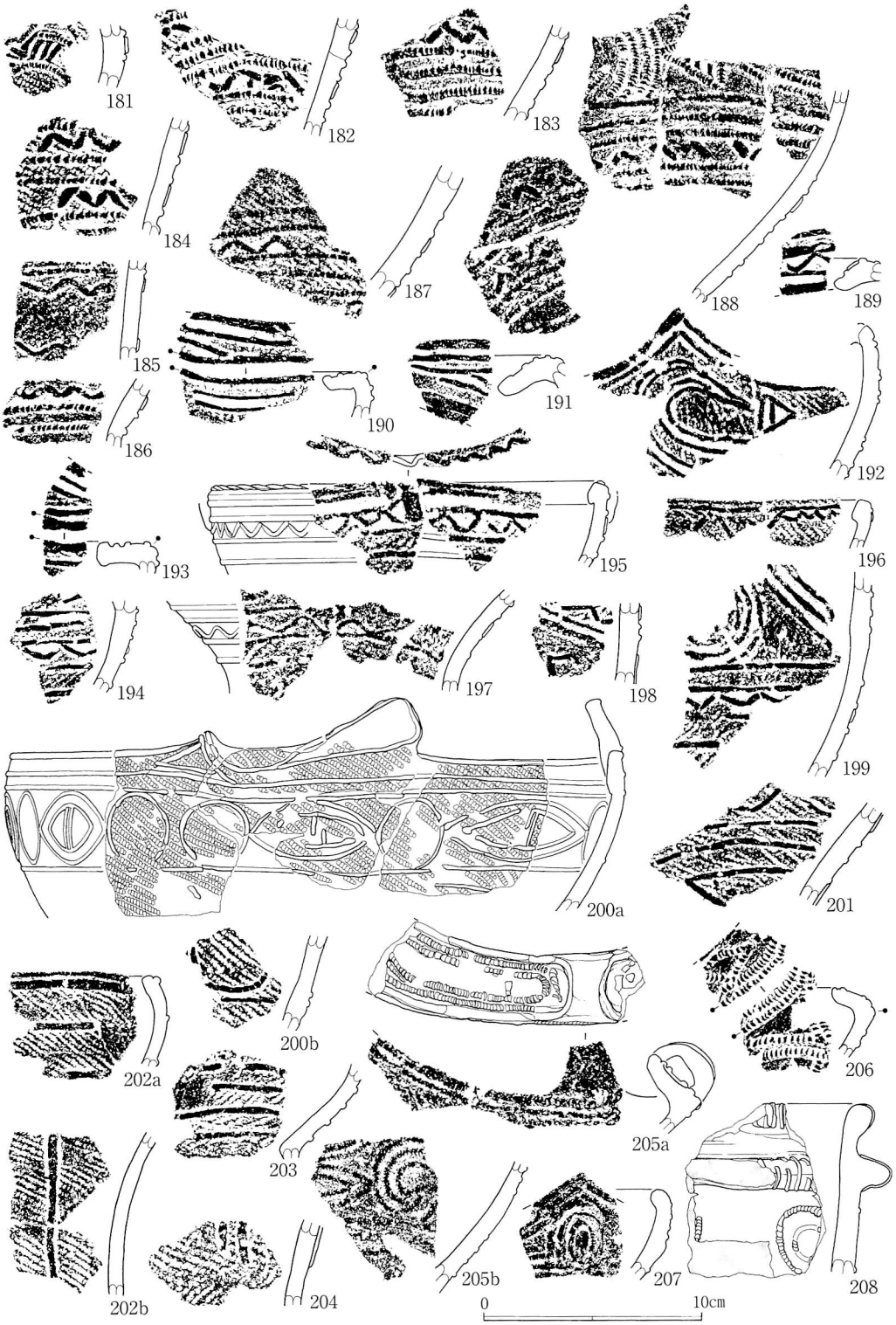
分類	口端遺存数	体部数	胎土ab	c	繊維	浮線a_1	a_2	b	c	d	e	f	山形A	B	斜行縄文	羽状縄文	TOTAL
A1a	30	142	111	62	—	144	20	—	—	37	1	1	12	4	23	2	172
A1b	8	19	16	11	—	—	—	—	1	26	1	—	10	—	10	1	27
A2	5	20	24	1	—	15	—	10	—	16	—	—	7	—	5	—	25
A3	107	89	151	45	38	23	144	—	29	64	—	—	2	29	12	4	196
A4	10	4	7	7	—	7	3	—	2	8	—	—	—	—	—	—	14
A5	25	16	23	18	13	—	—	—	—	—	41	—	—	—	3	1	41
A6	1	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	2
TOTAL	186	291	334	153	51	189	167	10	32	151	43	3	31	33	53	8	477

第３表　Ⅲ群土器Ａ類一覧

第20図　Ⅲ群土器Ａ類－１

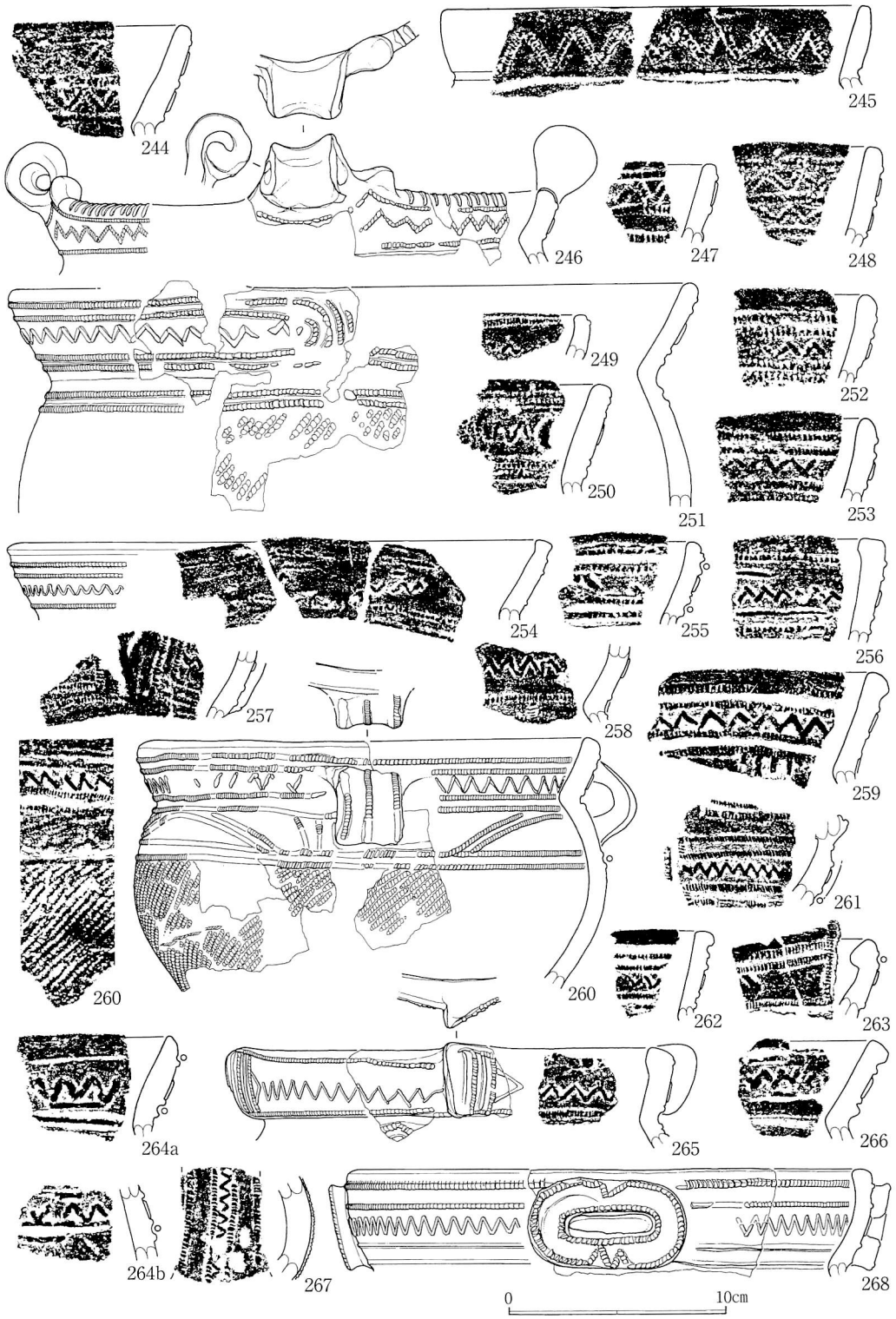


第21図　Ⅲ群土器Ａ類－２



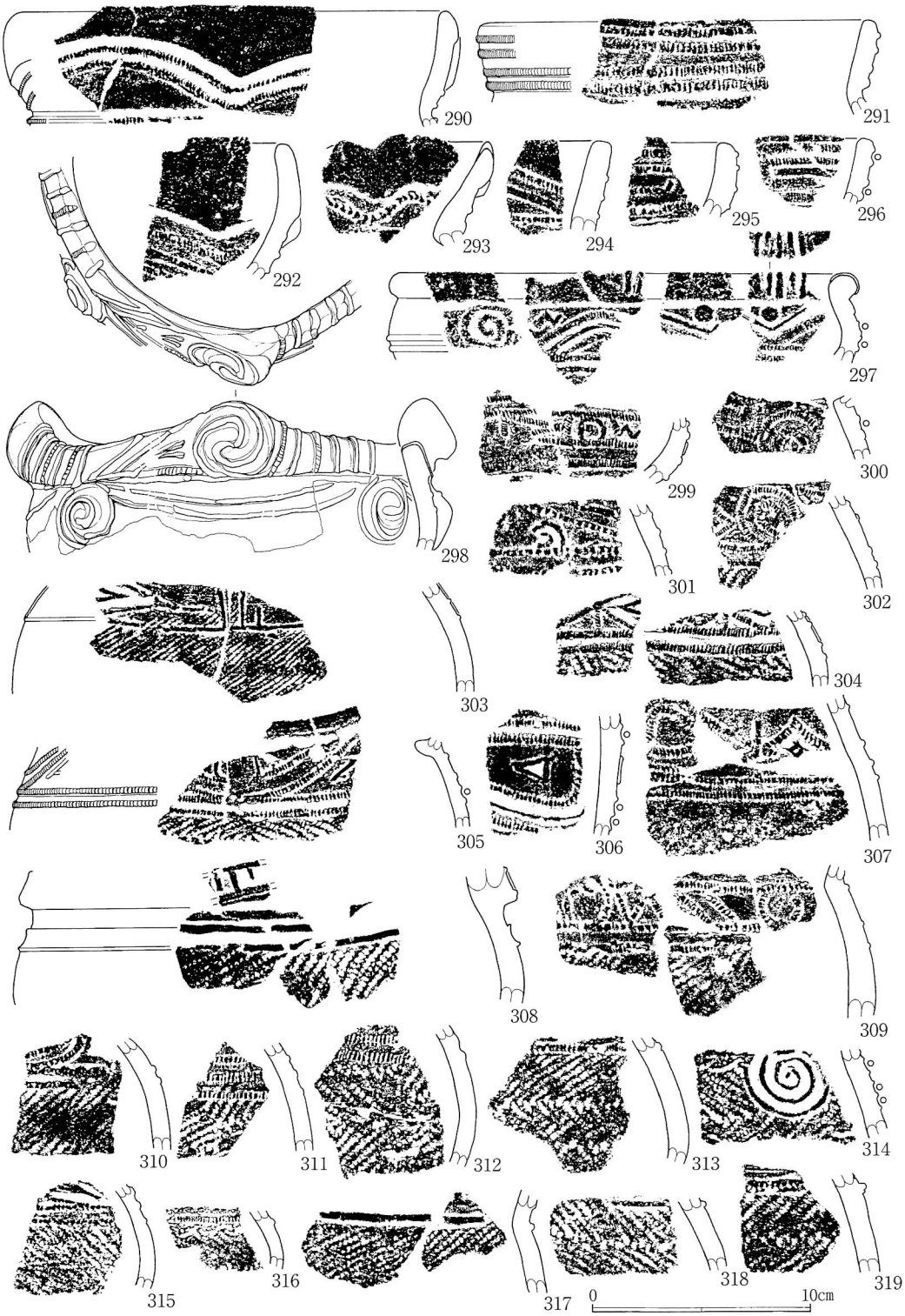
第22図　Ⅲ群土器Ａ類－３（網点：欠損部）

第23図　Ⅲ群土器Ａ類－４（白ドット:浮線C種・網点:欠損部）



第24図　Ⅲ群土器Ａ類－５（白ドット：浮線C種）

第25図　Ⅲ群土器Ａ類－６（白ドット:浮線C種・網点:欠損部）



第26図　Ⅲ群土器Ａ類－７（白ドット：浮線C種）

連続山形(244～269)、帯状(290～293)、幾何学状(289・297など)といったバラエティーがある。口縁部に配す橋状把手（240・260・282）や楕円形突起（268～277）は本類特有のもので、口端に隆帯や肥厚帯をめぐらす手法（283・285・286など）や渦状隆帯（277～279）・円形突起（288・297）などは後述のＢ類と共通した要素である。頚部下文様は口縁と意匠を異にし、幾何学文様を施す場合が多い。

連続山形浮線の施文手法は、大半がＢ種による。ただし、Ａ２類のような端正な鋸歯状文様は数少なく、一見波状風であったり左右非対称の例が多い（249～269）。Ａ1類とＡ2類の中間的な手法と言えよう。

Ａ４類（第22図205～207・第23図209～216）

Ａ1類～３類の特徴を合わせ持つものを本類とする。205～207はＡ1類と３類の複合例。205・206はＡ1類の内屈口縁をもつ。しかし前者はＡ３類的な橋状突起が付され、後者は浮線 a_2 種が無文地上に施される。207は波頂下の楕円形浮線の中央にＡ3類的な小突起をもつ。209～216はＡ２類的なＶ字･斜行格子目浮線が施されるが、Ａ３類の特徴となる口縁部肥厚帯(209･210)や有頚器形（210～215）・各種突起（211・212）・浮線ｃ種（213）を複合する例である。

Ａ５類（第27図322～341）

浮線ｅ種を単一要素とするグループ。貼付文様には細形と太形の別があるが、明確な一線を引きがたいため一括する。太形個体では胎土ｃや植物繊維含有個体が相当量存在し、外傾もしくは外反口縁が大多数を占める。325は口端に耳状突起を配す資料である。浮線ｅ種の施文例としては、１ａ・１ｂ類の中に１個体ずつあり（156・195)、本類との近縁関係がうかがえる。

Ａ６類（第27図320・321）

浮線ｆ種のみをもつもの。２個体の出土にとどまる。320は縄文を地文とし、口縁部から底部までの間に施文が及ぶ。321は横位集合沈線との複合例である。以上の他に、Ａ１類の１点（139）に同種の施文が確認できる。

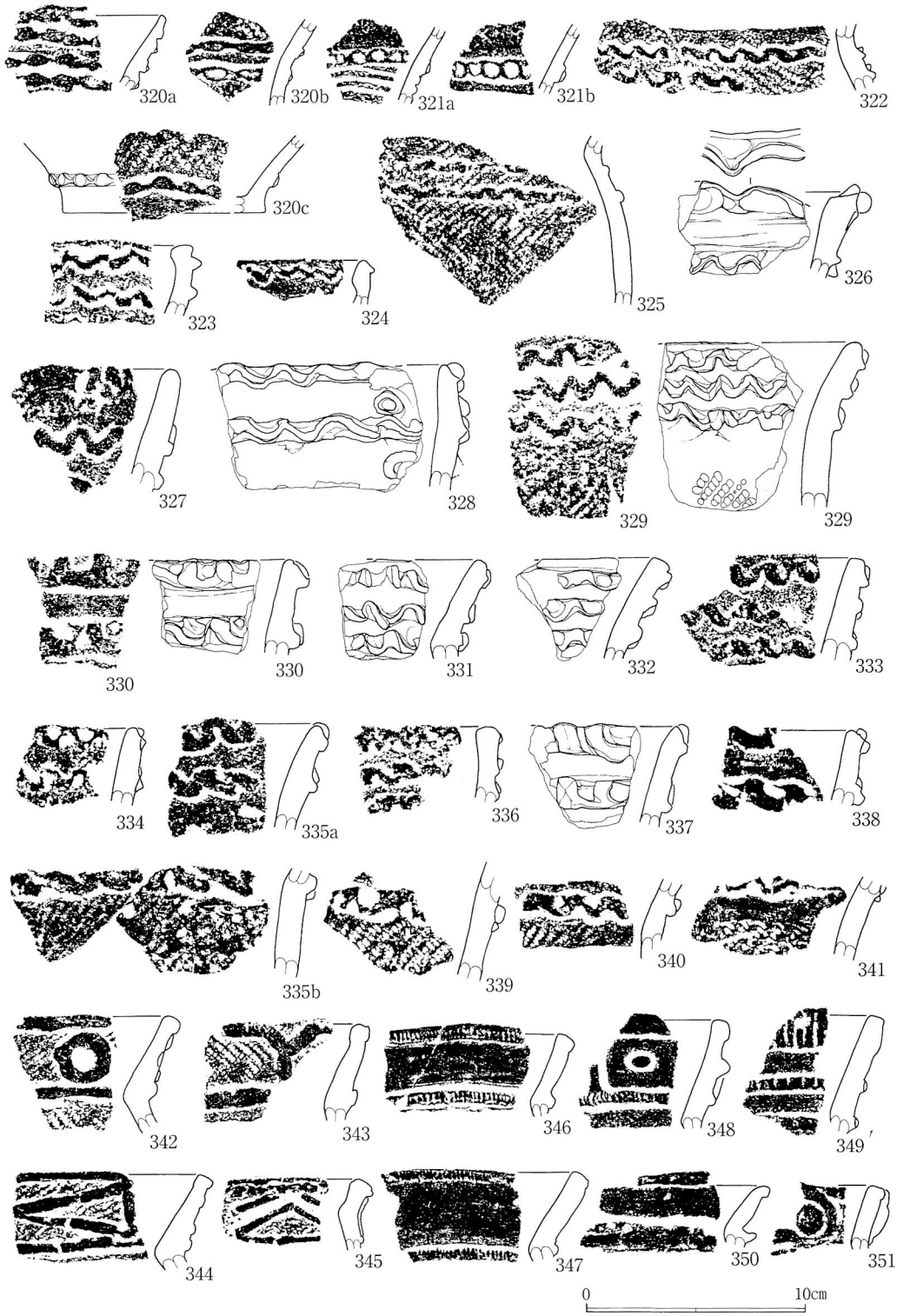
ⅢＢ類

口縁部に隆帯・肥厚帯や単一沈線を施すグループに加え、口縁部を無文帯とするものを本類とする。出土量は、Ａ類を若干上回る209個体にのぼる。口縁器形は、頚部から外傾するものが主体を占めるが、Ａ３類に較べ屈曲が緩やかな点に特徴がある。波状口縁は少数で、平縁上に小突起が付される程度である。植物繊維を含む個体はⅢ群中最も多い。

Ｂ１類（第27図342～345）

縄文を地文とし、口端から頚部にかけて太い粘土紐を貼付するもの。施文構成や器形は後述のＢ２類と同様で、Ａ１類との中間的な性格をもった資料と言える。

Ｂ２類（第27図346～第29図380）



第27図　Ⅲ群土器A類－８・B類－１（網点：欠損部）

口端に隆帯もしくは肥厚帯をめぐらすグループで、Ｂ類全体の半数近くを占める。隆帯・肥厚帯の数に基づき２類に細分できる。

Ｂ2a類（346～363）　２列以上の横位隆帯を配すもの。最多例（355）で４列におよぶ。全体構成がわかる355・362では、連結隆帯と橋状突起によって器面が４単位に分割されており他の個体も同様の在り方を示す可能性がある。346～348は隆帯上に連続刺突が加えられる。施文手法は、前述の浮線ａ２種と同一で、Ａ３類との近縁関係を物語る。

Ｂ2b類（364～380）　１列の隆帯・肥厚帯がめぐるもの。口端の横位隆帯下に斜位・渦状などの隆帯を配す364～369と肥厚帯のみの370～380に二分できる。後者の中には、沈線や鋸歯状彫去を加える個体が多い。この他、発掘資料では確認できなかったが、肥厚帯下の無文部に連続刺突を施す例が表採品の中に１点ある（第８図13）。

Ｂ３類（第29図381～388）

口端は肥厚せず、その直下に横位隆帯をめぐらすもの。隆帯の貼付位置が下がる点を除けば2a類に近似するグループである。

Ｂ４類（第29図389～第30図408）

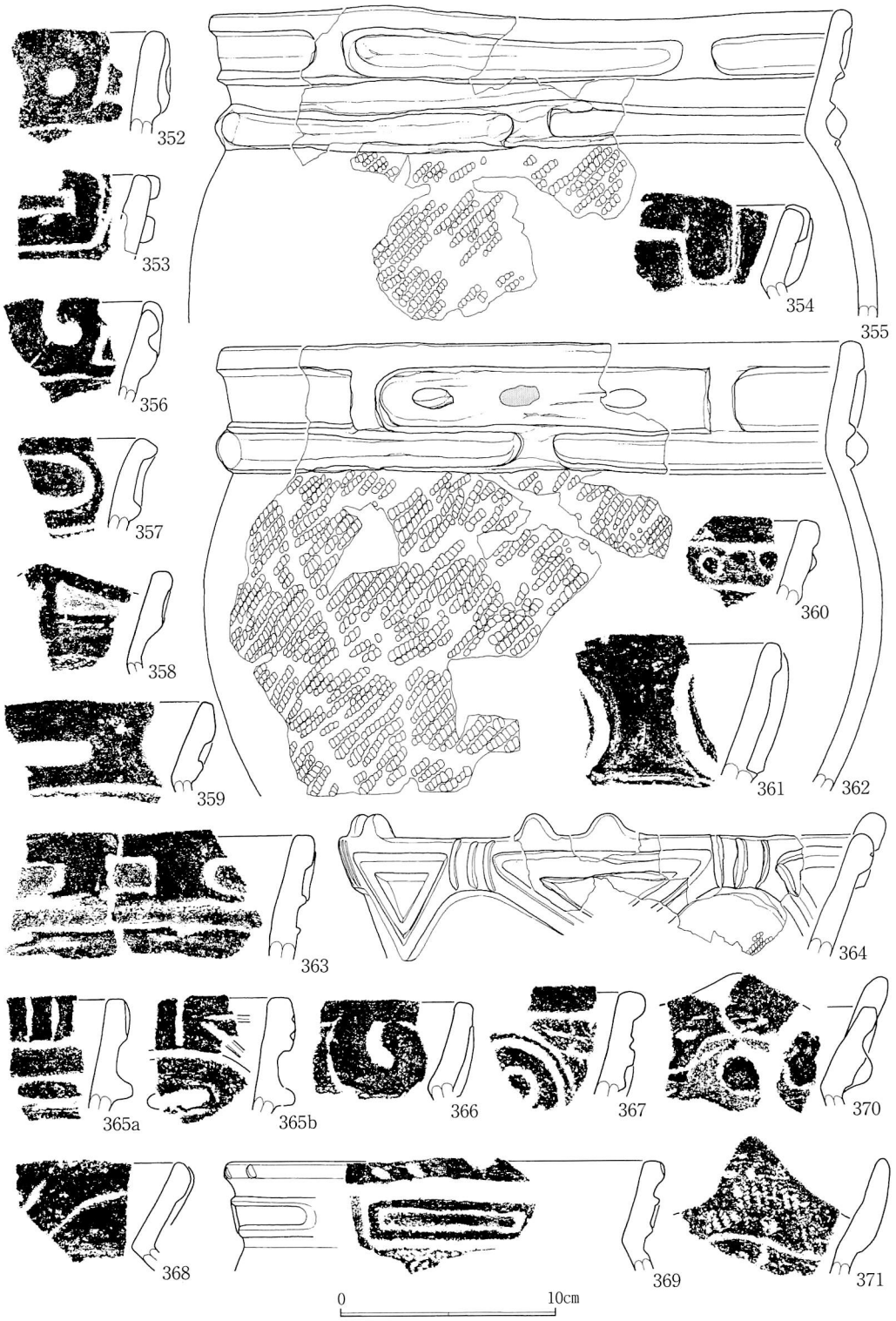
横位隆帯を欠くグループを本類とする。貼付位置は、全周をめぐるもの（391）と要所にのみ配すもの（392など）の別がある。隆帯の形状には、縦位～斜位と渦状・菱形などの幾何学形があり、量的には前者が若干上回る。Ｂ２類と共に、円形突起を伴う個体が多い。

Ｂ５類（第30図409～414）

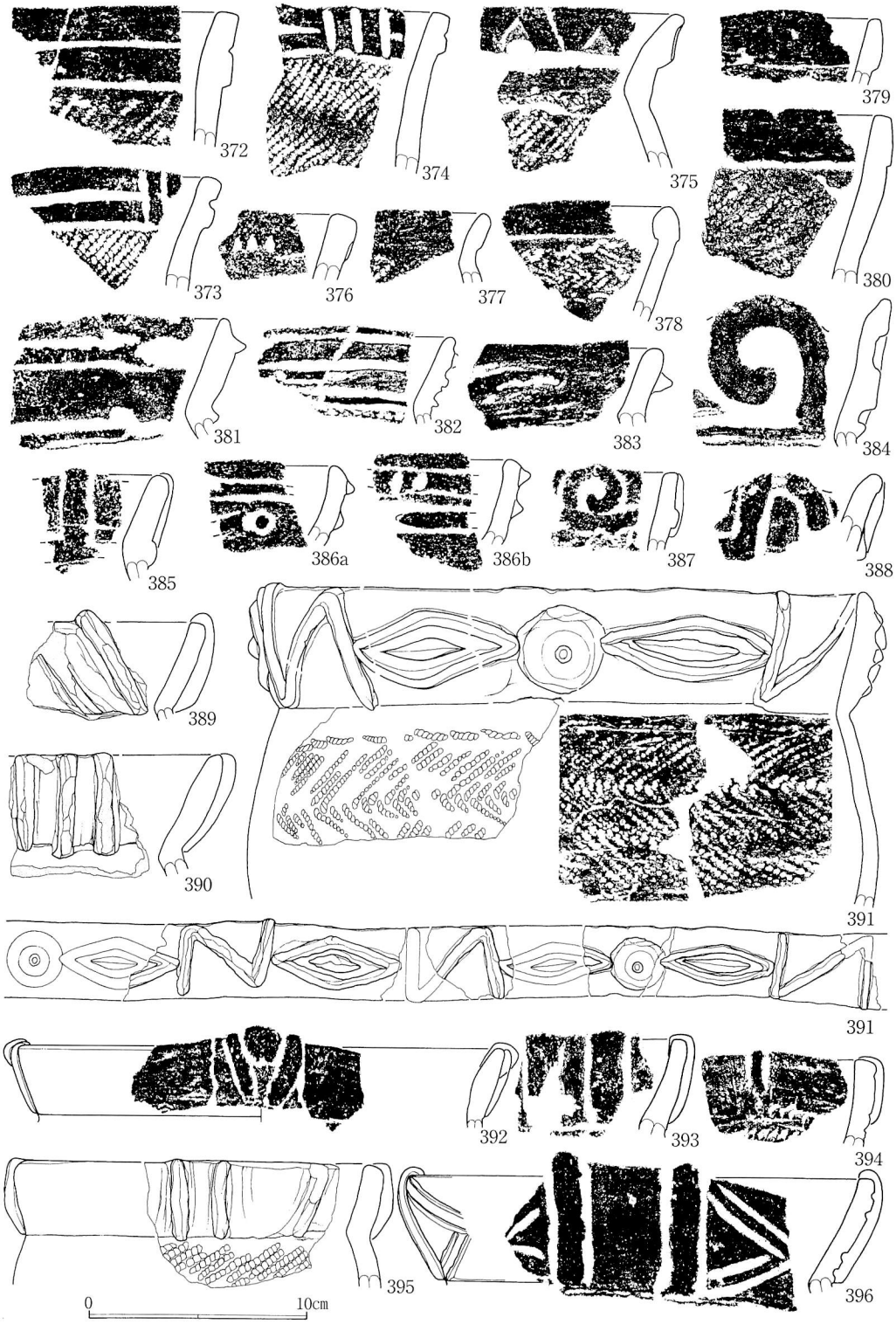
単一沈線だけが描かれるもの。沈線の図形は、横位・縦位・山形・渦状をなしており、Ａ３

分類	口端遺存数	体部数	胎土ab	c	繊維	連続刺突	三角形鋸歯	沈線文	円形突起	斜行縄文	羽状縄文	TOTAL
B1	4	—	3	1	1	—	—	—	—	—	1	4
B2a	37	2	27	12	23	5	—	—	4	1	—	39
B2b	32	1	30	3	21	—	4	6	1	4	1	33
B2a~b	27	—	20	7	12	1	—	—	—	—	—	27
B3	26	—	16	10	11	3	—	—	1	—	—	26
B4	42	3	28	17	31	1	—	2	4	—	1	45
B2～5	5	52	—	—	—	—	—	1	3	1	—	57
B5	7	2	7	2	5	—	—	9	—	1	—	9
B6	29	—	20	9	23	—	—	—	—	2	—	29
TOTAL	209	60	151	61	137	10	4	14	13	9	3	269

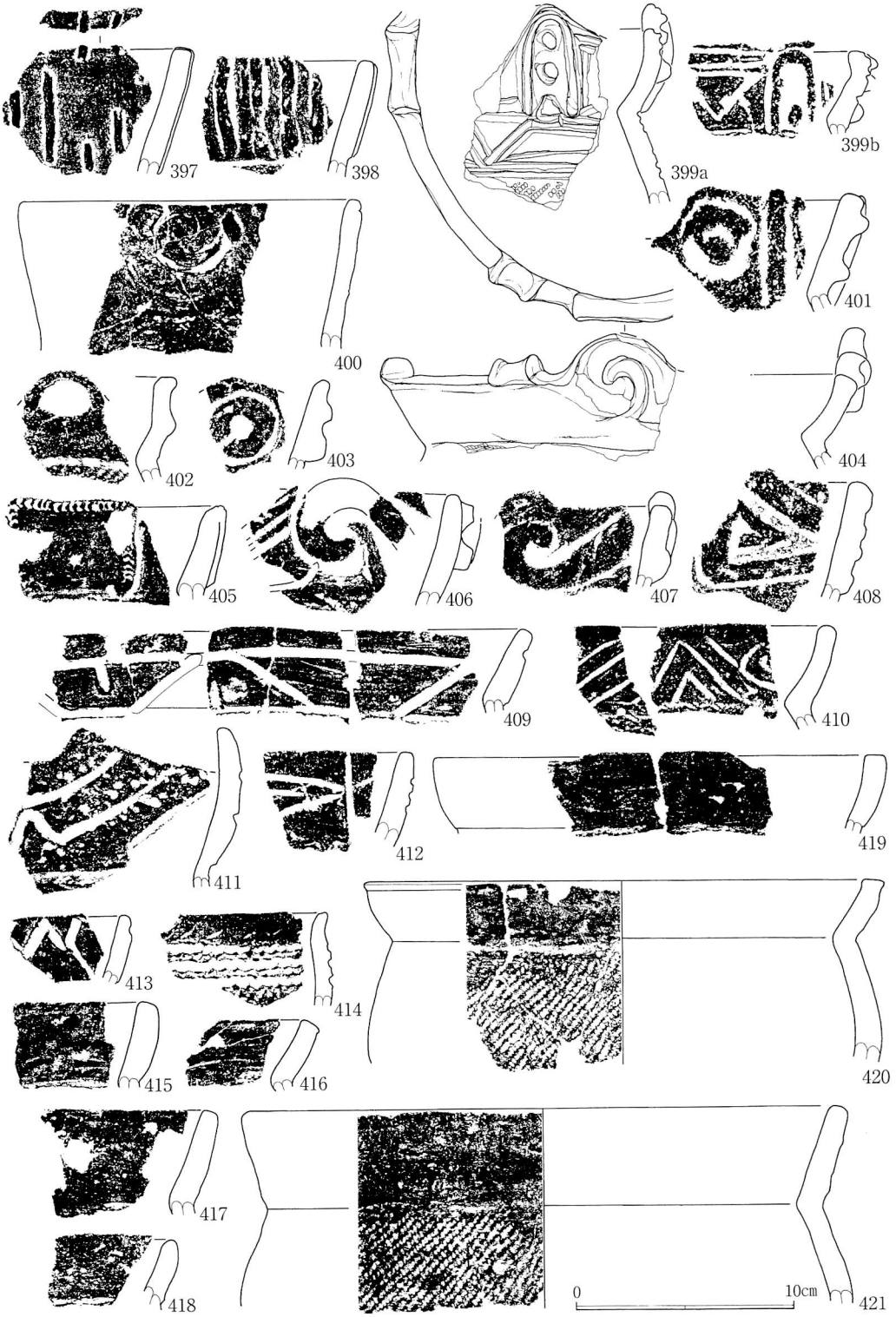
第４表　Ⅲ群土器Ｂ類一覧



第28図　Ⅲ群土器Ｂ類－２（網点：欠損部）



第29図　Ⅲ群土器Ｂ類－３（網点：欠損部）



第30図　Ⅲ群土器Ｂ類－４（網点：欠損部）

類の頚部下文様に類例がある。414は３条の連続山形沈線を密接して描くもので、本類の中では異質な資料である。

Ｂ６類（第30図417～421）

「く」の字状に張り出す口縁部を無文帯とし、それ以下に縄文を施すもの。

ⅢＣ類

多裁竹管工具により平行沈線文を施すグループ。使用胎土はａが大半を占める。本類の口縁器形は、Ａ２類にみられる内屈・内湾口縁（Ａ）と外反・外傾口縁（Ｂ）からなる。

Ｃ１類（第31図422～425）

一条の平行沈線によって文様を描くもの。山形文様を基幹とするC1a類（422・423）と円形突起を配し口縁に横位沈線を施すC1b類（424･425）に分けられる。前者の422は、本類の中で唯一植物繊維を含む資料である。後者の425は台付球胴器形をなし、同一形態の426と共に埋設土器として利用されていた。425の口端には、竹管背面による凹線が施される。

Ｃ２類（第31図427～438）

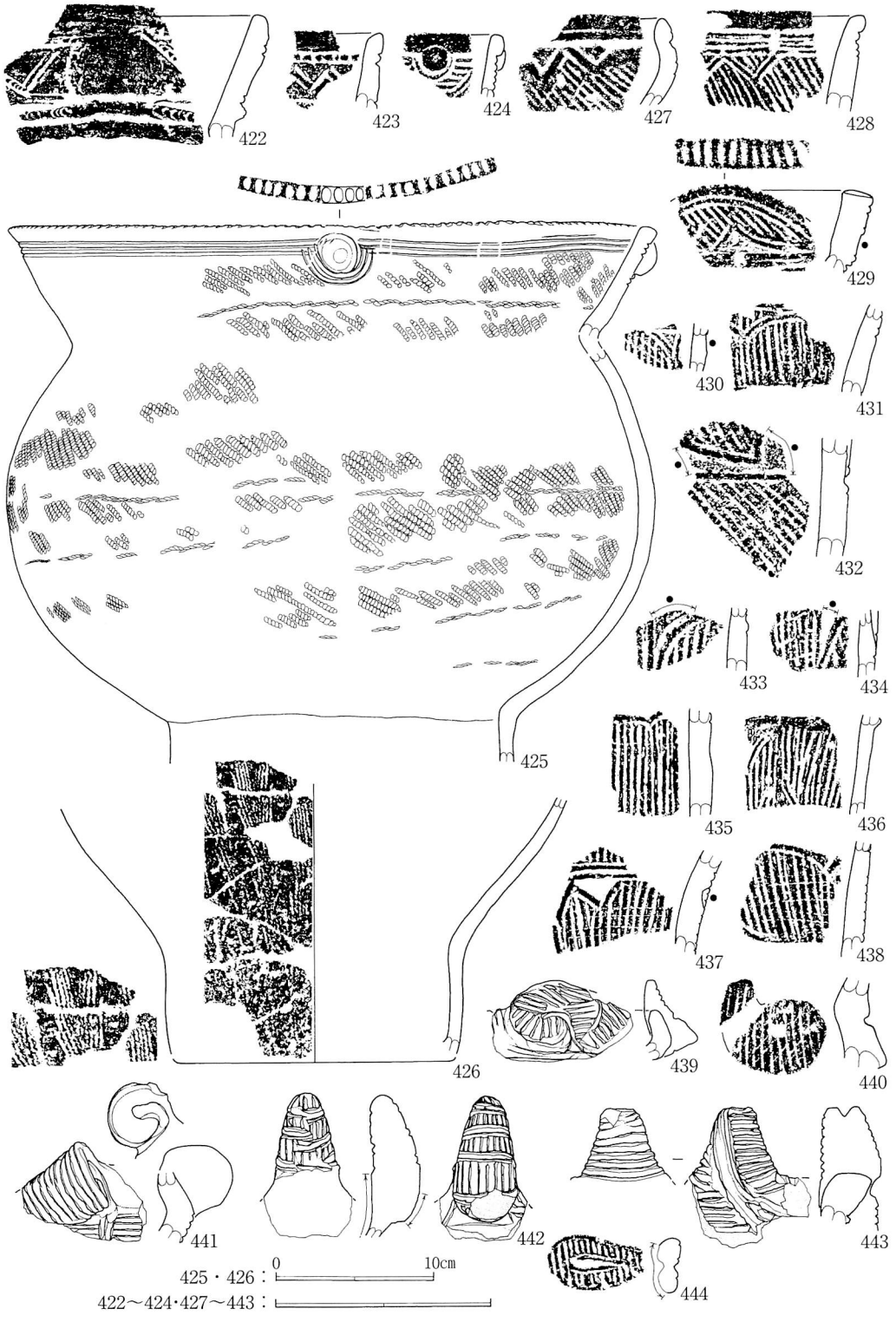
集合平行沈線文グループのうち、幾何学的な彫去を複合するもの、および文様帯の中に山形や三角形沈線を加えるものを本類とする。口端遺存資料は３例にとどまる。429の口端施文は425と同一手法による。口端・体部に文様差はみられず、集合沈線に細線を重ねて格子目を描く資料が多い。後述のＣ３類に較べ細線の走行にバラエティーがみられる点が特徴的である。

Ｃ３類（第31図439～第34図518・520～527）

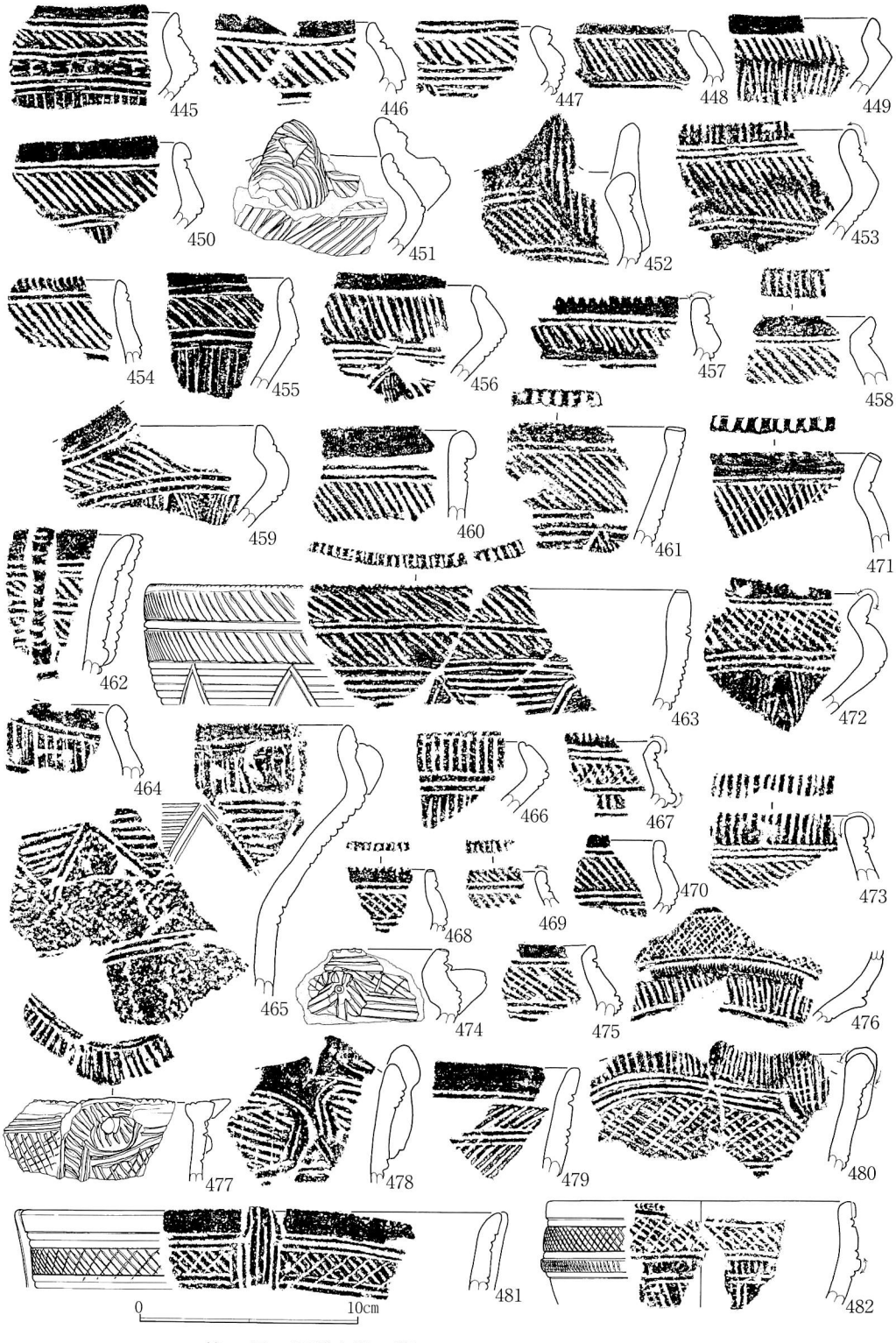
Ｃ類の主体グループにあたり、口端遺存資料にして103個体の出土をみた。口縁部文様には６種の別があり、斜位集合沈線（445～463）を３ａ類、縦位集合沈線（464～466）を３ｂ類、斜行格子目沈線（467～482）を３ｃ類、山形ないし矢羽状沈線（483～486）を３ｄ類、横位集合沈線（487～490）を３ｅ類、以上が欠落するもの（491～493）を３ｆ類とする。数量的にはａ類が最多の40個体を数え、27個体のｃ類がこれに続く。

口縁器形では、ａ～ｃ類がＡを主体とし、ｄ～ｆ類はＡ・Ｂほぼ同量である。口縁部と体部文様帯の区分が明瞭なａ～ｄ類の中には、両者の境界に横位隆帯をめぐらすものが存在するがその量はａ類：３・ｂ類：１・ｃ類：４・ｄ類：３、にとどまり、器形との有意な関係もみいだしがたい。口端や口縁下の隆帯には、各種文様を施す場合がある。しかし全体的な施文率はさほど高くなく、ｃ類での撚糸施文が目につく程度である。

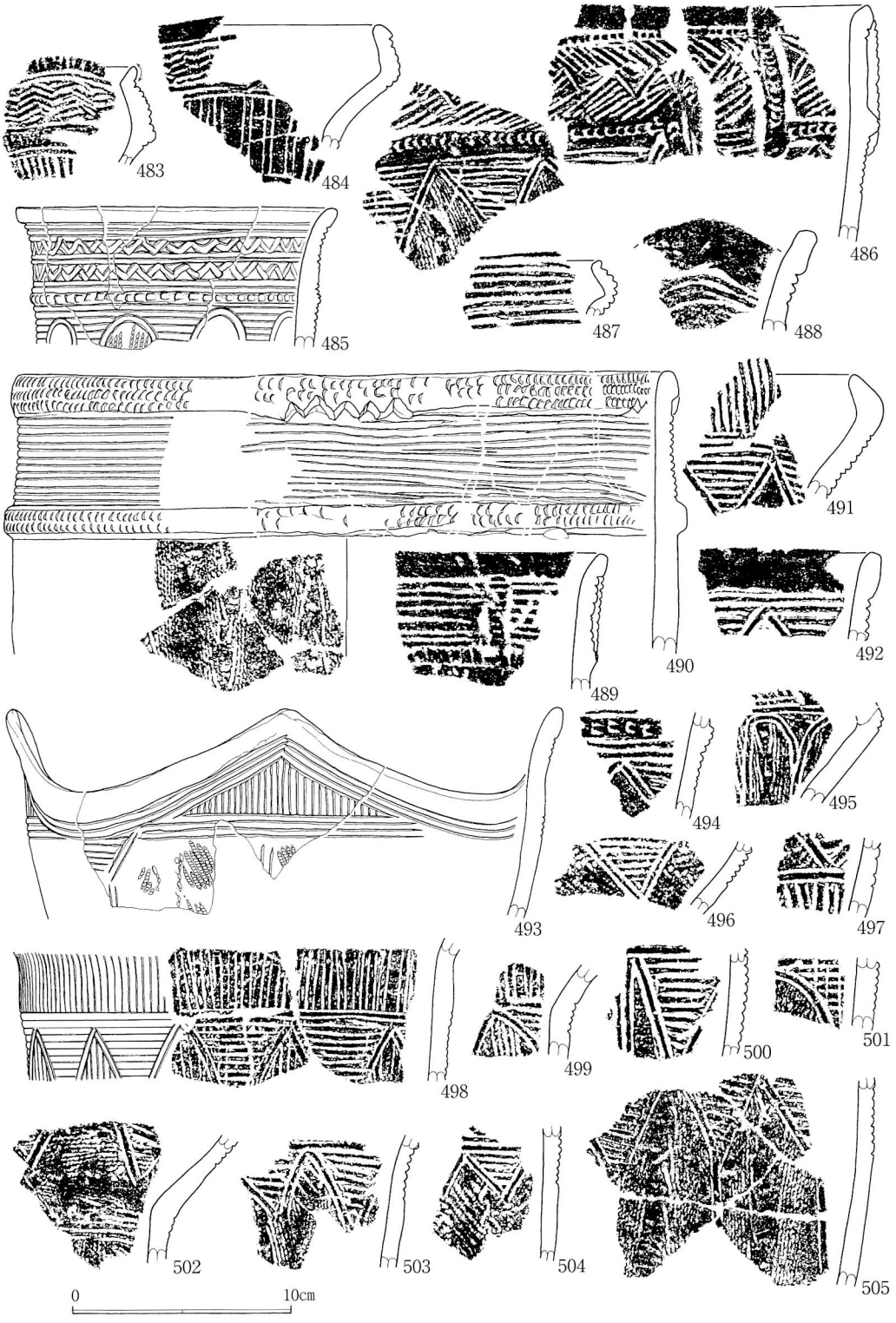
体部文様には、施文部位の在り方や文様構成の上で多様なバリエーションを認める。本遺跡においては、全体構成を把握できる資料が限定されるため具体的な文様パターンの提示は困難であるが、口縁部文様帯の直下もしくは体上部の文様帯下にＶ字ないしＹ字文を配すケース（491～505など）が最も一般的なようである。なお511と519は、後者の中に前者が入る「入子」



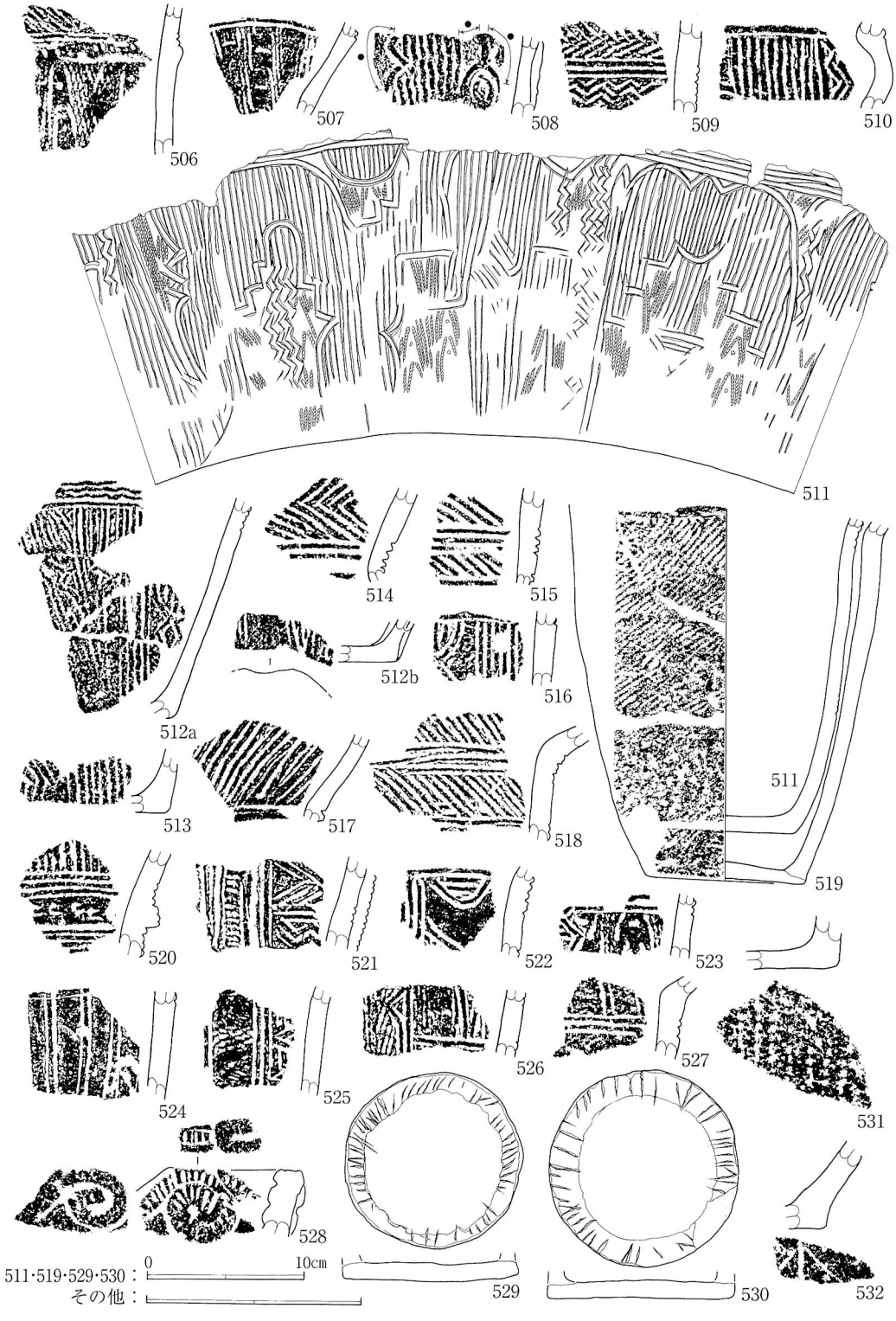
第31図　Ⅲ群土器Ｃ類－１（ドット:彫去・矢印:剥落部・網点:欠損部）



第32図　Ⅲ群土器Ｃ類－２（矢印:撚糸施文・網点:欠損部）



第33図　Ⅲ群土器Ｃ類－３



第34図　Ⅲ群土器Ｃ類－４・Ｄ類・底部（ドット:彫去・網点:欠損部）

状態で出土した。

ⅢＤ類（第34図528）

棒状工具の先端で集合沈線を描くもの。１点の出土にとどまる。528は波状口縁の頂部破片で、両面に渦状文様が施される。外面には、ヘラ状工具による１条の細線が複合される。

ⅢＥ類（第35図533～544）

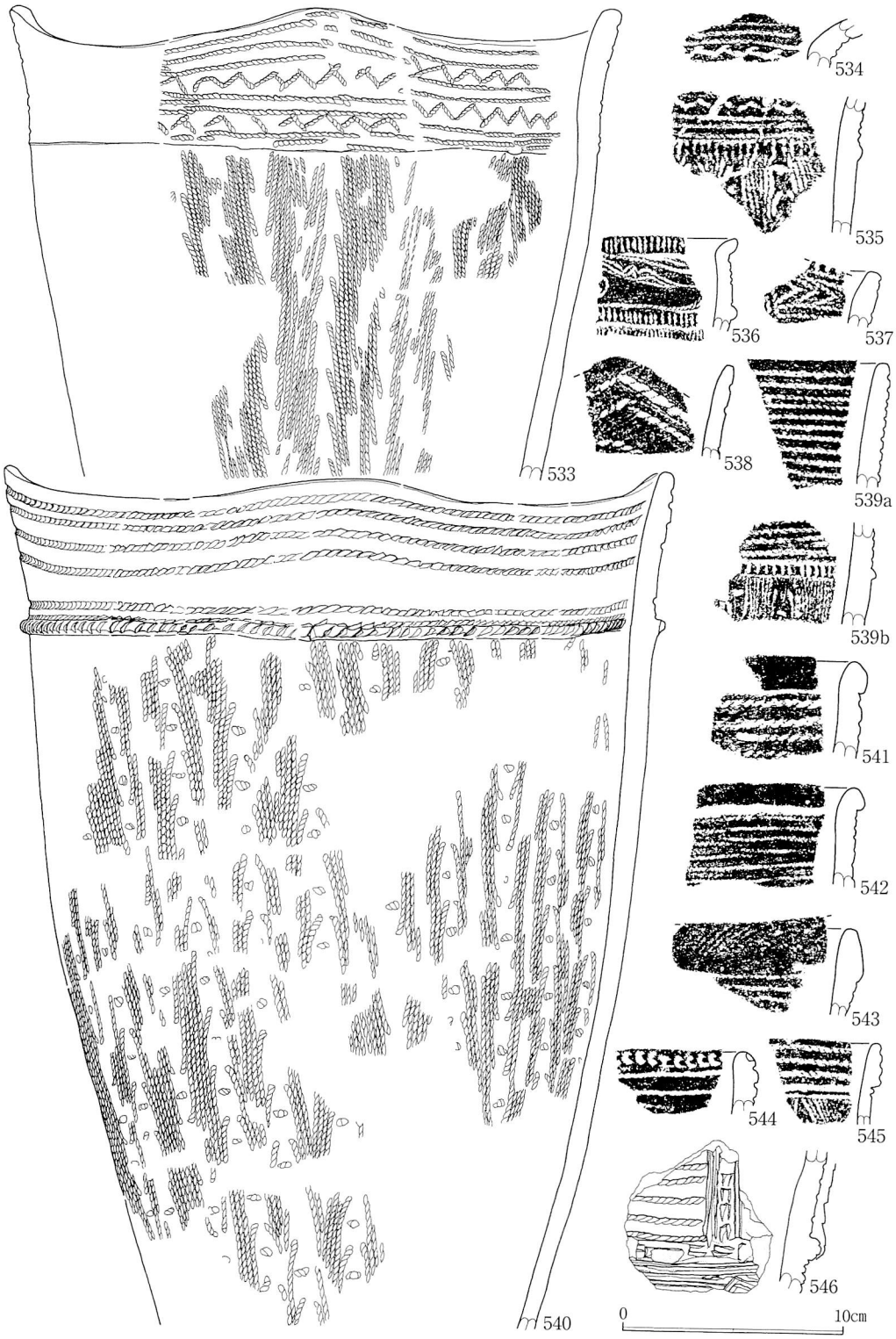
一段撚りによる縄の側面を器面に押圧するグループ。口端遺存資料で20個体、体部破片を合わせると32個体出土した。外反の強い535を除けばいずれも単純外傾器形をもつ。全体形がうかがえる２点は、４単位の大波状口縁をなす。使用胎土は、Ｃ類に較べｃが多い傾向にある。

縄の押圧施文は器面上部に限定される。口端と文様帯の下端には、双方もしくは後者に隆帯をもつものがあり、下端に隆帯を欠く場合は小段が設けられる。隆帯上は無文のケースが一般的であるが、Ｃ３類と同様の撚糸・刺突を施すものもある。縄文を横位回転で施す543は、本類にのみ認める手法である。

押圧文様には、山形などの幾何学的な図形と横位等間隔施文の別があり、前者をＥ１類（533～537）とする。後者の中には、竹管平行沈線を複合するものが存在するため、これをＥ３類

分類	口端遺存数	口縁器形A	B	口端・隆帯上撚糸	刻目	集合沈線	単一沈線	連続刺突	刺突	無文	体部斜行竹管文	羽状縄文	撚糸文	木目状撚糸文	TOTAL
C1a	2	—	2	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—	2
C1b	2	—	2	—	—	—	1	—	—	1	1	—	—	—	2
C2	3	1	2	—	—	—	1	—	—	2	—	—	—	—	3
C3a	40	34	7	4	1	1	1	1	—	27	—	—	—	3	40
C3b	7	7	—	—	—	1	—	—	—	6	—	1	—	—	7
C3c	27	18	9	10	2	1	—	—	—	11	—	—	—	1	27
C3d	10	5	5	1	—	—	—	—	1	8	—	—	—	1	10
C3e	5	3	2	1	—	—	—	—	2	2	—	—	—	1	5
C3f	14	8	6	—	—	9	—	—	—	9	—	1	—	—	14
C3a~f	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	7	1	39	50
D	1	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
E1	4	—	4	3	—	—	—	—	—	1	—	—	—	3	4
E2	16	—	16	1	—	—	—	—	1	14	—	—	—	2	16
E3	1	—	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	1
TOTAL	132	76	56	20	3	12	4	2	5	82	4	9	1	51	182

第５表　Ⅲ群土器Ｃ類・Ｄ類・Ｅ類一覧



第35図　Ⅲ群土器Ｅ類（網点：欠損部）

(545・546)、欠落資料をＥ２類（538～544）とする。以上３種の個体量はＥ１類：６・Ｅ２類：23・Ｅ３類：３である。縄の撚りは、Ｅ１類でＬに偏る傾向がある。

Ｂ　底部（第35図529～532）

本群に属する可能性が高い底部資料は168個体。529・530は、底部内面の縁辺に刻みを加え粘土帯の固定化を意図したもので、図示の２点がすべてである。底面に圧痕を認める個体は数少なく、スダレ状圧痕（531）４点と木葉圧痕（532）1点を確認するにとどまった。

Ｃ　地文の様相

Ａ類では単節斜行縄文を主としながら、結束羽状縄文も一般的に使用される。Ｂ類は縄文構成を知りうる資料に乏しいが、Ａ類との間に有意な違いはみられない。以上はいずれも横位回転によって施文されるものである。

Ｃ～Ｅ類資料の中で、縄文原体および施文構成が把握できた資料は65個体を数える。最多を占めるのは78％の木目状撚糸文である。これを含めた縦位回転施文率は88％もの高率を示し、Ａ・Ｂ類との際立った異なりをみせる。

体部破片も合わせ、木目状撚糸文が施される資料は299点を数える。確認原体は、撚り方向の別も含めて７種である（第36図下）。数量的には、Ｂ1種が80.6％、Ｂ2種が18.7％を占め、Ａ種は２点の存在を認めるのみである。左右の撚り別比は、Ｌ：56％・Ｒ：44％を記録する。

Ｄ　Ⅲ群土器の位置づけ

本群土器は若干の時期幅をもち、系統的にも多様な内容からなる。先後関係の検討に先だち各類の系列を整理しておく。

関東～中部高地系　Ａ1a類は十三菩提系、Ａ4類・Ａ5類は扇平系、Ｄ類は五領ヶ台Ｉａ系土器にあたる。Ａ1a類は、本遺跡と至近距離にある重稲場遺跡のＩ群土器と同一内容をもつ。Ａ４類の中に東北南部的な要素を合わせもつ資料が含まれる点は留意すべきである。

北陸系　真脇系のＡ1b類、朝日下層系のＡ２類、新保Ｉ系のＣ３類が該当する。Ａ1b類は重稲場Ｉ群の構成要素をなしており、Ｄ類は近隣の豊原・大沢遺跡で類似資料が出土している。

東北南部系　Ａ３類とＣ１類は大木６系土器である。Ｂ類は類例に乏しいが、器形や隆帯・肥厚帯の在り方から、本系列の範疇に含まれる資料と考えられる。

東北北部系　Ｅ類は円筒下層ｄ～上層ａ系土器である。主体を占めるＥ２類は、東北北部に類例がなく、Ｃ３類的要素が加わるＥ３類と共に変形が進行した資料と言える。

以上のように、本遺跡Ⅲ群における複数系列の土器は、少数資料のＡ５類やＤ類に搬入品の疑いがもたれるほかは、当地における在地土器と見なすべき在り方を示す。角田山麓では本時期の好遺跡が分布しており、県内海岸部における最重要フィールドをなしている。近隣遺跡との対比や各類の分布状況をもとに以下の３～４期区分を提示する。

Ⅲ群土器の類別分布

1～4　5～9　10～

A1a類（十三菩提系）

A4・5類（扇平系）

A3類（大木系）

B類（大木系）

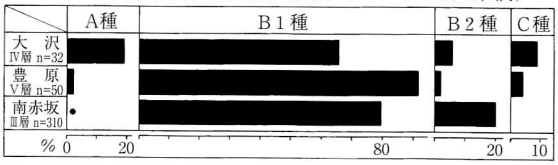
A2類（朝日下層系）

C3類（新保系）

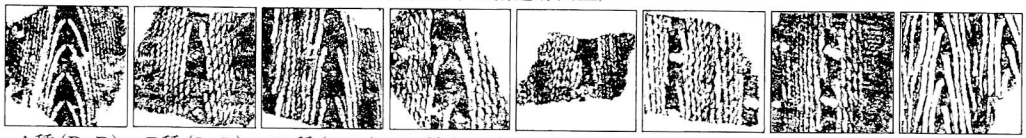
南赤坂遺跡の木目状撚糸文原体一覧

種別	A種	B1種				B2種		TOTAL
	R−R	L−L	L−R	R−R	L·R−L·R	L−L	R−R	
原体判別	1	102	8	74	1	28	23	237
原体不明	1	62				10		73
TOTAL (%)	2 (0.6)	247 (79.7)				61 (19.7)		310

木目状撚糸文原体の遺跡間比較（ドット：1%未満）



木目状撚糸文原体のバラエティー（C種は中田割遺跡出土）



A種（R−R）　B種（L−L）　B1種（L−R）　B1種（R−R）　B1種（L·R−L·R）　B2種（L−L）　B2種（R−R）　C種

第36図　Ⅲ群土器の分布と木目状撚糸文

１期　Ａ１類は重稲場Ｉ群土器の主要部分を占めるグループで、十三菩提式の２期区分（金子1999）に従えば古段階、４期区分（今村1974）に従えば中葉に位置づけられる。しかし本遺跡Ａ類内での割合はさほど高くなく、器種組成にも偏りがみられる。これとセットをなすのは類似分布を示すＢ類であろう。重稲場Ｉ群においてＢ類が構成グループの一部を占める点からも、この二者をもって一時期をなしたと考えられる。ただし重稲場では、あくまで客体的な存在にすぎず、本遺跡との間に大き格差を認めることが留意される。

２期　本遺跡浮線文土器の主体を占めるＡ３類は、浮線の施文手法や器形がＡ１類と大きく異なる。本類の一特徴浮線ｃ種の存在は、重稲場Ⅱ群土器に多用される手法である。連続山形文の貼付手法はＡ１類とＡ２類（３期）の中間的な特徴を備えており、１期に較べ後出要素を認めるグループと考えられる。分布の上で注目されるのは、東尾根においてＡ１類をほとんど混えぬ形で本類が出土したことである（第36図）。同地区出土のⅢ群土器は53個体を数える。内訳は、Ａ１類：２・Ａ３類：37・Ｂ類：10・Ｃ３類：４である。Ａ３類に対するＢ類の比率21％が西側斜面の数値（66％）を大きく下回り、Ｂ類の中での含繊維土器が３点にとどまる点も注意される。これらの主要部分を時期的限定が可能な一括資料とみるならば、Ａ３類を主としながらも若干のＢ類が伴う段階が存在したと考えることができよう。ただし、近隣遺跡で類例がほとんど確認されておらず、段階設定の妥当性については今後の検討課題としたい。

３期　重稲場Ⅱ群土器併行期を本時期とする。十三菩提式の後半段階もしくは後葉段階にあたり、Ａ２類とＣ２類を中心に構成される。両者の出土量は遺跡間で大きく異なっており、重稲場３遺跡ではＣ２類主体、豊原遺跡ではＡ２類が大半を占める。本遺跡での出土はともに僅少で、とりわけ後者の乏しさが著しい。双方の数量差を遺跡間変異に求めるのか、あるいは微妙な時間差と考えるかは判断しがたいが、本遺跡での利用頻度が一時的に低下したことは十分考えられる。なお、Ｃ３類の中には３期に伴う可能性が高い資料も存在する（461など）。しかしＡ２類とは地文様相を大きく異にしており、大半は４期の所産と見なすべきである。

４期　中期初頭土器群である。Ｃ３類やＥ類の主要部分とＤ類が該当する。本遺跡の当時期土器は120個体を上回り、数量的な検討に適した角田山麓３例目の資料となる。豊原遺跡Ｖ群古段階と大沢遺跡Ａ地区Ｉｂ期と比較した場合、Ｃ３類の構成内容には大きな相違がみられる。３ｃ類が3ａ類を凌駕するのは本遺跡にのみ認める特徴で、口端上の撚糸施文率・口縁部文様帯下端の隆帯保有率も２遺跡を明らかに下回る。大沢で高率を示す口端連続爪形刺突は、本遺跡では存在がかろうじて確認できるのみである。Ｅ類の割合は大沢に匹敵する数値を示すものの、５％未満の豊原とは有意な開きがある。体部における木目状撚糸文の使用率は、２遺跡に較べて格段に高く、原体Ｂ２種の率も最高値を示す。その一方で、各遺跡では異系統のＤ類が少量ながら組成内に含まれており、個性と普遍性を併せもった当地の土器様相がうかがえる。

縄文土器観察表－1

NO	分　類	出土区	胎土	器　形	文　　様	縄　文
1	Ⅰ－A1	E-3-k④	●b		撚糸L側面圧痕、楔状刻目	
2	Ⅰ－A2	削平区採集	●b		竹管平行沈線横位施文、口端刻目	(RL)
3	〃	E-3-r②	●a		〃　横位施文	RL
4	〃	G-2-m③	●c	体部有段	〃　横位・斜位施文、口端刻目、有段部V字刺突	RL
5	Ⅰ－A3	C-2-l	●a	無段	〃　矢羽状・格子目施文、斜位刺突	
6	〃	B-2-o②	●a	有段	〃　格子目施文、口端刻目、有段部V字刺突	
7	〃	C-3-p③	●b		〃　格子目施文	
8	Ⅰ－A4	E-4-v①	●b		竹管背面刺突斜位・横位施文	
9	〃	E-5-f①	●b		爪形連続刺突斜位・横位施文	
10	Ⅰ－A5	D-3-l	●a		コンパス文	(LR)
11	Ⅰ－B	削平区採集	●a		口端縦位刺突	RL・LR（端部結縛）
12	〃	〃	●a		〃　〃	RL・LR
13	〃	E-3-n①	●c		〃　〃	LR
14	〃	D-2-u①	●c		〃　〃	LR
15	〃	D-4-y③	●a		〃　〃	RL・LR
16	〃	E-3-p③	●a		〃　〃　、口唇斜位刺突	(LR)
17	〃	不　明	●a		〃　〃	結節回転
18	〃	E-3-g①	●c		〃　爪形竹管	RL＋LR
19	〃	B-2-o①	●c		〃　斜位刺突、体部刺突	RL・LR
20	〃	E-3-d②	●a		〃　〃	RL＋LR
21	〃	E-3-o④	●a		〃　〃	RL
22	〃	D-4-i②	●a		〃　〃	LR
23	〃	D-4-j③	●a		〃　〃	(LR)
24	〃	E-3-g①	●a		〃　V字刺突	RL＋環？
25	〃	E-3-i①	●a		〃　矢羽刺突	撚糸R
26	〃	D-4-t①	●a		口唇列点刺	RL＋LR
27	〃	C-2-t③	●a	体部有段	〃　〃	網目状撚糸L
28	〃	E-3-v①	●a	有段	有段部斜位刺突、波状沈線	RL
29	〃	G-2-r	●c	有段	〃　〃	RL
30	〃	E-3-m②	●a	有段	〃　V字刺突	RL＋LR
31	〃	E-3-n①	●a	有段	〃　〃	RL・LR
32	〃	E-3-n①	●a	有段	〃　〃	RL・LR
33	〃	削平区採集	●a	有段	〃　〃	RL・LR
34	〃	〃	●a	有段	〃　〃	(LR)
35	〃	E-3-k	●c	有段	〃　〃	(RL)
36	〃	E-3-u②	●b	有段	〃　斜位刺突	(RL・LR)
37	〃	B-2-o	●a	無段	〃　横位・斜位刺突	(RL)
38	〃	D-3-h③	●a	無段	体部　〃・　〃	RL
39	〃	D-3-h	●a	無段	〃　〃・　〃	RL＋LR
40	〃	E-3-f①	●a	無段	〃　矢羽刺突	(LR)
41	〃	E-4-u③	●c	無段	〃　横位・斜位刺突	RL＋LR
42	〃	D-3-e①	●c	無段	〃　斜位刺突	RL＋LR
43	〃	D-2-u	●a	無段	〃　横位刺突	RL＋LR
44	〃	D-3-e③	●b	無段	〃　円形竹管	撚糸R
45	〃	E-4-v①	●a	無段	〃　斜位刺突	(RL＋LR)
46	Ⅰ	B-2-t②	●a	丸底	〃　V字刺突	
47	Ⅰ	D-2-w④	●a	丸底？	底部付近縦位刺突列	
48	Ⅰ－C	D-3-i②	●c			RL＋LR
49	〃	D-3-r②	●a			RL＋LR
50	〃	C-2-g④	●c			RL・LR
51	〃	D-3-t③	●a			RL・LR
52	〃	C-2-o③	●c			RL・LR
53	〃	E-3-a②	●b			RL・LR
54	〃	G-2-m③	●a			RL
55	〃	E-4-p	●b			RL＋環
56	Ⅰ	E-3-f①	●c			RL＋LR
57	〃	E-3-n③	●a			〃
58	〃	B-2-n	●c			〃
59	〃	E-3-g③	●c			〃
60	〃	E-3-f①	●c			〃
61	〃	E-3-r②	●a			〃
62	〃	E-3-v④	●c			〃
63	〃	E-3-q①	●b			〃
64	〃	B-2-n	●a			〃
65	〃	D-2-s④	●c			〃
66	〃	D-2-t②	●a			RL・LR
67	〃	C-2-l③	●a			〃
68	〃	C-2-j	●a			〃
69	〃	B-2-t②	●c			〃
70	〃	D-2-v④	●a			〃

縄文土器観察表－2

NO	分　類	出土区	胎土	器　形	文　　様	縄　文	備　考
71	Ⅰ	D-2-q③	●c			RL・LR	
72	〃	E-3-w②	●b			〃	
73	〃	D-3-n①	●c			〃	
74	〃	削平区採集	●a			〃	
75	〃	D-2-v④	●a			〃	
76	〃	D-3-y②	●b			〃	
77	〃	F-3-p③	●b			〃	
78	〃	E-3-m	●a			〃	
79	〃	D-4-e①	●c			RL	
80	〃	不　明	●a			〃	
81	〃	G-2-h④	●a			〃	
82	〃	D-2-u	●a			RL＋結節	
83	〃	D-3-h	●a			不明	
84	Ⅱ－A	D-4-o①	c	外傾口縁	口端連続爪形文、櫛歯細線		口端小突起
85	〃	E-4-p	c		体部連続爪形文、櫛歯細線＋円形刺突		
86	Ⅱ－B1	E-4-fほか	c	外反口縁	連続爪形文＋斜位刻目、斜行格子目沈線＋円形竹管		焼成前穿孔
87	〃	E-5-a①	c		連続爪形文、斜行格子目沈線＋円形竹管	(RL)	
88	〃	E-4-m	c		〃　＋円形竹管	(RL)	
89	〃	E-4-q④	c		〃　＋円形竹管	(RL)	
90	〃	D-4-j①	c	外反口縁	連続爪形文、斜行格子目沈線＋円形刺突		
91	〃	D-4-k②	c		連続爪形文＋斜位刻目、斜行格子目沈線＋円形刺突		
92	〃	E-4-g④	c		〃　＋円形刺突		
93	〃	E-4-o	c	外反口縁	連続爪形文、斜行格子目沈線＋円形刺突		
94	〃	E-4-m	c		〃　＋円形刺突	(RL)	
95	〃	D-4-e④	c		〃　＋円形刺突	(RL)	
96	Ⅱ－B2	E-4-m	c		連続爪形文＋斜位刻目		
97	〃	E-4-q④	c		連続爪形文、格子目沈線＋円形刺突	(RL)	
98	〃	E-4-1・	c	外反口縁	連続爪形文＋斜位刻目、格子目沈線＋不整形刺突		
99	〃	E-5-a・	c	〃	〃　＋　〃　、　〃　＋不整形刺突		
100	〃	D-4-j③	c		格子目沈線＋不整形刺突		
101	Ⅱ－B3	E-4-f①	c		斜行格子目沈線		
102	Ⅱ－C	E-4-f	c	外反口縁	連続爪形文、縦位集合沈線		口端小突起
103	〃	E-5-d・	c	〃	〃　、　〃		〃
104	〃	E-4-f	c	〃	〃　、　〃　＋円形竹管		〃
105	〃	F-4-b	c	〃	〃　、　〃　＋円形竹管		〃
106	〃	C-2-y	c	〃	〃　、　〃　＋円形竹管		〃
107	〃	E-4-a	c		連続爪形文　〃　＋斜位刻目		
108	〃	D-2-u	c		縦位集合沈線、横位区画沈線＋円形竹管		
109	〃	D-2-p	c		〃　、　〃　＋円形竹管	(RL)	
110	〃	D-4-f	c		〃　、　〃　＋円形竹管	(RL)	
111	〃	C-2-g	c	外反口縁	連続爪形文、縦位平行沈線		口端小突起
112	〃	D-4-d	c	〃	〃　、　〃　＋円形竹管		〃
113	〃	D-3-y	c		横位区画沈線＋円形刺突		
114	Ⅱ－D	E-4-f	a		〃　＋刺突	RL	
115	〃	D-3-a	a		縦位・弧状平行沈線	(LR)	
116	Ⅱ－E	D-4-a	c	外傾口縁	口端連続刺突	RL	
117	Ⅱ－F	D-4-e	c	〃		L	
118	〃	E-3-p	c	外反口縁		(RL)	口端小突起
119	〃	E-4-b	a	外傾口縁		RL・LR	焼成前穿孔
120	Ⅱ	E-4-m	c		横位区画沈線＋円形刺突	RL	
121	〃	削平区採	c		横位平行沈線	〃	
122	〃	E-4-b	c			〃	
123	〃	D-4-e	c			〃	
124	〃	B-3-t	c			〃	
125	〃	E-4-m	c			〃	
126	〃	E-4-h	c			〃	
127	〃	E-4-g	c			〃	
128	〃	E-3-p	c			L	
129	〃	E-4-q	c			RL・LR	
130	〃	E-4-f	c				底部
131	Ⅲ－A1a	D-2-v②	c	内折口縁	浮線a1種鋸歯状・横位施文、連続山形浮線	RL	
132	〃	C-2-t③	c	〃	〃　〃　・横位・菱形施文	RL・LR	
133	〃	E-2-s④	a	〃	〃　〃　・横位施文		
134	〃	削平区採集	a	〃	〃　〃　・横位施文	(RL)	
135	〃	D-2-v③	a	〃	〃　鋸歯状施文	(RL)	
136	〃	E-3-p④	a	〃	〃　〃		
137	〃	D-2-u①	a	〃	〃　鋸歯状・横位施文		
138	〃	D-2-u②	c	〃	〃　横位施文		
139	〃	削平区採集	a	〃	〃　〃　、浮線f種		
140	〃	D-2-k	c	〃	〃　〃		

縄文土器観察表－3

NO	分　類	出土区	胎土	器　形	文　　様	縄　文
141	Ⅲ－A1a	D-4-j①	c	内折口縁	浮線a1種横位施文	(RL)
142	〃	E-4-v	a	〃	〃　〃	
143	〃	D-3-v	a	〃	〃　〃	
144	〃	E-3-t①	c	〃	〃　〃	RL
145	〃	C-2-f	b	〃	〃　〃	LR
146	〃	D-2-t①	b	〃	〃　横位・弧状施文	RL
147	〃	E-3-lほか	c	〃	〃　横位施文、連続山形浮線A種	
148	〃	D-5-j①	a	〃	〃　〃　、　〃　A種	RL
149	〃	D-2-w③	c	〃	〃　〃　、　〃　A種	
150	〃	D-2-q	a	肥厚口縁	〃　鋸歯状・横位施文、浮線d種リング状貼付	
151	〃	E-3-u②	a	〃	〃　横位・浮線d種斜位施文、連続山形浮線B種	LR
152	〃	D-2-r①	a	外傾直立	〃　横位・斜位施文	
153	〃	ピット21	a	外傾口縁	〃　〃　〃	LR
154	〃	F-3-u③	c	〃	〃　横位施文	
155	〃	E-3-e④	c	〃	〃　鋸歯状・横位施文	
156	〃	D-2-s③	c	外傾直立	〃　横位施文、口端浮線e種	外面(RL)、内面LR
157	〃	D-3-o③	a	外傾口縁	〃　横位施文、口端浮線d種・渦状突起	LR
158	〃	D-2-v②	b		〃　横位施文、浮線a2種縦位施文	RL
159	〃	E-3-d②	c		〃　縦位施文	
160	〃	F-3-u①	c		〃　横位・縦位・弧状施文	LR＋端部結節
161	〃	E-4-g④	c		〃　鋸歯状・横位施文＋隆線	RL
162	〃	D-2-m③	a		〃　横位・斜位施文＋隆線	
163	〃	D-2-y①	a		〃　弧状施文＋隆線	
164	〃	D-2-r・	a		〃　鋸歯状・環状・斜位・横位施文＋隆線	RL
165	〃	E-2-x④	a		〃　環状・菱形施文＋隆線	
166	〃	D-2-vほか	a		〃　縦位・横位・弧状施文＋隆線、浮線d種格子目施文	RL
167	〃	D-2-p	c		〃　鋸歯状施文＋隆線	
168	〃	D-2-x①	b		〃　鋸歯状・弧状・横位施文＋隆線	LR
169	〃	D-3-gほか	a		〃　横位・斜位施文	RL
170	〃	E-4-g①	a		〃　菱形・縦位施文	(RL)
171	〃	F-3-u③	c		〃　菱形・横位施文	
172	〃	D-4-d②	c		〃　縦位・横位・斜位施文	RL・LR
173	〃	E-3-o③	c		〃　縦位・山形施文	RL
174	〃	D-2-l④	c		〃　幾何学状施文	(RL)
175	〃	E-3-s①	c		〃　幾何学状施文	LR
176	〃	B-2-j	a		〃　横位・環状施文	(LR)
177	〃	D-2-u	a		〃　横位・弧状施文	(LR)
178	〃	C-2-o	a		〃　弧状施文	LR
179	〃	D-2-k	a	外傾口縁	〃　横位施文、口端浮線d種、連続山形浮線A種	
180	〃	D-2-p	a		〃　横位・幾何学状施文(浮線d種充填)、連続山形浮線A種	LR
181	〃	E-2-r②	a		〃　弧状施文（浮線d種充填）	(RL)
182	〃	C-3-s③	c		〃　横位施文、連続山形浮線B種	(RL)
183	〃	D-2-m	a		〃　〃　、　〃　B種	
184	〃	E-4-q②	a		〃　〃　、　〃　B種	RL
185	〃	D-2-l④	a		〃　〃　、　〃　A種	
186	〃	E-4-q②	c		〃　〃　、　〃　A種	
187	〃	D-2-y④	a		〃　〃　、　〃　A種	RL
188	〃	D-2-l	a		〃　横位・弧状・幾何学状施文、連続山形浮線A種	
189	Ⅲ－A1b	不　明	c	内折口縁	浮線d種横位施文、連続山形浮線A種	
190	〃	D-2-s①	c	〃	〃　横位施文	(RL)
191	〃	E-3-n①	a	〃	〃　〃	
192	〃	E-4-qほか	c	〃	〃　幾何学状施文	RL
193	〃	E-4-l④	c	〃	〃　横位施文	
194	〃	E-4-q②	c	〃	〃　横位施文、連続山形浮線A種	(LR)
195	〃	D-2-g・	c	外傾直立口縁	〃　〃　、　〃　A種、棒状突起	(LR)
196	〃	E-3-q①	a	〃	〃　〃　、　〃　A種	RL
197	〃	E-4-q②	c		〃　〃　、　〃　A種	LR
198	〃	C-2-l	c		〃　斜位施文、　〃　A種	(LR)
199	〃	F-4-r	c		〃　横位・斜位・環状施文、連続山形浮線A種	LR
200	〃	E-3-iほか	a	外傾直立口縁	〃　幾何学状施文	
201	〃	E-3-r②	c		〃　横位・弧状施文	RL
202	〃	E-4-q①	a	外傾内湾口縁	〃　横位・縦位施文	RL
203	〃	D-2-w②	c		〃　横位施文	LR
204	〃	C-2-j	a		〃　縦位施文	RL・LR
205	Ⅲ－A4	D-2-p	c	内折口縁	浮線a1種横位・幾何学状施文、口端橋状把手	
206	〃	D-2-r③	c	〃	浮線a2種横位・斜位・菱形施文	
207	〃	D-2-r②	a	外傾直立	浮線a1種横位・環状施文	
208	Ⅲ－A3	D-2-o③	c	直立口縁	〃　環状施文、隆線上浮線d種	
209	Ⅲ－A4	D-2-sほか	c	〃	〃　肥厚帯上横位施文、体部幾何学状施文	
210	〃	E-3-u③	a	有頸深鉢	浮線c種・d種幾何学状施文	

縄文土器観察表－4

NO	分類	出土区	胎土	器形	文様	縄文	備考
211	Ⅲ－A4	E-4-q②	c	有頸深鉢	浮線a1種横位・環状・幾何学状施文、環状突起	(LR)	
212	〃	F-3-p	c	〃	〃　横位・縦位施文、浮線d種格子目施文、棒状突起	(LR)	焼成前穿孔
213	〃	D-2-r③	c	〃	〃　横位施文、上端浮線c種、浮線d種格子目施文		
214	〃	D-2-r③	a	〃	〃　横位施文、浮線d種格子目施文		
215	〃	E-2-x③	a	〃	浮線d種横位・格子目施文		
216	〃	C-2-o	c		〃　〃・〃		
217	Ⅲ－A2	D-3-d	a	内湾口縁	浮線a1種横位施文、口端浮線d種		
218	〃	D-5-e④	a	〃	浮線d種縦位施文、横位竹管沈線	(RL)	
219	〃	D-2-s③	c	直立口縁	浮線b種横位・縦位施文、斜位集合沈線上浮線d種		
220	〃	C-3-y	a		斜位集合沈線上浮線d種、連続山形浮線B種		
221	〃	D～E-4	a		浮線a1種横位施文、浮線d種格子目・縦位施文	(LR)	
222	〃	D-3-h①	b		〃　〃　、浮線b種縦位施文、連続山形浮線B種	LR	
223	〃	C-2-x	a		〃　縦位施文、横位竹管沈線	(LR)	
224	〃	E-2-y①	a		〃　横位・弧状施文＋幾何学彫去、連続山形浮線B種		獣面突起
225	〃	削平区採集	a		〃　横位施文、連続山形浮線B種		
226	〃	C-3-l①	a		浮線b種縦位施文、　〃　B種	LR	
227	〃	C-3-b④	a		〃　横位・幾何学施文	(LR)	
228	〃	D-2-q②	a		浮線a1種幾何学施文（浮線d種充填）	(LR)	
229	〃	D-2-p	a		〃　横位・幾何学施文、隆帯上浮線d種		
230	Ⅲ－A3	C-3-e③	c	外反口縁	浮線a2種横位施文	(LR)	
231	〃	E-3-i	●a	有頸深鉢	〃　横位・菱形施文		
232	〃	D-3-y④	a	〃	〃　〃・〃　、環状突起		
233	〃	D-2-k	●c	〃	〃　〃・〃		
234	〃	F-3-k	c		浮線c種　〃・〃		
235	〃	D-3-bほか	●b		浮線d種　〃・〃		
236	〃	C-2-t①	c		浮線a2種・c種横位・菱形施文、口端竹管背面沈線		
237	〃	D-4-yほか	●a	有頸深鉢	〃　横位・菱形施文		
238	〃	D-2-v②	●a	〃	〃　横位・弧状施文、紡錘形突起		
239	〃	D-2-qほか	c	〃	浮線a1種　〃・〃　、〃	(RL)	
240	〃	D-2-r	c	〃	浮線a2種横位・菱形施文、橋状把手		
241	〃	E-3-g④	●a		〃　〃・〃　、口端浮線d種		
242	〃	D-2-r②	c		浮線a1種横位・弧状施文、紡錘形突起		
243	〃	D-2-r④	c		浮線a2種　〃・〃　、〃		
244	〃	E-3-k②	a	有頸深鉢	〃　横位・連続山形施文		
245	〃	E-3-g③	●c	〃	〃　連続山形施文		
246	〃	E-4-q②	a	〃	〃　横位・連続山形施文、口端浮線d種、橋状突起		
247	〃	E-3-l④	c		〃　〃・〃		
248	〃	E-2-t③	a		〃　〃・〃		
249	〃	D-2-q③	c		〃　横位施文、連続山形浮線B種		
250	〃	D-2-p	a	有頸深鉢	〃　〃　、〃　B種		
251	〃	G-3-c①	c	〃	浮線a1種横位・弧状施文、連続山形浮線B種		
252	〃	D-4-l②	a		浮線a2種横位施文、連続山形浮線B種		
253	〃	D-2-x①	c		〃　〃　、〃　B種		
254	〃	E-2-yほか	a		〃　〃　、〃　B種		
255	〃	D-2-s①	c		浮線a2種・c種横位施文、連続山形浮線B種		
256	〃	C-4-l②	a		浮線a2種・d種横位施文、連続山形浮線B種		
257	〃	G-1-v②	a		浮線a2種縦位・横位施文、　〃　B種、垂下隆帯		
258	〃	D-4-y	●c	有頸口縁	〃　〃・〃　、〃　B種		
259	〃	D-2-sほか	c	〃	〃　横位・浮線d種縦位施文、連続山形浮線B種		
260	〃	E-2-r③	●c	〃	〃　横位・斜位施文、連続山形浮線B種、橋状把手	LR	
261	〃	C-3-j③	c		〃　横位・縦位施文、　〃　B種、垂下隆帯		
262	〃	E-2-p③	c	有頸深鉢	浮線a1種横位施文、連続山形浮線B種		
263	〃	D-3-q②	b		浮線a2種横位・縦位施文、連続山形浮線B種		
264	〃	C-5-eほか	a	有頸深鉢	浮線c種横位施文、連続山形浮線B種		
265	〃	D-2-nほか	●c	〃	浮線a2種横位施文、連続山形浮線B種		
266	〃	F-2-e②	a	〃	浮線d種横位施文、連続山形浮線B種		
267	〃	削平区採集	c	橋状把手	浮線a2種縦位施文、　〃　A種		
268	〃	D-2-p	c	有頸深鉢	浮線a2種・c種横位施文、連続山形浮線B種、楕円形隆帯		
269	〃	G-2-a	a	〃	〃　横位施文、連続山形浮線B種、楕円形隆帯		
270	〃	D-2-k	a	〃	楕円形隆帯上浮線d種、隆帯下浮線c種・d種		
271	〃	D-2-h	a		〃　浮線a2種		
272	〃	D-2-v④	●c		〃　〃		
273	〃	D-4-m④	a	有頸深鉢	浮線a2種横位施文、楕円形隆帯		
274	〃	F-2-c①	a		楕円形隆帯上浮線a2種		
275	〃	F-2-b②	a		〃　〃		
276	〃	F-2-g④	a		環状突起上浮線a2種		
277	〃	D-3-i	a		浮線a2種縦位～弧状施文、渦状隆帯		
278	〃	B-3-v	●a	有頸深鉢	獣面突起上浮線a2種		
279	〃	G-2-a③	a	〃	浮線a2種幾何学施文、渦状隆帯		
280	〃	D-2-r②	a	〃	〃　同心円施文、肥厚帯下端三角形彫去		

縄文土器観察表－5

NO	分　類	出土区	胎土	器　形	文　　様	縄　文	備　考
281	Ⅲ－A3	削平区採集	a	有頸深鉢	浮線a2種横位・斜位施文、異形突起		
282	〃	G-1-u	c	〃	橋状把手上浮線a2種		
283	〃	D-2-rほか	a	〃	浮線a2種横位・縦位施文、口縁肥厚帯		
284	〃	D-3-v①	a		浮線c種縦位施文		
285	〃	D-2-pほか	a	有頸深鉢	浮線a2種・c種幾何学施文、口縁肥厚帯	RL＋LR	
286	〃	D-2-m④	a	〃	〃　横位・縦位・同心円施文、口縁肥厚帯		
287	〃	E-3-n④	a		〃　幾何学施文、口縁肥厚帯		
288	〃	D-2-w④	●c		浮線a2種・c種斜位施文、垂下・円形突起		
289	〃	D-2-qほか	b	有頸深鉢	浮線a2種・c種幾何学施文、環状・垂下隆帯	RL（結節）	
290	〃	E-3-qほか	a	〃	〃　横位・弧状施文、口縁肥厚帯		
291	〃	D-3-y①	●a	〃	〃　横位施文		
292	〃	E-3-l	●a		〃　斜位施文		
293	〃	D-2-r④	c	有頸深鉢	〃　波状施文、口縁肥厚帯		
294	〃	F-3-c③	a		〃　横位・斜位施文、浮線d種斜位施文		
295	〃	C-4-g①	●a		〃　横位施文		
296	〃	D-4-o①	●a		浮線a2種・c種横位・縦位施文		
297	〃	C-2-oほか	a		浮線a2種・c種幾何学施文、口端浮線d種、円形突起		
298	〃	E-3-r②	●a		〃　・c種・d種幾何学施文、渦状・円形突起		
299	〃	D-3-f	c		〃　幾何学施文、連続山形浮線B種		
300	〃	D-2-w①	●a	有頸深鉢	〃　・c種幾何学施文		
301	〃	G-2-a①	a		浮線a2種・d種幾何学施文		
302	〃	F-2-b①	a		〃　幾何学施文	(LR)	
303	〃	D-2-q	●c		浮線c種斜位施文、浮線d種縦位・横位施文	LR	
304	〃	D-2-xほか	a		浮線a2種横位・縦位・斜位施文、浮線d種斜位施文	(RL)	
305	〃	D-2-l④	c	有頸深鉢	浮線a2種・c種・d種幾何学施文	(RL・LR)	焼成前穿孔
306	〃	D-3-o①	a		〃　・c種・d種幾何学施文		
307	〃	E-3-g①	●a		〃　幾何学施文・菱形突起		
308	〃	D-2-r④	●a		浮線d種幾何学施文	LR	
309	〃	G-1-u③	●a		浮線a2種　〃	LR	
310	〃	D-2-q①	a		〃　横位・弧状施文	LR	
311	〃	E-3-l	●a		〃　横位施文	LR	
312	〃	D-3-f③	●c		〃　〃	RL・LR	
313	〃	E-3-g③	a		〃　〃	RL＋LR	
314	〃	E-2-x②	a		浮線c種渦状施文	RL＋LR（結節）	
315	〃	D-2-w④	b		浮線a2種横位・浮線c種斜位施文	RL	
316	〃	削平区採集	c		〃　横位施文	(RL＋結節)	
317	〃	D-2-vほか	●c		浮線d種横位施文	LR	
318	〃	E-3-d④	a		〃　〃	RL＋RL	
319	〃	D-3-b③	●a		浮線a2種　〃	LR＋LR	
320	Ⅲ－A6	E-4-hほか	a	外傾口縁	浮線f種横位施文	(RL・LR)	
321	〃	D-3-sほか	a		〃　〃　・横位竹管沈線		
322	Ⅲ－A5	D-3-i④	b		浮線e種横位施文	(RL)	
323	〃	E-3-m①	a	外傾直立口縁	〃　〃		
324	〃	D-2-y②	c	〃	〃　〃		
325	〃	D-3-i④	b		〃　〃	RL・LR	
326	〃	D-2-r④	a	外反口縁	〃　〃　、口端耳状突起		
327	〃	D-4-e②	a	外傾口縁	〃　〃		
328	〃	E-2-x④	c	直立口縁	〃　〃　、円形突起		
329	〃	削平区採集	●c	外反口縁	〃　〃	(LR)	
330	〃	D-2-x②	c	外傾口縁	〃　〃		
331	〃	E-2-x④	c	有頸深鉢	〃　〃		
332	〃	D-2-y①	a	外反口縁	〃　〃		
333	〃	D-4-o②	c	外傾口縁	〃　〃		
334	〃	C-2-y④	c	〃	〃　〃		
335	〃	E-3-dほか	c	外反口縁	〃　〃	LR	
336	〃	D-2-w④	c	直立口縁	〃　〃		
337	〃	E-3-m③	c	外反口縁	〃　〃		
338	〃	D-2-r④	a	外傾口縁	〃　〃		
339	〃	D～E-4	c		〃　〃	LR	
340	〃	D-3-g①	a		〃　〃	(LR)	
341	〃	D-2-u②	a		〃　〃	(LR)	
342	Ⅲ－B1	E-2-x④	a	有頸深鉢	横位・環状隆帯	(RL・LR)	
343	〃	D-2-s①	a	〃	横位・幾何学隆帯	RL	
344	〃	D-2-tほか	c	〃	〃・〃	LR	
345	〃	D-2-p	c		〃・〃	(LR)	
346	Ⅲ－B2a	E-3-m③	c	有頸深鉢	横位隆帯上連続刺突		
347	〃	E-4-q①	●a	〃	〃　〃		
348	〃	削平区採集	●c	〃	〃　〃　、円形突起		
349	〃	E-4-a③	●c	〃	〃　縦位沈線		
350	〃	D-2-l	●c	〃	〃		

縄文土器観察表－6

NO	分　類	出土区	胎土	器　形	文　　様	縄　文	備　考
351	Ⅲ－B2a	E-4-l	a		横位・環状隆帯、円形突起		
352	〃	F-3-a④	●c		〃・〃		
353	〃	D-2-l	●a		長方形隆帯		
354	〃	D-2-w①	●c	有頸深鉢	横位・縦位隆帯		
355	〃	G-2-w③	c	〃	〃・橋状隆帯、橋状突起	LR	
356	〃	D-2-s①	●c		〃・渦状隆帯		
357	〃	G-2-n②	●c		〃・弧状隆帯		
358	〃	D-2-x④	c	有頸深鉢	〃・橋状隆帯		
359	〃	E-3-m③	a	〃	〃・〃		
360	〃	E-2-t①	●a		横位隆帯、円形突起		
361	〃	E-4-m	●c		横位・橋状隆帯		
362	〃	D-2-m③	●c	有頸深鉢	〃・〃、橋状突起、楕円形突起	LR	
363	〃	D-2-rほか	●c		〃・〃		
364	Ⅲ－B2b	E-3-g①	●a		横位・斜位隆帯上縦位沈線	(LR)	
365	〃	E-3-p④	●a		横位隆帯上縦位沈線、弧状隆帯		
366	〃	C-2-f	●c	有頸深鉢	横位・渦状隆帯		
367	〃	F-2-h	a		〃・〃		
368	〃	E-4-g③	●a	有頸深鉢	〃・斜位隆帯		
369	〃	削平区採集	●a	〃	〃・長方形隆帯、口端斜位沈線	(LR)	
370	〃	E-3-k④	●a	〃	肥厚帯、波頂下円形突起		
371	〃	D-4-h④	●a		〃	RL	
372	〃	D-2-s③	●c		肥厚帯上横位沈線	LR	
373	〃	D-2-y①	●c	外反口縁	〃　横位・縦位沈線	(LR)	
374	〃	D-2-m③	●c	〃	〃　〃・〃	LR	
375	〃	E-4-g④	●c	有頸深鉢	〃　三角形彫去	LR	
376	〃	D-4-g①	●a		〃　〃	(LR)	
377	〃	D-3-i	●a	有頸深鉢	肥厚帯		
378	〃	D-4-y④	a	外斜口縁	〃	RL＋LR（端部結節）	
379	〃	E-3-m③	●c		〃		
380	〃	D-2-l④	c	外傾口縁	〃	LR	
381	Ⅲ－B3	E-3-m①	c	有頸深鉢	口端下横位隆帯		
382	〃	D-2-v③	a	〃	〃　〃		
383	〃	D-2-k	●a	〃	〃　〃		
384	〃	E-3-l②	●a	〃	〃　〃、渦状隆帯		
385	〃	E-4-m	●a	〃	〃　〃、縦位隆帯		
386	〃	D-2-x③	a		口端下横位隆帯（沈線施文）、円形突起		
387	〃	不　明	●c		〃　〃、渦状隆帯		
388	〃	E-4-m	c		〃　〃、半円状隆帯		
389	Ⅲ－B4	D-2-p	●c	有頸深鉢	斜位隆帯		
390	〃	D-2-v④	●c	〃	縦位隆帯		
391	〃	D-2-lほか	c	〃	幾何学隆帯、円形突起	RL＋LR（端部結節）	
392	〃	E-3-i	c		斜位隆帯、円形突起		
393	〃	削平区採集	c		縦位隆帯		
394	〃	F-1-y	●a		〃、無文帯下刺突列		
395	〃	E-3-u④	●a	有頸深鉢	縦位・斜位隆帯	(LR)	
396	〃	D-4-e③	●a	〃	縦位隆帯、斜位沈線		
397	〃	E-4-g④	●c		〃		
398	〃	C-2-o④	●c		〃		
399	〃	D-2-xほか	b	有頸深鉢	逆U字隆帯、楕円形突起、幾何学沈線	(LR)	
400	〃	D-2-h	●c	外傾口縁	渦状隆帯		
401	〃	E-3-l	a	有頸深鉢	縦位・環状隆帯		
402	〃	D-2-q	c	〃	波頂部環状突起	(LR)	
403	〃	E-4-m	●a		〃　〃		
404	〃	D-2-p	c		渦状隆帯	(端部結節)	
405	〃	D-2-q	●c	有頸深鉢	長方形肥厚帯（口端・側縁連続刺突）		
406	〃	E-4-f①	●c		斜位・渦状隆帯		
407	〃	E-3-y②	c		〃・〃		
408	〃	D-2-w③	c		幾何学隆帯		
409	Ⅲ－B5	D-2-sほか	●c	有頸深鉢	幾何学沈線		
410	〃	E-3-mほか	●c	〃	〃		
411	〃	D-2-q	●a		〃		
412	〃	D-3-x	●c		〃		
413	〃	E-3-t④	a		連続山形沈線		
414	〃	D-2-l	●c	直立口縁	連続山形沈線、口端下斜位爪形刺突	LR	
415	Ⅲ－B6	削平区採集	●a	有頸口縁			
416	〃	E-3-h	c	〃			
417	〃	E-3-r②	●a	〃			
418	〃	C-2-j③	●c	〃			
419	〃	C-2-x	●a	〃			
420	〃	D-3-i	c			LR	

縄文土器観察表－7

NO	分　類	出土区	胎土	器　形	文　　様	縄　文	備　考
421	Ⅲ－B6	B-2-u①	c			LR	
422	Ⅲ－C1a	D-2-l④	●c	有頸深鉢	竹管沈線・連続爪形文幾何学施文、隆帯上連続刺突		
423	〃	F-4-a③	a		連続爪形文、連続山形竹管沈線		
424	Ⅲ－C1b	C-2-k②	c		横位・弧状竹管沈線、円形突起		
425	〃	B-4-c③	a	台付鉢	〃・　〃　、　〃　、口端竹管背面沈線	RL（端部結節）	埋設土器1
426	Ⅲ	B-4-c③	a	〃		木目B1種R：R	〃　2
427	Ⅲ－C2	D-4-e④	a	内湾口縁	斜位集合沈線、山形平行沈線（上部彫去）		
428	〃	C-2-g①	a	外傾口縁	〃　、　〃		
429	〃	D-2-x②	a	〃	〃　、三角形彫去、口端竹管背面沈線		
430	〃	D-4-m②	a		格子目文、三角形彫去		
431	〃	D-2-u④	a		縦位集合沈線、弧状平行沈線		
432	〃	C-5-e	a		斜行格子目文、幾何学形彫去		
433	〃	E-3-a③	c		縦行集合沈線、弧状平行沈線、幾何学形彫去		
434	〃	D-3-x	a		格子目文、幾何学形彫去		
435	〃	C-4-y③	a		縦行集合沈線、弧状平行沈線		
436	〃	C-3-y	a		〃　、　〃		
437	〃	D-4-e③	a		格子目文、山形平行沈線、三角形彫去		
438	〃	E-4-uほか	a		格子目文、弧状平行沈線		
439	Ⅲ－C3	D-2-u③	a	内屈口縁	「の」字状突起上集合沈線		
440	〃	C-3-t	a		〃　斜行格子目文		
441	〃	D-3-h	a		突起上斜位・突起下横位集合沈線+縦位平行沈線		
442	〃	E-3-y②	a		〃　斜位集合沈線+横位平行沈線		
443	〃	C-2-p③	a		〃　横位集合沈線、縦位～斜位彫去		
444	〃	E-5-t③	a		〃　縦位集合沈線		
445	Ⅲ－C3a	D-3-y④	a	内屈口縁	口縁部斜位・隆帯下縦位集合沈線、隆帯上刺突		
446	〃	E-4-u④	a	〃	〃　斜位集合沈線		
447	〃	B-3-o①	a	〃	〃　〃　、口縁下V字文		
448	〃	D-4-k④	a	〃	〃　〃		
449	〃	D-3-c③	a	〃	〃　〃　、口縁下縦位集合沈線		
450	〃	E-3-a	a	〃	〃　〃　、〃　〃		
451	〃	D-2-x①	a	〃	口縁部・口縁下斜位集合沈線、突起上三角形彫去		
452	〃	D-4-m④	a	〃	口縁部斜位集合沈線、突起上縦位集合沈線		
453	〃	E-3-u②	a	〃	〃　〃　、口端撚糸L		
454	〃	D-2-g③	a	〃	〃　〃　、口端連続爪形刺突		
455	〃	D-3-y④	a	〃	〃　〃　、口縁下縦位平行沈線		
456	〃	D-2-r④	c	〃	〃　〃　、口縁下V字文	（撚糸）	
457	〃	C-2-k②	a	〃	〃　〃　、口端撚糸L		
458	〃	C-3-e④	a	〃	〃　〃　、口端内面縦位竹管沈線		
459	〃	C-2-m③	a	〃	〃　〃	木目B1種L：L	
460	〃	D-4-a④	a	直立口縁	〃　〃		
461	〃	D-2-s③	a	外傾口縁	〃　〃　、口縁下V字文、口端竹管背面沈線		
462	〃	E-4-v③	a	外反口縁	〃　〃　、隆帯上刻目		
463	〃	E-3-jほか	a	外傾直立	〃　〃　、口縁下V字文、口端刻目		
464	Ⅲ－C3b	D-5-e	a	内屈口縁	口縁部・口縁下縦位集合沈線		
465	〃	D-4-h	c	〃	口縁部縦位集合沈線、口縁下V字文	RL＋LR（端部結節）	
466	〃	E-5-f	a	〃	〃　・口縁下縦位集合沈線		
467	Ⅲ－C3c	E-2-l③	a	〃	口縁部斜行格子目文、口端・隆帯上撚糸L		
468	〃	E-4-g①	a	〃	〃　〃　、口端刻目		
469	〃	E-4-a②	a	〃	〃　〃　、口端斜位集合沈線・撚糸L		
470	〃	C-2-f②	a	〃	〃　〃　、口縁下斜位集合沈線		
471	〃	E-3-u①	a	〃	〃　〃　、口端刻目		
472	〃	D-3-h③	a	〃	〃　〃　、口端撚糸L	木目B1種L：L	
473	〃	C-3-e③	a	〃	〃　〃　、口端撚糸R		
474	〃	E-2-y③	a	〃	〃　〃　、口端刻目		
475	〃	E-4-l	a	〃	〃　〃		
476	〃	C-3-j④	a	〃	〃　〃　、口縁下縦位集合沈線、隆帯上連続爪形		
477	〃	D-3-nほか	a	外傾口縁	〃　〃　、口端縦位・隆帯上斜位集合沈線		
478	〃	D-4-w③	a	〃	〃　〃		
479	〃	D-3-y④	a	〃	〃　〃		
480	〃	D-3-h	a	〃	〃　〃　、口端斜行格子目文・撚糸L		
481	〃	E-3-mほか	a	〃	〃　〃　、隆帯上縦位集合沈線		
482	〃	D-3-tほか	c	直立口縁	〃　〃　、口縁下格子目文、口端・隆帯上撚糸R		
483	Ⅲ－C3d	D-4-e②	a	内湾口縁	口縁部連続山形文、口縁下縦行集合沈線、口端撚糸R		
484	〃	E-4-v①	c	内屈口縁	〃　〃　、口縁下縦行平行沈線		
485	〃	D-4-w	a	外反口縁	〃　〃　、口縁下V字文、隆帯上刺突	（撚糸L）	
486	〃	D-3-p	a	直立口縁	〃　〃　・矢羽文、口縁下V字文、隆帯上刺突	木目B2種R：R	
487	Ⅲ－C3e	D-4-e④	a	内屈口縁	口縁部横位集合沈線		
488	〃	D-2-v④	c	外傾口縁	〃　〃		
489	〃	D-3-y④	a	直立口縁	〃　〃　、隆帯上刻目		
490	〃	C-2-k①	a	〃	〃　〃　、隆帯上刺突・三角形彫去	木目B1種R：R	

縄文土器観察表－8

NO	分　類	出土区	胎土	器　形	文　　様	縄　文	備　考
491	Ⅲ－C3f	C-3-s②	a	内屈口縁	口端縦位集合沈線、口端下V字文		
492	〃	C-3-i①	a	外傾口縁	口端下V字文		
493	〃	D-4-s③	a	〃	波頂下縦位集合沈線、口端下V字文	(RL・LR 端部結節)	
494	Ⅲ－C3	C-2-k①	a		隆帯上刺突、隆帯下V字文	(木目？：？　)	
495	〃	C-2-m③	a		口縁部斜行格子目文、口縁下Y字文	木目B1種R：R	
496	〃	D-3-o②	a		体部V字文	RL＋LR	
497	〃	D-2-w③	a		〃 V字文下縦位集合沈線	(LR)	
498	〃	E-3-sほか	a		〃 V字文・縦位集合沈線		
499	〃	E-5-f①	a		〃 縦位集合沈線下V字文	(木目L：？)	
500	〃	C-2-d④	a		〃 V字文・縦位平行沈線		
501	〃	D-3-p③	a		〃 V字文（格子目施文）	(撚糸L)	
502	〃	E-4-v①	a		〃 V字文、V字文下横位平行沈線	撚糸R	
503	〃	D-3-f	a		〃 V字文	木目B1種L：L	
504	〃	E-3-p④	a		斜行格子目文下V字文	RL＋LR(端部結節)	
505	〃	D-3-i②	a		体部Y字文	木目B1種L：L	
506	〃	D-4-i②	a		斜位集合沈線下隆帯	木目B1種L；L	
507	〃	D-4-a④	a		横位平行沈線	木目B2種L：L	
508	〃	D-2-s④	a		篦目文、幾何学彫去		
509	〃	B-4-t①	a		〃		
510	〃	E-3-s③	a		〃		
511	〃	D-4-b③	a		〃	木目B1種L：L	
512	〃	D-4-n①	a		〃　、体部下端彫去		
513	〃	D-4-i③	a		〃		
514	〃	D-4-a④	a		矢羽状集合沈線		
515	〃	E	a		斜位集合沈線、横位平行沈線		
516	〃	E-4-v③	a		横位平行沈線下、幾何学集合沈線		
517	〃	E-2-v①	a		斜位集合沈線、横位平行沈線		
518	〃	E-3-m③	c		〃　、　〃		
519	Ⅲ	D-4-b③	a			LR	
520	Ⅲ－C3	D-4-h③	a		縦位集合沈線、隆帯上刺突（隆帯下V字文）		
521	〃	B-3-y①	a		矢羽状・連続山形集合沈線、隆帯上刻目		
522	〃	E-5-dほか	a		横位平行沈線下、幾何学集合沈線		
523	〃	D-2-r②	c		横位平行沈線下、　〃	木目B1種R：R	
524	〃	E-3-p③	a		縦位平行沈線		
525	〃	C-2-f	a		幾何学集合沈線	(撚糸L)	
526	〃	E-3-k③	a		幾何学平行沈線	(撚糸L)	
527	〃	D-4-n②	a		横位・縦位平行沈線		
528	Ⅲ－D	D-2-u	a		単一沈線集合施文		
529	Ⅲ	F-2-c②	a				
530	Ⅲ	E-3-w②	a				
531	Ⅲ～Ⅳ	G-3-d③	b		スダレ状圧痕（タテ糸17～18㎜・ヨコ糸 5㎜間隔）		
532	Ⅲ	D-2-s③	a		木葉圧痕		
533	Ⅲ－E1	C-2-k②	a	外傾口縁	横位・連続山形押圧（L）	木目B1種R：L	
534	〃	D-3-f	c		〃・　〃　（L）		
535	〃	不　明	a		〃・　〃　（L）	木目B1種R：R	
536	〃	C-2-g①	c	直立口縁	横位・斜位・山形・環状押圧（R）、口端・隆帯上撚糸R	(撚糸R)	
537	〃	D-4-m	a	外傾口縁	横位・縦位・矢羽状押圧（L）、口端撚糸L		
538	Ⅲ－E2	D-3-p①	a	〃	横位押圧（R）		
539	〃	D-2-sほか	a	〃	〃　（L）、隆帯上刻目	木目B1種L：L	
540	〃	C-3-j①	a	〃	〃　（R）、隆帯上刻目	木目B1種L：L	
541	〃	D-3-P③	a	直立口縁	〃　（R）		
542	〃	D-4-g①	a	〃	〃　（R）		
543	〃	C-2-f②	a	外傾口縁	〃　（L）、口端LR		
544	〃	F-3-u①	c	直立口縁	〃　（R）、口端刺突		
545	Ⅲ－E3	C-2-p③	a	外傾口縁	〃　（L）、下端横位竹管平行沈線		
546	〃	D-2-r②	a		〃　（R）、隆帯上刺突、隆帯下V字文	木目B種L：L	
547	Ⅳ	B-4-j①	a		縦位平行沈線	LR	
548	〃	G-3-d①	b		〃　、格子目文		
549	〃	F-3-u①	a	外傾口縁	横位沈線＋連続爪形文、三角形彫去		
550	Ⅴ	E-3-e①	a		横位単一沈線、刻目		
551	〃	D-4-e③	a	外反口縁	横位・渦状単一沈線・斜位細線		
552	〃	E-4-g④	a	〃	横位単一沈線		
553	〃	E-4-l①	a	外傾口縁	縦位単一沈線、沈線区画内刺突		
554	Ⅵ	C-4-x③	a		弧状単一沈線	RL	
555	Ⅶ	E-2-s②	a		隆帯上刺突、体部刺突		
556	〃	D-4-n①	a		隆帯上刺突		
557	〃	F-3-c③	a		体部刺突		

註1：胎土●は、植物繊維の含有を示す
　2：削平区採集資料は、E-3・4区包含遺物

2　土製品

狭義の土製品とみなされる資料は、玦状耳飾１点のみである。土器片を再利用した土製円盤は確認できなかった。

（１）土製玦状耳飾（第52図164）

径3㎝程度と推定される小形品である。平坦な側面をもち、平面は中央に向かって緩やかに凹む。赤彩は認められない。前期終末～中期初頭に属すと考えられ、大沢遺跡Ａ地区から同時期の類似資料１点が出土している。

（２）焼成粘土塊

図示しなかったが、土器製作に伴う粘土塊が６グリッドから計20点出土した。総重量は551ｇを測る。このうち４グリッド（C-3-n・E-3-g・G-2-nほか）で２～７点が出土しており、特定箇所に弱いながらも集中する傾向がある。径2.8㎝の半球状をなすものが１点あるほかは、いずれも不整形を形状をもつ。大きさも2.6㎝～7.8㎝と様々である。

3　石　器

Ⅰ～Ⅲ群土器に伴う石器類が多量に出土した。全体数は、製品だけで377点にのぼる。以下では、食料の調達・加工に関わるⅠ群石器、工具的な性格の強いⅡ群石器、生産用具以外のⅢ群石器に区分し、項目別に特徴を記述する。

次章で述べるように、本遺跡では古墳時代に下降すると考えられる打製石器が相当量出土している。その製作に関わる石核・剥片類の中には、縄文時代との峻別が困難な資料も含まれるため、本項では縄文時代への帰属が確実な黒曜石のみをとりあげる。

（１）Ⅰ群石器

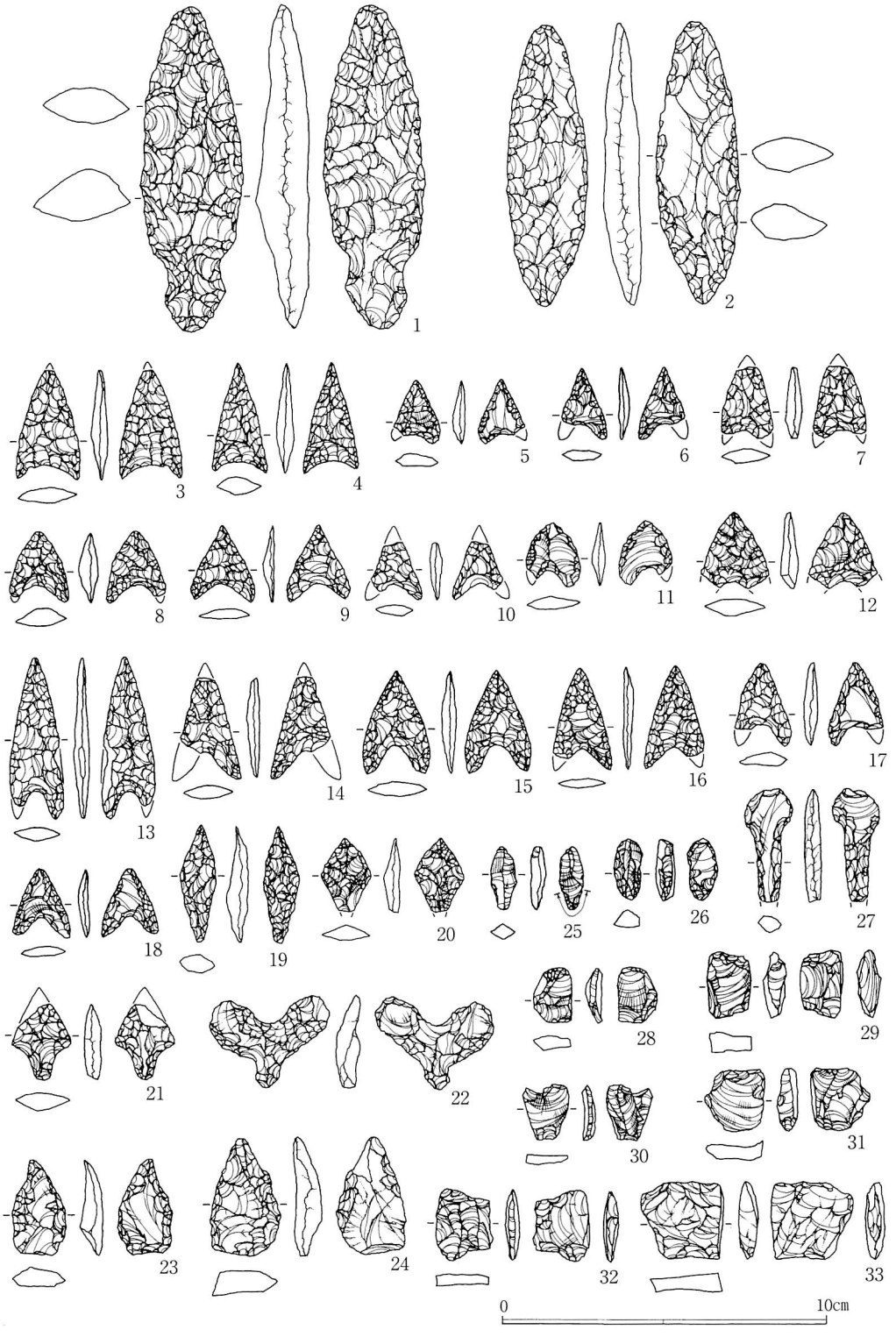
216点の出土をみた。器種と数量の内訳は、石鏃19点、石槍３点、礫石錘107点、磨石・敲石類83点、石皿４点である。

Ａ　個別用具について

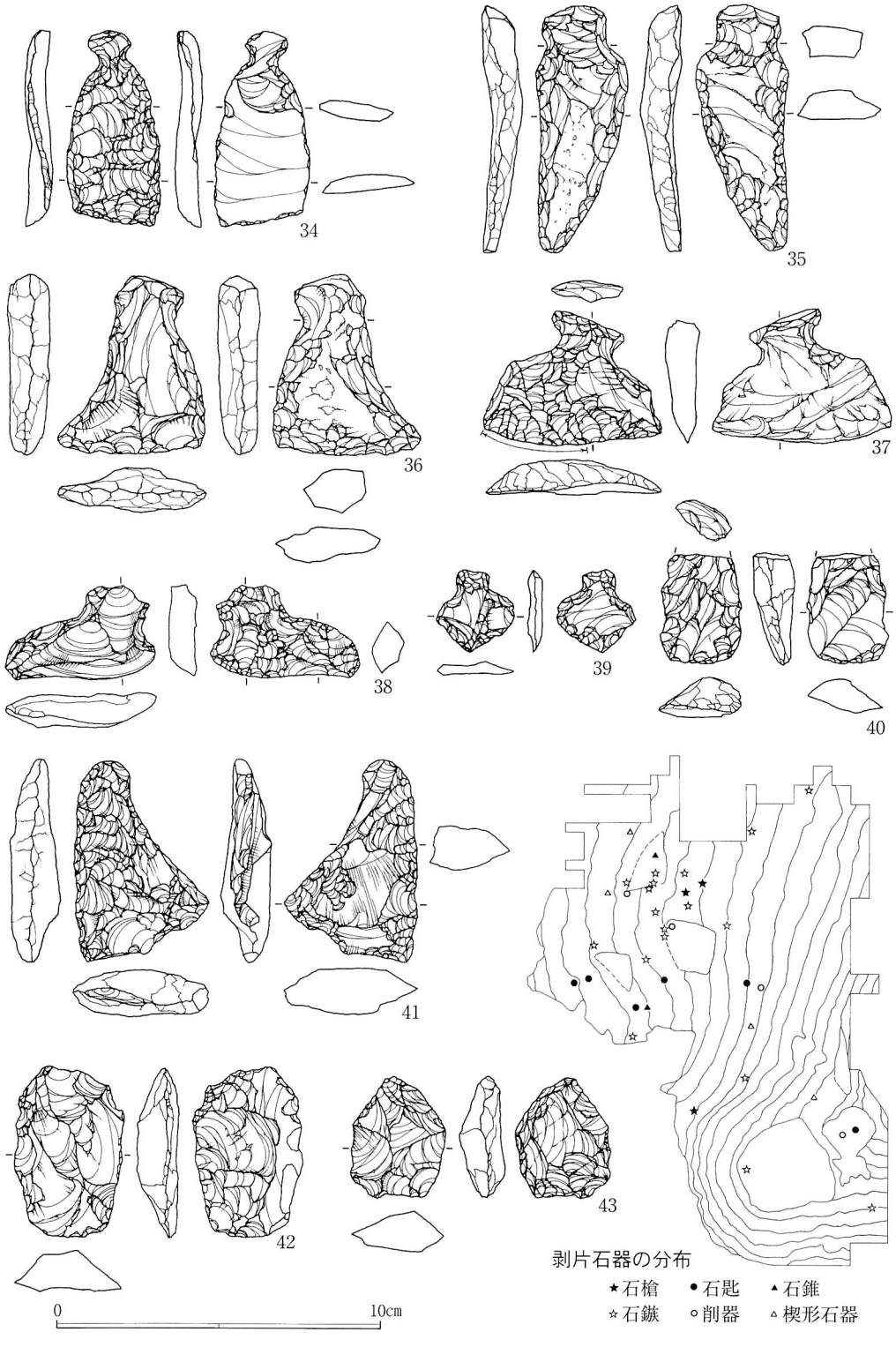
ａ　石鏃（第37図3～24）

未製品を含め29点出土した。使用石材には黒曜石・頁岩・メノウ・流紋岩・泥岩があり、全体の41％で黒曜石が使用される。

製品は基部形態などに基づき、凹基無茎（Ａ）・尖基（Ｂ）・有茎（Ｃ）・Ｄ　雁股（Ｅ）に大別できる。Ａについては、基部の抉りが最大幅に対し10％未満をⅠ・10％以上30％未満をⅡ・30％以上をⅢ、長幅比2.0以上をａ・2.0未満をｂとし、以上の組合せから、Ⅰａ類（3・4）・Ⅰｂ類（5）・Ⅱａ類（6・7）・Ⅱｂ類（8～12）・Ⅲａ類（13～17）・Ⅲｂ類（18）に細分する。形態と石材にはある程度の相関があり、Ⅱｂ類は黒曜石、Ⅰａ・Ⅲａ類はこれ以外に偏在する。



第37図　剥片石器－1（25矢印：磨耗範囲）



第38図　剥片石器－2 （37矢印：磨耗範囲）

近隣遺跡の在り方に基づけば、ＡＩａ類は前期前葉、ＡＩｂ類～Ｂ類（５～20）は前期終末～中期初頭の資料と考えられる。Ｃ類（21）は豊原遺跡の前期終末～中期初頭層準、Ｄ類（22）は重稲場遺跡で類例が確認できるので、Ⅲ群土器に伴う可能性がある。

ｂ　石槍（第37図１・２）

いずれも頁岩を石材とする。小破片を除く２点を図示した。

１は基部に抉りを施す優品で、右中央に表皮の一部を残すほかは全面にわたって押圧剥離が行なわれる。石核・剥片類の中に本例と同一の石材は見あたらず、東北地方からの搬入品と考えられる。Ｉ群土器に伴う可能性が高いが、中里村泉竜寺遺跡（諸磯ａ～ｂ式期）で類例が出土しており、前期初頭～後葉の大枠でとらえておく。

２は表裏に剥離面が残存するものの、入念な調整によって柳葉形に整形された資料である。時期の特定は難しく、Ⅲ群土器に伴うことも考えられる。

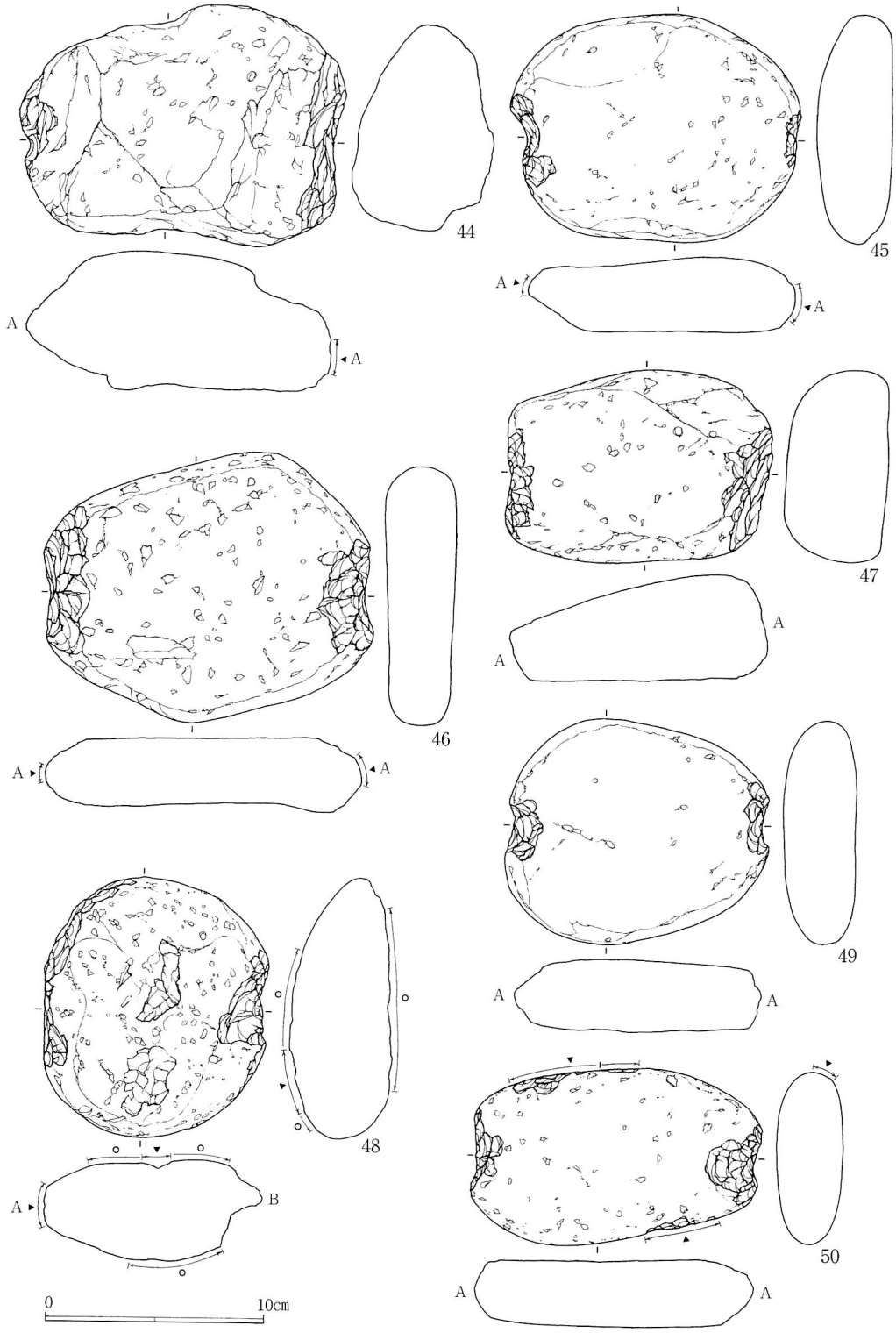
ｃ　礫石錘（第39図～第43図）

製品（第39図44～第43図83）と製作関連資料（第43図84～93）が出土した。内訳は、完成品107点（完形品88・破損品19）、製作途上の破損または放棄資料12点、抉り加工時の剥片30点である。このうち剥片１点が製品と接合した（第43図83）。製品の中には、磨石・敲石類や砥石からの転用品９点が含まれる。完成品と製作関連資料では分布状況に異なりをもつ。前者が調査区全域に及ぶのに対し、後者は西側斜面に限定されており、とりわけ高域B-2-t区における集中的な出土が特徴である。

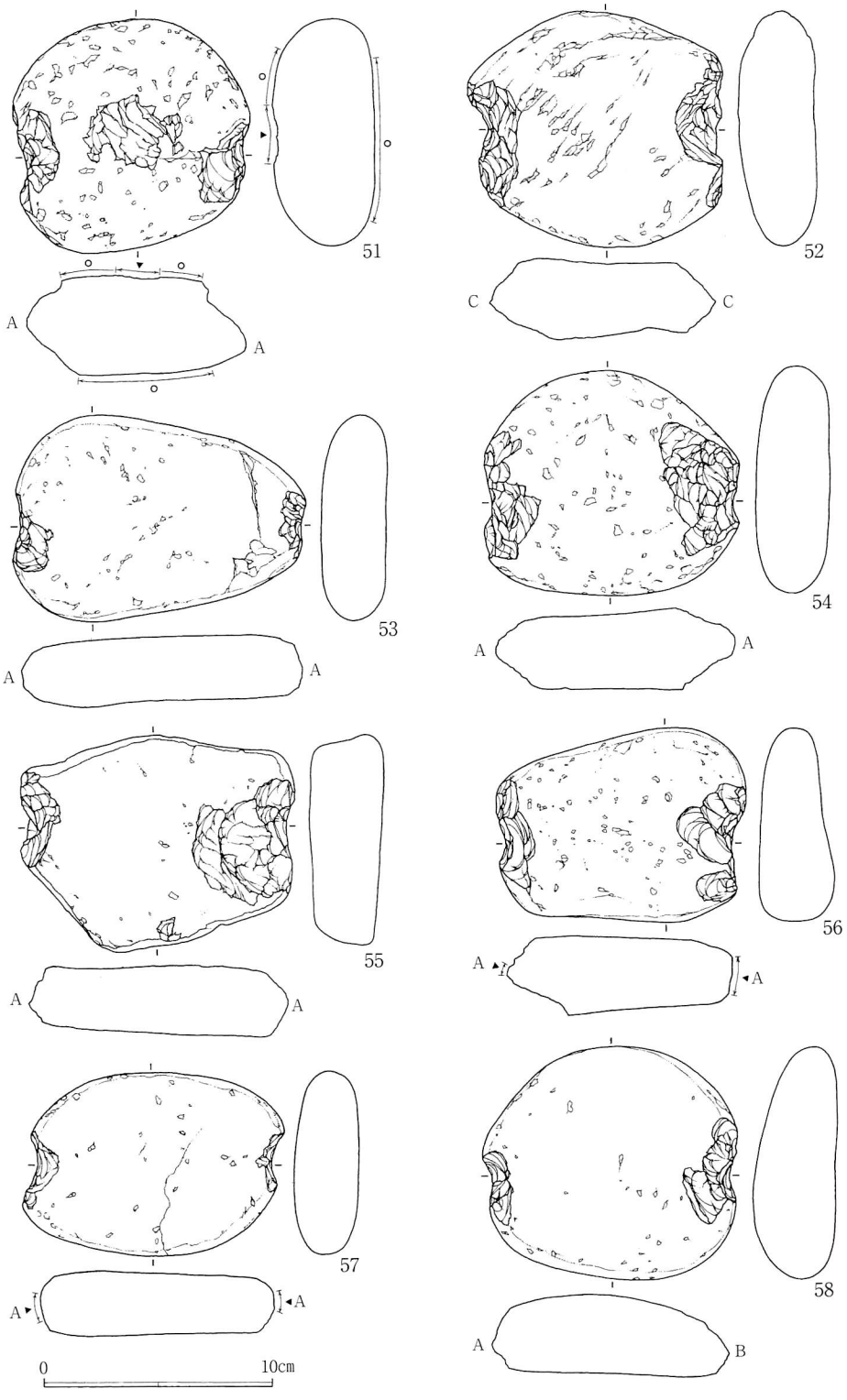
使用石材は、安山岩・流紋岩・玄武岩・泥岩・花崗岩などからなり、大多数が円礫によって占められる。このうち遠隔地産と断定できるのは、３点の花崗岩だけである。

抉りは、いずれも長軸両端に施される。抉り内部で計測した長軸幅は、最小で58cm・最大で148cmを測り、80cm～110cmの間に６割以上が含まれる。重量は54ｇ～1372ｇの幅があり、中心をなすのは100ｇ～500ｇの範囲内である。両者に基づく礫石錘サイズは、緩やかな一峰性分布を示し明確なグルーピングが困難であるが、便宜的に第43図右下のような区分を試みる。

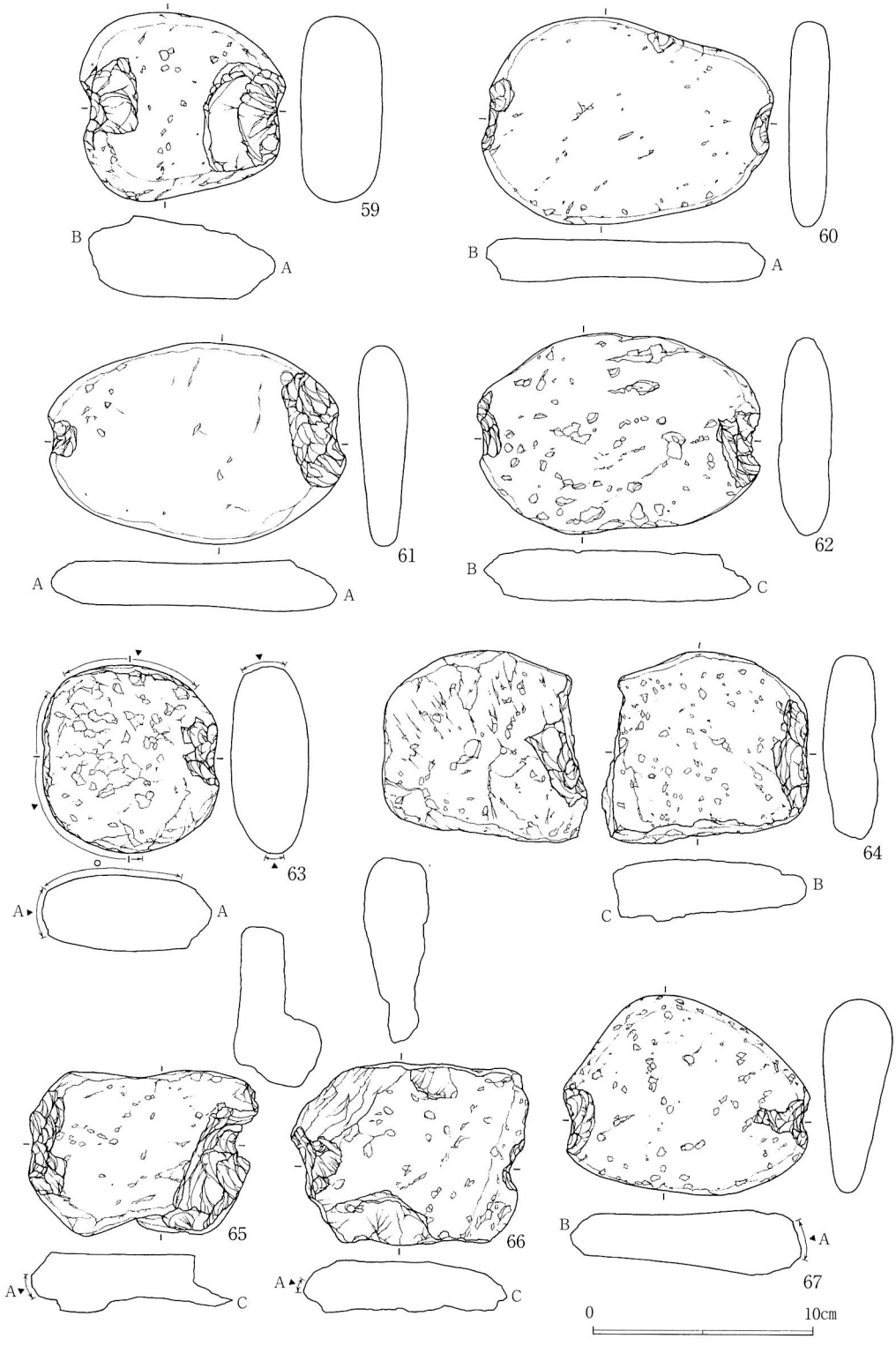
抉り加工は両面からの剥離がほとんどである。素材の形状により剥離面が離れた資料も存在するが、通常は両者が接して切り合い関係をもつ。エッジの加工にはバリエーションがみられ微細な剥離や敲打によって丸味を帯びるもの（A）、やや先鋭な状態を留めるもの（B）、シャープなもの（C）に分けられる。両端での在り方を類型化すれば、Ａのみ（Ｉａ類）・Ａ＋Ｂ（Ｉｂ類）・Ａ＋Ｃ（Ｉｃ類）・Ｂのみ（Ⅱａ類）・Ｂ＋Ｃ（Ⅱｂ類）・Ｃのみ（Ⅲ類）の６区分が可能である。完形品88例の在り方としては、Ｉａ類が51点（58％）に達し、12点を数えるＩｂ類以下はⅢ類へ向かうにつれて減少する。サイズ分類との関係は、Ｃ３サイズに分散傾向を認めるほかはＩａ類への集中化が明瞭である（第43図一覧表）。



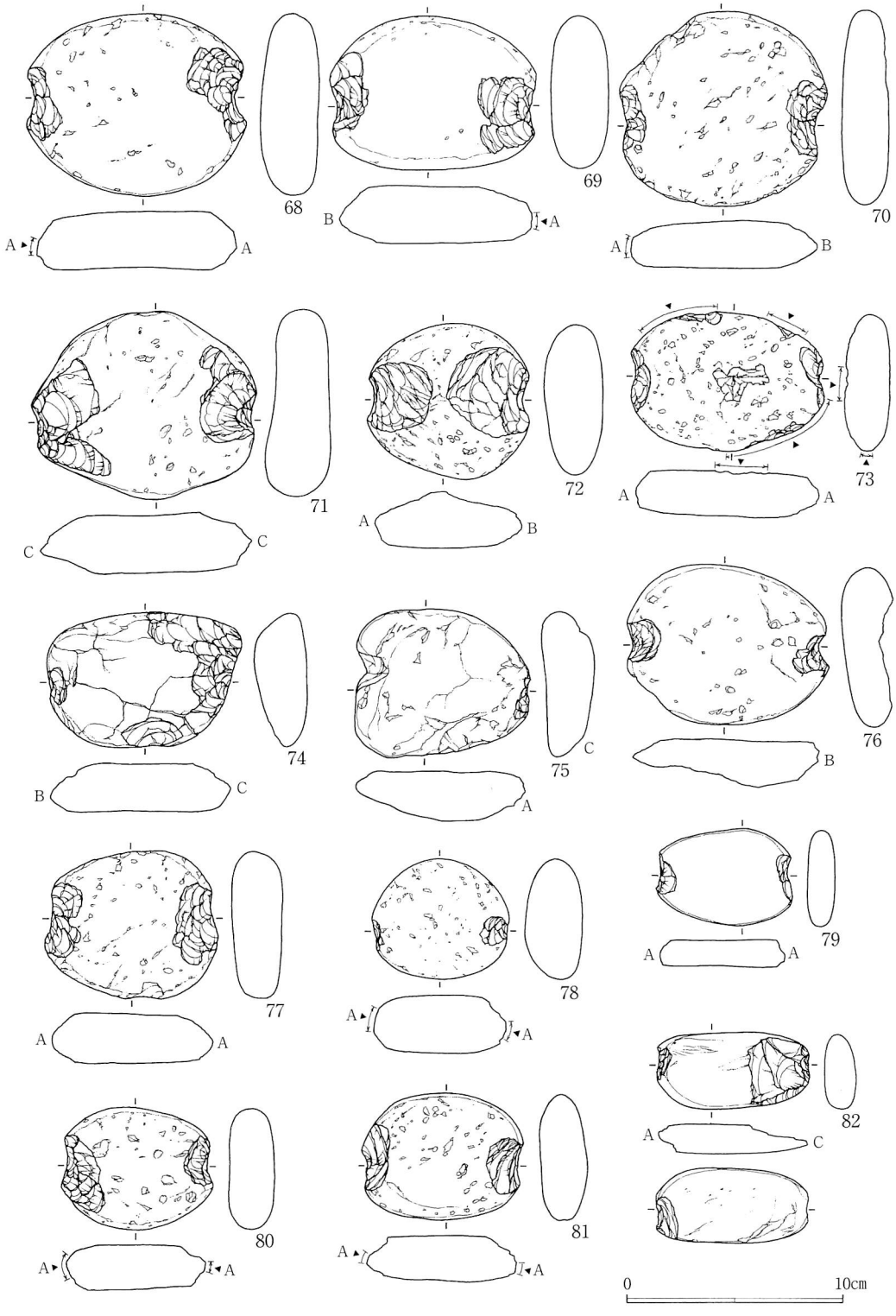
第39図　礫石錘－1　(▲:敲打・○:磨耗)



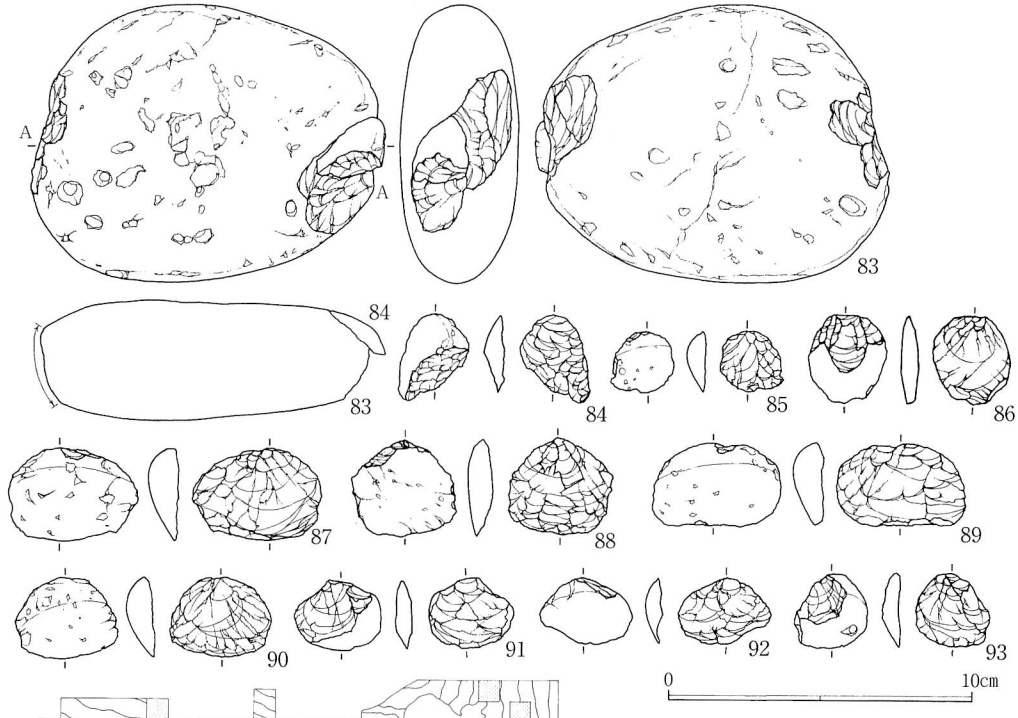
第40図　礫石錘－2（▲:敲打・○:磨耗）

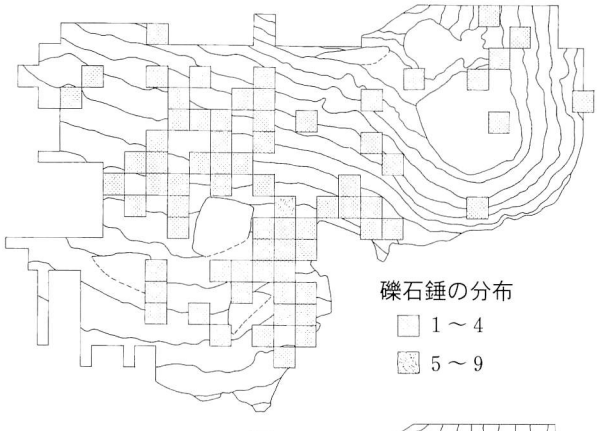


第41図　礫石錘－3（▲:敲打・○:磨耗）



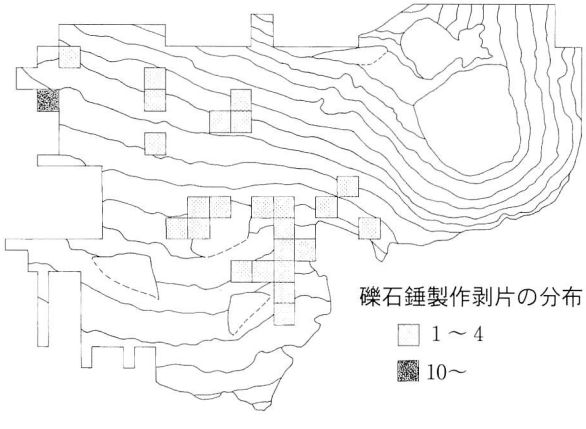
第42図　礫石錘－４（▲:敲打・○:磨耗）

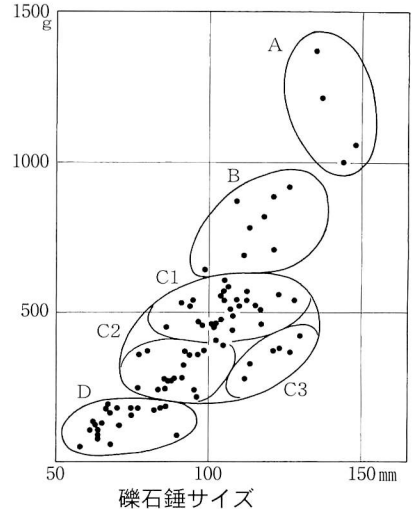




挟部加工	Ⅰa類	Ⅰb類	Ⅰc類	Ⅱa類	Ⅱb類	Ⅲ類	TOTAL
サイズA	3		1				4
B	9	1					10
C1	19	3	1	2	1	2	28
C2	7	4	5		2	1	19
C3	2	1	1	1	1		6
D	11	3	2	2	2	1	21
TOTAL	51	12	10	5	6	4	88

礫石錘のサイズと挟部加工





礫石錘サイズ
（横軸は挟部間の最短長）

第43図　礫石錘－5・礫石錘製作剥片

d　磨石・敲石類（第44図・45図）

完形品40点、破損品43点からなる。使用石材の大半は安山岩で、遠隔地産は花崗岩１点に限定される。器面における保有部位を考慮した使用痕の種類には、①平坦面磨耗・②側面敲打・③先端敲打・④平坦面敲打（凹）がある。

本遺跡で器面全体の在り方が把握できる資料は54点を数える。使用痕の保有形態としては、単一要素からなるものが半数近くを占めており、①（Ⅰ類：94～98）17点、④（Ⅷ類：112・113）６点、③（Ⅵ類：102）２点が該当する。複合パターンで比較的多いのは、①＋②（Ⅱ類：99～101）の７点、①＋③（Ⅲ類：105・111）の６点、①＋④（Ⅳ類：106）と①＋②＋③（Ⅴ類：109・110）の各５点である。このほか②＋④（Ⅶ類：104）が１点存在する。

要素別に見た出現率は、平坦面磨耗率74％・側面敲打率22％・先端敲打率24％・平坦面敲打率22％と算出される。なお、破片資料の中には①が27点、①＋②が６点存在するので、①・②の最大出現率は、89％と33％となる。

e　石皿（第46図）

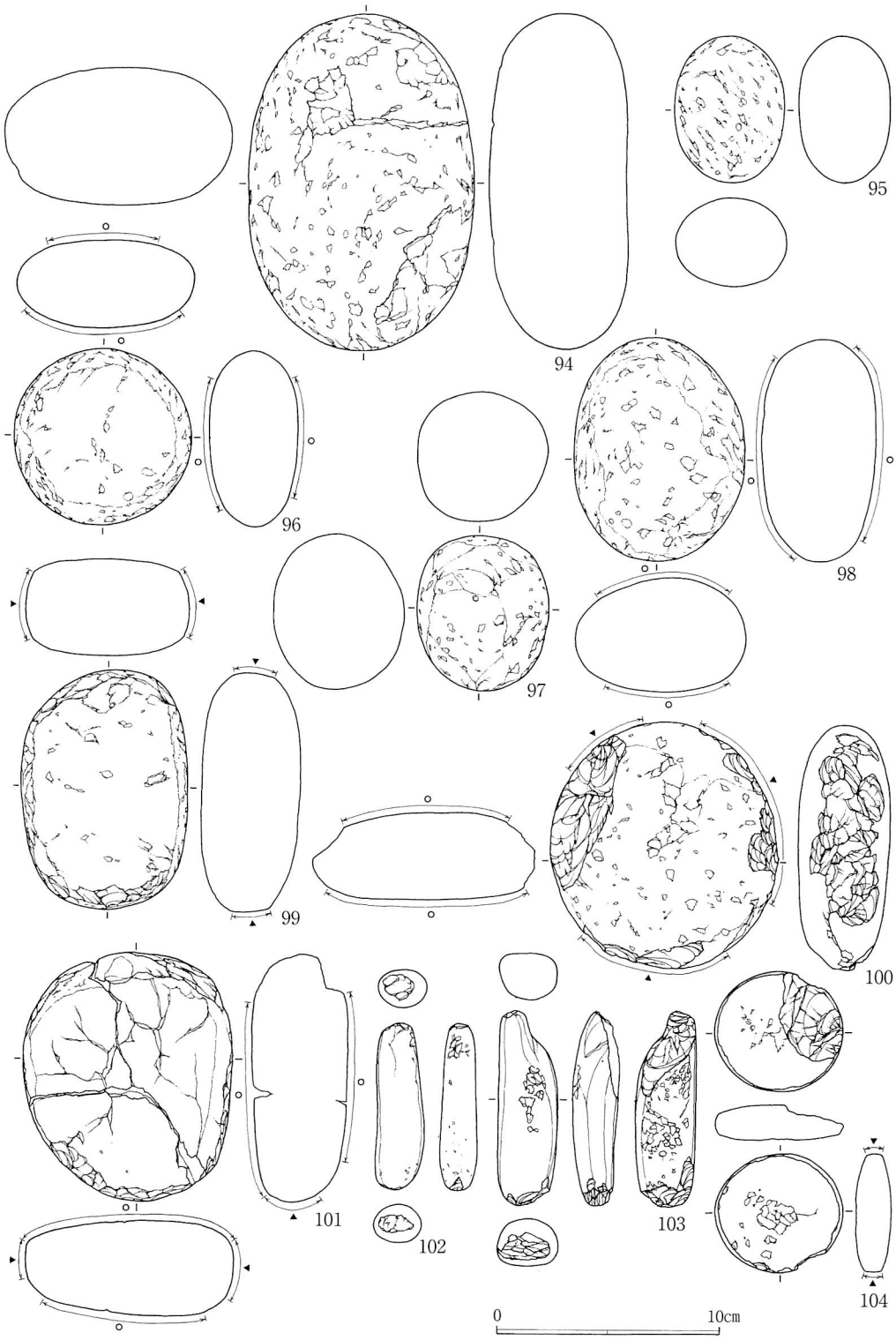
盤状を呈し表裏に磨耗を有するもの（114・116）３点と緩い凹をもつもの（115）１点が出土したにとどまる。磨耗の度合はいずれも軽度である。角田山麓の前・中期遺跡では、石皿と磨石・敲石類の出土比が前者１に対し後者２～５を示すのが一般的である。本遺跡出土の搬入礫は概して風化が進行しており、使用痕が確認できなかった個体の中に石皿が少なからず存在する可能性もある。

B　Ⅰ群石器の位置づけ

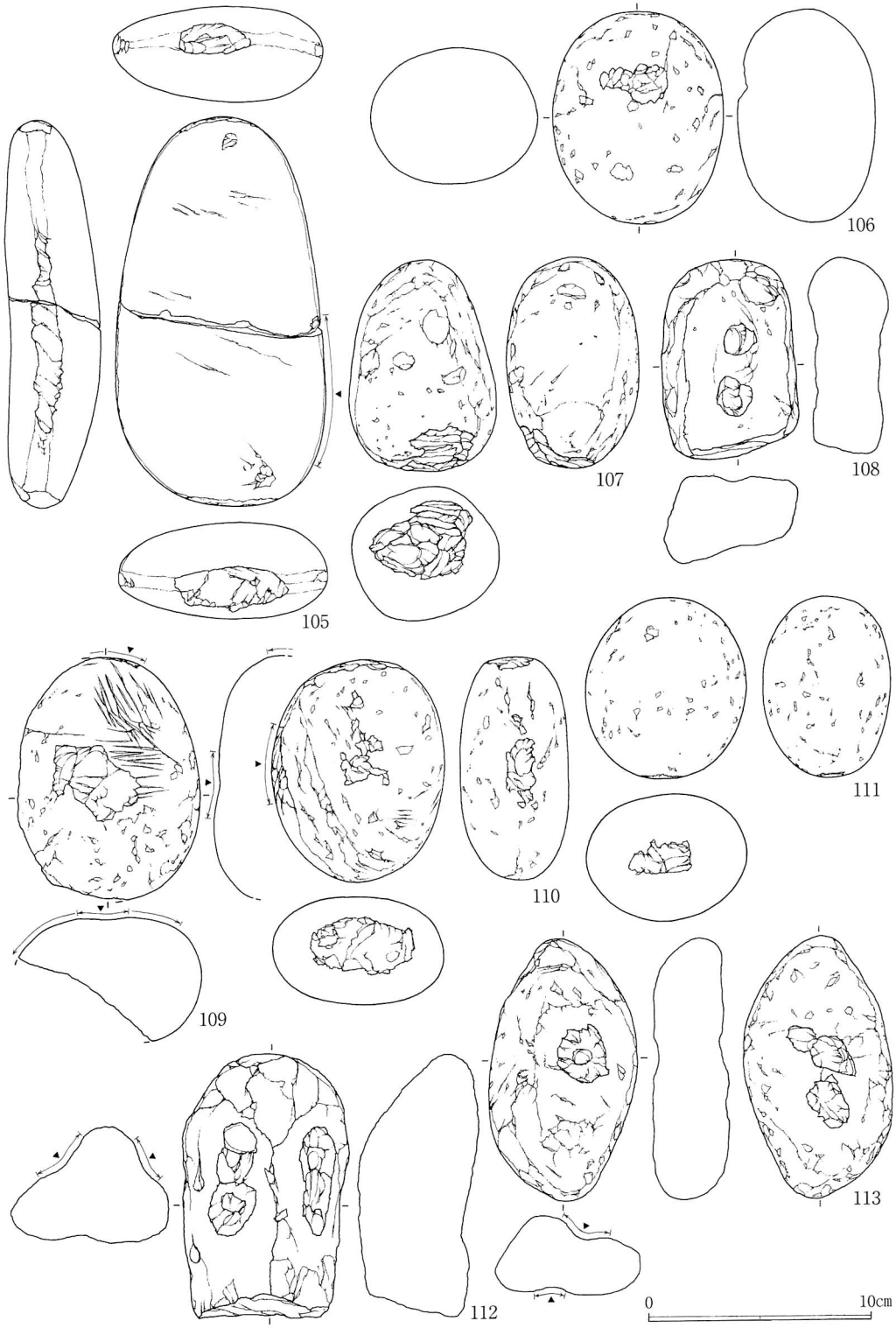
本遺跡のⅠ群石器は、出土量に問題を残す石皿を除けば212点を数える。この中にはⅠ群やⅡ群土器に伴う石鏃・石槍が含まれており、Ⅲ群以前に遡る何らかの資料がさらに存在することも予想される。しかし、土器の数量構成が石器に反映される可能性は極めて高く、前期終末～中期初頭の石器組成を検討できる良好な資料と考えて差しつかえなかろう。

本群を特徴づける重要な要素は、10％にも充たない石鏃、打製石斧の欠落、50～40％近くを占める礫石錘や磨石・敲石類の存在、である。これに類した石器組成は、新潟～北陸の前期前葉に成立する。近隣の新谷遺跡はその典型例である。以後、類似組成は中期中葉に至るまで同一空間内に存続するが、本遺跡の石器組成は、その一端を示す資料となる。

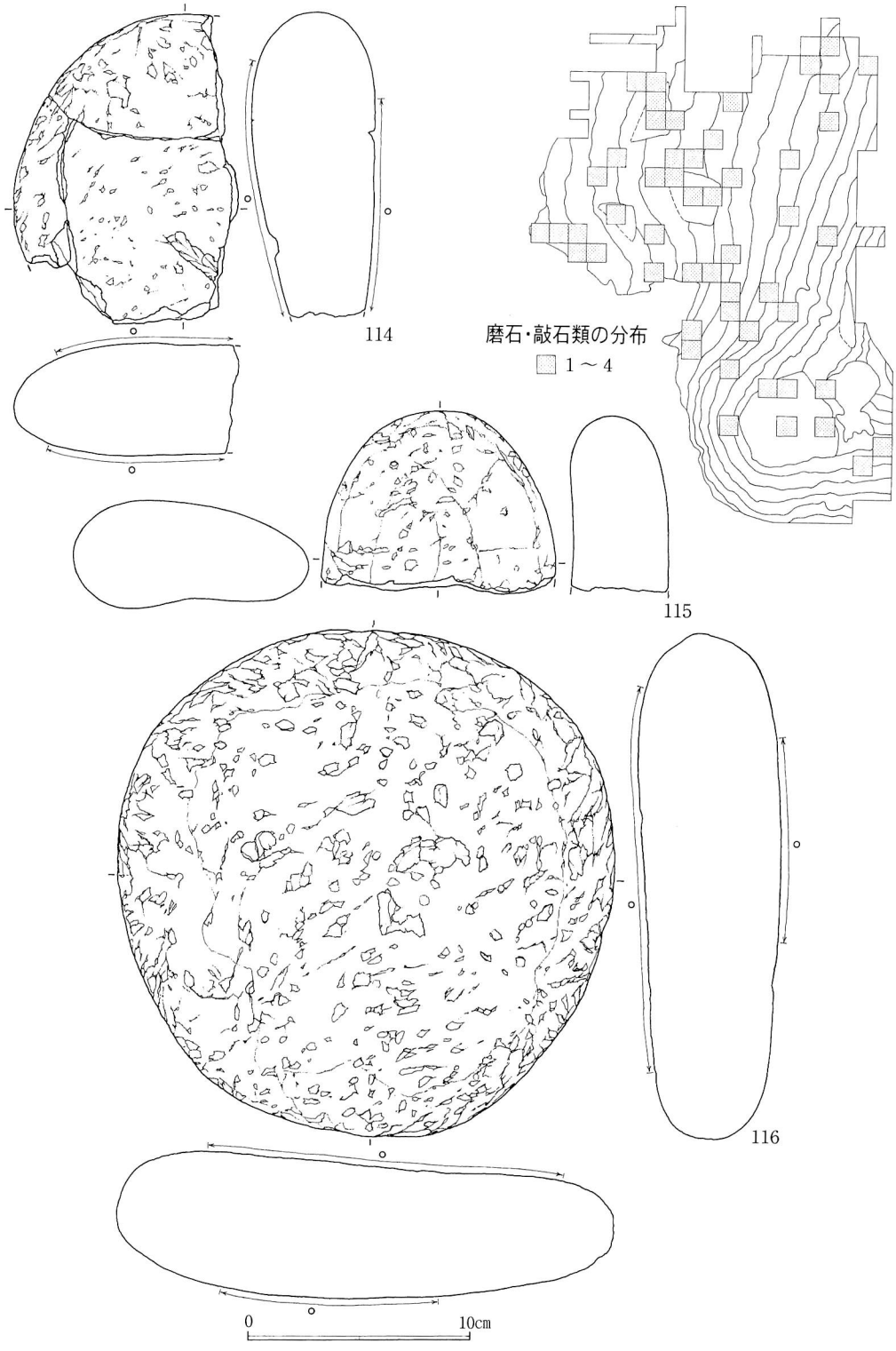
構成器種の主体を占める礫石錘については、編み物用錘具説がある。しかし、角田山麓における前期遺跡の大半は沖積地に接した台地低域部に立地し、大量の礫石錘を伴うケースがみられる。その一つ豊原遺跡では、前期終末層準から多量の魚骨（トゲウオ）が出土しており、水産資源の活発な利用を物語る。前期終末を境に居住域は台地高域部へと拡大するが、石鏃の急増と礫石錘の減少によって両者の量的逆転現象を生ずることも確認されている。



第44図　磨石・敲石類－1（○:磨耗・▲:敲打）



第45図　磨石・敲石類－2（▲：敲打）



第46図　磨石・敲石類の分布と石皿（○：磨耗）

近年、漁網錘説に対する懐疑論の根拠として、抉部における先鋭さを重視する見解が提示された［渡辺2000］。本遺跡出土資料の在り方は前述のとおりで、それとは異なる観察所見がえられた。この種の石器における遺跡間変異は著しいものがあり、後述のⅡ群石器と出現傾向を大きく異にする点も重要なことがらである。

（2）Ⅱ群石器

磨製石斧31点・石匙６点・削器４点・石錐３点・楔形石器９点・砥石102点が出土した。

A　個別用具について

a　磨製石斧（第47図・48図）

石材は蛇紋岩・流紋岩・砂岩などからなり、前二者を主体とする。形態やサイズに基づき、次のような区分が可能である。

１類（117～121）　斧身の断面形が楕円をなすもの。大型～中型の６点が該当する。いずれも研磨は基部まで及ばない。すべて刃部が欠失しており、120は欠損部を敲石として再利用したものである。主として前期前葉の資料と考えられる。

２a類（122～130）　側面が平坦に研磨されるもののうち、大型～中型品を本類とする。完形品１点・基部遺存２点・中間部破片３点・刃部遺存10点からなる。平面形としては、撥形（122・123・126）と短冊形（128・129）の別がある。基端はいずれも平滑に研磨されるが、122・123では鈍い光沢をもつ。使用時の柄ズレによる弱い衝撃痕と考えられる。刃部の使用痕は両面で観察できる。偏刃をなす127は、右面の剥離痕が研磨に先行しており、刃部再生に伴う形態変化の一例とみなされる。以上はⅢ群土器に伴うものであろう。

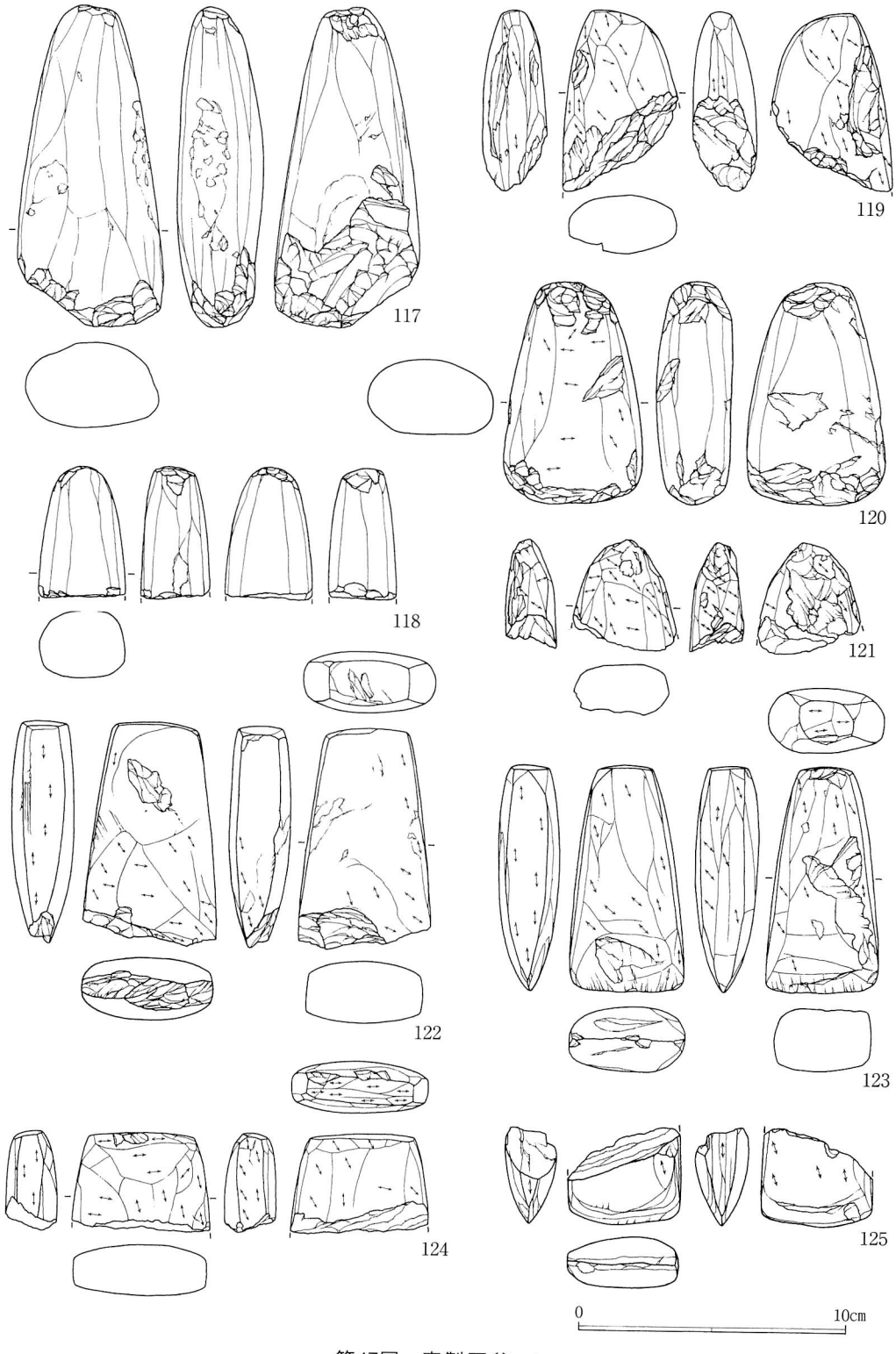
２b類（132～135）　最大幅３㎝以下の小型石斧。図示した４点がすべてである。刃先が残る132・135は、ともに片刃をなす。後者の刃部付近にはタール状の黒色付着物が両面で観察でき、その範囲をスクリントーンで示した。付着物の性質や付着原因は不明であるが、石斧柄への装着状態がうかがえる資料の可能性がある。133・134は、一側面に製作時の擦切痕をとどめるものである。新潟県内では、近年諸磯ｂ式期に属する小型擦切石斧の存在が確認されているので［平吹2000］、所属時期は前期後葉～中期初頭と考えるのが妥当である。

３類（131・136）　扁平な形状をなし、側面が不整形なもの。中型～小型品の２点のみである。131は斜刃ぎみの片刃石斧で、右面は刃部再生研磨による。

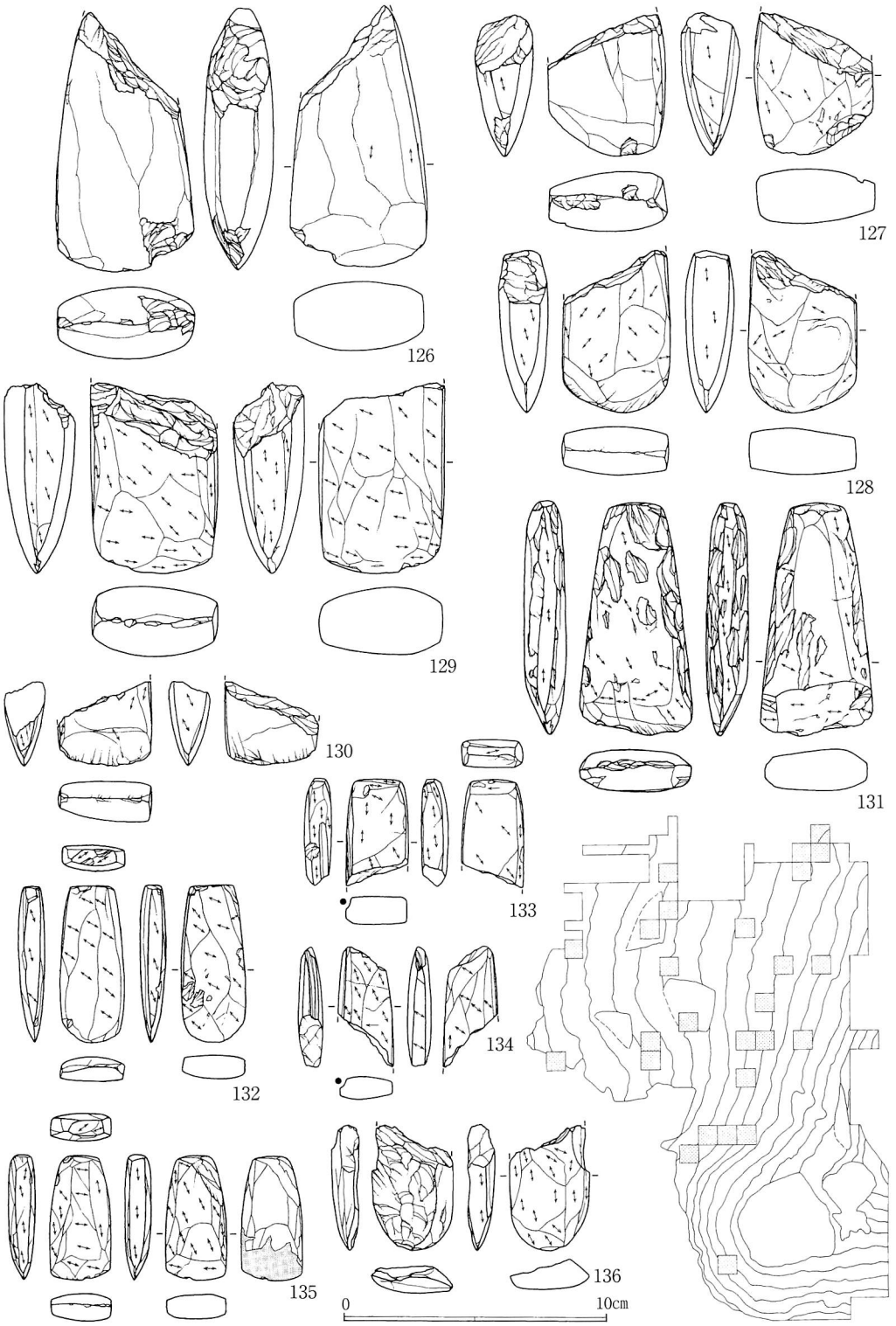
b　磨製石斧製作工程資料（第49図・50図）

本遺跡内での石斧製作を示す資料が27点出土した。石材は、蛇紋岩と流紋岩である。敲打技法と擦切技法が確認でき、前者についてはＡ～Ｄの工程が想定される。

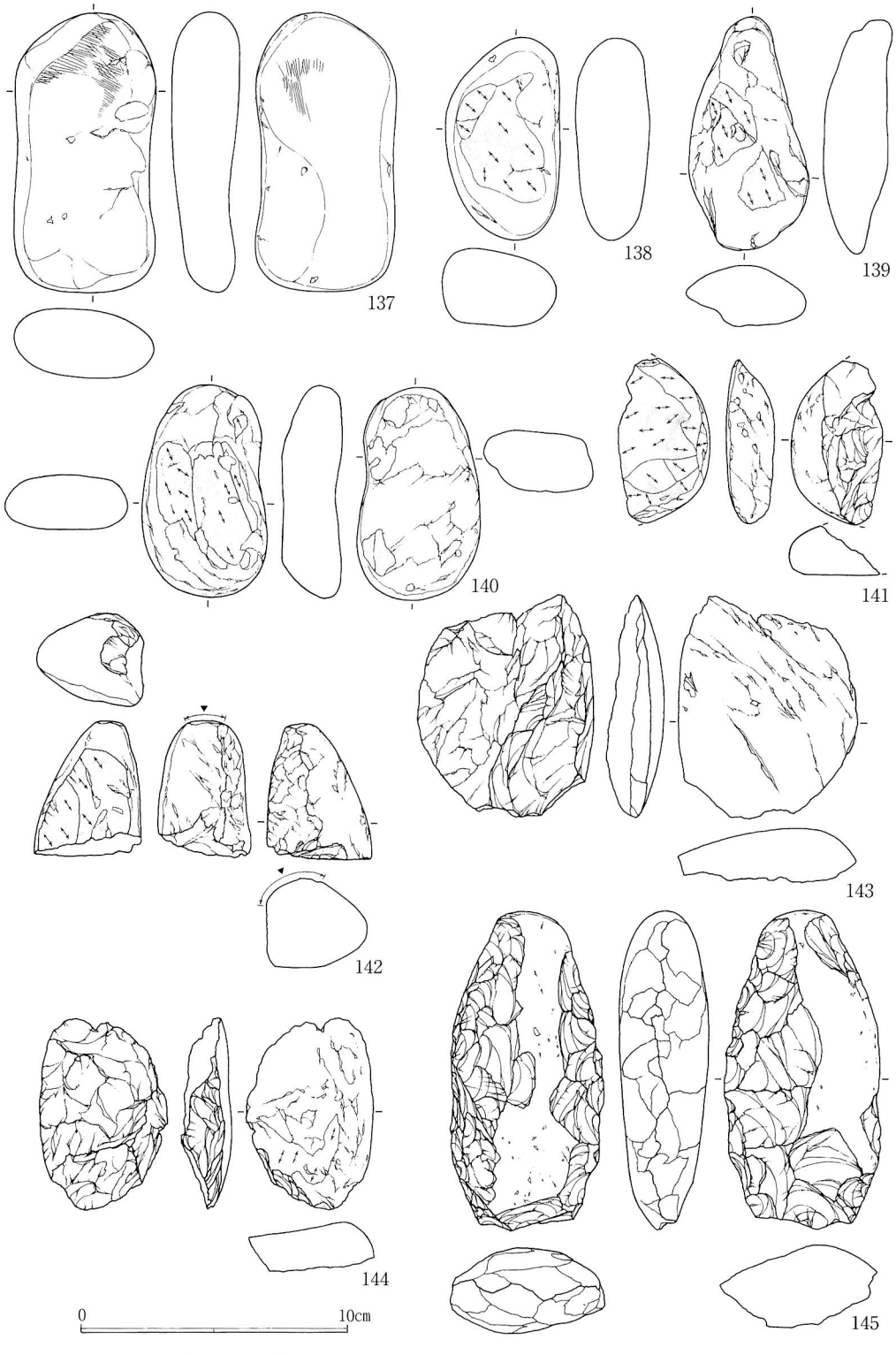
敲打技法工程Ａ（137～140）　円礫に研磨を加えた資料を本工程とする。６点出土しており、研磨はいずれも平坦面に限定される。



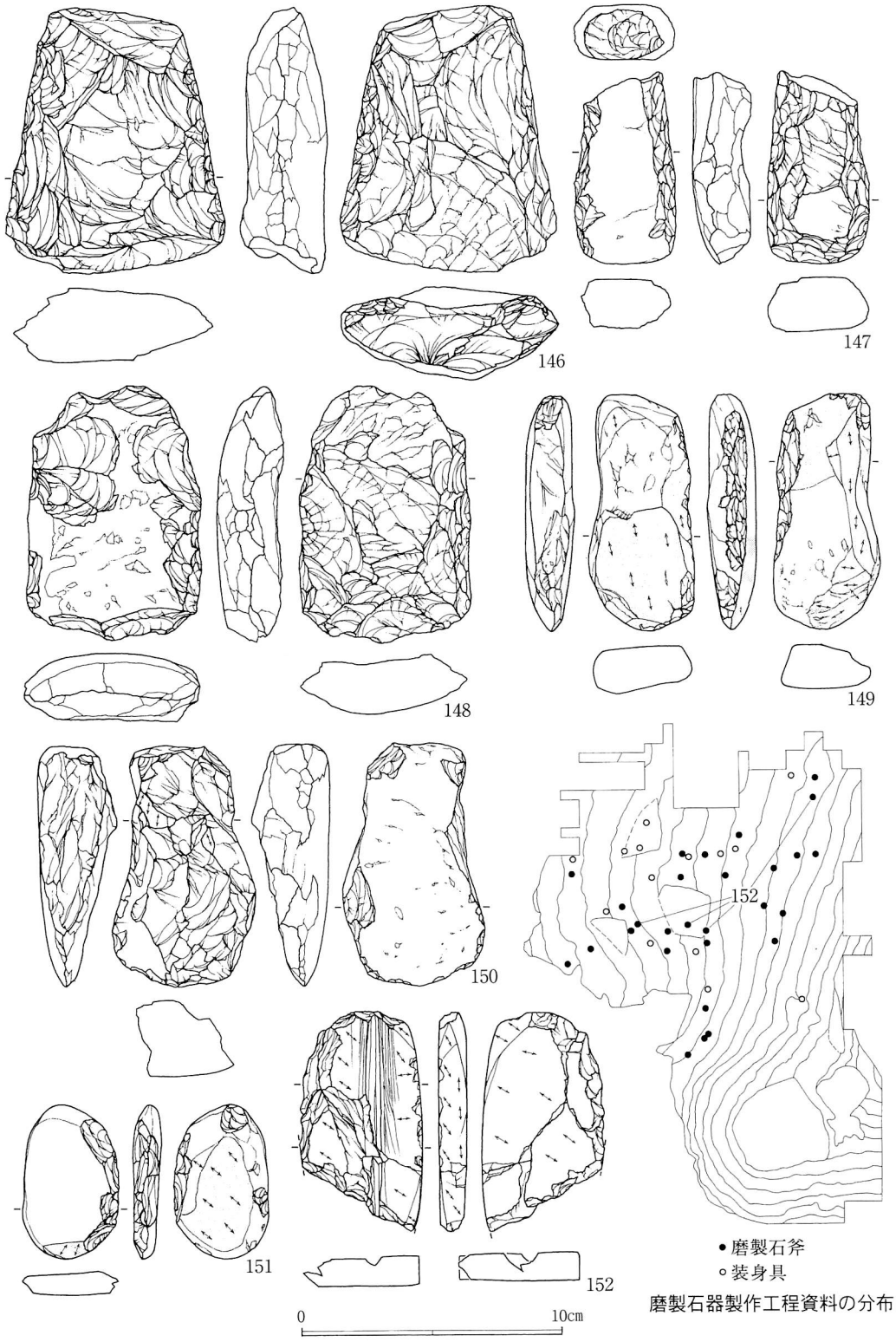
第47図　磨製石斧－1



第48図　磨製石斧－2（135網点:黒色付着物・ドット:擦切痕）



第49図　磨製石斧製作工程資料－1（網点:研磨面・▲:敲打）



第50図　磨製石斧製作工程資料－2（網点：研磨面）

敲打技法工程Ｂ（141～144）　石斧素材を剥片剥離によって作出する段階。中型～小型石斧の素材となりうる剥片（143・144）４点と工程Ａの分割資料（141・142）７点が出土した。142は先端に敲打痕を複合しており、ハンマーとしても使用されたことがうかがえる。

敲打技法工程Ｃ（145～151）　側面に剥離を加え大まかな形状を形作る段階である。９点出土しており、素材の在り方には自然礫（145・147）、工程Ａの分割品（150）や剥片（146・148）の別がある。149・151は、研磨と剥離の先後関係が不明瞭であるが、刃部作成研磨段階の初期資料と見ることもできる。

擦切技法（152）　152は、全面研磨によって扁平素材を作出した後、中央での２分割を意図している。成品サイズが133・134に合致した好資料である。本例は４つに破片化しており、敲打分割時の失敗例とみられる。

ｃ　**石匙**（第38図34～39）

全点形態を異にする。34は珪質頁岩製。腹面に小剥離を加えた後、入念な押圧剥離が背面に施される。いわゆる「松原型石匙」の典型資料で［秦1991］、前期前葉に位置づけられる。38は黒曜石を石材としており、その他の資料もⅢ群土器に伴うものであろう。37は珪質頁岩製で、34と共に東北地方からの搬入品の可能性がある。刃部の磨耗が顕著な資料である。

ｄ　**削器**（第38図40～43）

頁岩（40・42）と黒曜石（41・43）を石材とする。40は片刃石斧状の小型石器で、東北地方に分布する「石箆」に類似した特徴をもつ。44は全面にわたりラフなタッチの剥離が加えられており、石鏃未製品の可能性もある。

ｅ　**石錐**（第37図25～27）

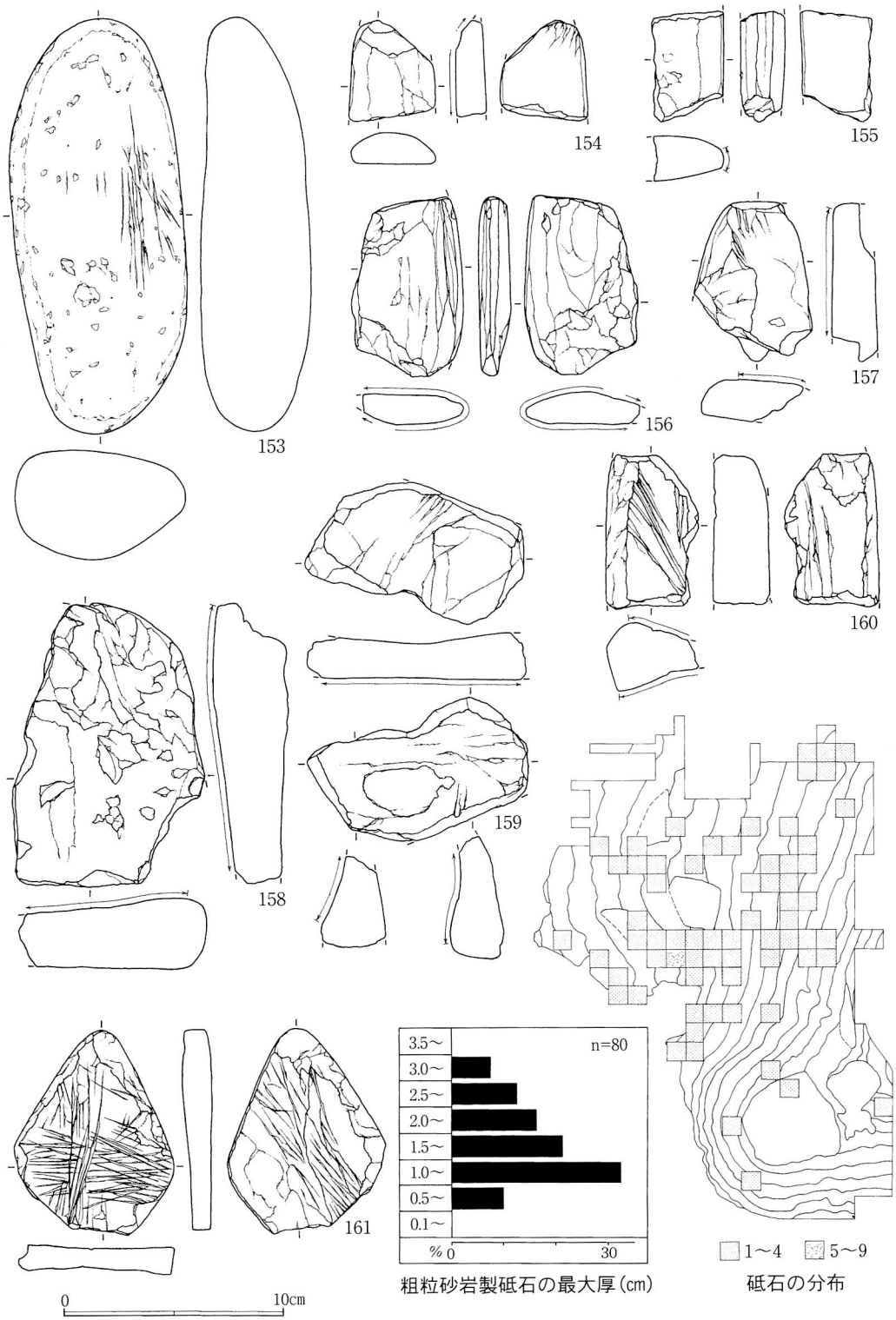
流紋岩（27）と黒曜石（25・26）が使用される。後者の２点はツマミを欠く。後述の剥片分類に従えばＳサイズにあたり、両極打法によって剥離されたものである。25の先端には、回転線状痕が明瞭に観察できる。

ｆ　**楔形石器**（第37図28～33）

両極打法によって作出された剥片のうち、幅広で側面に樋状剥離をもつ資料を楔形石器とした。チャートの円礫から剥離されたもの（33）と黒曜石製（28～31）があり、前者の石材利用は33の１点に限定される。29・32・33は、一側縁に折断面をもつ例である。

ｇ　**砥石**（第51図）

凝灰岩製（153）１点・泥岩製５点・粗粒砂岩製（154～161）96点からなる。完形品は円礫素材の153のみで、これ以外は盤状をなす資料が破損したものである。なお、粗粒砂岩製品については、最大長３㎝以上で礫面に明瞭な磨耗痕を認める資料のみを砥石に分類した。細片が多く個体識別も困難なため、上記の数量は多分に流動的である。



粗粒砂岩製砥石の最大厚(cm)

砥石の分布

第51図　砥　石

粗粒砂岩製の使用痕には、溝状と平滑～緩い凹面をなすものの別があり、前者は160・161などの少数資料にとどまる。各個体の最大器厚は0.7cm～3.4cmの幅をもち、うち54％が１cm台に分布する（第51図下）。使用痕の保有部位は、平坦面と端部にある。端部に小段をもった155は、擦切時に使用されたいわゆる「石鋸」である。

B　Ⅱ群石器の位置づけ

本遺跡におけるⅡ群石器の出土総数は155点を数える。Ⅰ群・Ⅱ群合計数の中に占める割合は42％を示し、東日本における前・中期遺跡のなかでは極めて高い数値にあたる。内容を見ると、磨製石斧20％・砥石66％・剥片工具類14％となり、磨製石斧やその製作に関わる用具の卓越によって特徴づけられることが明らかである。

本遺跡で製作される石斧石材の多くは、西頚城産と推定される蛇紋岩である。工程Ａの存在からみて、搬入時の形態は原石であった可能性が高い。新潟県内の海岸部では、前期前葉から中期前葉に至る間において、こうした形での石材搬入行為によって石斧製作を行なう遺跡が点在している。しかし前期終末～中期初頭の事例は従来確認されておらず、石斧製作の連続性を示す新たな知見をもたらした。前述のように、本遺跡の石斧製作手法は、敲打技法と擦切技法からなる。後者は小型石斧に限定され、前期後葉の伝統が受け継がれている。一般に擦切技法によって製作された石斧の量は、前者に較べ数少ない。しかし、小型石斧との関連性は極めて高く、前期後葉～中期初頭の県内海岸部を特徴づける重要な要素と考える必要がある。

（３）Ⅲ群石器

玦状耳飾り２点。垂飾２点。玉斧２点からなる。

A　個別用具について

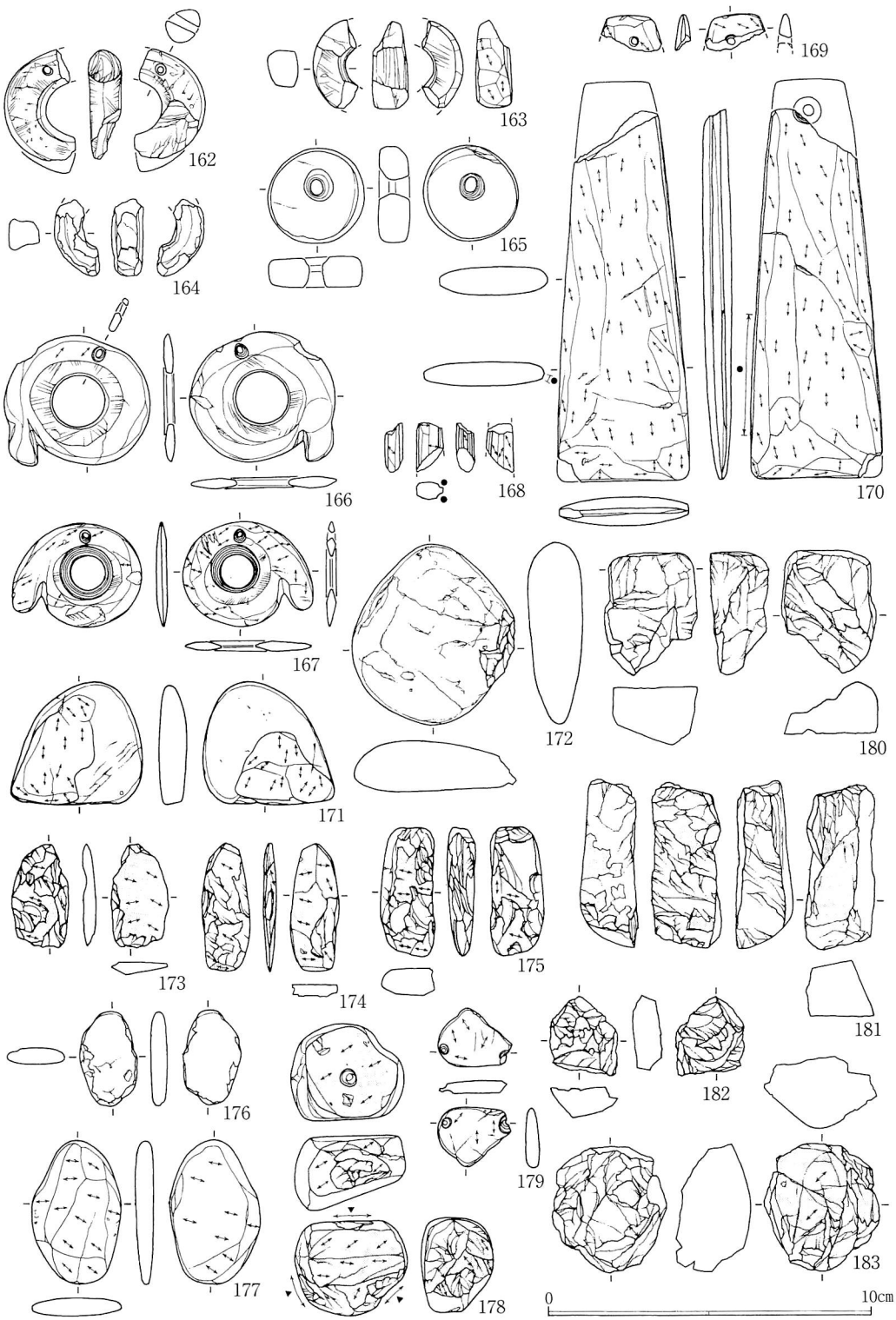
a　玦状耳飾（第52図162・163）

162は茶褐色をなした滑石を石材とする。平面形はドーナツ状を呈し、最大径４cmほどと推定される。切目の一部がかろうじて遺存しており、側面方向からの擦切分割がうかがえる。内部には縦方向の整形痕が観察できる。前期前葉の特徴を備えた資料である。

中間部破片の163は、乳白色の滑石製。断面形は不整方形をなす。内面には孔穿時の回転痕が鮮明に残される。柱穴状ピット86から出土したもので、Ⅲ群土器が共伴した。

b　垂飾（第52図165・167）

167は「の」字状石製品の完形資料で、Ⅲ群土器Ｅ類（第35図540）と共に出土した。使用石材は、淡緑色の岩体に黒色粒子が入り混じった美麗な蛇紋岩である（本章扉写真）。本例の特徴は、環の形状がドーナツ状を呈し、尾部が丸味を帯びること、中央孔の穿孔痕が帯状にめぐることにある。現在この種の垂飾は全国で20例確認されているが［長野県立歴史館2001］、３要素を備えた資料は、至近距離の天神遺跡出土品（第52図166）のみである。ともに「の」



第52図　装身具類（網点:研磨・▲:敲打・ドット:擦切痕）

字面側の整形が入念な点は、表裏の意識を示唆する意味で留意すべきである。

165は滑石製。縁辺が丸味を帯びた肉厚な資料で、中心から外れた箇所に孔をもつ。入念な研磨が行なわれるが、孔の位置からみて玦状耳飾りの未製品の可能性がある。

c　玉斧（第52図169・170）

別名「有孔石斧」である。基部破片の169と、これを失う170が出土した。ともに石材は蛇岩。170は基部付近の孔が部分的に残存しており、全長は12.5cmほどと推定される。一側面には製作時の擦切痕が観察できる。

d　棒状石製品（第52図168）

蛇紋岩製の小破片。一側縁の両面に擦切溝を有するが、分割面は研磨によって除去される。一方がいくぶん広がる形状をもち、「棒状垂飾」の一部をなす可能性も指摘できる。

e　装身具製作資料（第52図171～183）

敲打工程（172・180）２点、研磨工程（171・173～177・181～183）10点、穿孔工程（178・179）２点からなる。石材は、蛇紋岩（162～168・170）、碧玉（161）、ヒスイ（170～172）。

178は一面が平滑に研磨され、その中央に穿孔を試みたもの。この他、側面や背面に穿孔を意図した３箇所の敲打痕をもつ。173～177は、小形円礫や剥片に研磨が加えられ、179と同類の垂飾未製品と考えられる。形状・サイズが167に近似する171は、本遺跡内での「の」字状石製品の製作を示唆する点で注目の一例である。

ヒスイ資料は何れも西側斜面のⅠ・Ⅱ層から出土した。しかし、古墳時代前期の玉造遺跡は頚城以北で未だ確認されておらず、181の類品が柏崎市大宮遺跡（諸磯ｂ式期）で出土した点も勘案し、縄文時代前期終末～中期初頭の所産と考えた。183は礫面、182は剥離面、181は角柱状の節理面に研磨が行なわれる。研磨の程度は微弱である。

B　Ⅲ群石器の位置づけ

本遺跡から出土したⅢ群石器は、製作工程資料を合わせると20点を数え、新潟県内海岸部の前・中期遺跡としては多出例に該当する。出土資料の中には、前期前葉に遡る玦状耳飾１点が存在するが、他の多くはⅢ群土器に伴うものと考えられる。

前期終末～中期初頭に属することが確実な製品は、玦状耳飾・「の」字状石製品・玉斧の３種である。これに加えて168が棒状垂飾であるとすれば、「倉輪・松原型装身具セット」を完備する稀な事例となる［川崎1996］。

本遺跡で製作された装身具の実態は定かでない。ただし、形態的に類似した「の」字状石製品が角田山麓に限定される現状や、その素材となりうる研磨礫が１点ながら存在する事実は示唆的である。ヒスイ資料は研磨の度合いが極めて低く、他の未製品とは一線を画しうる。完成品の存在を想定しにくい資料であり、技術的な制約の中での試行品と見るべきであろう。

（4）黒曜石（第53図）

原石１点・石核35点・剥片343点が出土した。これらの分布は調査区の全域に及ぶ。密度の上では西側斜面に中心をもつが、東尾根のテラス遺構（古墳時代前期）にも分布する点が特徴的である。関連して注意されるのは、古墳時代の土器胎土中に黒曜石状のガラス質岩石粒子を含む個体が存在することである（P128参照）。遺跡内に散布する縄文時代の石核・剥片類を胎土混入物として再利用したことが上記のような分布を生じた要因とも考えられる。

角田山麓における黒曜石の利用上限は、現時点で前期終末に求められる。Ⅲ群土器に伴う可能性が高い17点の石鏃から求めた本遺跡での利用率は、50％強と算出される。これを近隣の同時期遺跡と比較した場合、相対的に低い数値に留まっている。

原産地については、11点を対象とした分析結果が示されている［金山ほか1995］。内訳は、長野県星ケ塔産が９点、同県和田峠・山形県月山・新潟県板山産が各１点である。同時に分析された重稲場・大沢・豊原（前期終末～中期前葉）の３遺跡でも星ケ塔産石材の多用が確認されており、当地においては一般的な在り方をなしている。

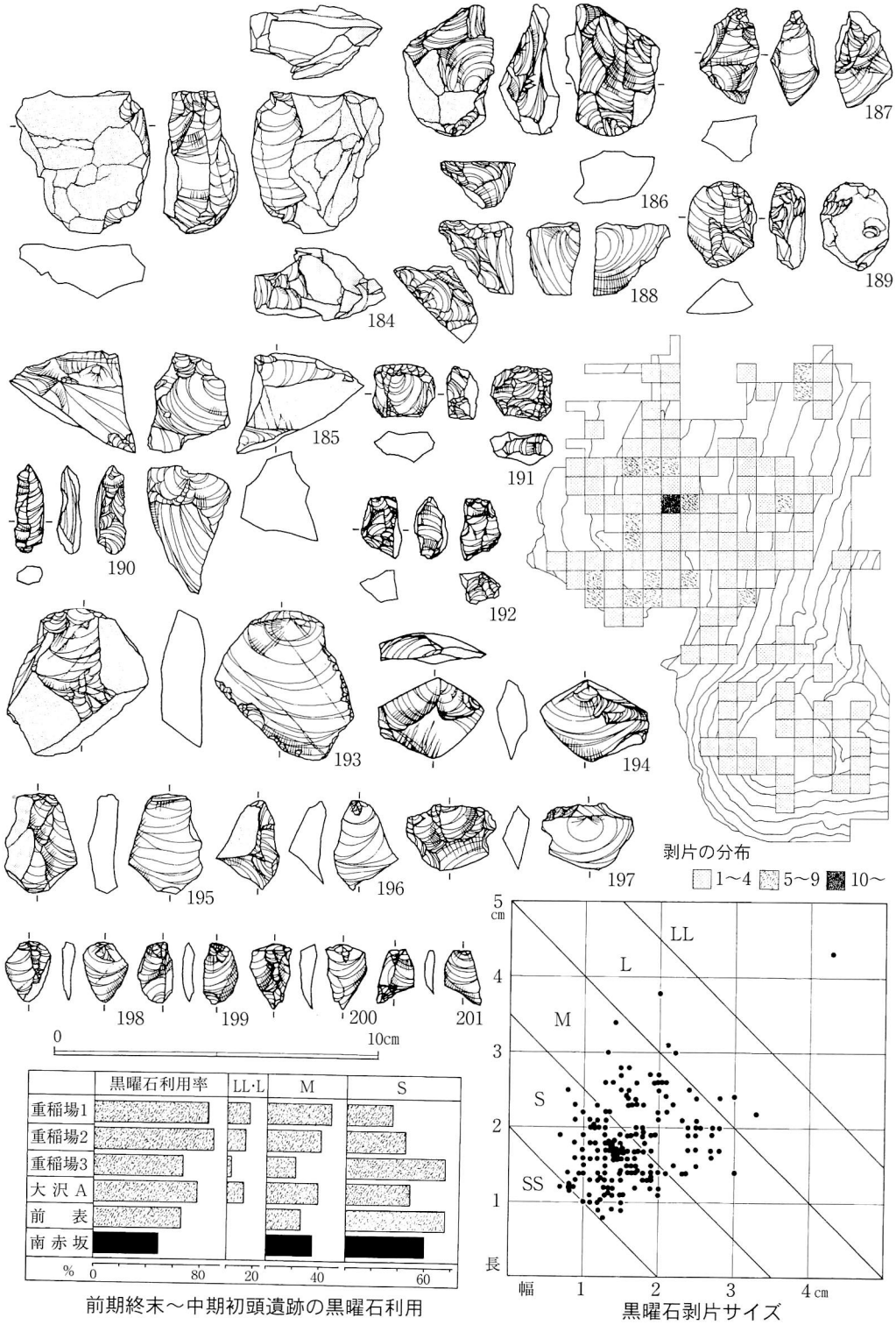
184は剥片剥離初期の石核である。最大長4.6cmを測り、搬入時の原石サイズがうかがえる資料である。剥離は二方向からなされており、作業の進行につれて頻繁な打面転移が行なわれる（185～188）。189～192は石核の最終的な姿で、両極打法が用いられる。

第53図右下は、完形剥片181点の長・幅分布を示したもので、剥片サイズを機械的に５区分した。193～195はLL～L、196・197はM、108～201はＳサイズにあたる。石鏃素材に適した大きさは、ＬおよびMの大型剥片である。サイズの構成と黒曜石利用率の間にはある程度の相関が見られ、本遺跡ではサイズにおいても下位に位置することが特徴である。

（5）搬入礫

発掘区から出土した搬入礫の中で、遠隔地産石材と断定できる資料は花崗岩である。その量は、自然礫で1581ｇ（４点）、礫石器（礫石錘と磨石・敲石類）の素材で737ｇ（４点）を記録する。角田山麓の同時期集落では、新谷遺跡（前期前葉）で多量の花崗岩が持ち込まれており、礫石器に占める割合は礫石錘（総数404点）で５％、磨石・敲石類（総数572点）で4.5％、石皿（総数147点）で９％に達する。一方、豊原遺跡では中期初頭層準から小円礫２点、大沢遺跡Ａ地区（中期前葉主体）では握り拳大の被熱礫１点を確認したにとどまる。本遺跡の在りは、後二者と近似した状況を示しており、石材調達活動の時間的変化がうかがえる。

花崗岩の本来的な搬入目的としては、土器の胎土に混入する鉱物の入手を意図した可能性が高く、礫石器への利用は、これに伴う副次的な行為と考えられる。本遺跡出土の花崗岩には顕著な被熱痕をもつ大型自然礫が存在する。関連要素として理解することもできるであろう。



前期終末～中期初頭遺跡の黒曜石利用

黒曜石剥片サイズ

第53図　石核・剥片（網点：自然面）

石器・土製品観察表－1

NO	種　別	出土区	石　材	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	備　考
1	石　槍	E-3-v①	珪質頁岩	9.3	3.0	1.5	36.7	
2	〃	C-3-y④	頁　岩	8.1	2.3	1.0	20.6	
3	石　鏃	D-4-w	珪質頁岩	3.4	1.8	0.4	1.9	
4	〃	不　明	珪質頁岩	3.2	1.6	0.5	1.4	
5	〃	E-4-r	黒曜石	1.8	1.3＋	0.3	0.4＋	
6	〃	C-4-o③	黒曜石	2.0	1.2	0.3	0.4＋	
7	〃	D-4-i③	流紋岩	2.0＋	1.5	0.4	0.8＋	
8	〃	F-3-j	黒曜石	2.0	1.7	0.5	1.1＋	
9	〃	不　明	黒曜石	2.3	1.8	0.3	0.5	
10	〃	D-4-f②	安山岩	1.6＋	1.4＋	0.3	0.5＋	
11	〃	C-3-x④	黒曜石	1.8	1.5＋	0.4	0.6＋	
12	〃	G-1-v	黒曜石	2.2＋	1.9＋	0.5	1.4＋	
13	〃	D-4-b④	泥　岩	4.7	1.5	0.4	1.2	
14	〃	D-4-b④	珪質流紋	2.9＋	1.7＋	0.3	1.2＋	
15	〃	D-3-l	メノウ	2.9	1.9	0.4	1.8	
16	〃	C-3-g④	黒曜石	3.0	1.7＋	0.3	0.9＋	
17	〃	C-4-i②	珪質流紋岩	2.4	1.6＋	0.4	1.0＋	
18	〃	不　明	黒曜石	2.0	1.6	0.2	0.5＋	
19	〃	C-4-j①	黒曜石	3.4	1.0	0.6	1.4	
20	〃	C-4-j	黒曜石	2.1	1.4	0.4	0.7＋	
21	〃	B-2-t①	流紋岩	2.2	1.7	0.4	1.0＋	
22	〃	D-3-u	鉄石英	2.6	3.4	0.6	3.3	
23	石鏃未製品	E-4-l	流紋岩	3.4	2.0	0.7	4.0	
24	〃	D-3-q④	珪質流紋岩	2.8	1.5	0.6	2.1	
25	石　錐	C-4-h②	黒曜石	1.8	0.7	0.4	0.3	
26	〃	D-3	黒曜石	1.7	0.8	0.5	0.7	
27	〃	E-4-f④	流紋岩	3.2	1.4	0.4	1.5＋	
28	楔形石器	E-3-g②	黒曜石	1.5	1.1	0.4	0.5	
29	〃	C-4-t④	黒曜石	1.9	1.2	0.5	1.4	
30	〃	D～E-3	黒曜石	1.6	1.3	0.2	0.4	
31	〃	C-4-l	黒曜石	1.8	1.7	0.4	1.4	
32	〃	F-2-k	黒曜石	2.0	1.6	0.3	1.1	
33	〃	E-4-n	チャート	2.2	2.3	0.5	3.4	
34	石　匙	D-4-y③	珪質頁岩	5.6	2.6	0.5	9.3	
35	〃	D-4-e②	凝灰岩	7.1	2.6	0.9	12.8	
36	〃	D-3-j	安山岩	5.2	4.3	1.2	23.4	
37	〃	F-2-c③	珪質頁岩	3.9	5.1	0.9	15.8	
38	〃	D-5-e	黒曜石	2.6	4.3	0.7	9.2	
39	〃	E-4-k②	鉄石英	2.3	2.2	0.3	1.3	
40	スクレイパー	D-4-b	頁　岩	3.1	2.3	0.8	7.7＋	
41	〃	D-3-e④	黒曜石	5.7	4.8	1.3	23.2	
42	〃	C-4-o④	頁　岩	4.9	3.1	1.1	17.4	
43	〃	F-2-h	黒曜石	3.4	2.7	1.2	9.2	
44	礫石錘	E-3-r②	安山岩	13.7	10.9	6.4	1228.3	サイズA、抉部加工Ⅰa
45	〃	D-4-q②	安山岩	12.3	10.4	3.4	690.3	B　Ⅰa
46	〃	E-4-p	安山岩	14.4	11.9	3.3	1003.3	A　Ⅰa
47	〃	F-3-u③	安山岩	11.8	8.8	4.7	824.5	B　Ⅰa
48	〃　＋磨石・敲石類Ⅳ類	E-4-l③	流紋岩	9.9	11.9	4.6	649.3	B　Ⅰb
49	〃	E-3-p②	花崗岩	11.4	10.3	3.3	663.3	B　Ⅰa
50	〃　＋磨石・敲石類Ⅱ類	D-2-p	安山岩	12.8	7.9	3.0	548.6	C1　Ⅰa
51	〃　＋磨石・敲石類Ⅳ類	E-2-v②	安山岩	9.5	10.0	4.5	544.2	〃　Ⅰa
52	〃	E-2-t③	凝灰岩	10.1	10.3	3.5	461.1	〃　Ⅲ
53	〃	E-3-p③	安山岩	12.3	9.1	3.0	562.5	〃　Ⅰa
54	〃	D-3-q④	安山岩	10.5	9.8	3.4	543.1	〃　Ⅰa
55	〃	C-4-t①	安山岩	11.3	9.2	3.2	579.3	〃　Ⅰa
56	〃	E-3-u②	流紋岩	10.1	8.5	3.4	457.6	〃　Ⅰa
57	〃	E-3-p②	安山岩	10.3	8.1	2.8	405.5	〃　Ⅰa
58	〃	E-3-y②	安山岩	10.5	10.4	3.5	570.3	〃　Ⅰb
59	〃	E-3-n①	安山岩	8.6	8.6	3.7	453.0	〃　Ⅰb
60	〃	E-3-p④	安山岩	12.7	9.5	1.9	363.8	C3　Ⅰb
61	〃	E-5-v①	礫　岩	13.0	9.1	2.3	422.3	〃　Ⅰa
62	〃	E-3-t①	安山岩	12.3	9.0	2.3	380.0	〃　Ⅱb
63	〃　＋磨石・敲石類Ⅱ類	G-2-t③	花崗岩	7.7	8.5	3.5	359.0	C2　Ⅰa
64	〃	F-3-t①	安山岩	8.6	8.4	2.7	280.7	〃　Ⅱb
65	〃	D-2-s④	安山岩	9.2	7.5	3.9	321.3	〃　Ⅰc
66	〃	D-3-u	安山岩	9.3	8.4	2.9	340.0	〃　Ⅰc
67	〃	D-3-y④	安山岩	10.5	8.9	3.1	391.9	〃　Ⅰb

石器・土製品観察表－2

NO	種　別	出土区	石　材	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	備　考
68	礫石錘	不明	安山岩	9.4	8.5	2.6	360.6	サイズC2、抉部加工Ⅰa
69	〃	E-4-f①	安山岩	9.1	7.2	2.7	285.1	〃　Ⅰb
70	〃	D-3-u	安山岩	8.6	9.0	2.2	247.1	〃　Ⅰb
71	〃	E-3-y④	流紋岩	9.9	8.7	3.0	370.3	〃　Ⅲ
72	〃	D-4-e④	流紋岩	7.0	7.2	2.7	183.3	D　Ⅰb
73	〃　＋磨石・敲石類Ⅶ類	C-2-l②	玢　岩	8.6	6.4	2.1	188.3	〃　Ⅰa
74	〃	E-4-v①	安山岩	8.2	6.3	2.4	179.7	〃　Ⅱb
75	〃	D-3-e①	流紋岩	7.5	6.8	2.3	159.6	〃　片側無加工
76	〃	E-4-b③	安山岩	8.5	7.4	2.1	183.2	〃　抉部加工Ⅱb
77	〃	F-2-j②	安山岩	7.5	6.9	2.3	181.2	〃　Ⅰa
78	〃	E-3-p③	砂　岩	6.3	5.6	2.7	125.4	〃　Ⅰa
79	〃	D-2-w①	流紋岩	5.8	4.5	1.3	57.6	〃　Ⅰa
80	〃	D-2-w④	安山岩	6.4	5.7	2.1	112.2	〃　Ⅰa
81	〃	D-2-s①	流紋岩	7.1	5.9	2.1	129.6	〃　Ⅰa
82	〃	D-3-g②	粘板岩	6.8	3.5	1.4	54.3	〃　Ⅰc
83	〃	C-2-o④	粗粒玄武岩	0.5	9.0	3.9	613.3	B　Ⅰa
84	礫石錘製作剥片	D-2-s③	粗粒玄武岩	2.9	2.1	0.6	3.3	83と接合
85	〃　〃	B-2-s②	安山岩	1.9	2.1	0.6	1.9	
86	〃　〃	E-4-k③	安山岩	2.9	2.5	1.0	4.9	
87	〃　〃	B-2-t④	安山岩	3.0	4.2	1.0	12.0	
88	〃　〃	D-3-t①	安山岩	3.6	3.2	0.8	8.9	
89	〃　〃	C-2-f③	安山岩	2.8	4.2	0.9	11.3	
90	〃　〃	E-3-u④	安山岩	2.6	3.3	0.9	7.0	
91	〃　〃	B-2-t③	安山岩	2.3	2.8	0.6	3.7	
92	〃　〃	B-2-t①	安山岩	2.1	3.0	0.5	2.3	
93	〃　〃	B-2-s②	安山岩	2.2	2.5	0.6	2.9	
94	磨石・敲石類Ⅰ類	E-4-u①	安山岩	5.1	10.1	6.1	455.8	
95	〃　Ⅰ類	F-3-c④	泥　岩	6.6	4.9	4.0	186.0	
96	〃　Ⅰ類	D-4-j①	安山岩	7.9	7.9	3.9	361.2	
97	〃　Ⅰ類	F-3-c②	安山岩	7.0	6.0	5.8	337.6	
98	〃　Ⅰ類	G-1-u	安山岩	0.1	7.6	5.1	536.3	
99	〃　Ⅱ類	E-3-q②	安山岩	0.8	7.4	4.5	594.5	
100	〃　Ⅱ類	E-3-y①	流紋岩	1.0	10.2	3.9	656.6	
101	〃　Ⅱ類	E-3-s②	安山岩	1.2	9.3	4.3	685.5	
102	〃　Ⅵ類	D-4-v	凝灰岩	7.5	2.1	1.7	41.0	
103	〃　Ⅶ類	C-2-n	泥　岩	8.8	2.6	2.0	60.4	
104	〃　Ⅴ類	C-4-d③	滑石片岩	5.7	5.3	2.0	64.3	
105	〃　Ⅲ類	C-2-pほか	細粒砂岩	7.6	9.4	4.4	1032.0	
106	〃　Ⅳ類	D-5-j	安山岩	9.6	7.7	6.2	681.1	
107	〃　Ⅲ類	D～E-4	安山岩	9.5	6.7	6.0	516.3	被　熱
108	〃　Ⅷ類	D-3-w	安山岩	9.0	6.1	3.9	309.1	背面凹2
109	〃　Ⅴ類＋砥石	D-4-h	安山岩	0.9＋	8.2	5.6＋	493.4	被　熱
110	〃　Ⅴ類	D-4-g	流紋岩	0.0	7.8	4.9	526.5	
111	〃　Ⅲ類	C-2-m③	安山岩	8.1	7.2	5.7	470.2	
112	〃　Ⅷ類	D-3-r④	安山岩	1.9	7.5	5.4	524.7	
113	〃　Ⅷ類	C-4-i③	安山岩	1.8	6.6	3.4	319.0	
114	石　皿	F-2-eほか	安山岩	3.6＋	10.0	5.0	1079.6＋	
115	〃	E-4-a③	安山岩	8.0＋	10.5	4.8	434.6＋	
116	〃	D-3-u	安山岩	2.7	22.2	6.2	4530.0	
117	磨製石斧	G-3-l④	細粒砂岩	2.0＋	5.4＋	3.1	284.9＋	
118	〃	C-5-e③	細粒砂岩	4.8＋	3.3＋	2.5＋	61.3＋	
119	〃	D-4-j②	蛇紋岩	6.7＋	4.4＋	2.3	86.1＋	
120	〃　＋敲石	D-4-m	流紋岩	8.3＋	5.1＋	2.8	156.3	欠損面敲打
121	〃	E-4	蛇紋岩	4.1	3.3＋	1.9	38.2＋	
122	〃	C-4-c	蛇紋岩	8.3	5.0	2.3	166.3＋	
123	〃	B-2-t④	細粒砂岩	8.5	4.2	2.3	137.6	
124	〃	D-2-o④	安山岩	3.7＋	5.2＋	1.9	66.1＋	
125	〃	D-2-t③	角閃石	3.7＋	4.2	1.9＋	32.3	
126	〃	E-4-f②	流紋岩	9.8＋	5.1	2.6	156.6＋	
127	〃	E-3-j	流紋岩	5.3＋	4.4	2.2＋	59.8＋	
128	〃	D-3-c④	蛇紋岩	6.1	4.0	1.8	70.1＋	
129	〃	E-3-t③	蛇紋岩	7.1＋	4.7	2.6	135.6＋	
130	〃	E-3-j	蛇紋岩	3.2＋	3.5	1.5＋	20.0＋	
131	〃	D-2-u	蛇紋岩	8.8	4.2	1.5	94.3	
132	〃	C-4-i②	蛇紋岩	5.9	2.4	0.9	23.5	
133	〃	D-3-x②	蛇紋岩	4.0＋	2.3	1.0	18.6＋	
134	〃	D-4-a③	蛇紋岩	4.5＋	2.0	0.8	9.8＋	

石器・土製品観察表－3

NO	種　別	出土区	石　材	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	備　考
135	磨製石斧	E-3-r①	蛇紋岩	4.7	2.3	1.0	20.4	
136	〃	D-3-j②	蛇紋岩	4.8＋	3.1	1.1＋	19.7＋	
137	磨製石斧製作工程資料	E-3-r②	蛇紋岩	0.4	5.2	2.5	213.5	
138	〃	D-2-w②	蛇紋岩	7.5	4.3	2.8	147.4	
139	〃	C-2-t②	蛇紋岩	8.7	4.5	2.3	118.8	
140	〃	D-3-k②	蛇紋岩	7.9	4.6	2.2	138.9	
141	〃	C-2-o	蛇紋岩	6.1	3.4	1.8	44.2	
142	〃	C-3-t	蛇紋岩	5.0	3.9	3.5	89.3	
143	〃	F-3-u①	蛇紋岩	8.3	6.6	2.0	111.5	
144	〃	C-3-i	蛇紋岩	7.1	4.7	1.6	74.7	
145	〃	D-2-u③	安山岩	11.9	5.7	3.1	271.3	
146	〃	D-3-t①	流紋岩	10.1	8.3	2.9	272.0	
147	〃	D-3-c①	角閃石	7.2	3.9	2.0	82.5	
148	〃	D-5-a	流紋岩	9.7	6.6	1.9	212.7	
149	〃	D-4-m③	蛇紋岩	8.9	4.0	1.7	104.5	
150	〃	D-2-y③	蛇紋岩	9.1	5.4	2.9	157.8	
151	〃	E-5-a③	蛇紋岩	5.9	3.6	1.0	33.4	
152	〃	C-2-lほか	蛇紋岩	8.3	4.6	1.1	72.2	
153	砥　石	E-4-a④	凝灰岩	18.9	7.7	5.0	856.9	
154	〃	E-4-u③	粗粒砂岩	4.6＋	4.0	1.4	25.3＋	
155	〃	E-3-u④	粗粒砂岩	5.1＋	3.2＋	2.0	45.9＋	
156	〃	E-3-d②	粗粒砂岩	8.1＋	5.1＋	1.3	61.4＋	
157	〃	D-4-e③	粗粒砂岩	7.2＋	5.3＋	1.9	64.9＋	
158	〃	E-4-a③	粗粒砂岩	13.0＋	8.7＋	3.3	386.3＋	
159	〃	C-4-d④	粗粒砂岩	10.0＋	6.5＋	2.9	141.1＋	
160	〃	D-3-v③	粗粒砂岩	8.0＋	4.2＋	3.1	96.8＋	
161	〃	D-4-j②	細粒砂岩	8.8	7.2	1.3	87.0	
162	玦状耳飾	D-3-t④	滑　石	3.4＋	1.3	0.9	6.6	
163	〃	ピット86	滑　石	2.7	1.0	1.1	4.7＋	
164	土製玦状耳飾	D-4-e②	――	2.3＋	0.9	1.0	1.9＋	
165	円形垂飾	D-2-x①	滑　石	2.4	2.4	0.9	13.5	
166	「の」字状垂飾	天神遺跡	蛇紋岩	4.0	4.5	0.3	7.8＋	
167	〃	C-3-j①	蛇紋岩	3.2	4.1	0.3	4.8	
168	棒状石製品	D-3-v③	蛇紋岩	1.5＋	0.8＋	0.5	0.7＋	
169	玉　斧	E-4-f②	蛇紋岩	1.1＋	1.8＋	0.4	0.7＋	
170	〃	E-4-k④	蛇紋岩	11.4＋	4.0	0.8	68.8＋	
171	装身具製作工程資料	E-2-r①	蛇紋岩	3.7	4.0	0.9	20.6	
172	〃	C-3-j③	蛇紋岩	5.6	5.0	1.6	66.0	
173	〃	C-2-p③	蛇紋岩	3.2	1.7	0.3	2.5	剥片素材
174	〃	D-4-f②	蛇紋岩	3.9	1.4	0.4	3.6	剥片素材
175	〃	E-3-q②	滑　石	3.9	1.6	0.8	8.8	剥片素材
176	〃	D-4-r	蛇紋岩	2.9	1.7	0.5	3.3	
177	〃	D-3-t④	蛇紋岩	4.5	2.7	0.5	9.5	
178	〃	C-4-h④	碧　玉	3.5	2.9	2.2	31.3	
179	〃	C-3-o	蛇紋岩	2.3	1.8	0.4	2.2	
180	〃	C-3-y②	ヒスイ	3.7	2.8	1.8	26.3	
181	〃	C-4-o③	ヒスイ	5.1	2.1	1.7	31.7	
182	〃	C-5-e	ヒスイ	4.0	3.5	2.2	39.4	
183	〃	C-4-o①	ヒスイ	2.2	2.4	0.8	5.5	被　熱
184	石　核	C-4-e	黒曜石	4.3	2.1	4.1	35.0	
185	〃	F-2-m	黒曜石	3.9	2.5	3.1	19.1	
186	〃	E-3-g②	黒曜石	4.0	2.8	1.8	14.6	
187	〃	D-5-a①	黒曜石	2.9	1.4	1.7	5.1	
188	〃	不　明	黒曜石	2.2	2.2	1.6	6.2	
189	〃	D-3-b③	黒曜石	2.7	2.0	1.0	5.8	
190	〃	D-5	黒曜石	2.7	0.9	0.6	1.2	
191	〃	E-4-l	黒曜石	1.6	1.9	0.9	2.9	
192	〃	D-4-i③	黒曜石	1.9	1.2	1.0	1.8	
193	剥　片：サイズLL	E-3-y②	黒曜石	4.6	4.2	1.2	23.4	
194	〃　L	E-2-x	黒曜石	2.5	3.2	0.8	5.6	
195	〃　L	E-3-p③	黒曜石	3.0	2.0	0.8	5.0	
196	〃　M	F-4-w①	黒曜石	2.7	1.9	0.9	2.3	
197	〃　M	B-2-t②	黒曜石	2.0	2.7	0.6	3.1	
198	〃　S	D-4-y②	黒曜石	1.8	1.3	0.4	0.4	
199	〃　S	C-4-h③	黒曜石	1.8	1.1	0.3	0.4	
200	〃　S	D-4-q②	黒曜石	1.9	1.2	0.5	0.9	
201	〃　S	C-3-i②	黒曜石	1.6	1.1	0.2	0.3	

Ⅲ 結 語

縄文時代の南赤坂遺跡は、西側緩斜面の西半と東側尾根の先端部が既に削平をうけていた。今回の発掘調査で対象となった範囲は、遺跡推定面積のほぼ半分にあたる。

遺跡の形成は前期初頭に遡る。関東編年と対比すれば花積下層式期に出現し、二ツ木式期の前半に最初の利用ピークが訪れる。この時期の石器組成は明らかでないが、搬入品の可能性が指摘できる石槍・石匙の存在や玦状耳飾を伴う点から考え、一通りの用具を備えた小規模集落をなしたと考えられる。しかし近隣の布目遺跡に較べ土器量は極めて僅少で、利用季節や目的が限定された一時的な居住地であった可能性が高い。角田山麓では、前期前葉の遺物多出遺跡が各段階１箇所に限定される現象が知られている（第３図左下）。本遺跡の状況は従来の見方と合致するもので、当時の空間利用の在り方を考える上での一資料を提供したと言える。

若干の空白期間をおいた後、前期後葉の諸磯ａ～ｂ式期に至ると本遺跡は再び活動の場として利用される。ただしこの段階の土器量は前期前葉を下回り、組成としても不完全である。土器構成としては、格子目文土器［寺崎1991］やこれとセット関係にある平行沈線文土器に偏在するという特異な内容をもつ。これをいかに解釈するかは今後の課題である。

南赤坂遺跡が最盛期を迎えるのは前期終末～中期初頭である。土器の個体量は530あまりにのぼり、石器群も多彩な器種から構成される。遺跡内では剥片石器類や礫石錘、磨製石斧や装身具の製作が盛んに行なわれている。中でも西頚城産石材を入手しての後二者の製作が特筆できる。とりわけ、全国的にも数少ない「の」字状石製品の出土や、「倉輪・松原型装身具セット」の保有にみられるⅢ群石器の充実は注目に値する。

生活拠点としての性格を物語る上記のような特徴に対し、住居の実態は甚だ不鮮明で、西側斜面から掘立柱建物１棟と柱穴状ピットを見いだしたにとどまった。後者の全体分布は環状ないしは馬蹄形をなしたことも予想され、平地住居や掘立柱建物だけで集落が構成されていた可能性がある。新潟県内の前期終末～中期初頭集落では、住居構造や配列に基づき４類型の存在が指摘されている［石坂1999］。しかし、拠点的な性格をもった集落の中に竪穴住居が欠落するケースは知られておらず、上記のような所見が妥当であるとすれば新たな集落タイプと位置づけられることになる。なお、竪穴住居や炉が確認できなかった点からすれば、季節的な居住地の可能性も考慮の対象となる。ちなみに現時点では、本遺跡の前期終末土器群と同一様相を認める資料を新潟平野周辺で見いだすことはできず、その可能性については否定的である。

本時期土器群における変遷の在り方は既述のとおりである。その中で前期最終末段階での土器出土量の減少化を指摘した。角田山麓の前期終末遺跡では、形成期間が１～２型式に限定される重稲場遺跡群や１期資料の減少を認める豊原遺跡が存在する。こうした流動的な状況は、

この時期の評価につながる重要な特徴となる。

土器群にみられる特定遺跡への偏在や遺跡間変異の大きさも重視されるところである。中でも２期の主体を占めるＡ3類は、本遺跡を除けば微々たる存在にすぎず、極めて特異な資料と位置づけられる。これに似た現象は中期前葉の豊原Ⅵ群３類土器にもみることができ、集落レレベルで具現化した強い集団表象と解釈される［前山1991］。程度の差はあるものの、４期土器群における大沢・南赤坂・豊原の様相差も同様の在り方と言える。こうした現象は、土器だけにとどまらず、黒曜石の利用率に認める大きな格差、中期前葉集落における石鏃・砥石出現率の異なり［前山1996］にも表れている。その要因が何れにあるかは不明であるが、角田山麓縄文時代遺跡群において、この時期にのみ認める注目すべき動きである。

前期終末～中期初頭集落の営みを支えた生業活動の実態については、食料残渣が遺存しておらずＩ群石器からの類推が手がかりとなる。本遺跡におけるＩ群の構成は、礫石錘51％、磨石・敲石類41％、石鏃８％である。前述のとおり、本遺跡の礫石錘は主として漁網錘と考えられるので、眼前の沼地で淡水魚漁に使用されたものであろう。堅果類などの打割・製粉具とみられる磨石・敲石類は、耐久性に優れ、使用時の必要点数も少ない用具である。したがって、実際の貢献度は見かけ以上に高かったはずで、南赤坂では植物採集主、漁撈従の関係にあったと推測される。ただしこれらは利用季節を異にした可能性が高いので、季節ごとの活動内容を考慮に入れた上での検討が必要となる。

近隣の豊原・干納遺跡において食料残渣から推定された生業活動の在り方（第３図）は、所属時期が重なるだけに大いに参考となる。２遺跡の生業暦から読み取ることができる特徴は、食料資源が乏しい夏場を中心に水辺資源の活発利用がなされる点である。南赤坂の石器組成は２遺跡と類似する。利用食料や年間スケジュールの点でもよく似た内容であったと考えられ、日本海が活動圏内に含まれていたことも確実であろう。なお、至近距離に位置する中田割遺跡（中期初頭～後期前葉）では、シジミが出土したとの情報があり、本遺跡においても貝類の採集が行なわれていた可能性がある。

南赤坂が集落としての機能を保つのは中期初頭までである。Ⅲ群土器の４期は、中期初頭の中でも最古段階にあたり、これに後続する型式を全く含まない。したがって、本遺跡の廃絶は４期土器型式の存続期間内に求められることになる。角田山麓において、この時期出現する集落としては、中田割と松郷屋の２遺跡があげられる。ともに台地低域部に立地し、角田山麓の中では奥部に位置する点が特徴である。しかし本遺跡との距離は、前者が300mたらず、後者も１kmを測るにすぎない。仮にこれらが廃絶後の移動先であったとすれば、転居要因を経済的な側面から説明することは困難と言わざるをえない。何れにしても、前期終末～中期初頭社会に備わる流動的な一面をのぞかせるこの時期ならではの現象と考えたい。

参考文献

石坂圭介　1999　「集落」
『新潟県の考古学』 高志書院

今村啓爾　1976　縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較」
『物質文化』 27 物質文化研究会

今村啓爾　1974　「登計原遺跡の縄文前期末の土器と十三菩提式土器細分の試み」
『登計原遺跡』　登計原遺跡調査会

小野　昭・前山精明ほか　1988　「巻町豊原遺跡の調査」
『巻町史研究』Ⅳ　巻町

金山喜明・鈴木正男・前山精明　1995　「縄文時代の日本海沿岸部における黒曜石の交流」
『日本考古学協会第61回総会 研究発表要旨』 日本考古学協会

川崎　保　1996　「『の』字状石製品と倉輪・松原型装身具セットについて」
『長野県埋蔵文化財センター10周年記念紀要』 長野県埋蔵文化財センター

品田高志　1996　「季節と縄文集落－柏崎平野における縄文遺跡群の検討から－」
『新潟考古学談話会会報』第16号　新潟考古学談話会

田中耕作・鈴木　暁　2000　「新発田市二夕子沢Ａ遺跡の調査概要」
『新潟県考古学会第12回大会 研究発表会発表要旨』 新潟県考古学会

中野　純　1997　「刈羽式土器の再検討－型式間交渉の分析による試論－」
『新潟考古学談話会会報』第17号　新潟考古学談話会

寺崎裕助　1991　「縄文時代前期後半の格子目文土器について」
『新潟考古学談話会会報』第８号　新潟考古学談話会

長野県立歴史館　2001　『阿久遺跡と縄文人の世界』

秦　昭繁　1991　「特殊な剥離技術をもつ東日本の石匙」
『考古学雑誌』第76巻　第４号　日本考古学会

平吹　靖　2000　「縄文時代前期における磨製石斧製作について」
『新潟考古学談話会会報』第22号　新潟考古学談話会

福島県教育委員会ほか　1991　『法正尻遺跡』

前山精明　1991　「巻町豊原遺跡Ⅵ群３類土器考」
『新潟考古』第２号　新潟県考古学会

前山精明　「縄文時代」『巻町史 通史編上』　巻町

麻柄一志　1992　「夏の家と冬の家－縄文時代の季節的住み替えの可能性－」
『考古学と生活文化』　同志社大学考古学シリーズ刊行会

巻　町　1995　『巻町史　資料編１　考古』

分水町教育委員会　1997　『有馬崎遺跡』

渡辺　誠　2000　「礫石錘」
『星の糞遺跡発掘調査報告書』　御前崎町教育委員会

古墳時代

西側小テラスにおける続縄文土器と土師器の出土状態
（第77図110・第93図31）

古墳時代の概要

● 形成時期	古墳時代前期を中心とする
	（新潟シンポ編年８期・９期主体）
● 遺　　構	竪穴住居址：２軒（９期）
	テラス遺構：８期主体の特殊施設
● 土 師 器	遺構単位で組成把握
	西側小テラス・上段テラス下土坑群：８期
	１号住居址・４号住居址：９期
● 北方系土器	続縄文土器・折衷土器など
	（テラス遺構・１号住居址で８期～９期の土師器が共伴）
● 管　　玉	製品２点・製作工程資料多数
	（上段テラス下土坑群・下段テラス主体）
● 打製石器	８期～９期に属するスクレイパーなど
	（下段テラス・１号住居址主体）
● 生業関連資料	炭化物：クルミ・ヒシ・モモ
	籾圧痕土器
● 遺跡の性格	形成期間が限定された小規模集落
	北方民との直接接触を示す特殊な遺跡

北方系土器（右は推定復元）

Ⅰ　遺　構

西側斜面から竪穴住居址２・小ピット33・畝状遺構１、東側尾根からテラス遺構・土坑群・木炭集中域を確認した。小ピットの一部で古代に下降するものが含まれる可能性があるほかは古墳時代前期を中心とする遺構と考えられる。

１　西側緩斜面の遺構

A　１号住居址（第54図・55図）

緩斜面東部の11m～10.5m域に位置する。傾斜地に構築されるため、低域南西部の在り方に不明瞭な部分を認めるが、これを除けば住居構造が把握できる良好な遺構である。南北ラインでみた土層堆積は、Ⅰ層が厚く全体を覆い、Ⅱ層は北壁へ向かうにつれて層厚を増していく。

床面の掘込深度は、高域部で50cm近くにおよぶ。平面プランは方形で、南北5.6m・東西5.0mの規模をもつ。壁に接して深さ５～10cmの周溝が全域をめぐり、床面上には白色粘土が５cm程度の厚さをもって全面に貼られていた。

住居址内には中央に最大幅24cmの地床炉を設け、その四囲に一辺2.2～2.0m間隔で柱穴が配される。柱穴の掘込幅は最大30cm、深度は50cm前後を測る。付帯施設としては、最大幅1.5m・深さ60cmの円錐形土坑、安山岩の円礫を使用した重さ4.45kgの固定砥石（第55図上）、40cm×30cm範囲に「コ」の字状に分布する木炭集中域が確認された。

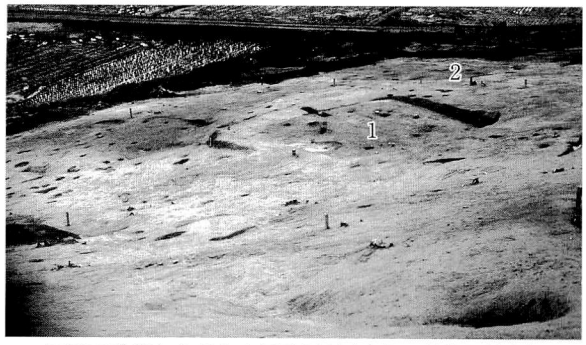
このうち土坑・地床炉・固定砥石・木炭集中域が中央付近の北西・南東ラインでほぼ一直線に並んでおり、これによって２つの空間に分けることが可能である。床面付近出土の完形もしくは準完形土器が東・西の２コーナーに偏る点も関連した特徴と言える。

B　４号住居址（第56図上）

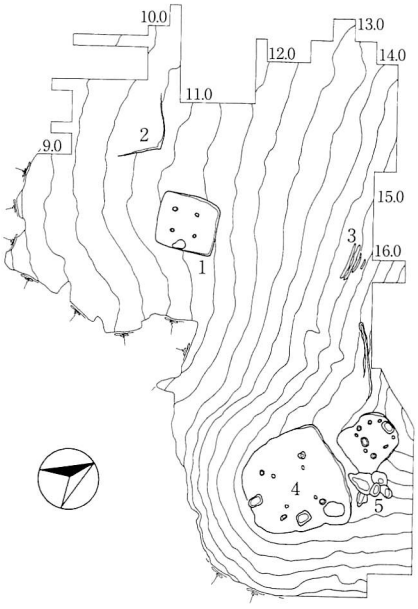
１号住居の西3.8mに位置する。保存状態は良好でなく、周溝を伴う北壁・東壁と複数の柱穴状ピットが遺存するのみである。炉址は確認できなかった。平面プランは方形をなすが、北西・南東コーナーが残っておらず、北面で5.1m以上、東面で5.4m以上の規模がうかがえる程度である。壁高は最大24cm、周溝深度は北面で８cm・東面で５cmを測る。本住居の主柱穴と考えられるのは、ピット２・３・９・10である。いずれも壁ぎわに位置し、２軒分が重複する可能性が高い。これに対応する南部の柱穴は明確でない。

C　畝状遺構（第56図下）

西側斜面高域の斜度20％前後の傾斜地に位置する。幅10cm～20cm・深さ8cm～20cmの溝４本が20cm～40cm間隔で等高線に沿って掘り込まれるものである。掘込長は低域ほど長く、3.6m～１mを測る。形状の類似性から畝状遺構と呼称したが、具体的な性格は明らかでなく、所属時期の詳細も不明である。



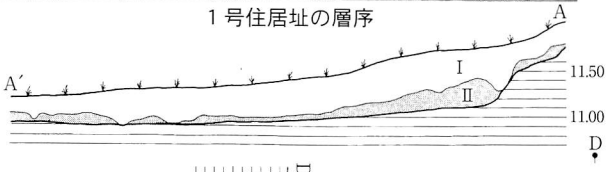
テラス遺構から見た１号住居址(1)と４号住居址(2)



古墳時代の遺構分布

1　１号住居址
2　４号住居址
3　畝状遺構
4　テラス遺構
5　上段テラス下土坑群

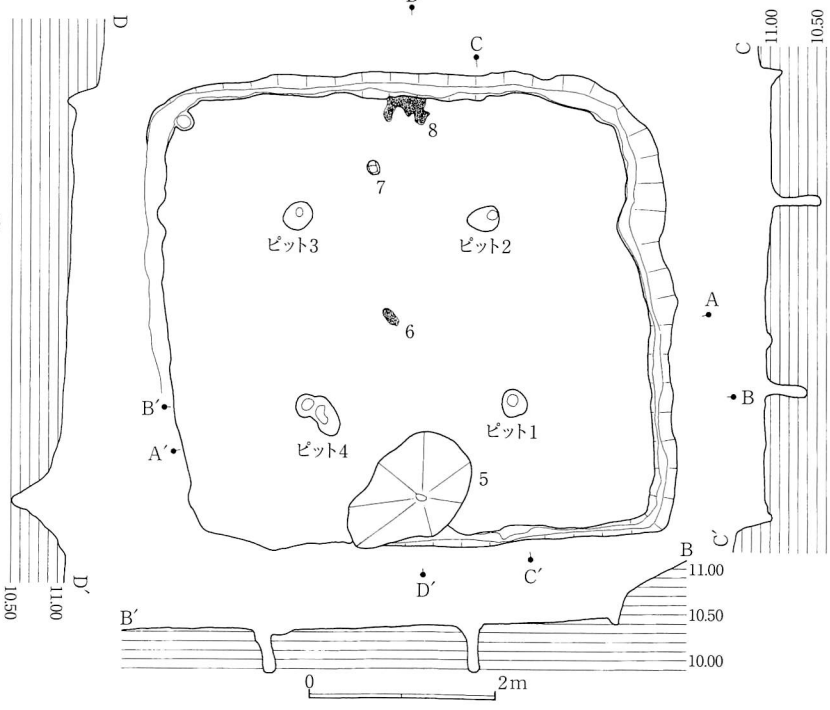
１号住居址の層序



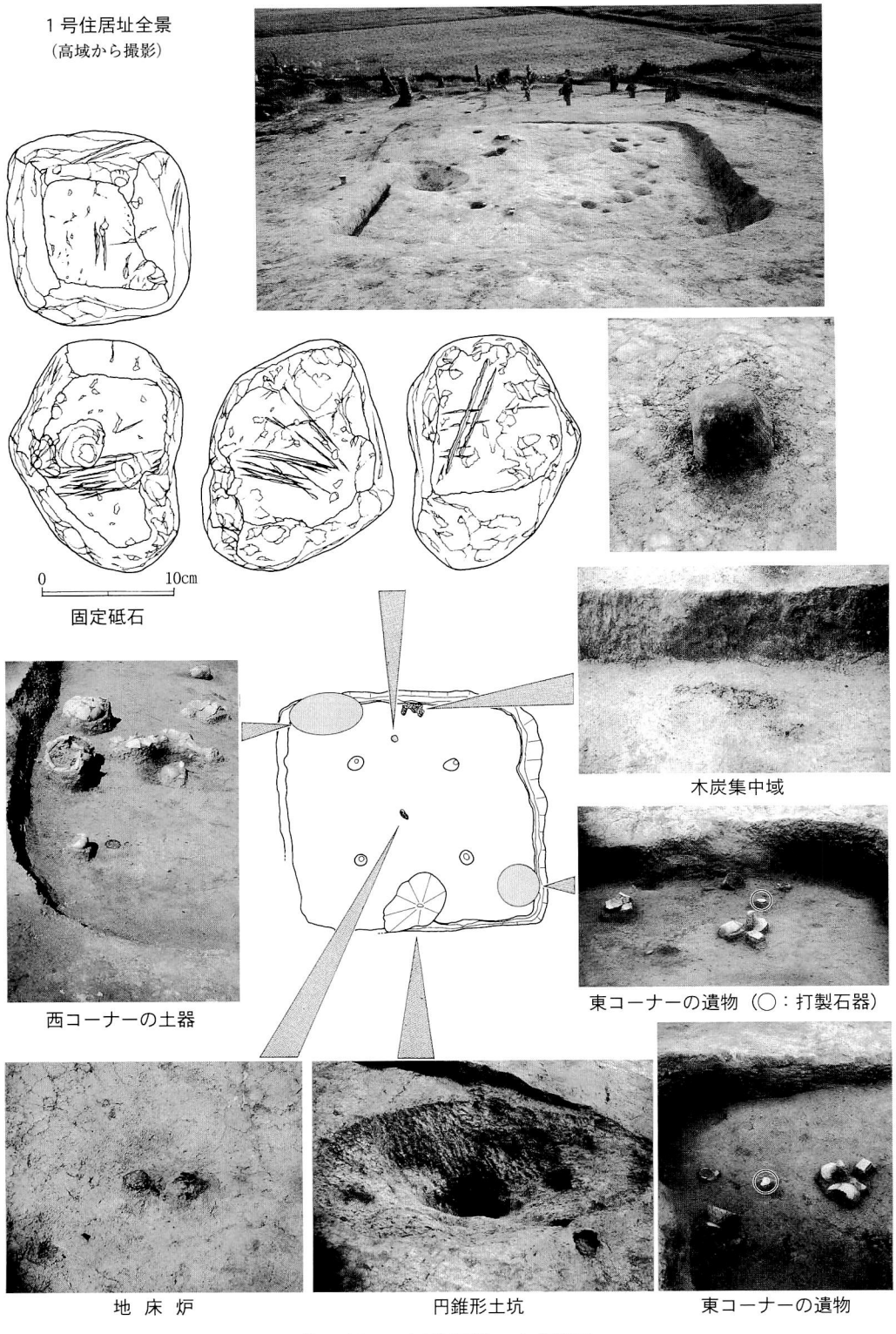
１号住居址
平面・断面図

柱穴（最小幅・深度）
ピット1：27cm・52cm
ピット2：26cm・46cm
ピット3：27cm・40cm
ピット4：24cm・46cm

内部施設
5　円錐形土坑
6　地 床 炉
7　固定砥石
8　木炭集中域



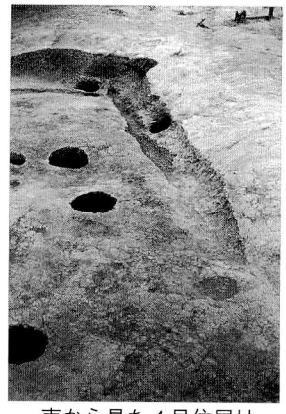
第54図　１号住居址の層序と平面・断面図



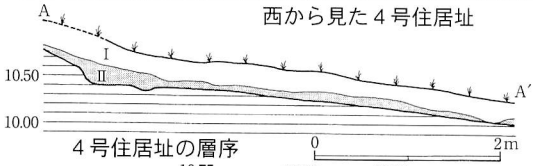
第55図　1号住居址の内部構造

西から見た４号住居址

北から見た４号住居址



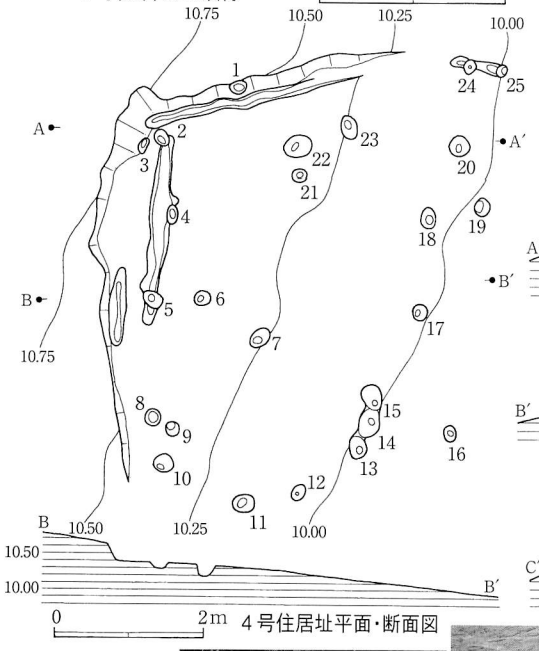
南から見た４号住居址



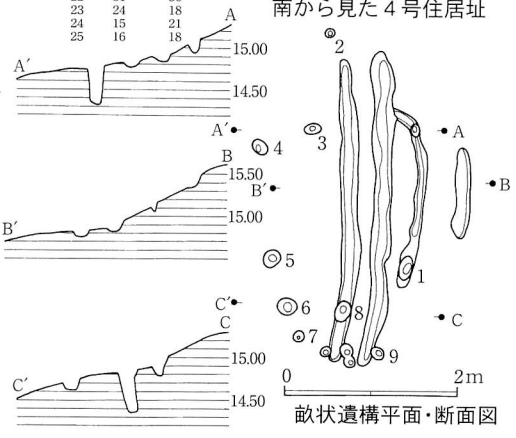
４号住居址の層序

4号住居址周辺ピット

No.	最小幅	深度
1	17cm	28cm
2	17	62
3	20	85
4	18	23
5	24	10
6	24	18
7	28	81
8	23	21
9	18	48
10	25	85
11	27	69
12	21	30
13	22	62
14	30	46
15	29	41
16	22	30
17	21	19
18	26	23
19	24	34
20	26	36
21	27	67
22	31	50
23	24	18
24	15	21
25	16	18



４号住居址平面・断面図



畝状遺構平面・断面図

畝状遺構周辺ピット
（深度10cm以上）

No.	最小幅	深度
1	15cm	46cm
2	12	24
3	16	44
4	18	16
5	21	14
6	19	13
7	12	33
8	17	50
9	12	16

北から見た畝状遺構

高域から見た畝状遺構

第56図　４号住居址と畝状遺構

2　東側尾根の遺構

（1）テラス遺構

東側尾根の17m～15m域を削平し、計３面の平坦地を造成した遺構である。西側の住居ゾーンとの比高は５m前後を測る。三方の眺望が良好であるが、反面遮蔽物を欠くところから強風下に置かれる場合が多く、季節風の直接的な影響を受けやすい立地でもある。

A　下段テラス（第57図～63図）

南北8.8m・東西9.2mを測る。全体面積70㎡あまりを有する最大規模のテラスである。尾根の高域側が直線的に削平されるため、平面形は半楕円を呈する。上段テラスとの比高は80cm程度を有し、北側ライン～北西コーナーには竪穴住居の壁に類した削平面がめぐる。

東西・南北ラインの層序を第59図に示す。上記の環境条件に由来してテラス面の堆積土は総じて薄く、基盤（Ⅳ層）までの層厚は30～40cmを認めるのみである。確認層位は、Ⅰ層：暗褐色腐植土、Ⅱ層：暗黄褐色土、Ⅲ層：赤褐色粘質土、Ⅳa層：灰褐色粘土、Ⅳb層：灰褐色砂層で、Ⅰ層・Ⅱ層が古墳時代・Ⅲ層が縄文時代の遺物包含層にあたる。Ⅲ層の堆積は、テラス造成時の削平を免れた縁辺斜面に限定される。Ⅳa・Ⅳb層は分布域を異にしており、後述の上段テラス構築面と下段テラスの東～南斜面に後者の堆積を認める。

本テラスの付属遺構としては、中央に４本柱からなる大小２つの建物プラン、その周囲に焼土坑１基と土坑３基が確認された。

建物跡（第61図）　大型プランはほぼ正方形を呈し、南北4.7m～4.6m・東西4.1m～4.0mを測る。柱穴規模は東西で明確な異なりがあり、北西・南西は66cm～65cm、北東・南東は100cm～98cmの深度をもつ。本地区が置かれる環境条件に関連した配慮であろう。内部の小型プランは、東西2.8m～3.0m、南北3.0m～3.2m規模。平面形は不整方形をなし、構築軸にも幾分ズレがある。掘込み深度は、42cm～48cmと均一である。両者の先後関係は明らかでない。

土坑（第62図）　掘立柱建物の北東コーナーから南側ラインにかけてのテラス縁辺に分布する。平面形は楕円や不整長方形を呈し、主軸は何れも南北方向にある。最大幅は2.1m～1.3mを測るが、最大深度は26cm～22cmにとどまる。共伴遺物としては、４号上面から口縁部を欠く小型壷（第79図85）、３号覆土から土器片・管玉製作剥片・微細炭化物片が確認された。なお、４号底面に存在する小ピットについては、本土坑に伴うか否か不明である。以上の３基は、平面形の上で墓壙に近似するものの、掘込深度の点でそれとは見なしがたく、異なる性格を考えるべきであろう。

焼土坑１（第62図）　基盤層への掘込深度10cmたらずの皿状の土坑内に木炭片が充満するものである。最大長60cmで、平面形は不整円をなす。掘立柱建物北側ラインの中央から北１mに位置しており、後述の上段テラス中心軸の延長部付近にあたる点が留意される。

B　上段テラス（第60図）

下段テラスの北１mあまりに位置する。テラスの形状は馬蹄形を呈し、幅4.7m・奥行5.2mを測る。下段テラスとは主軸が若干異なるが、一端が直線をなして対峙する点で密接な関係にあることがうかがえる。本テラスは、Ⅱ層によって完全に埋積化されていた。

尾根の地形に起因し、壁面の形状には著しい差がある。高域寄りの奥壁では、壁高65cmに達しオーバーハングするのに対し、低域に向かうにつれて比高を減じ、奥壁から3.8m以南で平坦地化する。テラス内には２つの楕円形土坑が掘り込まれており、これをとり囲むように柱穴が規則性をもって分布していた。古墳時代の遺物は、覆土中からわずかな土師器片が出土したにとどまる。

土坑　規模に若干の異なりはあるが、ともに45cmほどの深さをもつ。埋積状態も類似しており、下部に木炭を多量に含む軟質土、上部に粘性に富んだⅡ層が堆積する。前者においては焼土粒子の含有も僅かながら確認された。

本土坑については、形状や埋積状況からみて墓の可能性が高いため、最下部採取土壌の化学分析と脂肪酸分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。その結果、リン酸成分に著しい差は認められないものの、動物由来のステロールやアラキジン酸（C20）、ベヘン酸（C22）、リグノセリン酸（C24）などの脂肪酸が検出され（第64図）、ともに遺体埋葬施設として利用されていた可能性が示された。

建物跡　奥壁直下から２号土坑南に接する間に東西５対の柱穴が概ね整然とした配列で確認された。南北長は3.5m、東西の柱穴間隔は奥部で1.45m・前面で3.3mを測る。

柱穴列の内部には、東側ラインに最大10cmの小段が存在するほかは、何らの施設も確認できなかった。

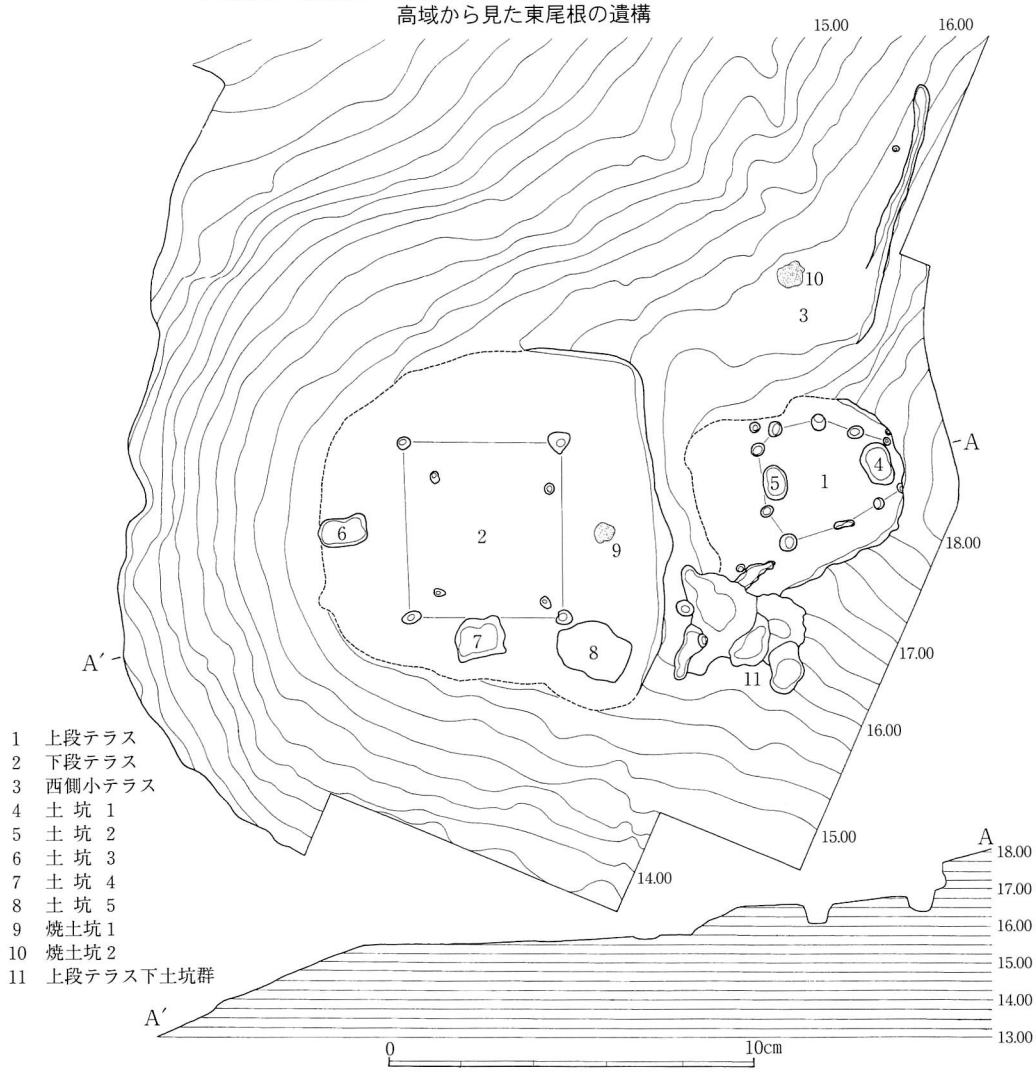
C　西側小テラス（第63図）

上段テラスの西１mあまりに位置する不整形なテラスである。構築レベルは16mで、上段テラスよりは50cm下位、下段テラスよりは60cm上位にあたる。東部の範囲が不明瞭であるが、おおよその規模は、東西８m・南北３m前後である。

本テラスの北側ラインは直線をなし、下段テラスと同様に竪穴住居壁面に類した削平面をもつ。壁高は最大20cm程度。これに沿って幅20cm～40cm・深さ10cmの溝が東西５mにわたり掘り込まれていた。溝内には多量の木炭が含まれており、東端から1.6mの間に横転状態の甕２個体と倒立状態の高杯・甕１個体ずつが出土した。

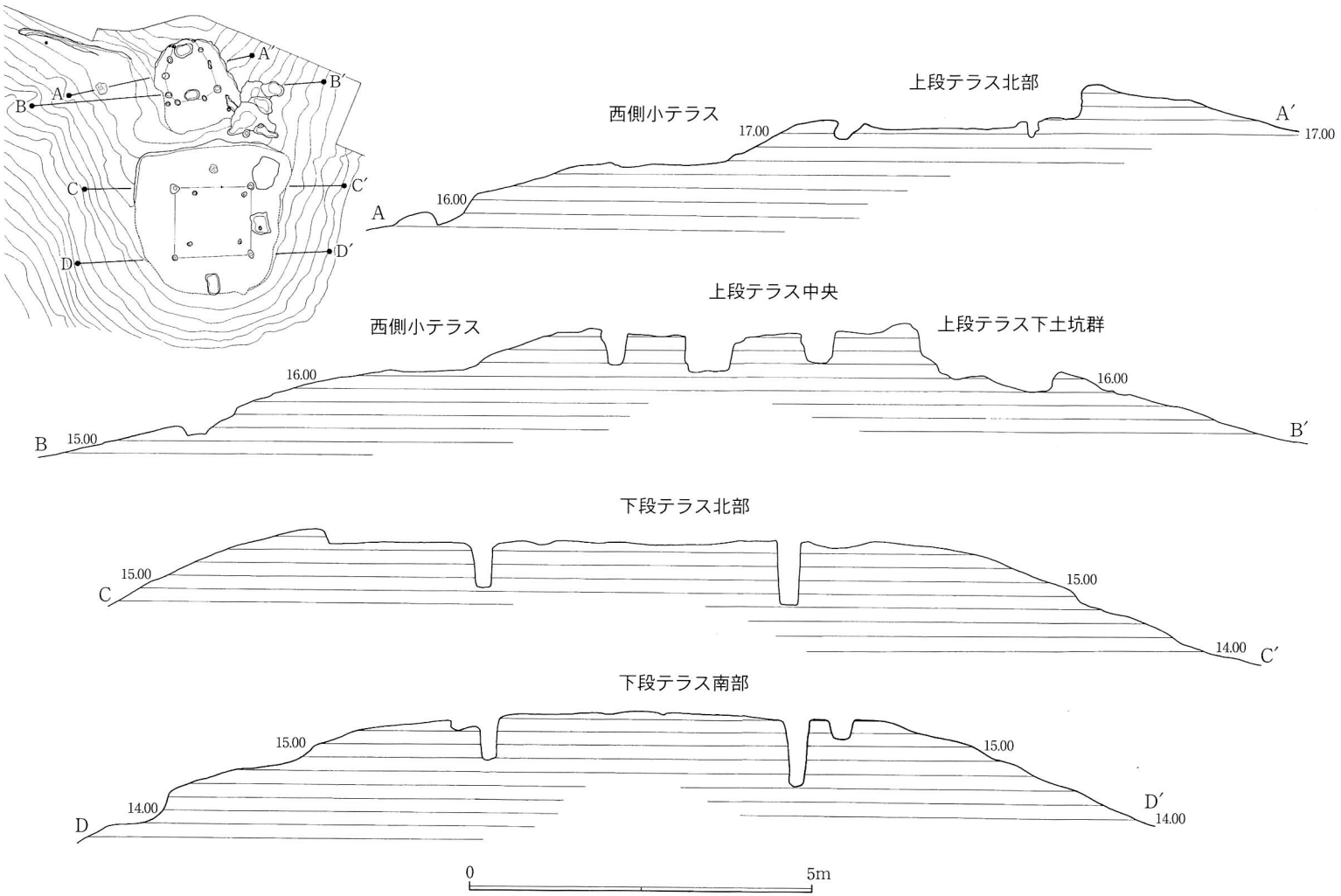
焼土坑２　テラス中ほどの縁辺部に位置する。平面形は円をなし、最大幅76cm・深さ15cmを測る。内部には木炭が充満すると共に、西側を除く外周が強い火熱によって２cm程度の厚さで著しく赤化していた。

高域から見た東尾根の遺構

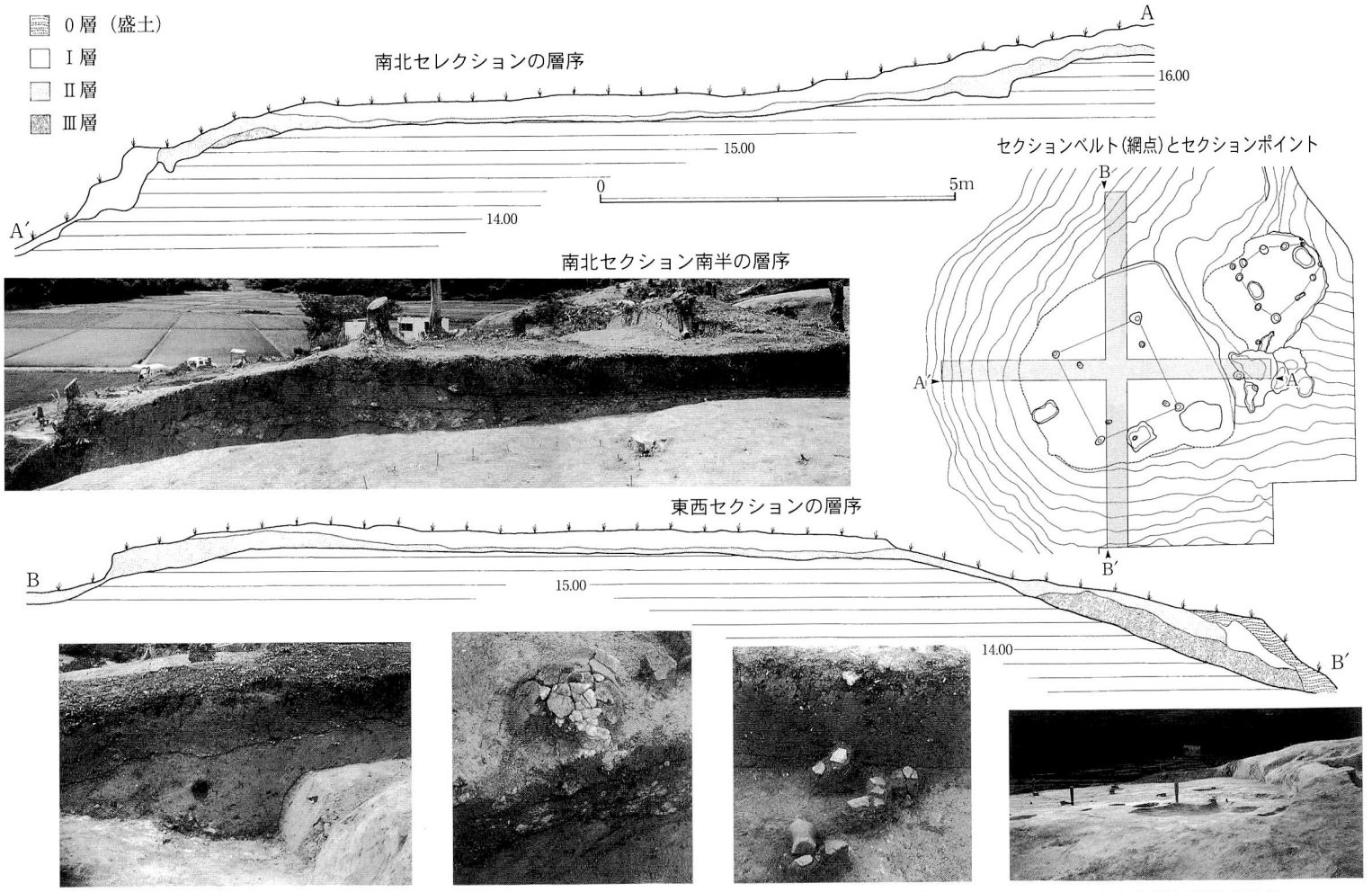


1　上段テラス
2　下段テラス
3　西側小テラス
4　土 坑 1
5　土 坑 2
6　土 坑 3
7　土 坑 4
8　土 坑 5
9　焼土坑1
10　焼土坑2
11　上段テラス下土坑群

第57図　東尾根の遺構全体図



第58図　テラス遺構エレベーション



上段テラス境界崖線の層序

壷（第75図92）の出土

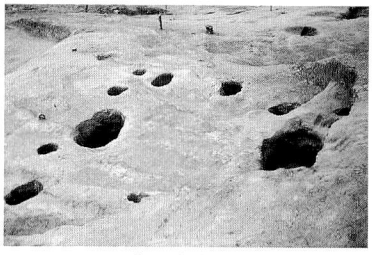
高坏（第74図67）の出土

東から見た下段テラス

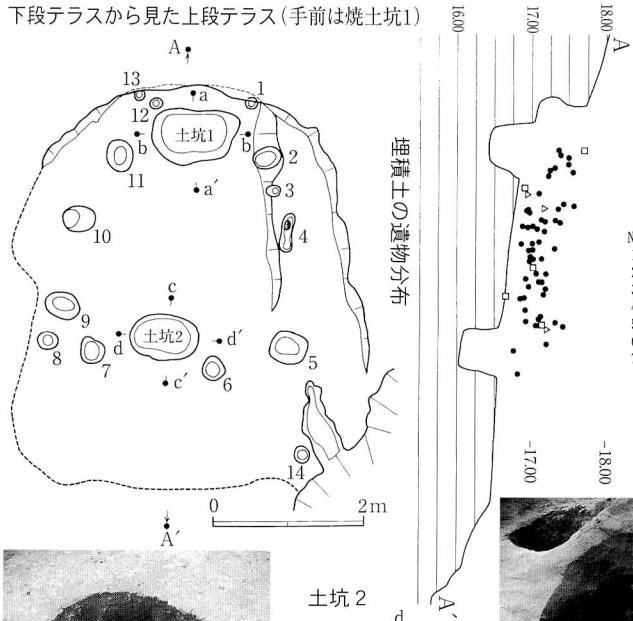
第59図　下段テラスの層序

下段テラスから見た上段テラス（手前は焼土坑1）

高域から撮影



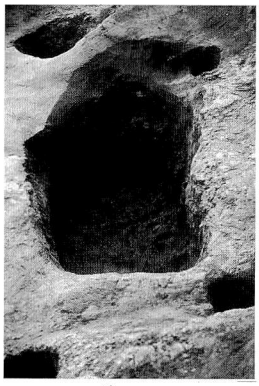
東から撮影

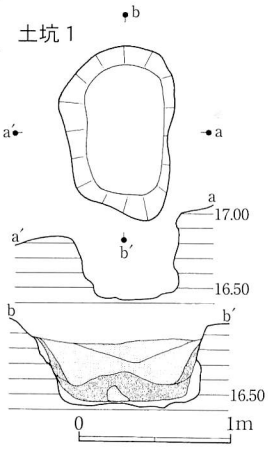


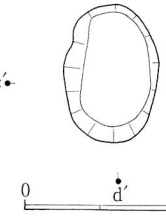
上段テラスのピット

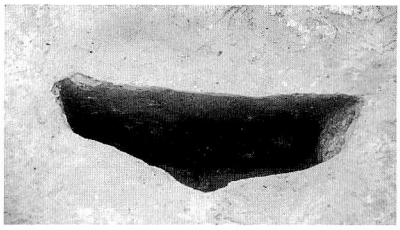
No.	長	幅	深(cm)	No.	長	幅	深(cm)
1	21	17	15	8	23	20	31
2	29	23	45	9	39	33	58
3	16	14	21	10	39	30	27
4	49	19	25	11	41	36	37
5	47	38	51	12	16	16	32
6	29	27	22	13	16	14	30
7	29	27	39	14	22	17	31

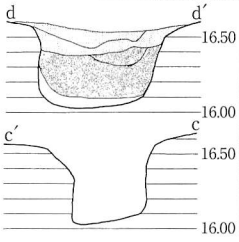
□ 土師器
△ 管玉製作剥片
● 縄文土器

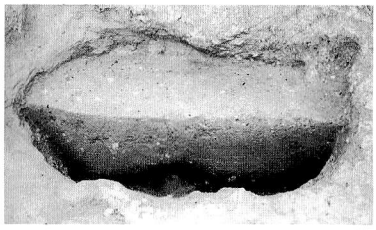






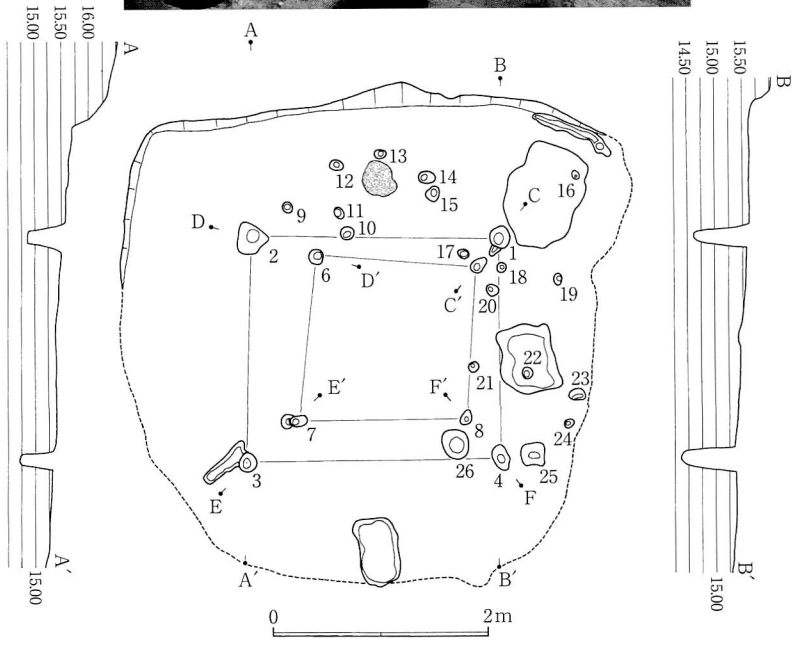






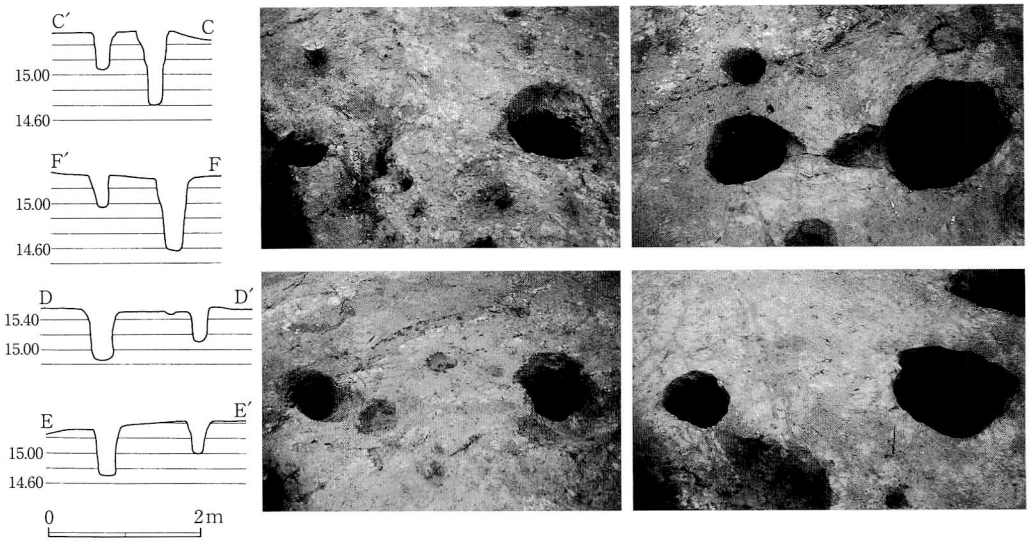
第60図　上段テラスの遺構と遺物分布

高域から見た下段テラスと
大型建物跡プラン

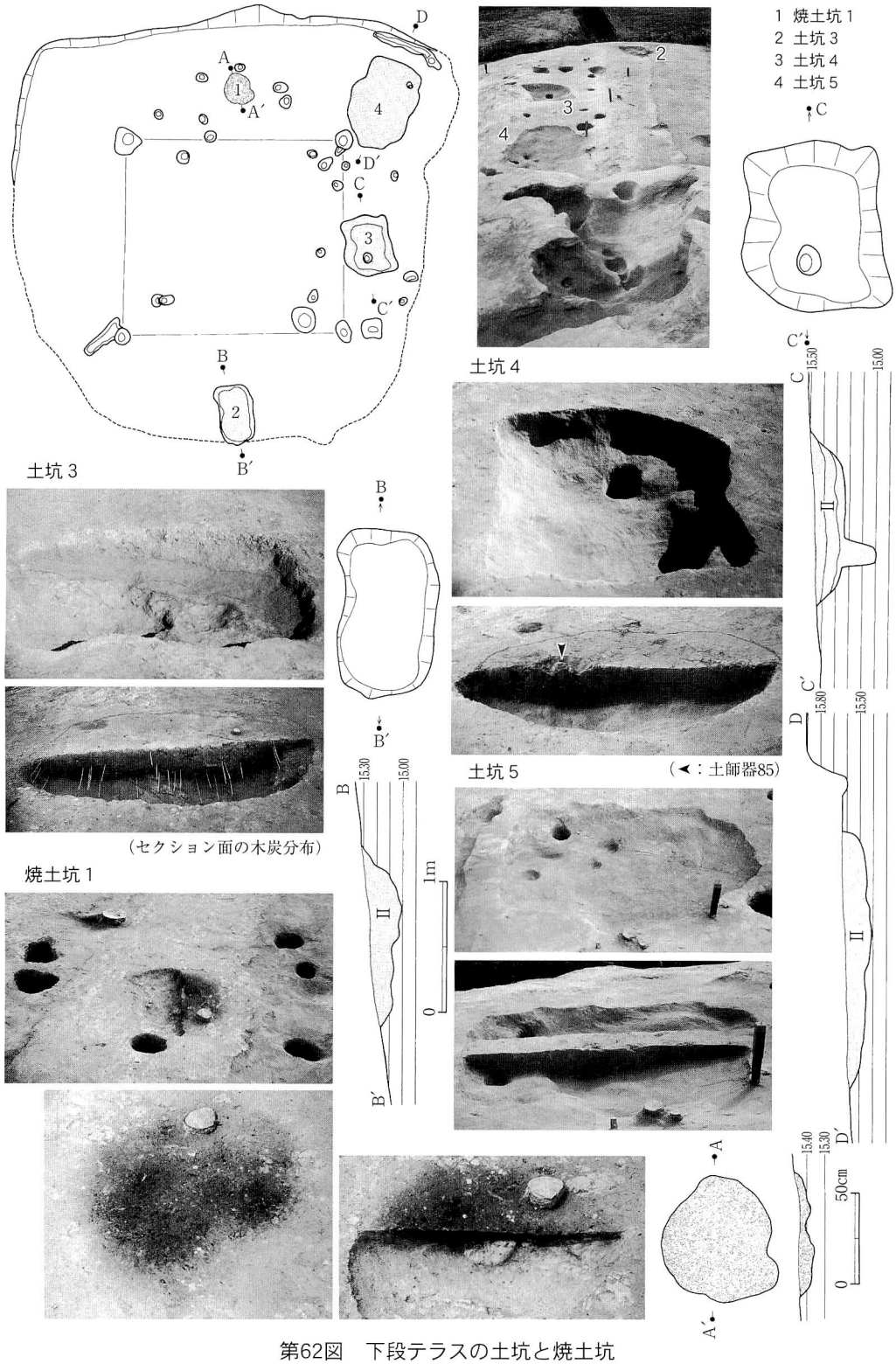


下段テラスのピット

No.	長	幅	深(cm)
1	42	39	101
2	58	53	72
3	36	30	64
4	47	42	99
5	29	27	48
6	30	25	50
7	28	25	41
8	28	22	43
9	20	16	13
10	23	23	12
11	19	16	15
12	24	21	34
13	21	17	46
14	28	24	27
15	28	24	17
16	18	17	26
17	19	15	18
18	20	17	12
19	20	17	20
20	22	21	22
21	22	16	25
22	23	21	31
23	30	23	10
24	21	15	18
25	44	42	30
26	54	47	19



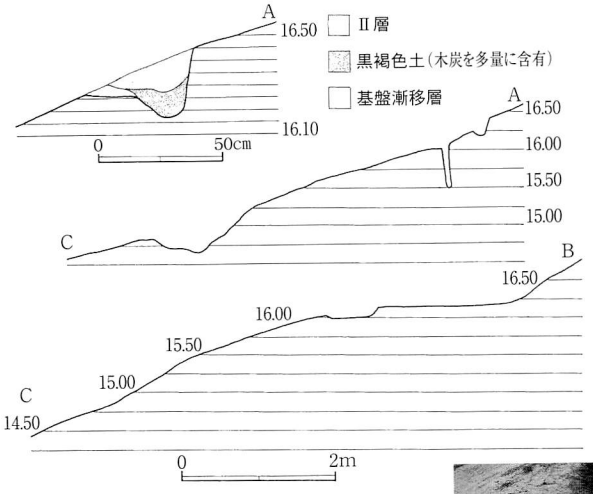
第61図　下段テラスのピットと建物跡

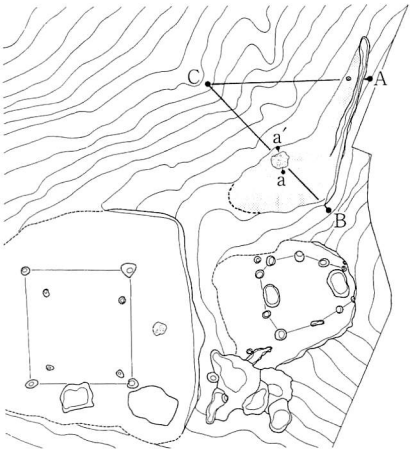


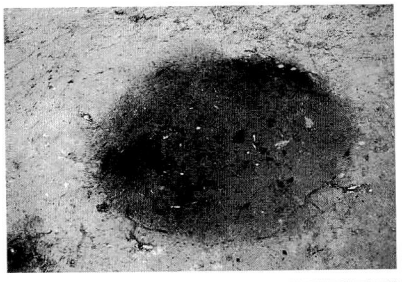
第62図　下段テラスの土坑と焼土坑

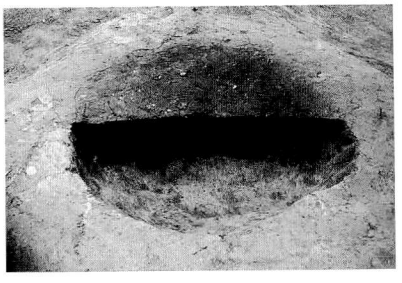
溝の層序

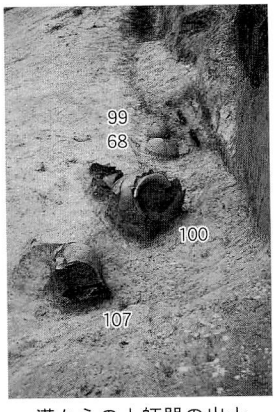
東から見た西側小テラス



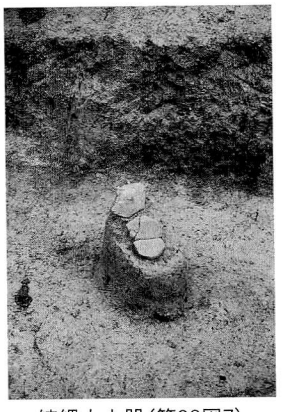




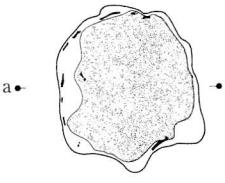


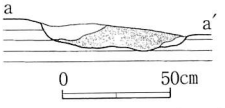


溝からの土師器の出土



続縄文土器(第93図7)
の出土





砂目：黒色土(木炭を多量に含有)
黒　：焼　土

第63図　西側小テラスの遺構と遺物の出土状態

試料１　上段テラス土坑１
埋積土最下部

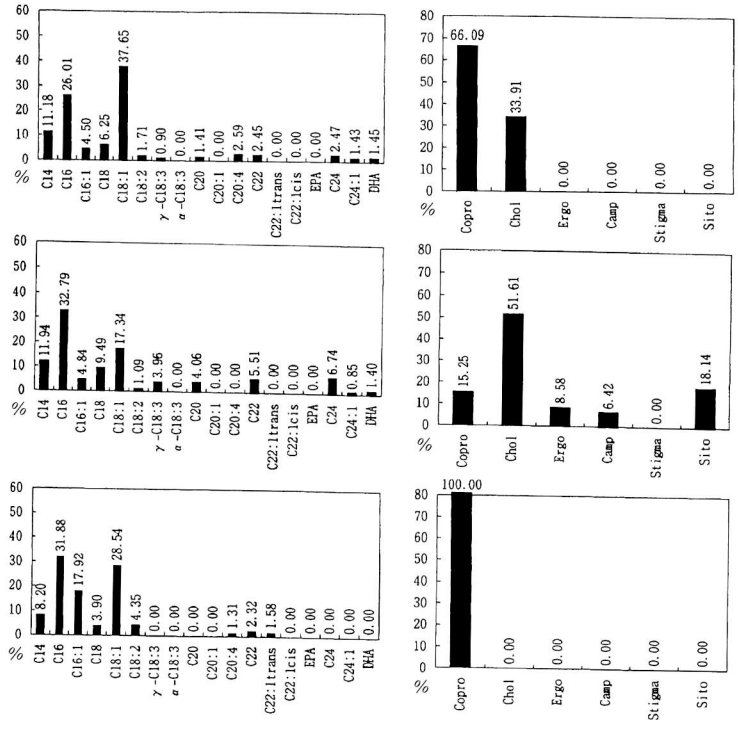
土　性	埴壌土
土　色	オリーブ褐
腐食含量(%)	1.05
P205(mg/g)	0.56

試料２　上段テラス土坑２
埋積土最下部

土　性	埴壌土
土　色	黄　褐
腐食含量(%)	0.64
P205(mg/g)	0.42

試料３　南赤坂遺跡
北方500m黒色土

土　性	軽埴土
土　色	褐
腐食含量(%)	1.46
P205(mg/g)	0.56



第64図　上段テラス土坑１・２における埋積土最下部の脂肪酸・ステロール組成

（２）上段テラス下土坑群

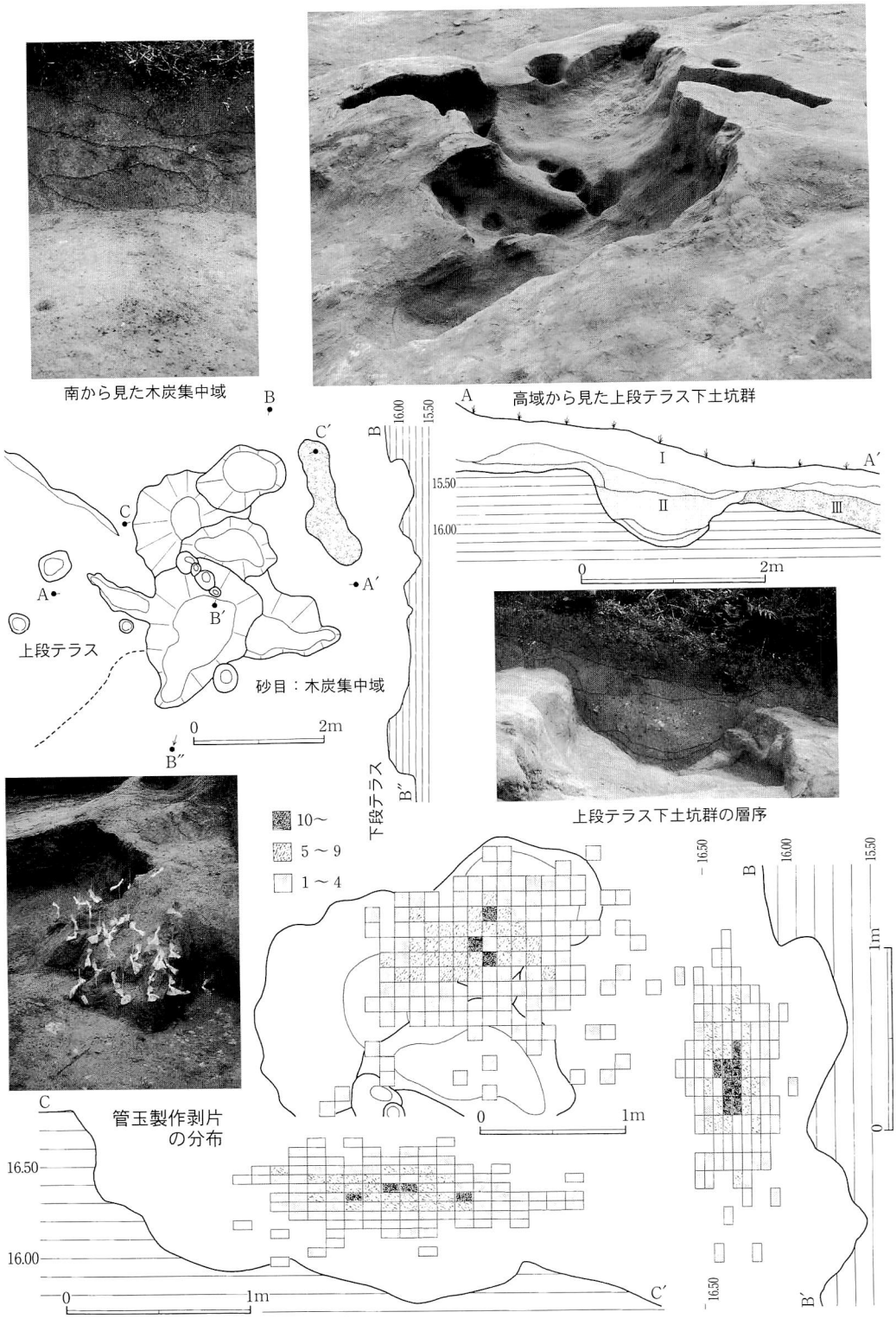
上段テラスの東に隣接した不整形な土坑である。最大幅は南北方向で4.2m、上段テラスとの比高は坑底で1.1～0.9mを測る。４基程度の土坑が重複する可能性を考慮し上記の名称を用いたが、溝状遺構と考え作業を進めたことから切合関係の確認を行なっておらず、こうした見方が適切か否かは定かでない。

特筆されるのは、1300点あまりにのぼる管玉製作剥片が北端部の2.5×1.8m範囲から集中して出土した点である。出土レベルは70cmの高低差があり、分布断面形はレンズ状を呈する。土器片の出土状況も似た在り方を示しており、廃棄行為によって短期間に埋積化したものと考えられる。南部に設けた土層観察面では、下部でラミナの形成が確認された。

なお、本土坑の掘削面は砂層であるが、中央軸付近に白色粘土の層脈が存在するところから粘土の採掘を意図した可能性も考える必要があろう。

（３）木炭分布域

上記土坑の東に隣接し、最大80cm幅、南北2m範囲の微細木炭分布域が確認された。包含レベルはⅡ層内である。中央部での断面観察によれば、最大厚は20cmを測り、浅い溝状遺構の中に堆積したものと考えられる。



第65図　上段テラス下土坑群と木炭集中域

3　遺構の年代

以上のなかで共伴土器に基づき所属時期が特定できた遺構は、１号住居址・４号住居址・テラス遺構・上段テラス下土坑群である。いずれも古墳時代前期に属しており、次章で述べる土師器の時期区分に従えば、上段テラス下土坑群がⅡ期（以下括弧内は新潟シンポ編年：８期)、テラス遺構がⅡ期～Ⅲ期（８期～９期)、２軒の住居址がⅢ期（９期）にあたる。

このうちテラス遺構については、上段テラスの土坑１・２最下部出土の木炭と下段テラスおよび西側小テラスの焼土坑１・２出土の木炭各１点を対象に、ＡＭＳ法に基づく放射性炭素年代測定をパリノサーヴェイ株式会社に依頼した。結果は下記のとおりである。

試料	樹種	補正年代(BP)	δ13C(‰)	測定年代(BP)
上段ﾃﾗｽ　土坑1	ブナ属	4680 ± 40	−28.0 ± 1.2	4730 ± 40
上段ﾃﾗｽ　土坑2	ブナ属	4700 ± 40	−30.9 ± 1.3	4790 ± 40
下段ﾃﾗｽ　焼土坑1	クリ	1210 ± 40	−26.3 ± 1.1	1230 ± 40
西側小ﾃﾗｽ焼土坑2	ハンノキ属	1870 ± 40	−26.2 ± 0.9	1890 ± 40

以上の測定値は発掘調査時の状況に基づき予想された年代と著しく異なるもので、若干の所見を試料ごとに述べる。

上段テラス土坑１・２　上段テラスの覆土には、Ⅱ層が厚く堆積していた。土坑１・２の埋土上部や周囲の柱穴内にもこれと同質の暗褐色～暗黄褐色土が覆い、Ⅲ層の堆積は認められなかった（第65図中段右)。Ⅱ層は古墳時代、Ⅲ層は縄文時代遺物の主要包含層にあたる。上段テラスにおける出土遺物の主体は尾根高域部から流入した縄文土器であるが、床面付近から土師器や管玉製作剥片が少量ながら確認されている（第60図中央)。遺構にみられる整然とした配列からも、２基の土坑だけが縄文時代に構築されたとは考えがたい。

下段テラス焼土坑１　本遺構は上段テラス寄に位置し、下段テラスの中では厚い土層に覆われていた。テラス面には今回の測定値に近い古代遺物が僅かに分布していたが、何れも表土からの出土である。焼土坑１は建物遺構の北側ライン中央に置かれており、この地点は上段テラスの長軸線延長部ともほぼ一致する。以上の位置関係からみて、両施設との有機的な関連性を求めるのが妥当な見方である。

西側小テラス焼土坑２　焼土坑１に較べやや大型で、強い加熱を長期にわたって受けたことがうかがえる遺構である。しかし、本遺跡においては弥生時代の遺構・遺物が一切確認されておらず、測定年代にそった遺構の解釈は困難と言わざるをえない。西側テラスでは、北側の削平ライン下に帯状の木炭集中域が存在しており、それとの関連性を考えるべきである。ちなみに、焼土坑１・２の土壌水洗をつうじ古墳時代に属する管玉製作剥片各１点を確認している。遺構の機能時期を推定する上での有力な資料として重視したい。

Ⅱ　遺　物

口端遺存資料集計にして435個体の土師器と11個体の北方系土器、管玉およびその製作工程資料1360点あまり、打製石器45点、砥石・敲石各１点、少量の炭化種子などが出土した。

1　土師器

大半は古墳時代前期に属するもので、他に後期の土器が少量出土している。遺構に伴う資料としては、下段テラス・西側小テラス・上段テラス下土坑群・住居址２軒から一定量の出土がある。

（1）器種分類（第66・67図）

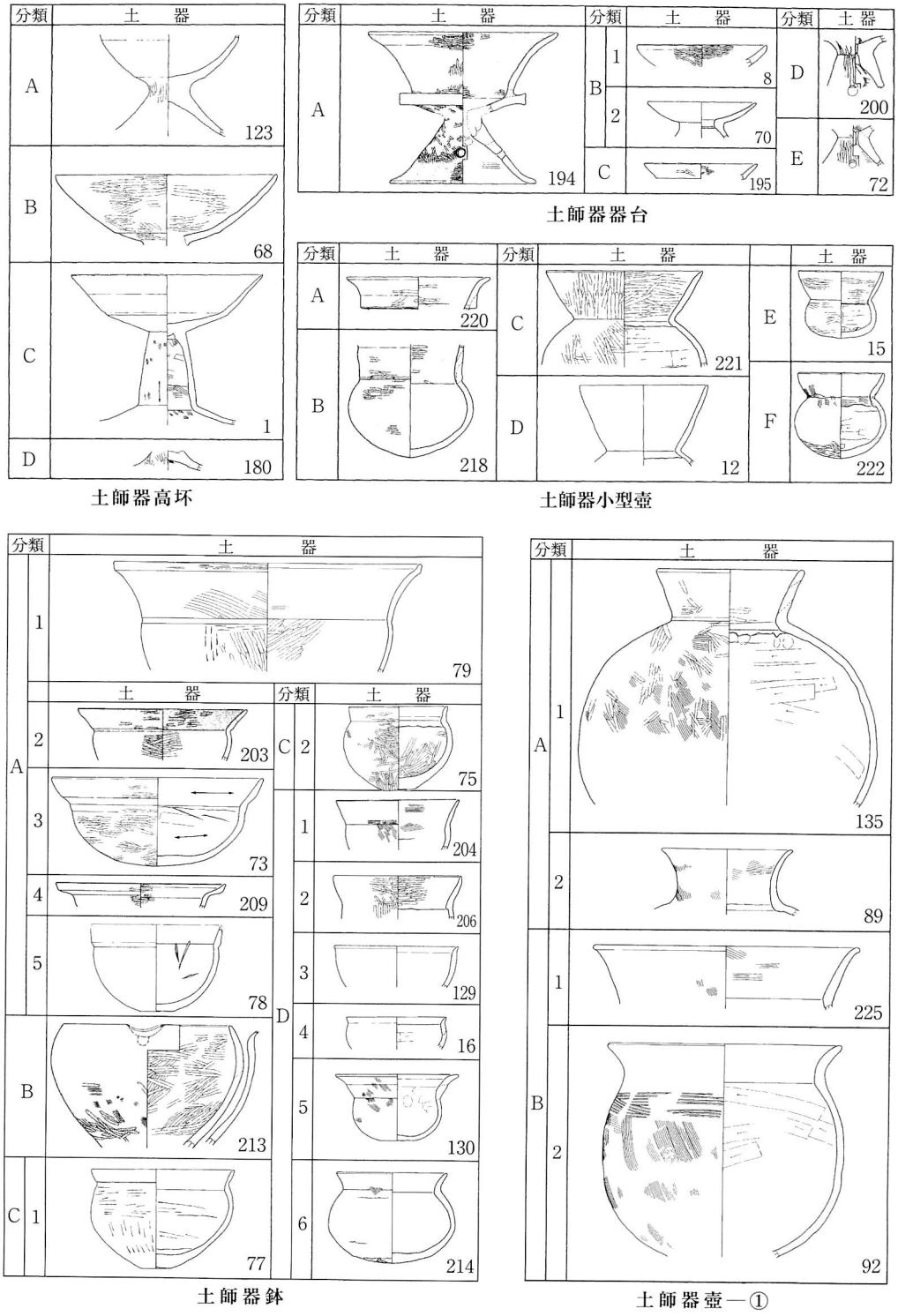
高坏　Ａ～Ｄの４種に大別した。坏部が内湾するもの（Ａ類）、坏部が直線的に伸び東海系の系譜と考えられるもの（Ｂ類）、畿内系の柱状脚高杯（Ｃ類）、中実脚の高杯（Ｄ類）がある。

器台　Ａ～Ｅの５種に大別した。Ａ類は結合器台。Ｂ類は小型器台のうち皿状の受部を有するものである。口縁端部の形態で面をもつもの（Ｂ１類）と丸く収まるもの（Ｂ２類）の２つに細分できる。Ｃ類は受部が有段のもの。また、Ｄ類は小型器台のうち受部が外反して伸びるもの。Ｅ類は小型器台のうち受部が直線的に伸びるもの。

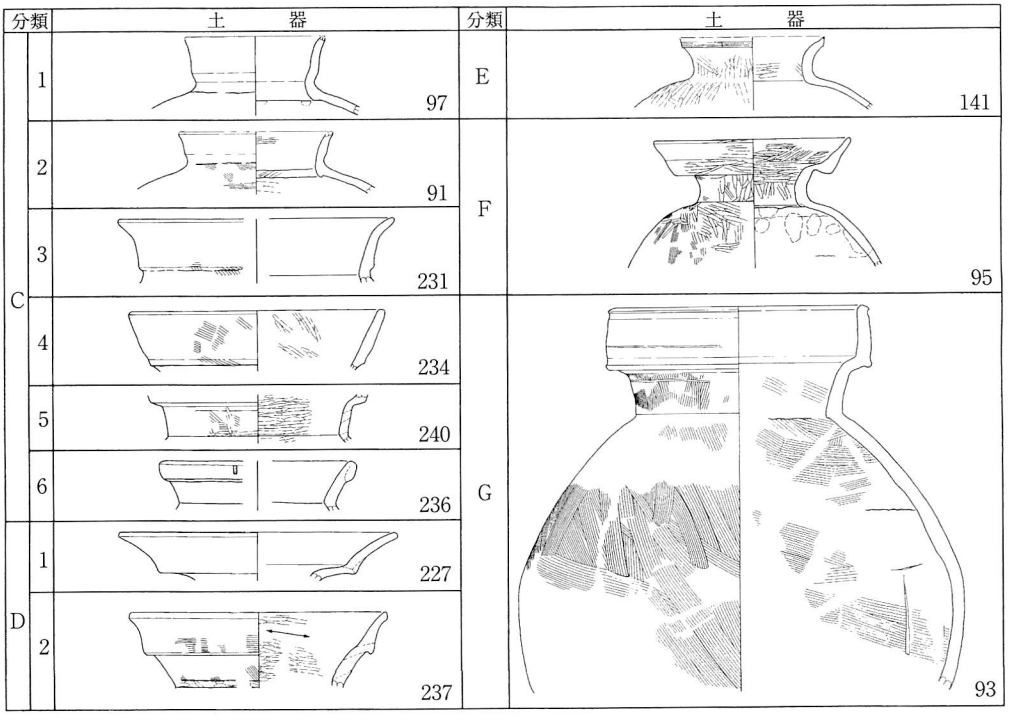
小型壷　Ａ～Ｆの６種に大別する。二重口縁のもの（Ａ類）、球形の体部に比較的長い口縁が直立気味に伸びるもの（Ｂ類）、広口で口縁が短めのもの（Ｃ類）、球形の体部に直線的に外方に長く伸びる口縁をもつ長頸壷（Ｄ類）、いわゆる小型丸底壷（Ｅ類）、球形の体部に内湾する口縁部をもつもの（Ｆ類）がある。

鉢　Ａ～Ｄの４種に大別した。Ａ類は有段の口縁部をもつものを一括し、５種に細別する。Ａ１類は内湾する体部に頸部で括れて大きく外反する長い口縁部が付くもの。Ａ２類は弥生時代後期以来の有段口縁鉢の系譜を引くもの。Ａ３類はいわゆる有段口縁丸底鉢。Ａ４類はいわゆる屈曲口縁鉢。Ａ５類は直線的に上方へ伸びる口縁部をもつものである。Ｂ類は片口の台付鉢。Ｃ類は短頸鉢。非精製のもの（Ｃ1類）と精製のもの（Ｃ2類）が認められる。Ｄ類は上記以外のもので、浅い半球状や扁平な球形の体部をもつものを一括した。口縁部の形態などから６種に細分した。体部に比して長めの口縁部が直線的に外方へ伸びるもの（Ｄ1類）、内湾する口縁部をもつもの（Ｄ2）、口縁端部がわずかに外反して収まるもの（Ｄ3類）、短い口縁部をもつもの（Ｄ4類）、比較的長くて器壁の厚い口縁部が外反して伸びるもの（Ｄ5類）、「く」字に外反する口縁部がつくもので、体部が比較的張り出し扁平なもの（Ｄ6類）がみられる。

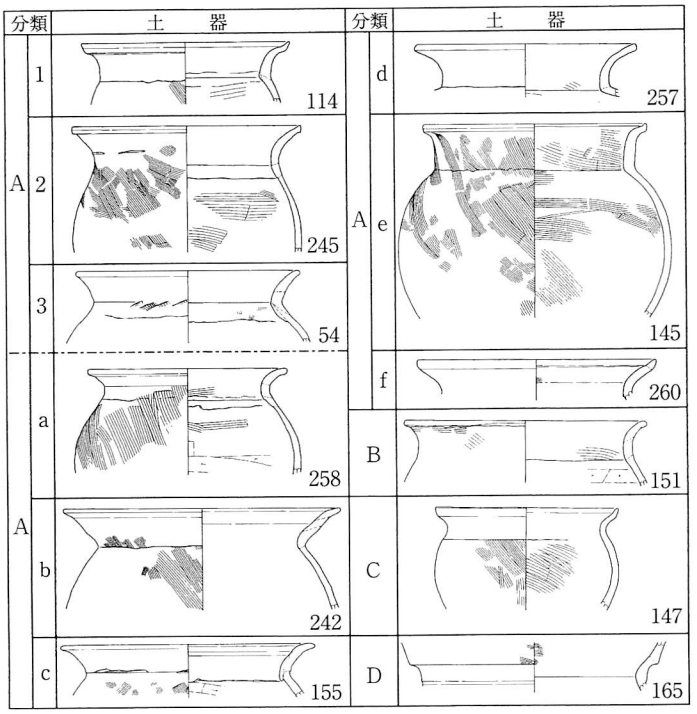
壷　Ａ～Ｇの７種に大別した。Ａ類は細口の壷で、上方に直線的に伸びる口縁部をもつもの（Ａ１類）と口縁部が外反しながら伸びるもの（A2類）の２種に細分できる。Ｂ類は広口で「く」字状もしくは「コ」字状の口縁部をもつものを一括した。外方へ直線的に伸びる口縁部をもつもの（Ｂ1類）と頸部の屈曲がゆるやかで、外方に外反しながら伸びるもの（Ｂ2類）の２種


分類
土　器
A
123
B
68
C
1
D
180
土師器高坏
分類
土　器
A
194
分類
土　器
B
1
8
2
70
C
195
分類
土　器
D
200
E
72
土師器器台
分類
土　器
A
220
B
218
分類
土　器
C
221
D
12
土　器
E
15
F
222
土師器小型壺
分類
土　器
A
1
79
2
203
3
73
4
209
5
78
B
213
C
1
77
土　器
分類
土　器
C
2
75
D
1
204
2
206
3
129
4
16
5
130
6
214
土師器鉢
分類
土　器
A
1
135
2
89
B
1
225
2
92
土師器壺—①

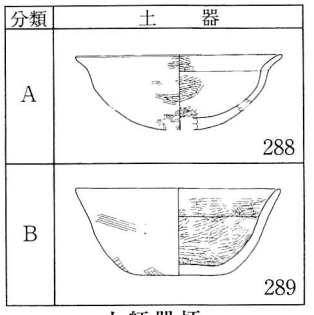
第66図　器種分類－1



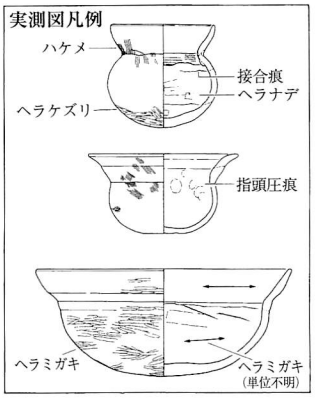
土師器壺―②



土師器甕



土師器坏



第67図　器種分類－2

に細別可能である。C類は有段口縁のものを一括した。細口で口縁部が外反しながら伸びるもの（C1類）、短い口縁部が上方に直線的に伸びるもの（C2類）、広口で比較的長い口縁部が外反しながら伸びるもの（C3類）、口縁部が内湾気味に伸びるもの（C4類）、長い頸部に有段口縁をもつもの（C5類）、口縁端部を折り返して有段口縁をつくるもの（C6類）の6種が確認できる。D類は二重口縁壷を一括し、さらに2種に細分した。D1類は筒状に伸びる細口の頸部に外反する口縁部が付く畿内系の二重口縁壷で、D2類は頸部が筒状にならず外反するもの。E類は体部が張る単口縁の壷で近江系と考えられるもの。F類は東海西部の影響を受けていると考えられる壷を一括した。G類は山陰系の壷。

甕　A～Eの5種に大別した。A類は口縁部が「く」字もしくは「コ」字に屈曲するものを一括した。口縁端部の形態により、口縁端部を摘み上げるもの（A1類）、口縁端部に面をもつもの（A2類）、口縁端部が丸く収まるもの（A3類）の3種に細分できる。また、口縁端部とは別に口縁部の形態・調整などからA類をa・b・c・d・e・fの6種に細別した。口縁部が単純に「く」字もしくは「コ」字に外反する形態で、最も多く認められるもの（a種）の他に、a種に比べ長く直線的な口縁部で体部の器壁の薄いもの（b種）、a種に比べ鋭く屈曲するもので、口縁部内面中央に凹みを有するもの（c種）、a種に比べ口縁部の外反が強いもの（d種）、口縁部が直立的に立ち上がり端部で外へ短く屈曲する典型的な「コ」字状のもの（e種）、短い口縁部が内湾しながらのびるもの（f種）が認められる。他に、折り返し口縁のもの（B類）、有段口縁を持つもの（C類）、近江系と考えられるもの（D類）がある。

坏　口縁部の形態により2種に大別した。内湾する体部に頸部で屈曲して外反する口縁部が伸びるもの（A類）と口縁部がほとんど外反せず、体部も丸みをもたないもの（B類）とがある。

（2）遺物各説

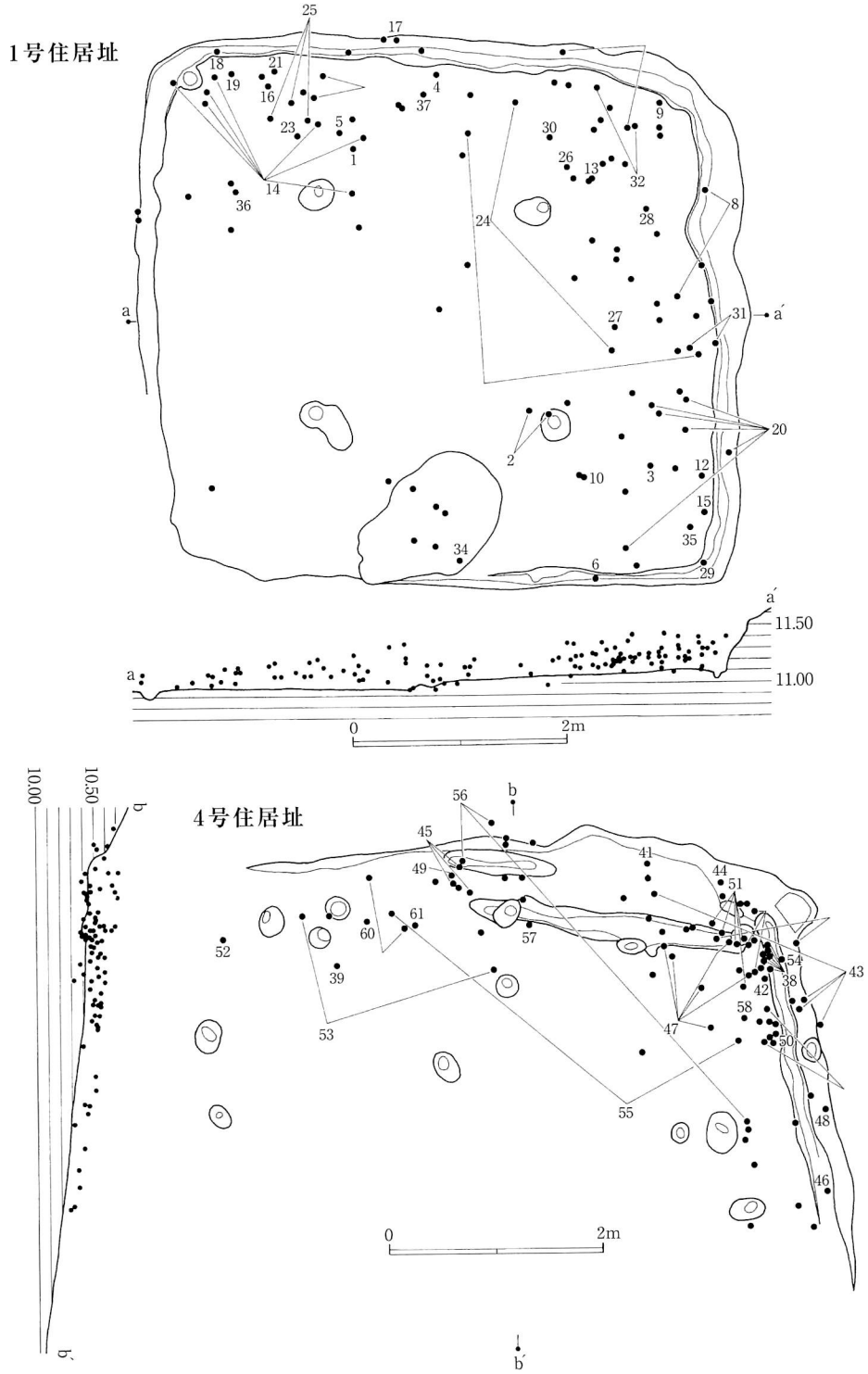
遺構ごとに説明を行う。調整や赤彩の有無などの詳細は観察表を参照していただきたい。

A　1号住居址（第69図・70図）

高坏・器台・小型壷・鉢・壷・甕がある。

高坏（1～7）　1～5・7はC類で、6はB類と推測する。脚部は1のように裾部が強く屈曲して伸びるものと、3のようになだらかに外へ開くものの2種類が認められる。1は坏部の器面の摩滅が激しいが、坏部・脚部ともに外面は粗いヘラミガキを行っている。脚部外面ではハケメ痕を残す。脚部内面には粘土紐の接合痕が1条確認でき、ハケメ痕も残す。3も器面の摩滅が激しく調整の不明な点が多いが、脚部外面は粗いヘラミガキが認められる。坏部は1に比べて深めで、口縁部はより急な角度で上方に伸びる。4は内外面とも丁寧な横位のヘラミガキで精製品である。残存する外面の広範囲に黒班がある。

器台（8～11）　確認できる受け部はいずれもB類であるが、8のように口縁端部が上方



第68図　1号・4号住居址の土師器分布（口端残存資料と図示資料に限る）

へ立ち上がるＢ1類と、９のように丸く収まるＢ2類がある。８は内外面とも横方向のヘラミガキである。８・９とも内外面の調整は丁寧で精製品といえる。

鉢（16）　口縁部はヨコナデで、体部外面はヘラミガキか。口縁端部は摘み上げられている。

小型壷（12～15・36）　12・13はＤ類、14・15はＥ類に比定できる。12・13とも器面の摩滅が激しく調整の不明な点が多いが、13は部分的にヘラミガキがみられ、内面に削痕をもつ。14・15はほぼ同じ法量で、扁平な球形の体部に口縁部が内湾気味に伸びるなど形態も類似している。14の方が外面にハケメ痕を残すなどより調整が粗い。底部は接地面が広く安定感のある丸底。36は小型壷の底部と推測する。内面は丁寧なヘラミガキ。

壷（29～32・37）　29はF類。30はＣ１類、31はＤ2類である。32はＢ類と推測する。

甕（17～28・33～35）　18・26はＡ２類。いずれもａ種。26は口縁部外面にスス付着。19～24・27・28はＡ3類。19はａ種で器壁は薄め。20は口縁部と体部中位に孔が穿たれている。同一個体から、口縁部には少なくとも３つ以上の孔が穿たれている。確認できる孔は全て焼成前の穿孔である。ススは外面全体にみられ、体部内面下半にはコゲの付着が認められる。21・22は法量・形態・成形技法・調整などで類似しており、同一工人による製作の可能性が高い。両者とも口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ、体部内面ヘラナデ調整で、頸部に粘土を継ぎ足している。底部は幅の狭い不安定な平底。ススは口縁部と体部中位を中心に付着しており、頸部と底部にはほとんど認められない。また、21の内面の体部下位にはコゲの付着が確認できる。23はａ種。遺存部でススは認められない。24はｆ種か。27は器壁が厚い。壷の可能性もある。28は口縁端部の内面がナデられて先細る。口縁部外面にはススが付着。25は体部外面上半にススが、体部内面下位にコゲの付着が認められる。17は小型の甕であるが、体部が薄い点や口縁部内面にハケメ痕を密に残す点など異質である。33～35は甕の底部と考える。いずれも幅の狭い平底である。

Ｂ　４号住居址（第71図）

高坏・器台・鉢・小型壷・壷・甕が確認できる。

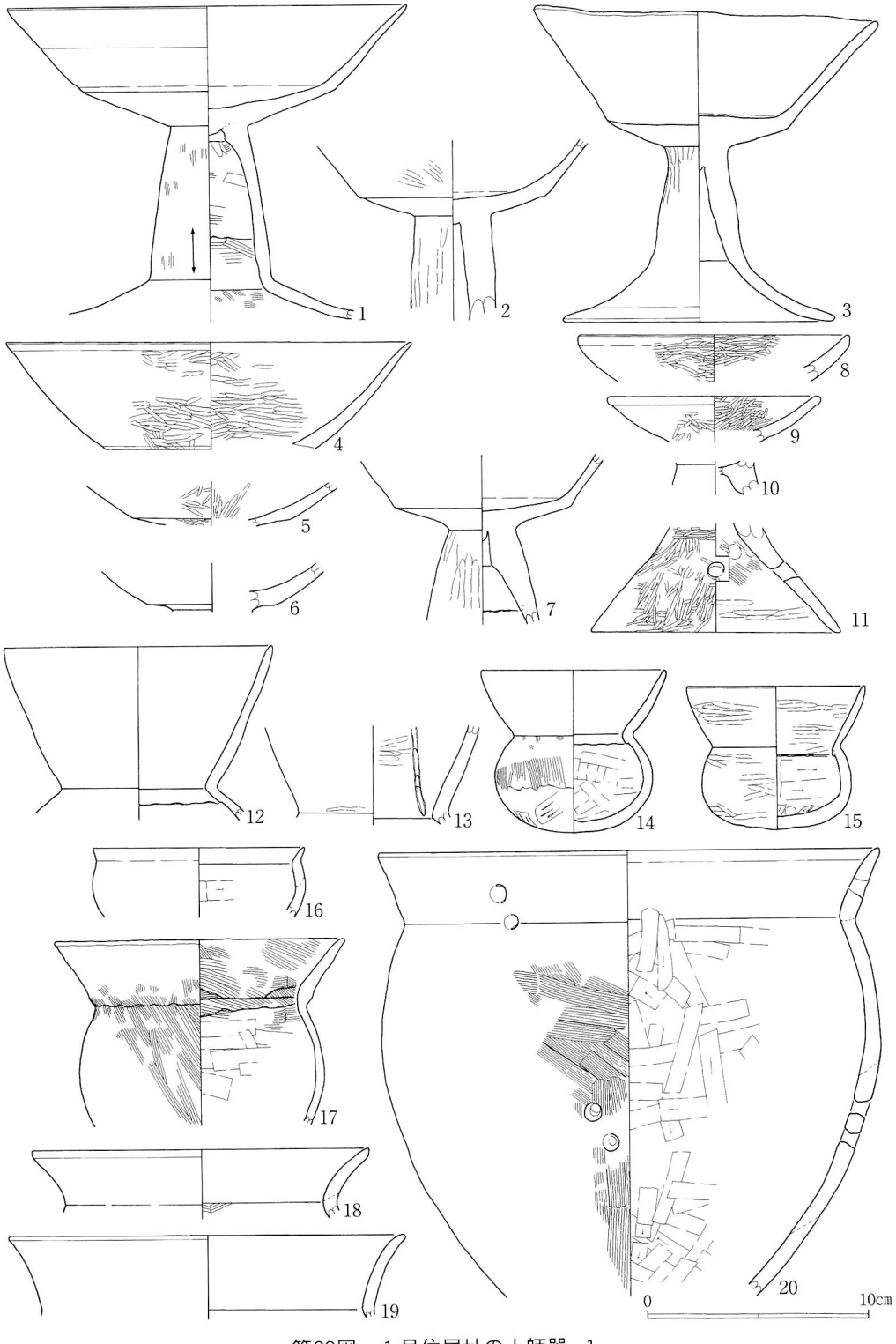
高坏（38～42）　38はＣ類であるが、１号住居址のものと比べ坏底部と口縁部との屈曲が弱く直線的に伸びている。39の坏部は丁寧なヘラミガキが行われている。40の脚部は１の脚部よりも径が小さく細身である。調整は内面下半に横位のハケメが認められる点では一致するが、外面の縦位のヘラミガキはより丁寧である。

器台（43）　脚端部がわずかに外方へ屈曲する。

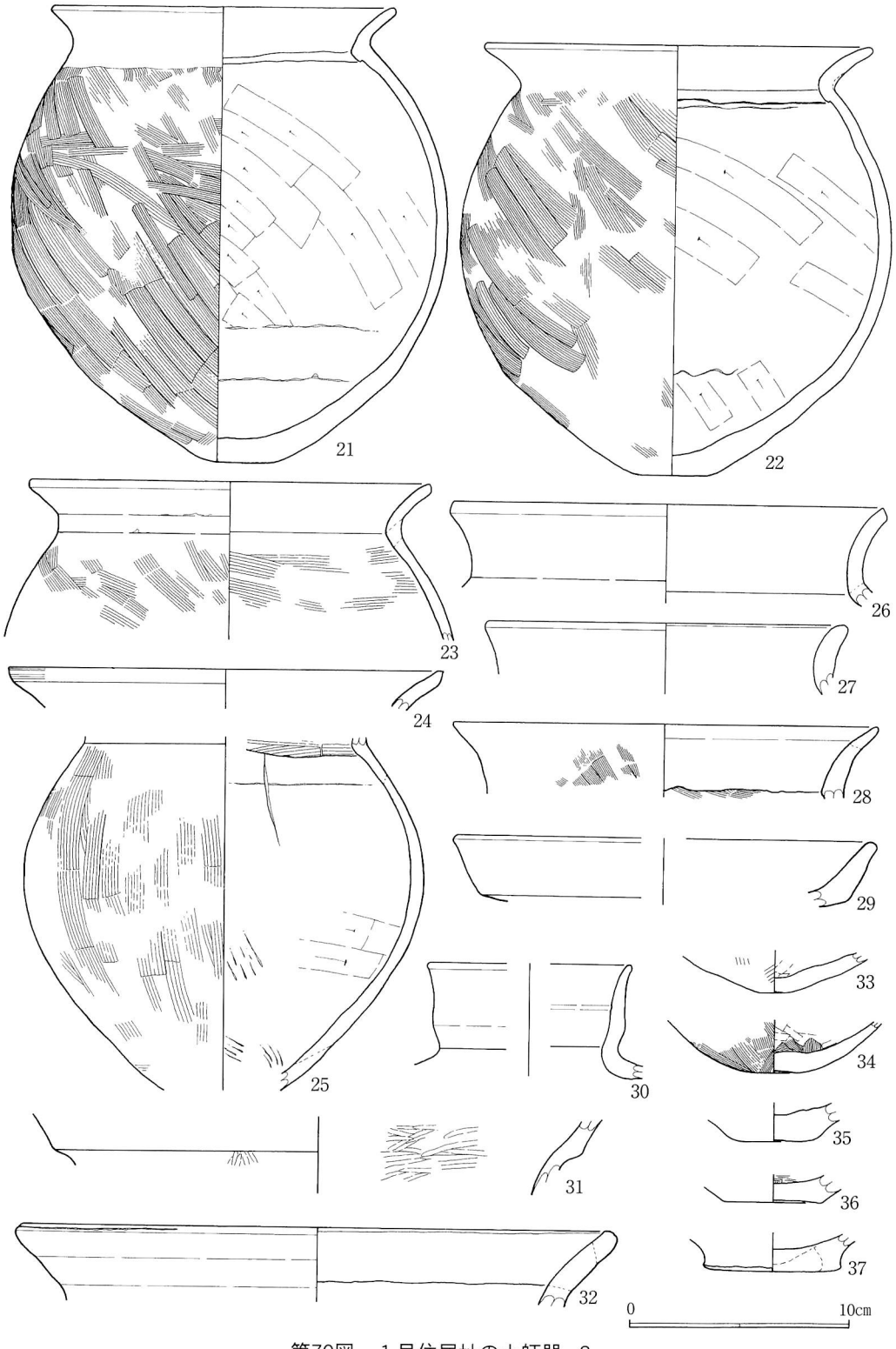
鉢（44）　Ｄ４類。

小型壷（45・46）　45・46ともにＥ類と考えられる。両者とも粗製である。

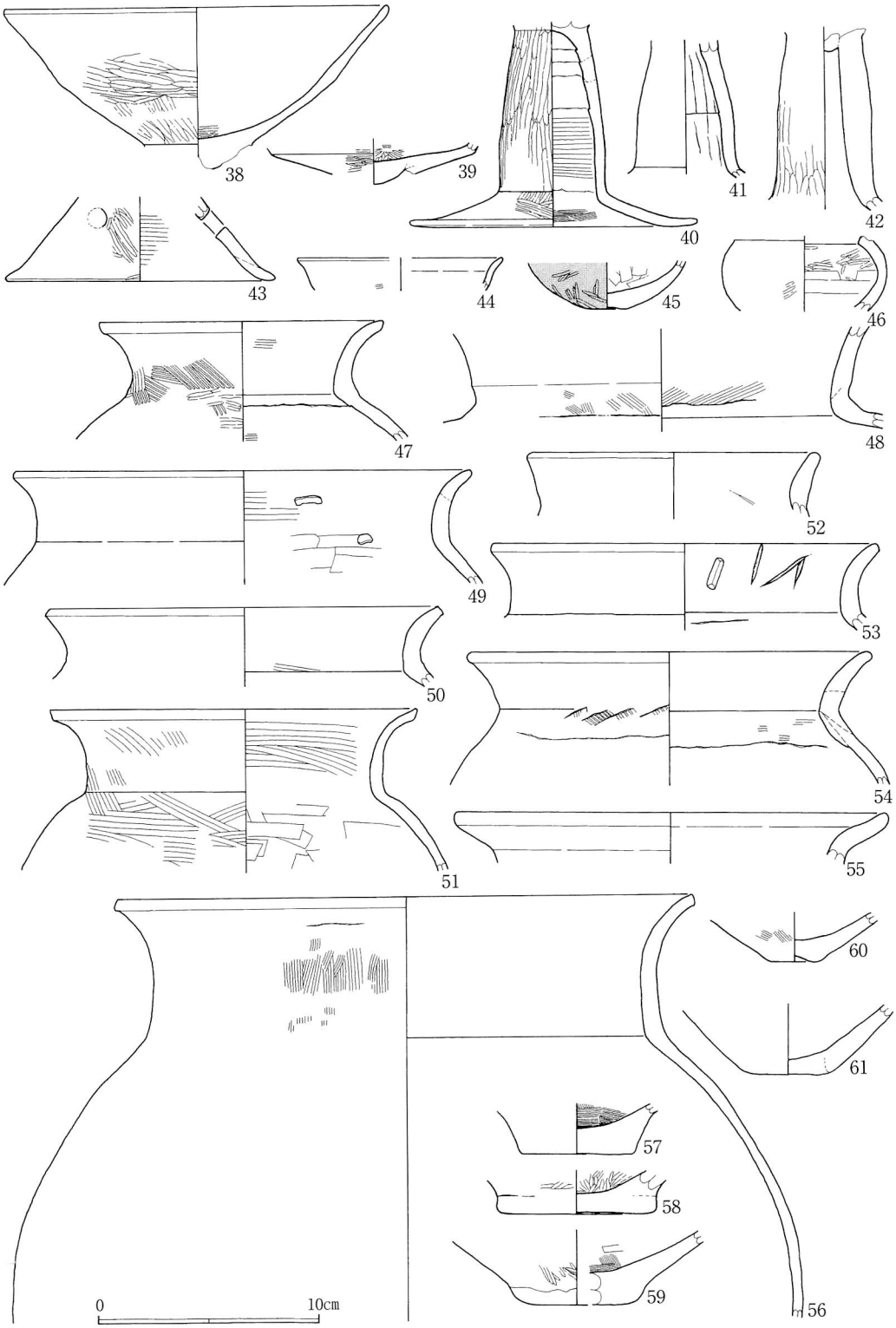
壷（47･48･57～59）　47はＢ2類で、外面は深いハケ調整の後ヘラミガキ。48はＣ2類で



第69図　1号住居址の土師器－1



第70図　1号住居址の土師器－2



第71図　４号住居址の土師器

ある。口縁部はわずかな段をもち上方へ伸びる。57～59は壷の底部と考える。57の底部内面は蜘蛛の巣状のハケメ痕。58の内面は丁寧なヘラミガキで黒色を呈し、内面黒色処理と区別がつかない。

甕（49～56・60・61）　A2類（50・51・56）とA3類（49・52・53・54・55）が認められる。51は47と形態、口縁端部に面をもつ点、口縁外面にハケメ痕を残す点、胎土など類似する点が多い。56はススが頸部を除いて付着。51・56ともに、口縁部は直立気味に立ち上がり外反する形態でｅ種に近い。53～54はａ種。54は内面の頸部の屈曲が鋭い。ススは遺存部外面全体に付着。55はｆ種。口縁部外面にススが付着する。60・61は甕の底部と推測する。61は比較的径の大きい平底である。

C　テラス遺構と上段テラス下土坑群（第74図～77図）

ここで図示した資料は、西側小テラス・下段テラス・上段テラス下土坑群とその周囲１ｍ未満の範囲から出土した資料である。各資料の出土地点は第72図のとおり。

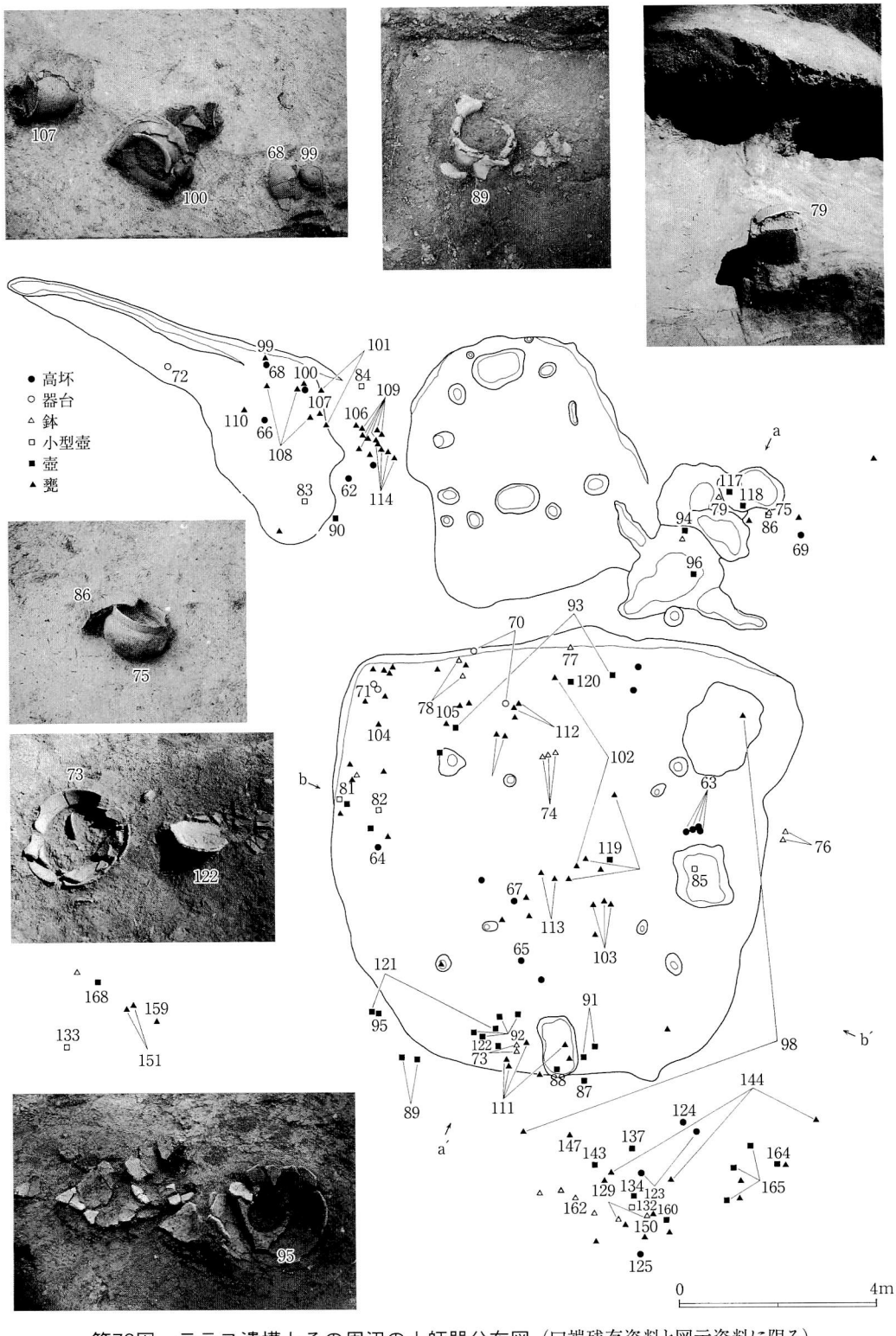
高坏（62～69）　68はＢ類。外面全体に赤彩が施され、口縁部内面の端部にも約1cm幅で赤彩が１周している。内面の赤彩部分は下部より器壁が薄く、粘土がある程度軟らかい段階で赤彩を付けながら横ナデが行なわれたと考えられる。62～67はＣ類に該当する。65・66は内面に輪積み痕を残す。坏部の63は内面の坏口縁部に横方向のハケメが認められる。この箇所の横ハケは４号住居址の39にも認められ共通する。また、62･63･64･66は赤色系の色調をもつ。

器台（70～72）　70・71はＢ2類。71は内外面横方向の丁寧なヘラミガキ。72はＥ類である。透孔は依存部分で１孔確認できる。

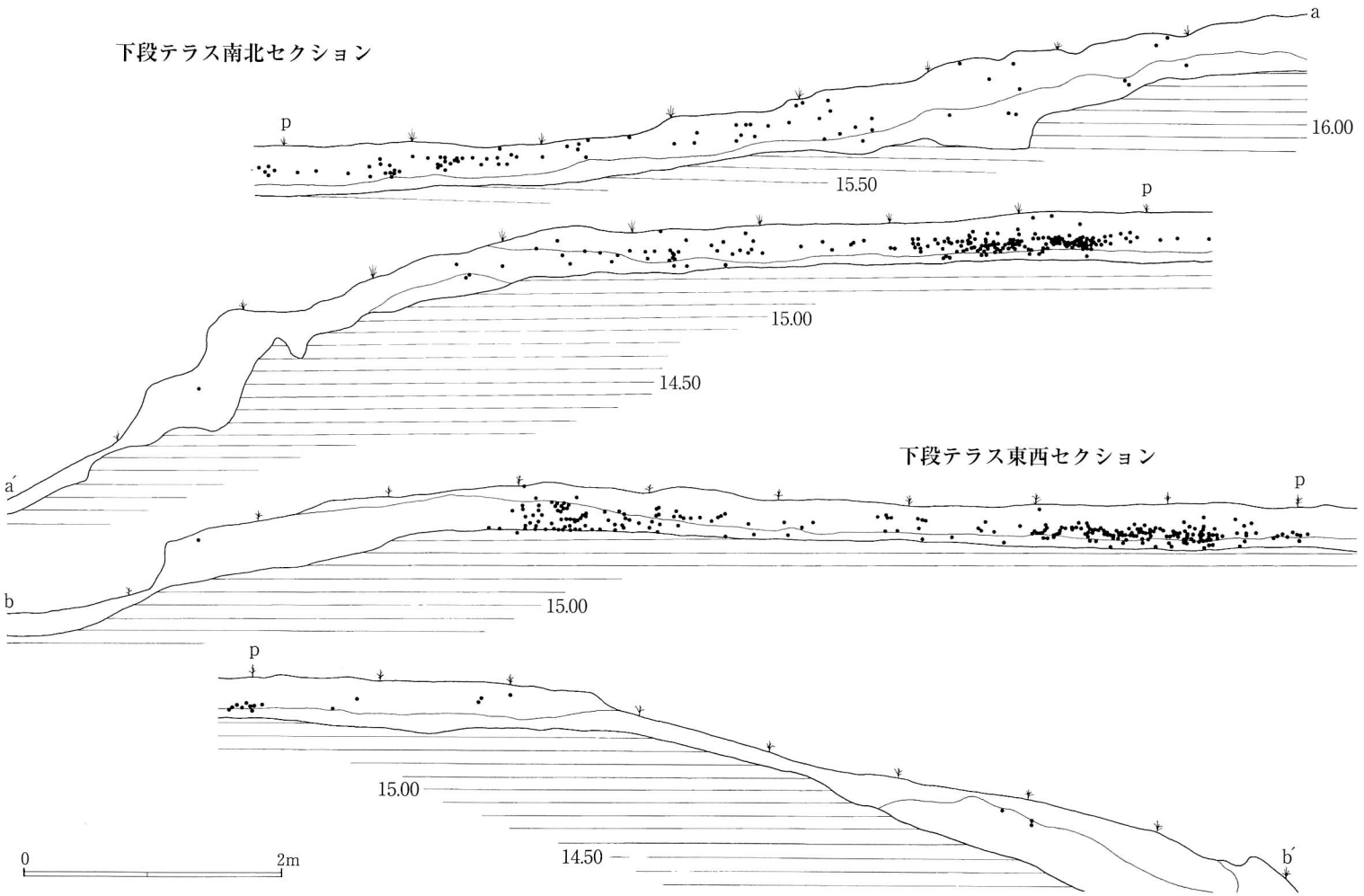
鉢（73～80）　73はＡ3類。74はＤ6類に含める。体部中位以下を欠損しているが、小さな平底の底部が同一個体となる。外面は横方向の粗いヘラミガキ。内面には炭化物が付着している。75はＣ2類、77はＣ1類。75は小型品で底部外面は不正方向のハケメ痕が確認される。86が被さった状態で出土。77は内外面でヘラケズリが確認でき、底部は凹状に窪まる。76はＤ4類。78はＡ5類で有段の短い口縁部が直立的にのびる。底部は狭い平底。79はＡ1類で大型品。体部外面は粗いヘラミガキの後一部でヘラケズリされる。口縁部外面はハケメの後ヨコナデ。口縁端部は上方に摘み上げられており、横方向のハケ状の痕を残す。体部内面は粗いヘラミガキ。体部の器壁は比較的薄い。80はＤ2類である。

小型壷（81～86）　82・83はＤ類の口縁部。85の外面の細かいハケメは体部外面全体で確認でき特徴的である。86はＢ類である。底部は上げ底。有段で上方にのびる短い口縁部がつく。75に蓋をするような状態で出土。81・84は二重口縁をもつＡ類。

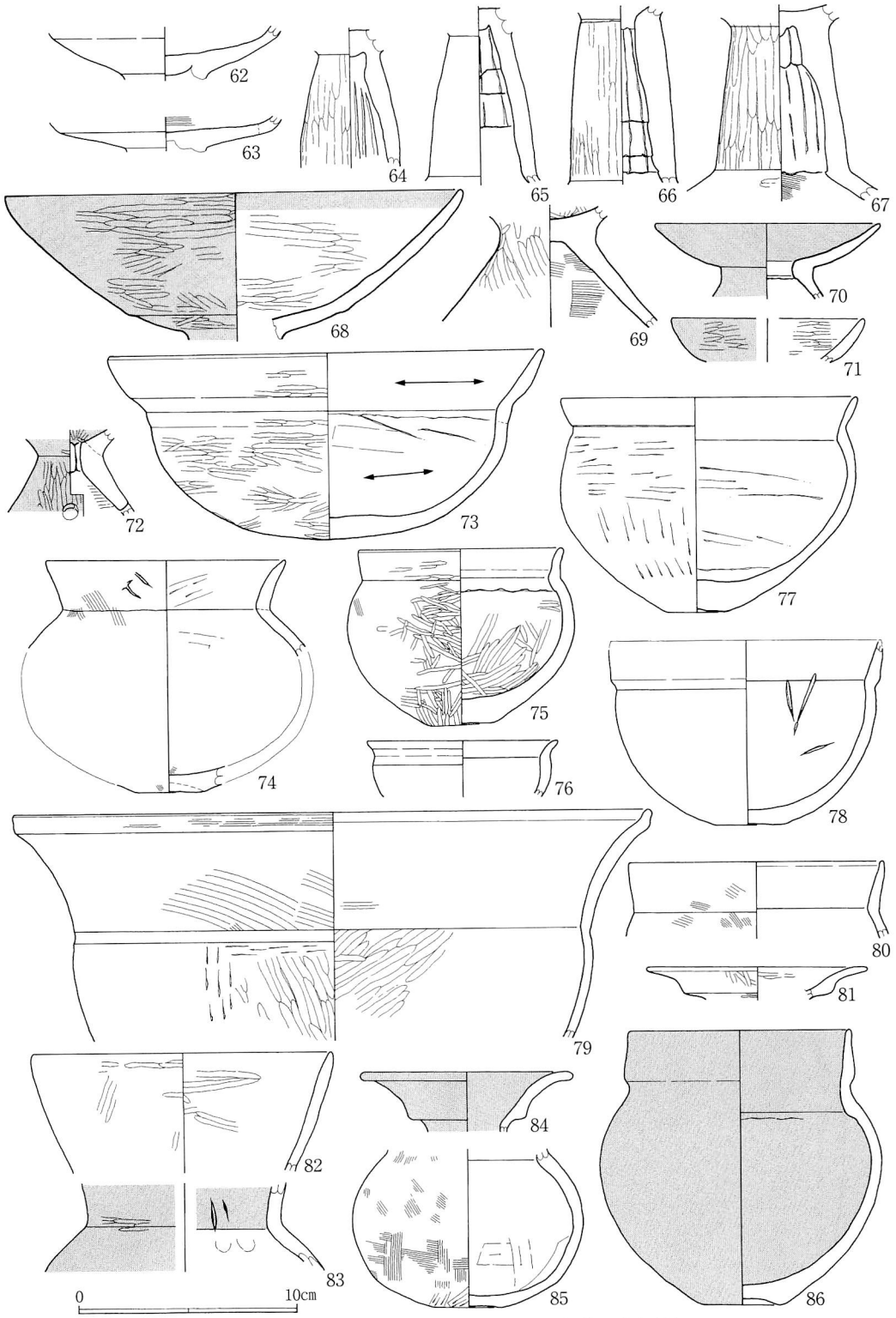
壷（87～97・116～122）　87･88･92はＢ2類。87は小型のものである。外面のハケメは深く、ヘラケズリとナデにより縦方向にハケメを切断している。88は土坑３からの出土。92は



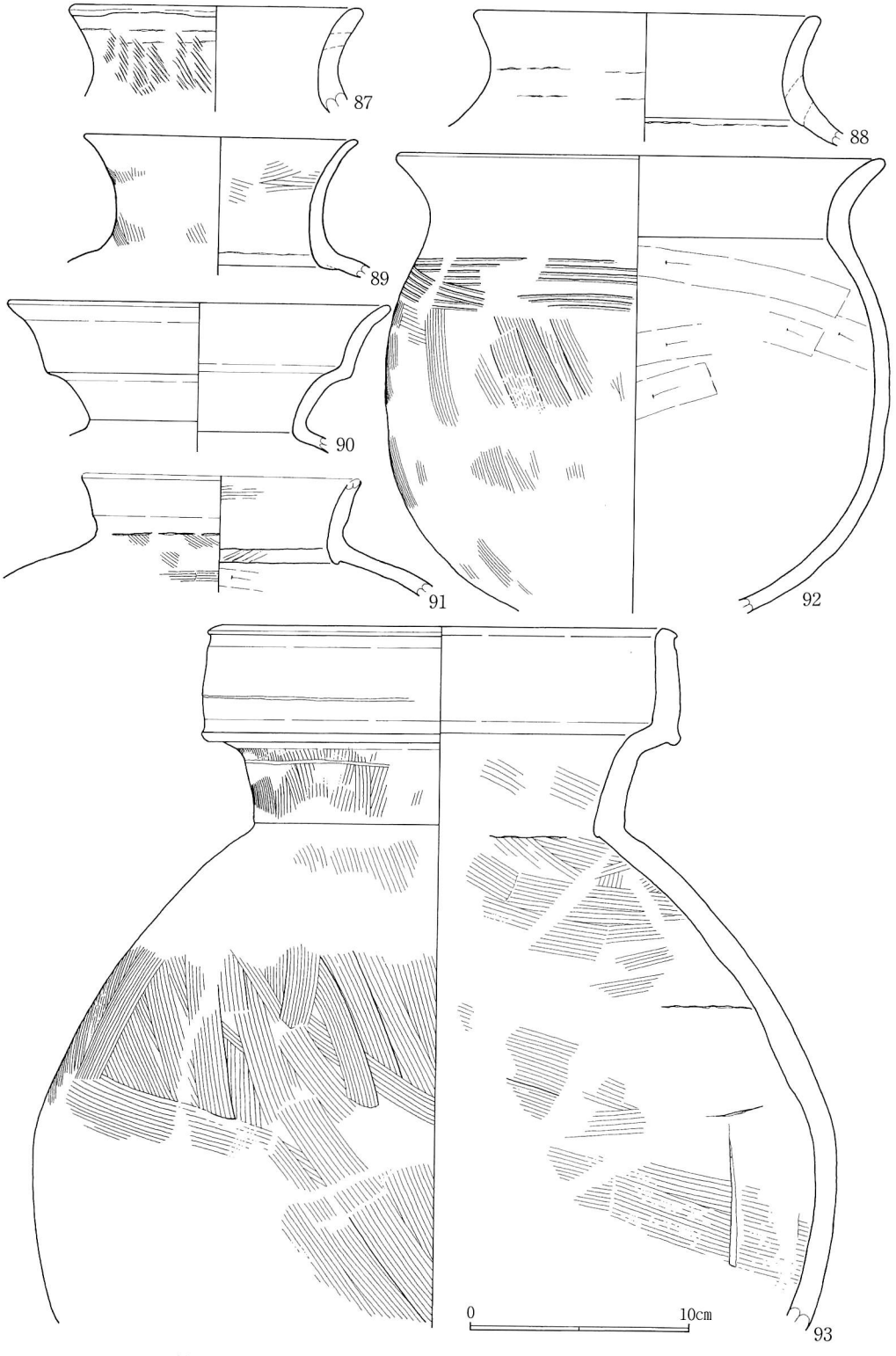
第72図　テラス遺構とその周辺の土師器分布図（口端残存資料と図示資料に限る）



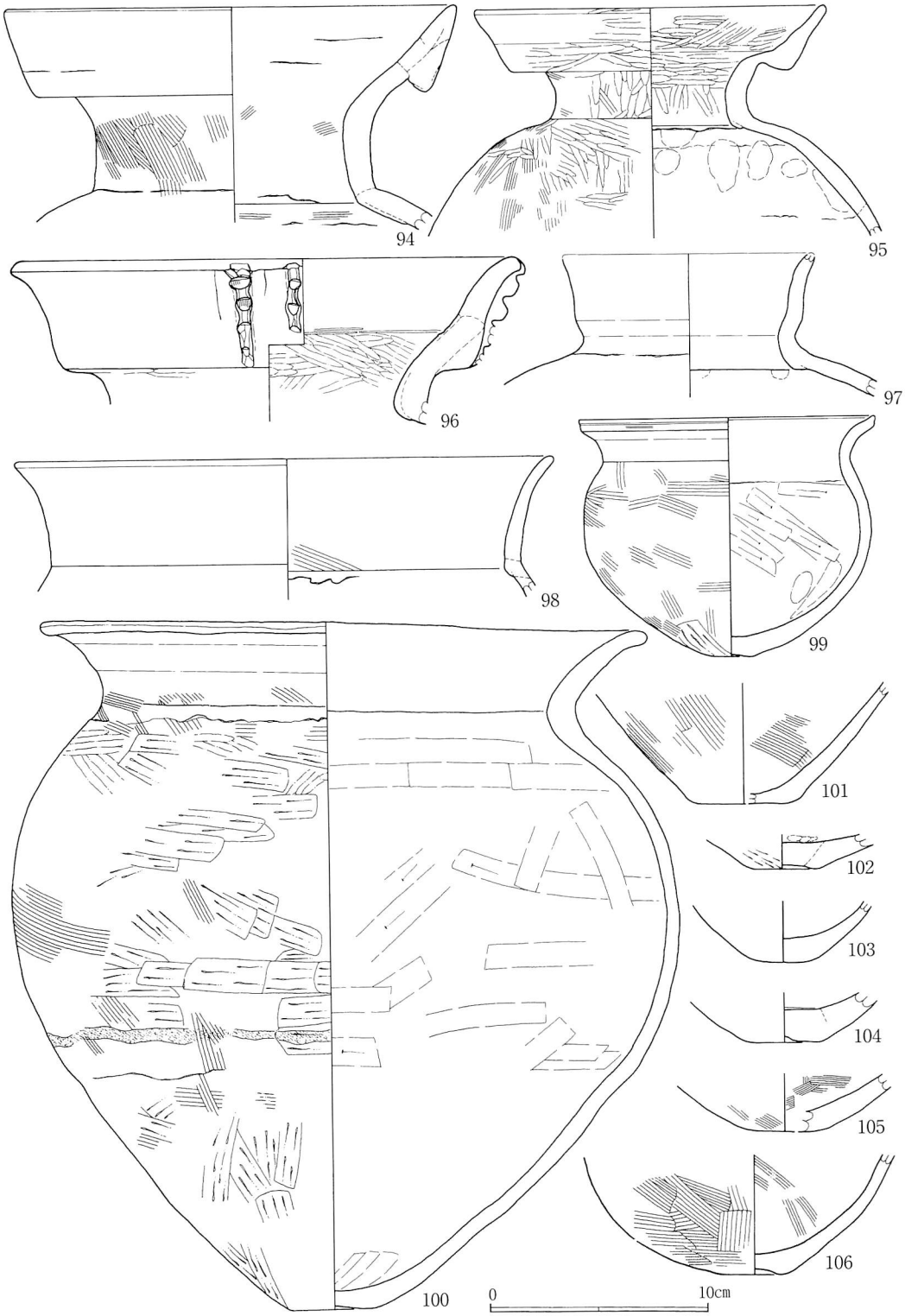
第73図　下段テラスにおける土師器の垂直分布（東西・南北セクションベルトの分布）



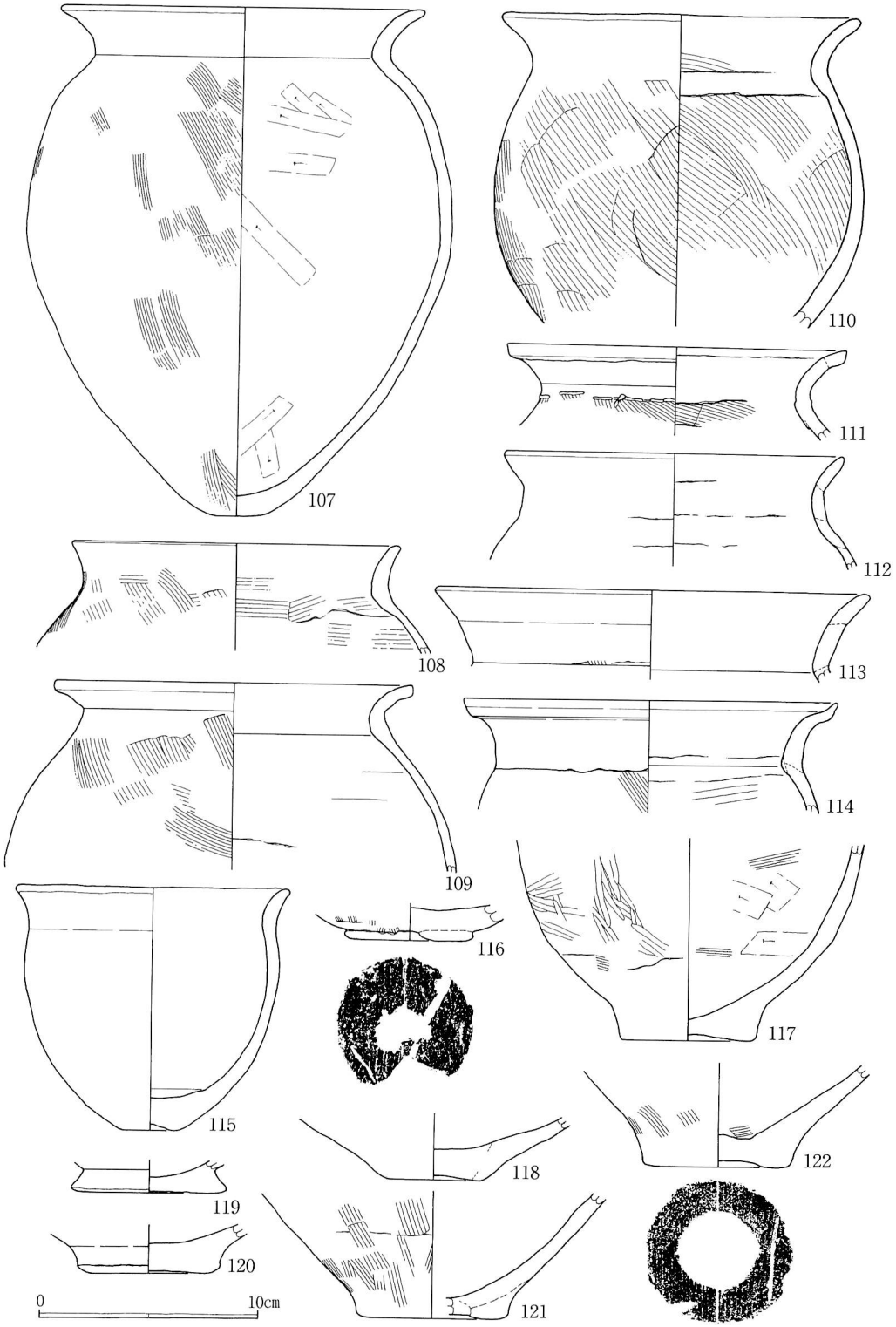
第74図　テラス遺構・上段テラス下土坑群の土師器－1



第75図　テラス遺構・上段テラス下土坑群の土師器－2



第76図　テラス遺構・上段テラス下土坑群の土師器－3



第77図　テラス遺構・上段テラス下土坑群の土師器－4

縦位のハケメを体部上位の深い横のハケメで切っている。89はA2類。90はD2類。93はG類。肩部は張らず、頸部と体部の内外面にハケメ調整を行う。また、口縁部と頸部外面で横方向に線状の刻みが認められるが、一周はしない。頸部ではハケメを切っている。形態は山陰系であるが、体部内面にハケメ調整を残すなど在地の調整技法である。94・95・96はF類。94は95に比べ頸部が長く、ヘラミガキが行われないなど粗雑である。96は棒状浮文をもつ二重口縁壷。棒状浮文には1列4箇所の削りが行われており、それぞれハケメ痕を残す。口縁部の成形は、口縁下部内外面を粗くヘラミガキした後に口縁上部を接合している。97はC1類。116～122は壷の底部と推測する。116・122の底部外面には木葉痕が認められる。

甕（98～115）　98・100・107・108・110・112・115はA3類。98は長めの口縁部が直線的にのびる。100は大型の甕。口縁端部は外側に屈曲している。外面調整にヘラケズリを多用するなど他の甕の調整と異なる。また、体部中程に色調の異なる粘土紐が認められる。ススは口縁部と体部中位に付着。107はa種。内面にはコゲが認められる。108は頸部の屈曲が弱い。a種。110はa種。体部は内外面とも密なハケメ調整。ススは外面全体に付着。112はe種。115は小型のもの。底部は上げ底。99・114はA1類。99は小型品。e種に含める。114はe種。遺存する範囲の外面全体にスス付着。109・111・113はA2類。109・111ともに体部から頸部までなだらかにのび、屈曲して短い口縁部が外へのびる。この形態は1号住居址の21・22でも認められる。113は口縁部が直線的にのび、端部でわずかに面をもつ。胎土は異質で、北方系のものに近い。101～106は底部である。101は比較的幅の広い平底と考えられる。上げ底のもの（102・106）、底部中央が窪むもの（104）、丸底のもの（103？・105）などがある。

D　テラス遺構周辺斜面（第78図～80図）

テラス遺構と上段テラス下土坑群の隣接斜面をこれとする。具体的な範囲は第81図右に示すとおりである。接合関係からみて、多くは下段テラスから転落したものと考えられる。

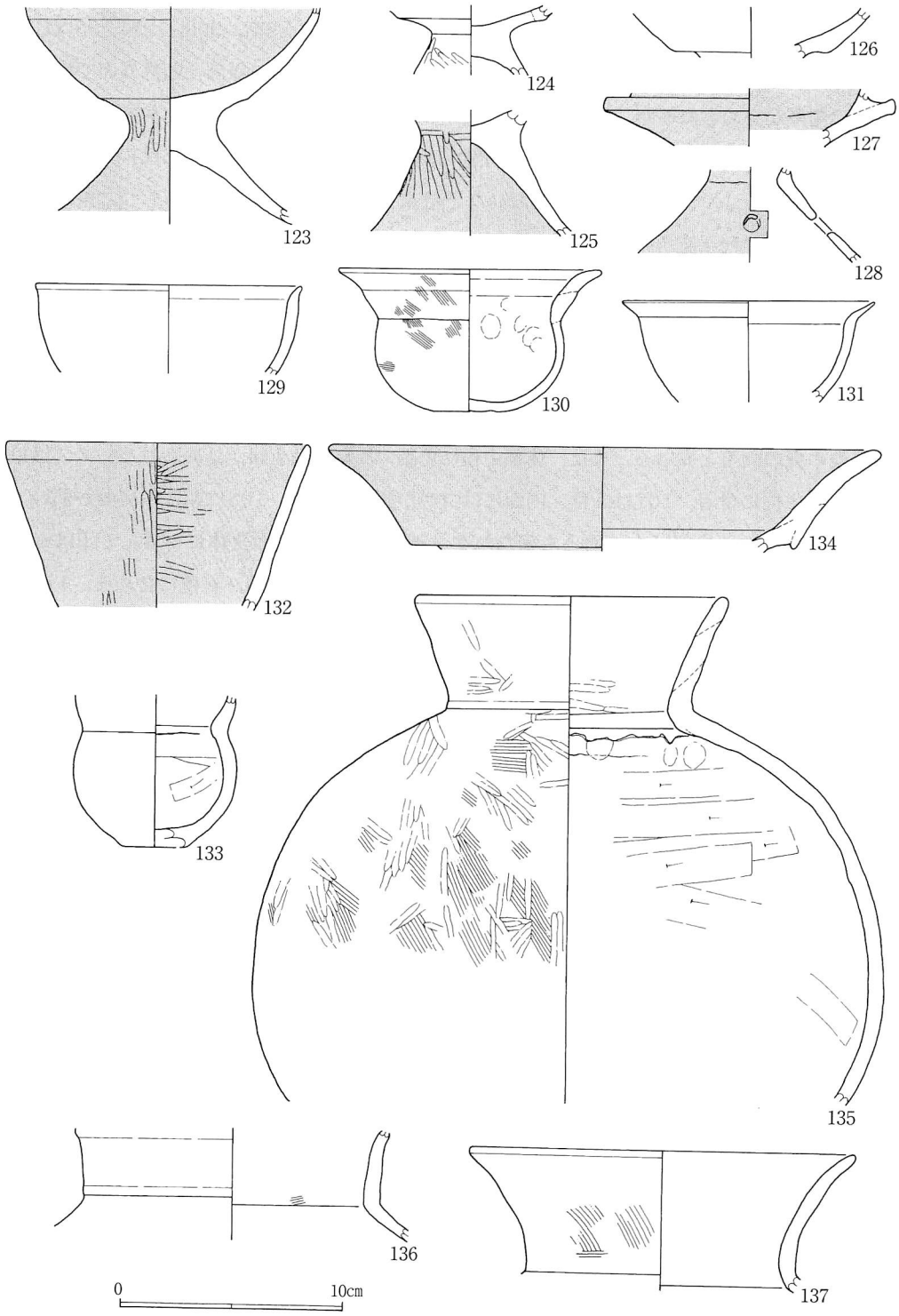
高坏（123～125）　123はA類である。坏部は内湾する椀形のもので、脚部はハ字状に広がる。調整は器面の磨滅で不明な点が多いが、坏部内面と脚部外面ではヘラミガキが認められる。124はB類。125は坏部を欠損している。

器台（126～128）　127はA類。128は透孔が残存部で1箇所認められる。

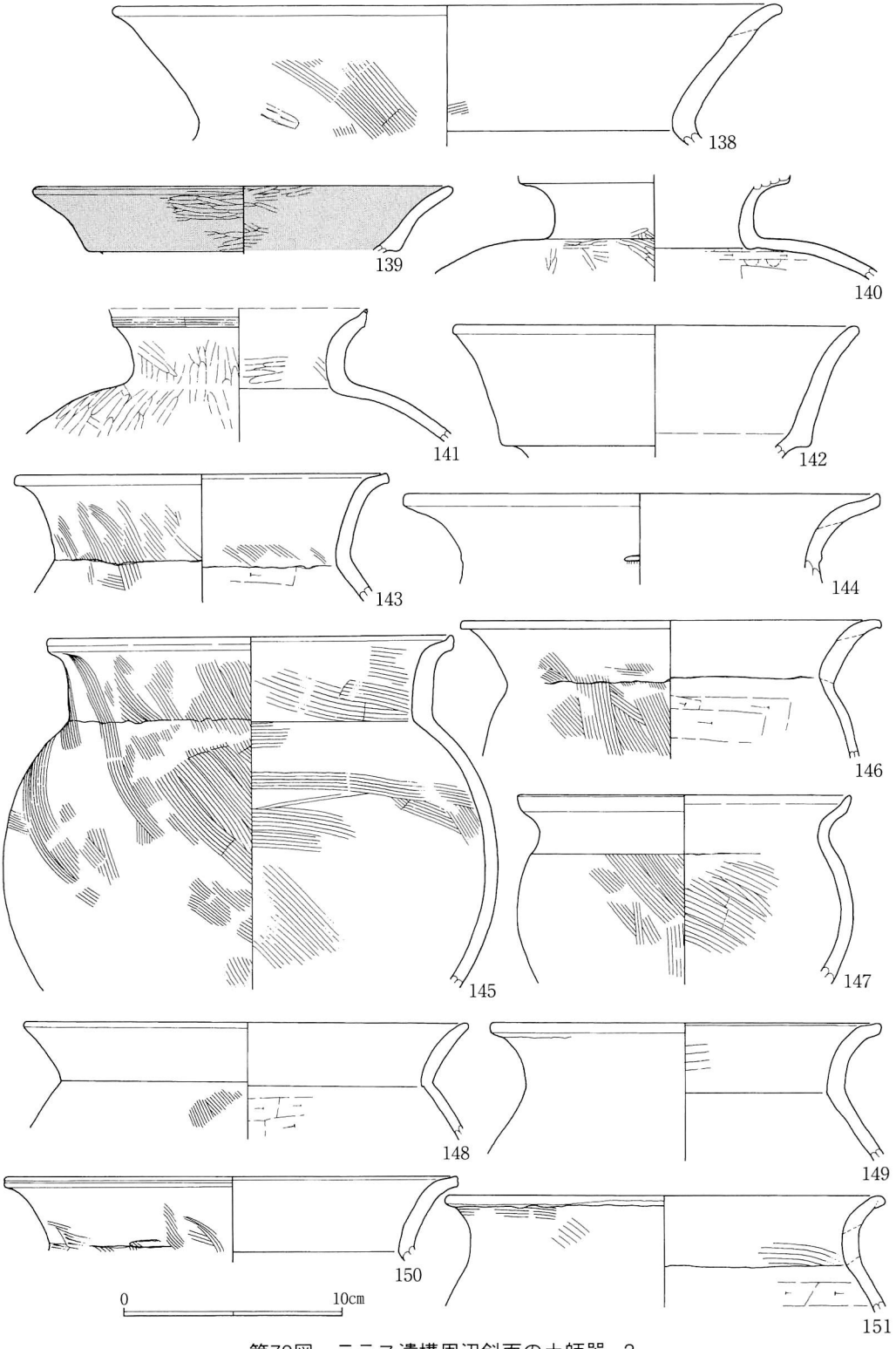
鉢（129～131・162）　129はD3類。130はD5類。扁平な体部に長めの口縁部が外反する。口縁部は比較的厚い。体部外面にはススが付着。131はD4類。口縁端部はつままれている。

小型壷（132～133）　132はD類の口縁部。133は器壁が厚い。

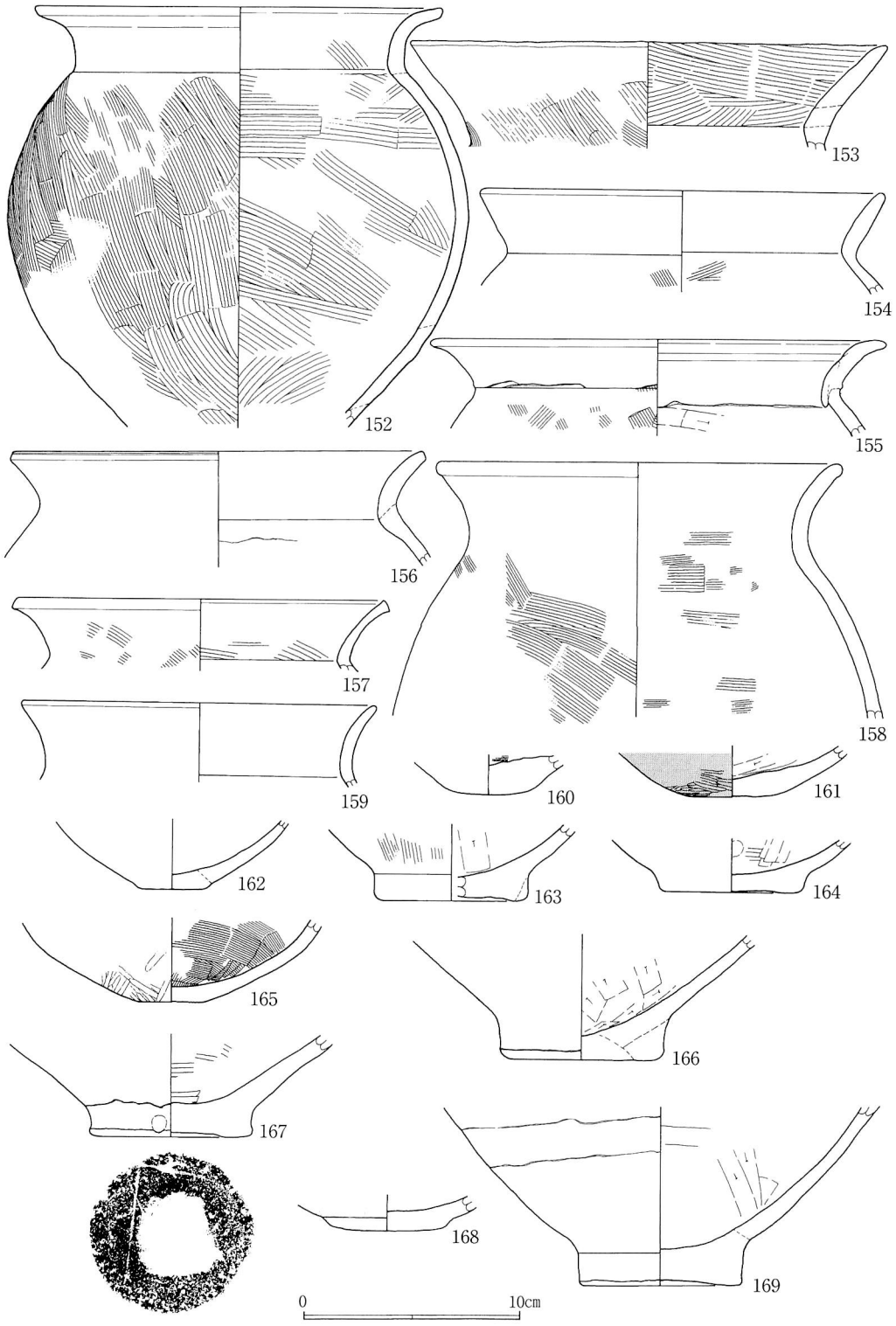
壷（134～143・161・163～169）　134・139はD1類である。135はA1類。ヘラミガキは粗い。136はC2類。端部は外方に短く摘み上げられる。137はA2類。口縁部はしっかりとしたヨコナデ。138はB1類。140・141はE類。140は肩部がかなり張る形態で、口縁部は強



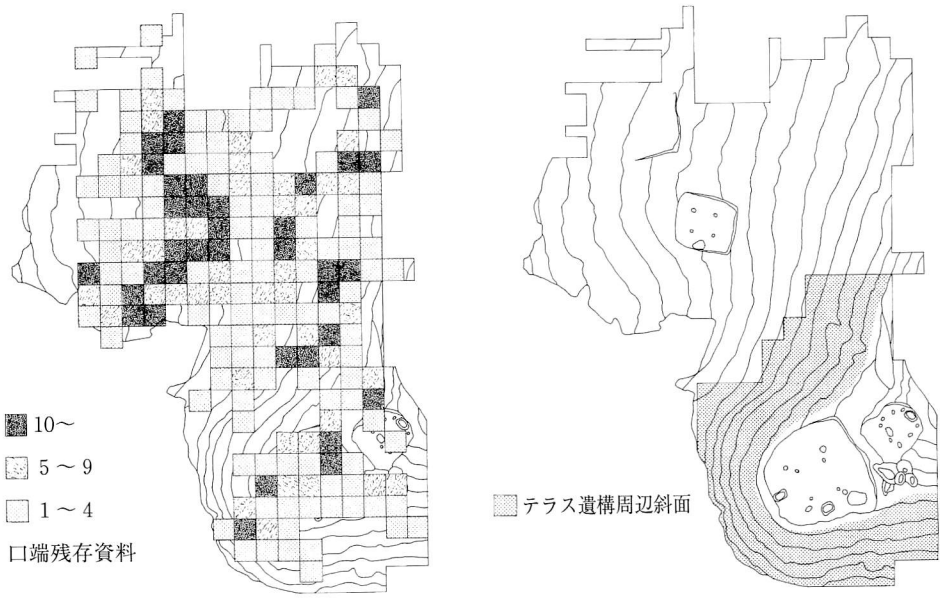
第78図　テラス遺構周辺斜面の土師器－1



第79図　テラス遺構周辺斜面の土師器－2



第80図　テラス遺構周辺斜面の土師器－3



第81図　土師器の分布密度とテラス遺構周辺斜面の範囲

く外反する。141の口縁端部は摘み上げられており面をもつ。面の部分にはハケメ状の痕跡が認められる。143は甕の可能性もあるが、ここでは壷に含めた。161・163～169は壷の底部である。161は丸底で底部外面中央が窪む。外面は依存する範囲全体に比較的丁寧なヘラミガキが認められる。163は底部外面ハケ調整。164は底部外面にハケ調整のあとヘラミガキを、体部外面にヘラミガキを行っている。165は体部と底部外面にヘラミガキが認められる。内面は密にハケメ調整が行われており、底部内面には蜘蛛の巣状のハケメ痕がみられる。色調・調整などから226と同一個体の可能性がある。167の底部外面には木葉痕とみられる痕跡がある。

甕（144～160）　144・146・149・150・152・156・157はA2類である。144はｄ種。146の口縁端部は小さな面をもつ。肩部の器壁の薄さや調整、胎土など242に類似する。ススは遺存する外面全体で認められる。149はａ種。口縁端部の内面はヨコナデによってくぼんでいる。150はｅ種。色調は赤味を帯び、壷の可能性もある。口縁部のハケメは143に類似する。152はａ種で口縁部の外反は強い。156・157ともにａ種で、157は口縁部全体にススが付着。145はA1類でｅ種。ススは口縁端部と体部上半で認められる。147はC類。148・153・154・155・158・159はA3類。148はａ種で頸部の屈曲は強め。155はｃ種。頸部の屈曲は鋭い。153は内湾しながら長くのびる口縁部で口縁部外面にスス付着。154はａ種。158はａ種。頸部の屈曲は弱い。ススは頸部周辺を除いて付着。159はａ種。160は丸底の底部。

E　**遺構外**（第82図～87図）

上記以外の場所から出土した資料を遺構外として図示した。口端残存資料に基づく調査区全

体の分析状況は、第81図左のとおりである。

高坏（170～193）　170～174・185～187・191～193はＣ類。外面は調整の不明な点が多いがヘラミガキ。187・191は内面に粘土紐痕が明瞭に確認できる。193は外面の縦位のヘラミガキが非常に丁寧で、他と比べ長脚のものである。175・176・183はＢ類。180はＤ類と考えられる。

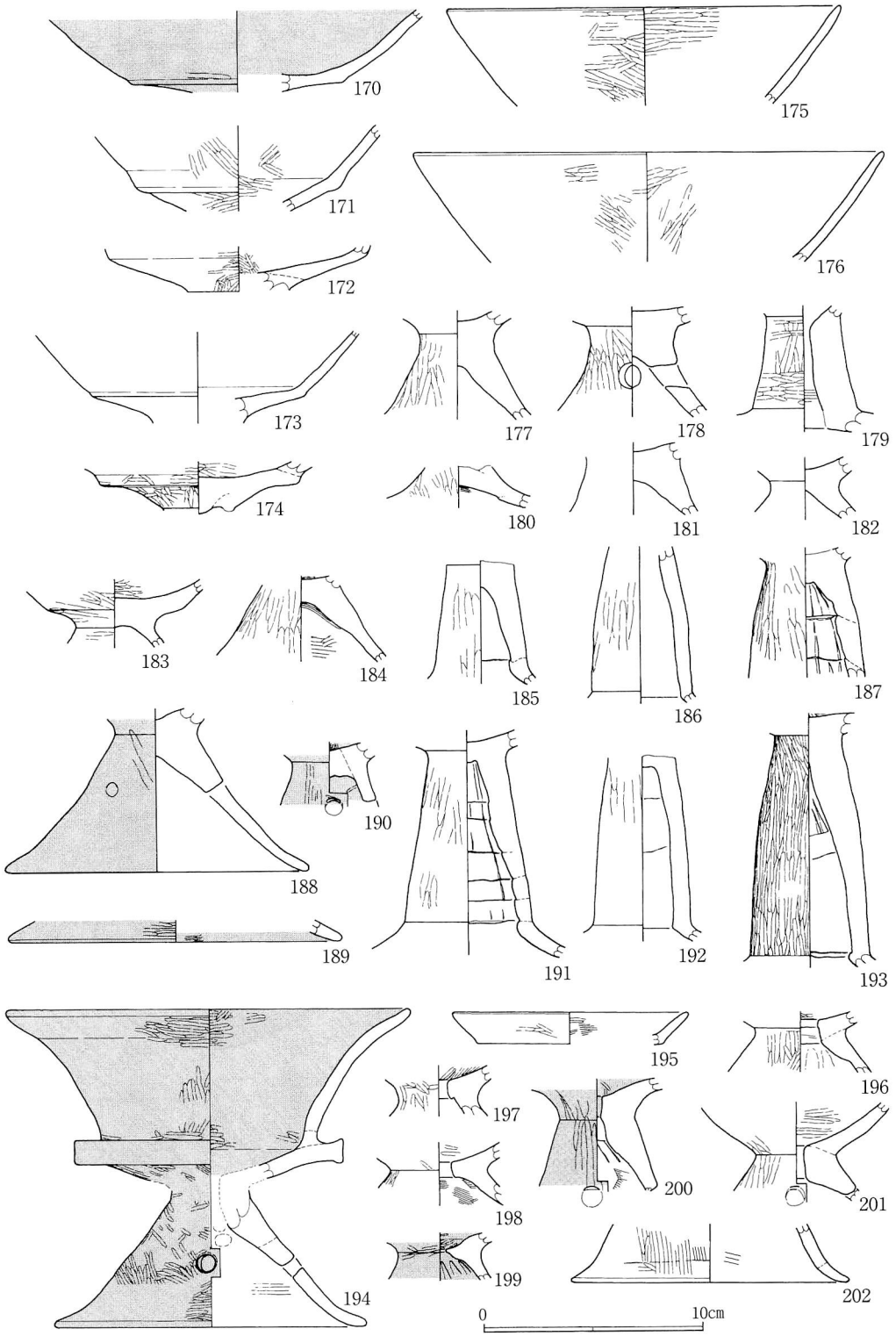
器台（194～202）　194はＡ類で、受部の底部から脚部にかけて接合していない。195は器台Ｃ類であろうか。200はＤ類。

鉢（203～216）　203はＡ2類。内外面とも横位の丁寧なヘラミガキ。204はＤ1類。205はＤ4類。206・207・212はＤ2類で、206は比較的丁寧なヘラミガキ。208・210はＤ3類。209はＡ4類で比較的丁寧なヘラミガキが確認できる。213はＢ類。内外面とも粗いヘラミガキ。214はＤ6類。底部ではヘラケズリが確認できる。外面の体部中位にススが付着。216はＣ1類。

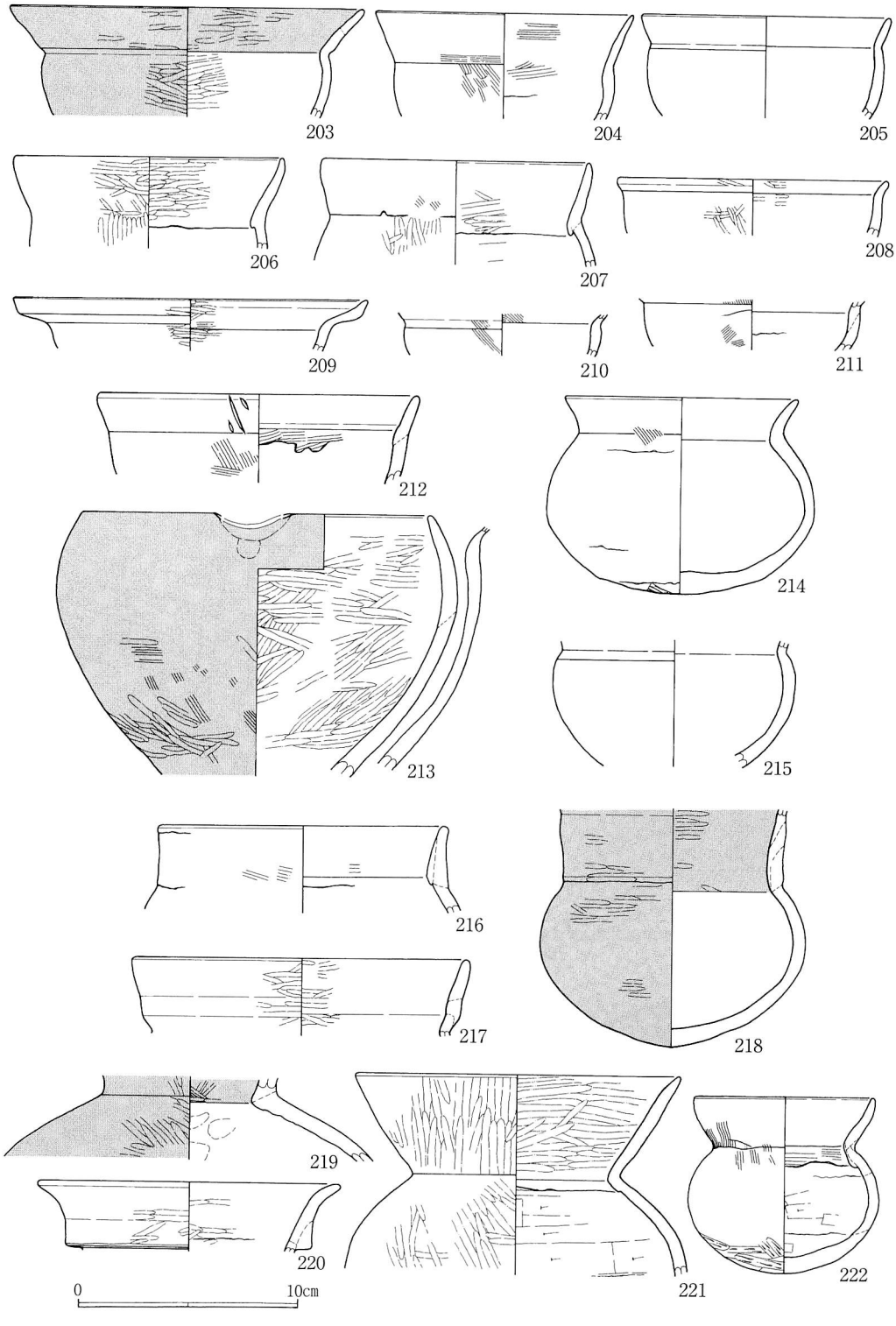
小型壷（217～224）　218はB類で、尖り気味の丸底。219はD類。220はA類。221はC類。222はＦ類。口縁部は内湾する形態で、外面は体部との接合部から口縁部にかけて縦位のハケメ痕を残す。体部中位から底部にかけてヘラケズリが認められる。223はＥ類。外面と口縁部内面ヘラミガキ。224はＥ類と推測する。外面に粗いヘラミガキが認められる。内面はナデ。

壷（225～240・275～284）　225は壷Ｂ1類。226はＡ1類か。下膨れした体部で、外面はハケメのち粗いヘラミガキ、内面は密な横方向のハケメが認められる。器壁は全体的に薄めである。227はＤ1類。228はＣ1類。229・235はＦ類。229では粗いヘラミガキが認められる。235は内面の粘土紐痕の箇所がくぼむ等かなり粗い作りである。230・232はＡ1類と考えられる。230はハケメ後ヨコナデ。232の外面は縦位の粗いヘラミガキで、内面は横位のハケメとヘラケズリが行なわれている。口縁部は内湾し、他と比べ異質である。231はＣ3類。233・237～239はＤ2類。233の内面はヘラミガキで、外面はヨコナデ。237は有段部を垂下させる形態で、内外面で粗いヘラミガキが確認できる。口縁端部を面取りする。238は内外面で比較的丁寧なヘラミガキを行っている。器壁は厚い。239は段部に刺突文が認められる。234はＣ4類に含める。236はＣ6類。折り返した口縁に刺突文が確認される。240はＣ5類。直立的な頸部から屈曲し、外方に内湾しながら短くのび、再び上方に立ち上がる。内外面とも比較的丁寧なヘラミガキ。外面及び破損面にススが付着しており、割れた後ススが付着したと考えられる。275～284は壷の底部と考える。276・277は底部外面に１本、線状の削痕を確認できる。276の削痕は木葉痕の可能性もある。279の底部外面には１本の線状の削痕がみられる。木葉痕の可能性もある。284の底部外面には木葉痕が認められる。

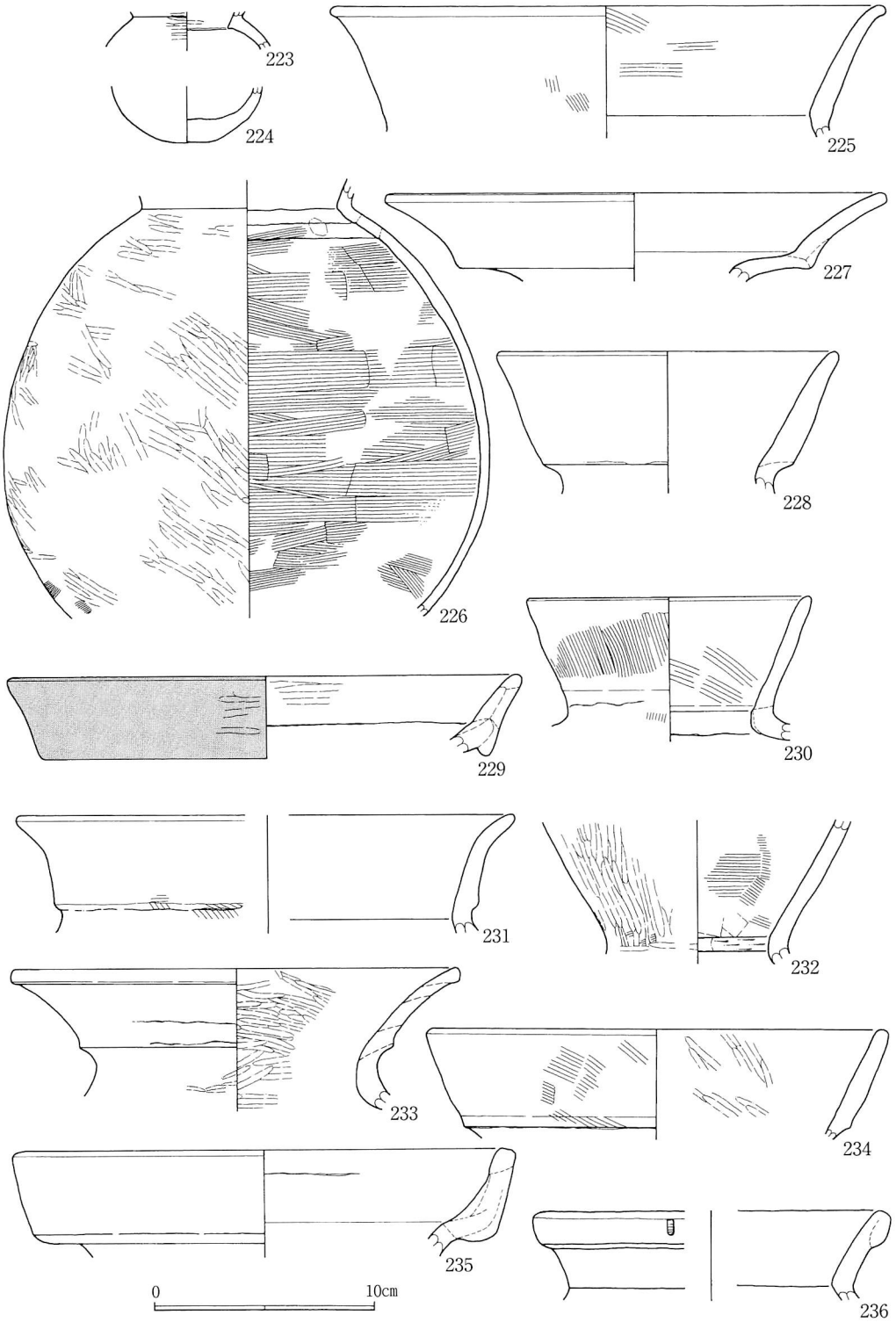
甕（241～274）　241・243・263はＡ1類。241はａ種で口縁部外面にスス付着。243はａ種、263はｄ種。245・246・248・250・253・257・259・261・262はＡ2類。245はａ種で外面



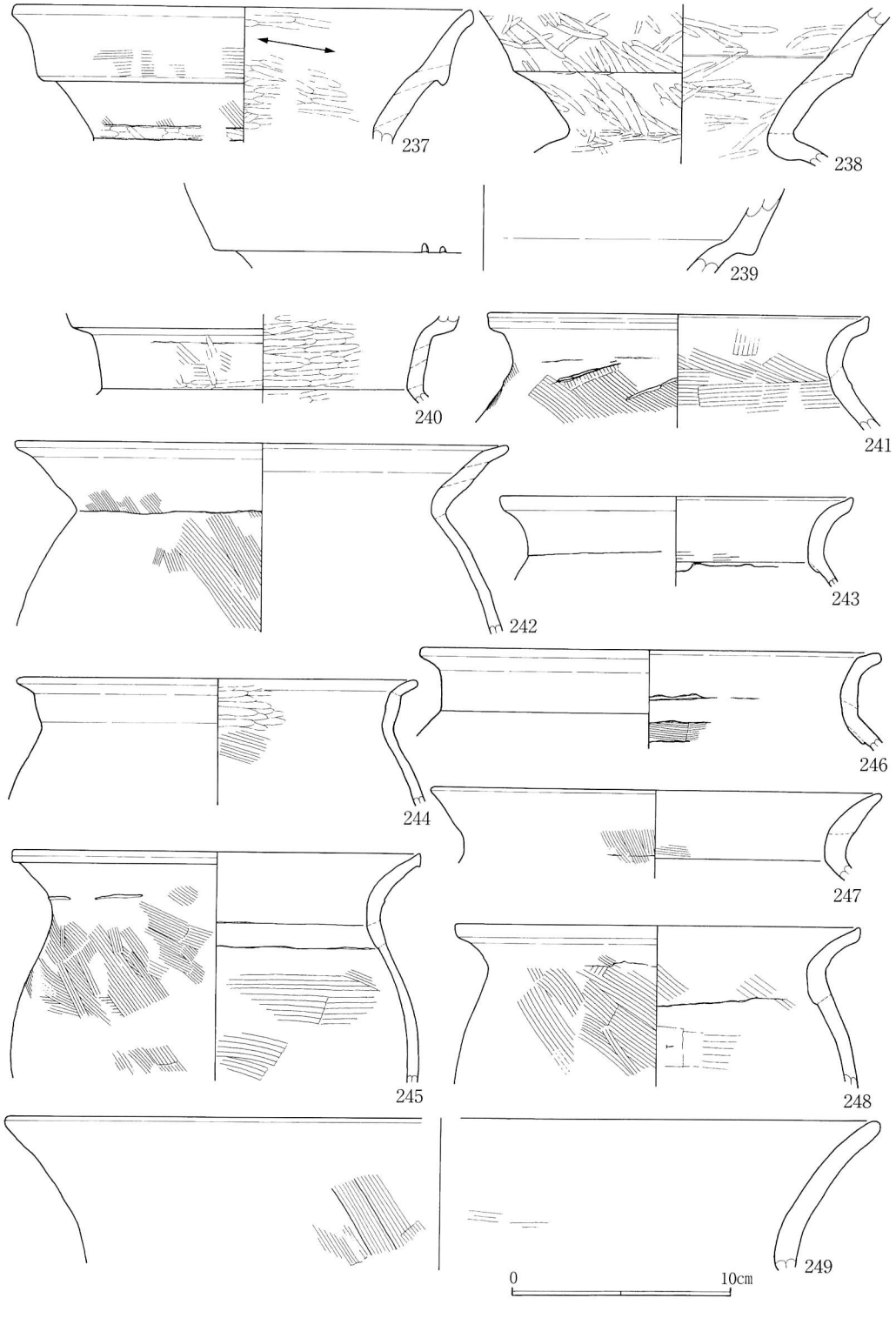
第82図　遺構外の土師器－1



第83図　遺構外の土師器－2

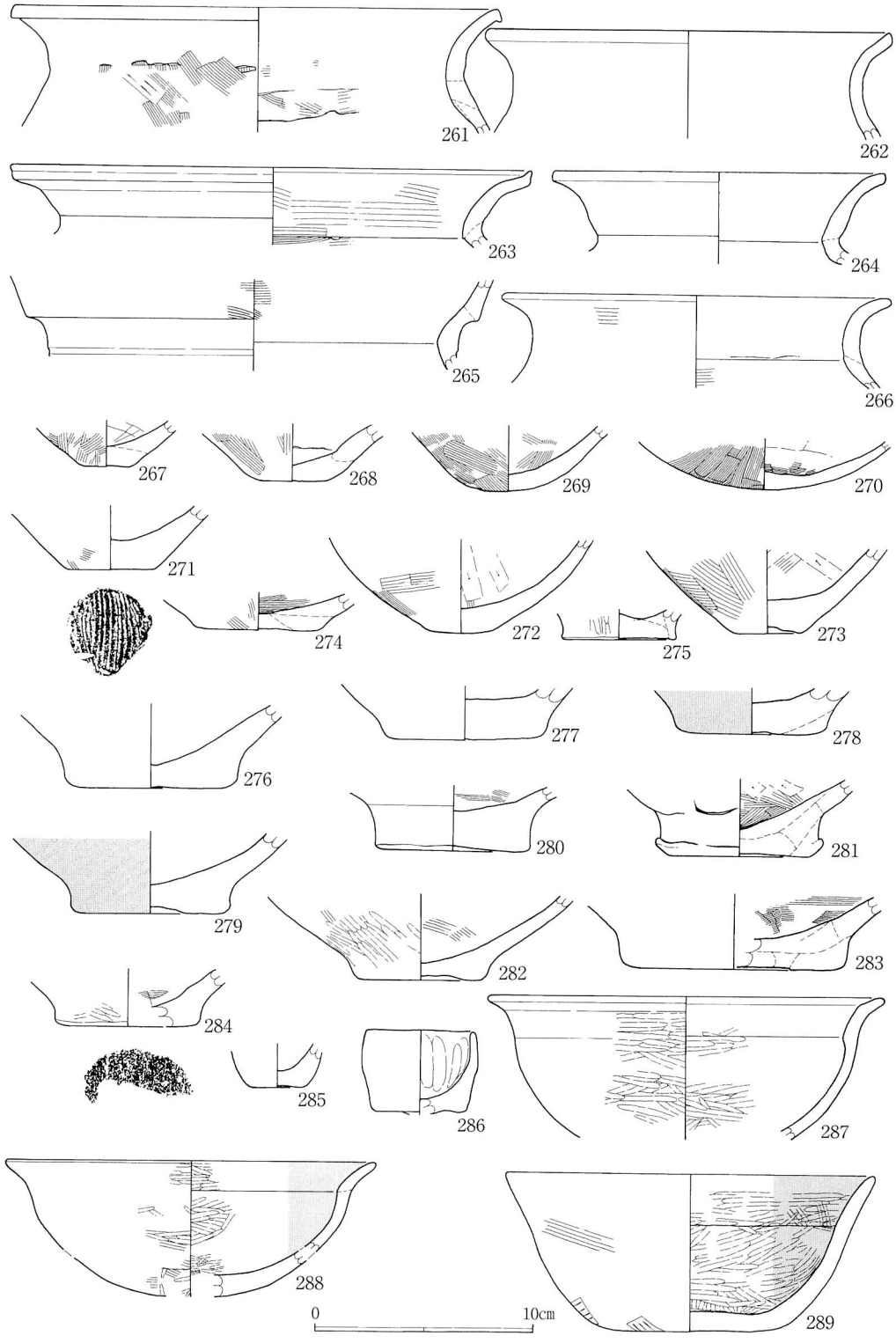


第84図　遺構外の土師器－3



第85図　遺構外の土師器－4

第86図　遺構外の土師器－5



第87図　遺構外の土師器－6

全体にスス付着。246はｅ種。248はａ種。250はｅ種。体部内面中位で、横方向に並んで２本の線刻が認められる。ススは頸部周辺を除いて付着。253はａ種であるが、比較的長い口縁部が直線的にのびる。口縁端部の面には横方向にハケ状の痕跡が認められる。内面の口縁部の屈曲は強い。ススは頸部周辺を除き認められる。259・261・262はａ種。242・244・247・249・251・252・254～256・258・260・264・266はＡ3類に該当する。242はｂ種で口縁部のヨコナデがしっかりしている。体部の器壁は薄い。依存する口縁部から体部上半にかけ外面にススが付着する。244はｅ種で外面全体にスス付着。247はａ種。249は外面全体にスス付着。251は頸部を除いてスス付着。252はａ種で比較的長い口縁部が外反し内面の屈曲は強い。254は全体的に薄く、頸部の屈曲は弱い。口縁部端部は摘まれて尖り気味になっている。ａ種で外面全体にスス付着。255はａ種で短い口縁部が直線的にのびる。256はａ種。頸部の屈曲は弱い。頸部を除いてスス付着。258はａ種。頸部で強く屈曲して短い口縁部がのびる。外面全体にスス付着。260はｆ種で266はａ種。265はＤ類。267～274は甕の底部と推測する。幅の狭い平底のもの（267・268・271～273）と比較的広い平底のもの（274）、丸底のもの（269・270）がある。また、269～272・274の底部外面にはハケメ調整が認められる。270は底部内面に蜘蛛の巣状のハケメがみられ底部と考えるが、外面の形態や調整は甕の体部のようである。271は古墳時代後期に属する可能性がある。272は丸底に近い平底。

手づくね土器（285・286）　285は調整不明。286は外面ナデ。底部外面中央が突起している。

坏（287～289）　287～289は古墳時代後期と考えられるものである。287・288はＡ類。287は口縁部が緩やかに外反する形態であるが、内面では強く屈曲するため稜線を明瞭に残す。内外面とも比較的丁寧なヘラミガキが行われている。また、体部内面の下半の一部が黒色を呈していることから、内面黒色処理が行われている可能性がある。288は体部中位から体部下位にかけて接合しない。内外面ヘラミガキで、内面は炭素の吸着により黒色処理される。289はＢ類。丸みをもった平底の底部から内湾気味に体部がのびる。口縁部と体部との境は外面ではわずかにくびれる程度であるが、内面では稜線が認められる。外面はハケメとナデ調整で、底部付近ではヘラケズリも認められる。内面は丁寧なヘラミガキが施され、炭素の吸着により黒色処理されている。

（３）土器の位置づけ

Ａ　編年

当遺跡の古墳時代前期の土器は、既存の編年案に従えば坂井・川村編年［坂井・川村1993］のⅡ－３期から山三賀編年［坂井1989］の古墳Ⅱ期の範囲におおむね収まると考える。

当遺跡の前期の土器の変遷は、形態や器種の消長などからおおむね４期に区分することがで

山三賀編年	坂井・川村	新潟シンポ編年	春 日	上越編年	漆町編年	本 書
坂井［1989］	［1993］	日本考古学協会［1993］	［1998］	川村［2000］	田嶋［1986］	
	Ⅱ－３期	７期	１期	３段階	７群	古墳Ⅰ期
古墳Ⅰ期	Ⅲ期	８期	２期	４段階	８群	古墳Ⅱ期
	Ⅳ期	９期	３期	５段階	９群	古墳Ⅲ期
古墳Ⅱ期		10期	４・５期	６段階	10群	古墳Ⅳ期
				７段階	11群	
古墳Ⅲ期			６期	８段階	12群	

第６表　編年対応表

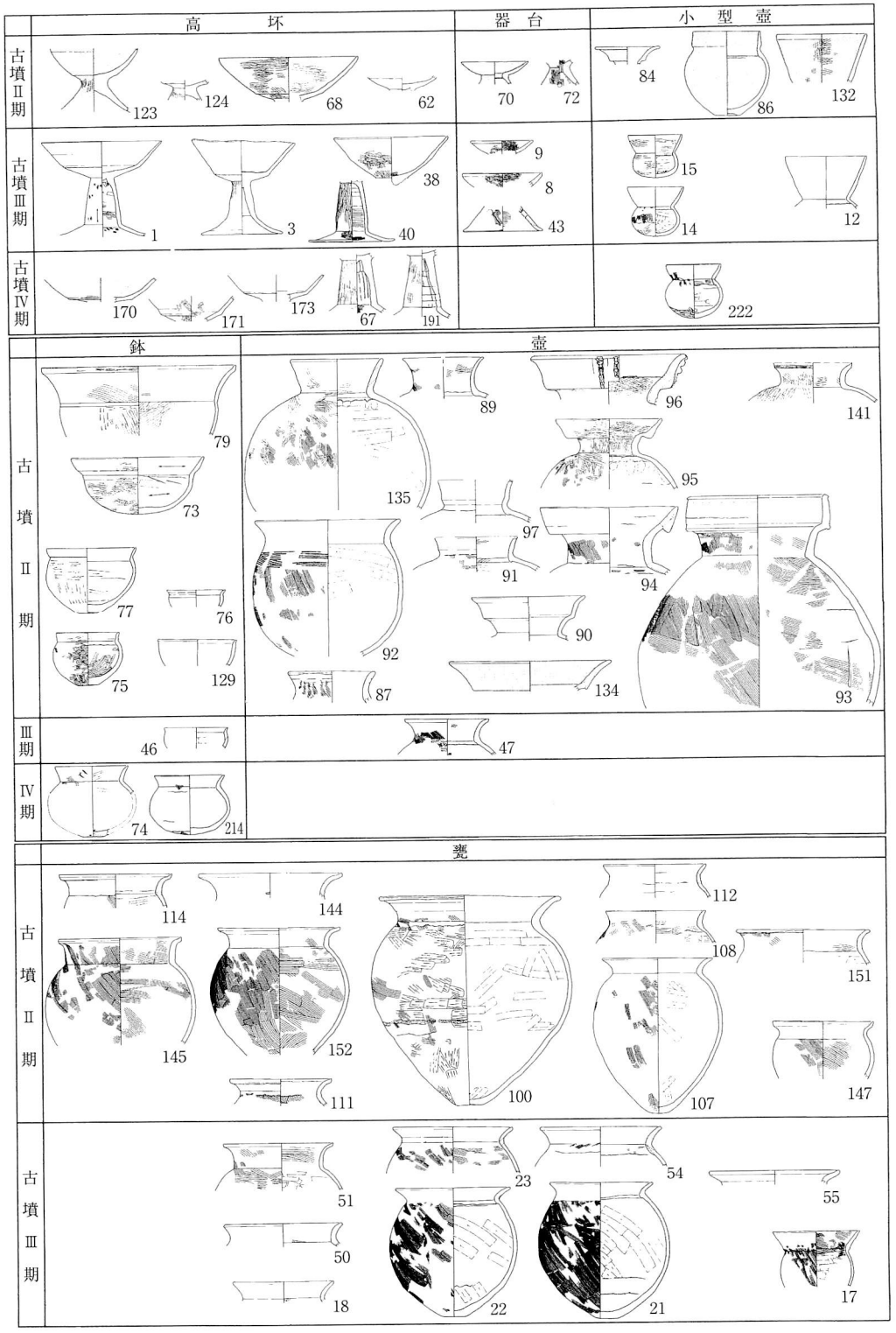
きる。以下ではそれぞれ古墳Ⅰ～古墳Ⅳ期として説明する。既存の編年案との対応関係は、おおむね第６表のようになると考える。

遺構では、住居址以外に西側小テラスと下段テラス、上段テラス下土坑群から一定量の出土が認められる。これらの資料を基本にするとおおむね古墳Ⅱ期（西側小テラス、下段テラス・テラス周辺の多く、上段テラス下土坑群）、古墳Ⅲ期（１・４号住居、下段テラス・テラス周辺の一部）、古墳Ⅳ期（下段テラスの一部）に分けられる。下段テラス・テラス周辺出土土器は、古墳Ⅲ・Ⅳ期のものも少量確認できるが、その主体を占めるのは古墳Ⅱ期である。また遺構外の資料は古墳Ⅰ期からⅣ期の幅におおむね収まると考えられる。他には古墳時代後期と考えられる内面黒色土器が遺構外から出土しているが、古墳Ⅳ期から古墳時代後期までの間の確実な資料は認められない。

変遷図（第88図）に関しては、古墳Ⅱ期の資料は各テラス・テラス周辺・上段テラス下土坑群出土資料、古墳Ⅲ期の資料は住居址出土資料のみ、古墳Ⅳ期は下段テラス以外に遺構外出土資料も加えて作成している。また、古墳Ⅰ期に関しては遺構出土の資料で確実に比定できるものがないと判断し、図示はせず文章で指摘するにとどめた。

古墳Ⅰ期　県内における該期の基準資料として、近くでは旧黒崎町の緒立遺跡２号住居址出土土器［黒崎町教育委員会1983］がある。緒立２号住居址出土土器を見てみると、高坏では坏の底部と口縁部の境で段をもち口縁部が長く外反する在地系のものが認められ、器台は口縁部が直線的、または外反しながらのびる形態のものが多く、口縁端部は短く摘み上げられたり面をもつものが認められる。調整はいずれも丁寧で赤彩されるものが多い。壷類では丁寧な調整のものが多く有段の口縁部も定量みられる。甕では体部に比して口縁部の広がりが弱いものが多く、口縁端部を内側に傾斜させて面をつくるものが定量みられる。また蓋も１点確認される。

当遺跡では、緒立２号住居址のような在地系の高坏は認められず、器台は受部が内湾する形



第88図　南赤坂遺跡における土器の変遷

態が多い。また、甕の口縁端部を内側に傾斜させて明確な面をもつものはほとんど認められず、蓋も確認できない。以上のことから、当遺跡出土土器の大半は古墳Ⅱ期以降と考えられる。確実に該期に比定できる資料はないが、203、218、220、227、231、239、244、253などは形態や調整などで古い様相が認められる。

古墳Ⅱ期　高坏は古墳Ⅲ期以降主体を占める畿内系のC類はほとんど認められず、在地のものや東海系のものが主体を占める。また小型壷・鉢・壷では有段口縁のものが定量存在する。東海系の壷F類も比較的多く認められる。また、内面ハケメ調整の在地の調整技法による山陰系の壷も確認できる。甕ではA類が主体を占めるが、B類・C類もわずかながら見られる。口縁端部の形態はA2類・A3類が主体であるが、A1類も少ないながら認められる。口縁部は外方に長くのびる。古墳Ⅲ期に比べ赤彩されるものや調整の丁寧なものが比較的多く認められる。

古墳Ⅲ期　1号住居址・4号住居址は高坏では畿内系のC類が主体を占め、小型壷E類が定量認められる点に特徴がある。古墳Ⅱ期で見られた東海系高坏や口縁端部を上方に摘み上げる甕A1類は認められない。甕は古墳Ⅱ期に比べより球形を呈するものが存在する。高坏・小型壷は4を除けば比較的粗いヘラミガキ調整であるが、器台には丁寧なヘラミガキの精製品がみられる。古墳Ⅱ期に比べ、赤彩が施されるものや調整の丁寧なものの割合は少ない。

古墳Ⅳ期　良好な資料はないが、古墳Ⅲ期より新しい様相の土器を抽出して図に示した。下段テラスの中央部と、テラスから離れた西側の斜面で比較的多く認められる。170・171・173・174の高坏の坏部は、古墳Ⅲ期に比べて口縁部の長さが短くなり、外傾度を増す点や、坏部の段が明瞭になる点などは新しい様相と考えられる。脚部は67のような太めのものは古墳Ⅲ期では認められず、古墳Ⅳ期以降と推測される。また、191の脚部は脚部内面に粘土紐の単位を明瞭に残している点を重視して古墳Ⅳ期に含めた。214は最大径を体部中位にもち口縁部が短く外反する形態や底部にヘラケズリ痕が認められる点などから古墳Ⅳ期以降のものと考えられる。県内での類例は多くないが、大潟町丸山古墳出土の土器［大潟町教育委員会1988］に類似する。222は最大径を体部中位にもち、器高に比して口縁部が短い点、体部下半にヘラケズリの調整痕を残す点などは新しい様相と考えられる。山三賀Ⅱ遺跡のSI115例［新潟県教育委員会ほか1989］に比較的近い。

古墳時代後期　土師器坏3個体分が確認されるのみである。このうち、288と289の内面には黒色処理が行われている。出土量が少なく、いずれも包含層からの出土であるため細かな時期比定は困難であるが、289の形態はMT15型式の須恵器が出土している三条市の保内三王山5号墳の土師器［三条市教育委員会ほか1989］の中に類例が認められる。また、他の2点もその時期と矛盾しない。これら3点はおおむね6世紀を中心とした時期と推測する。

B　胎土

1号住居址

器種	長石・石英 A	長石・石英 B	長石・石英 C	凝灰岩 A	凝灰岩 B	凝灰岩 C	黒曜石含
高坏・器台		1	10			11	
小型壷・鉢	1		4			5	
壷		1	3	2	1	1	1
甕		6	6	2	6	4	1
計	1	8	23	4	7	21	2

4号住居址

器種	長石・石英 A	長石・石英 B	長石・石英 C	凝灰岩 A	凝灰岩 B	凝灰岩 C	黒曜石含
高坏・器台		3	3	2	1	3	
小型壷・鉢			3			3	
壷		2			2		1
甕		5	3		7	1	2
計	0	10	9	2	10	7	3

テラス遺構・上段テラス下土坑群・テラス周辺

器種	長石・石英 A	長石・石英 B	長石・石英 C	凝灰岩 A	凝灰岩 B	凝灰岩 C	黒曜石含
高坏・器台		1	16	1	7	9	
小型壷・鉢		7	12	1	10	8	2
壷	3	7	11	4	4	13	4
甕	2	5	21	4	10	14	5
計	5	20	60	10	31	44	11

土師器合計（遺構外も含む）

器種	長石・石英 A	長石・石英 B	長石・石英 C	凝灰岩 A	凝灰岩 B	凝灰岩 C	黒曜石含
高坏・器台	3	5	51	4	8	50	
小型壷・鉢	1	7	36	1	10	33	2
壷	5	10	25	6	7	27	6
甕	3	16	50	9	23	32	8
計	12	38	162	20	48	142	16

第7表　古墳時代の土師器胎土

10倍のルーペを使い肉眼による観察を行った。対象としたのは、実測図提示資料に限定される。第7表では、そのうち古墳時代後期の土器と手づくね土器、壷・甕の底部を除いたものを集計した。また胎土の項目は①長石・石英の多寡、②凝灰岩の多寡、③黒曜石状岩石の有無の3点に限定した。観察鉱物を上記に限定した理由としては、次項に述べるように北方系土器の多くが石英・長石を比較的多く含んでいるのに対し、土師器は石英・長石をそれほど含まないものが多いと推測されたことと、当遺跡や山谷古墳、御井戸遺跡などの土師器の多くが凝灰岩を含んでいたこと、黒曜石状岩石を含む土器が当遺跡で散見されていたこと等による。①と②に関しては最も各鉱物が認められる箇所について多い（A)、少ないまたは無い（C)、その中間（B）の3分類を、③に関しては有無の2分類を行った。

その結果、土師器は長石・石英を多く含むものが少ない反面、凝灰岩を多く含むものが定量認められた。各器種では高坏・器台、小型壷・鉢などに対し甕で凝灰岩を多く含む割合が高い傾向がうかがえ、器種ごとの胎土の選別が推測される。また4号住居址では凝灰岩を比較的多く含んだ高坏・器台が認められ、1号住居址に比べ調整・胎土において粗雑化が激しい。同じ古墳Ⅲ期の中でも4号住居址の方が新しい様相をもつ可能性もある。また黒曜石状岩石を胎土に含む土器も各遺構で一定量認められる。当遺跡では下段テラス面から黒曜石が出土しており、古墳時代以前の黒曜石を土師器の胎土として再利用していたことが推測される（P75参照)。

なお、黒曜石状岩石を混入した土器は、ほぼ同時期の御井戸遺跡でも確認できる。今後は岩石学的な同定を行なうとともに、遺跡間・地域間比較を進めていく必要がある。

C　他地域との比較

以下では南赤坂遺跡の土器群の時期を上記の時期として検討を進めたい。

①甕の底部形態

計測方法は春日［1994a］と同様である。具体的には甕の底部を①丸底、②底径3cm未満の平底、③3cm以上～6cm未満の平底、④6cm以上のものの4種にわけ、底部が半分以上残っ

ているものについて計測を行った。ただし、計る場所によって②と③のどちらにも該当するものが存在したため、その場合は１個体であれば②と③の両方に0.5ずつ割り振っている。

古墳Ⅱ期では上越の一之口遺跡東地区と比べると、底径３cm以下の平底が多い点、丸底が一定量認められる点、底径６cm以上のものが少ない点などで異なっており、能登・越中とより類似している（第89図）。古墳Ⅲ期では資料が少ないものの、底径３cm以下と３cm以上６cm未満の平底が主体を占める状況は古墳Ⅱ期と変わらないが、丸底がほとんど認められない点が異なっている。遺構外で丸底が３個体認められておりこれらが古墳Ⅲ期に属する可能性もあるが、住居址からは確認できなかった。一之口遺跡東地区と比べると、底径３cm以下の平底が多い点、丸底が認められない点、底径６cm以上の平底が少ない点で異なる。また能登ではこの時期、底径３cm未満の平底が主体を占める様相から丸底のものが大半を占める様相へと変化しており大きく異なる。

以上のように、甕の底部形態では、古墳Ⅱ期・Ⅲ期とも底径３cm未満の平底と３～６cmの平底が主体であり、底径３cm未満の平底が認められない一之口遺跡東地区の甕の底部形態と大きく異なることが確認された。また古墳Ⅱ期では比較的能登の資料と類似しており、春日の能登・越中の土器様相が頸城より距離が遠い蒲原地域により類似するという指摘［春日1994a］を追認できたが、古墳Ⅲ期には丸底が主体とならない点で能登とかなり異なる。

	丸底	3cm未満の平底	3cm以上～6cm未満の平底	6cm以上の平底	総計
１号住居跡	0	2	4	1	7
４号住居跡	0	3	2	0	5
各テラス・テラス周辺・テラス下土坑群	3	8	8	1	20
遺構外	3	8.5	18.5	3	33
南赤坂遺跡合計	6	21.5	32.5	5	65

第８表　甕の底部形態（底部が1/2以上のものに限り集計）

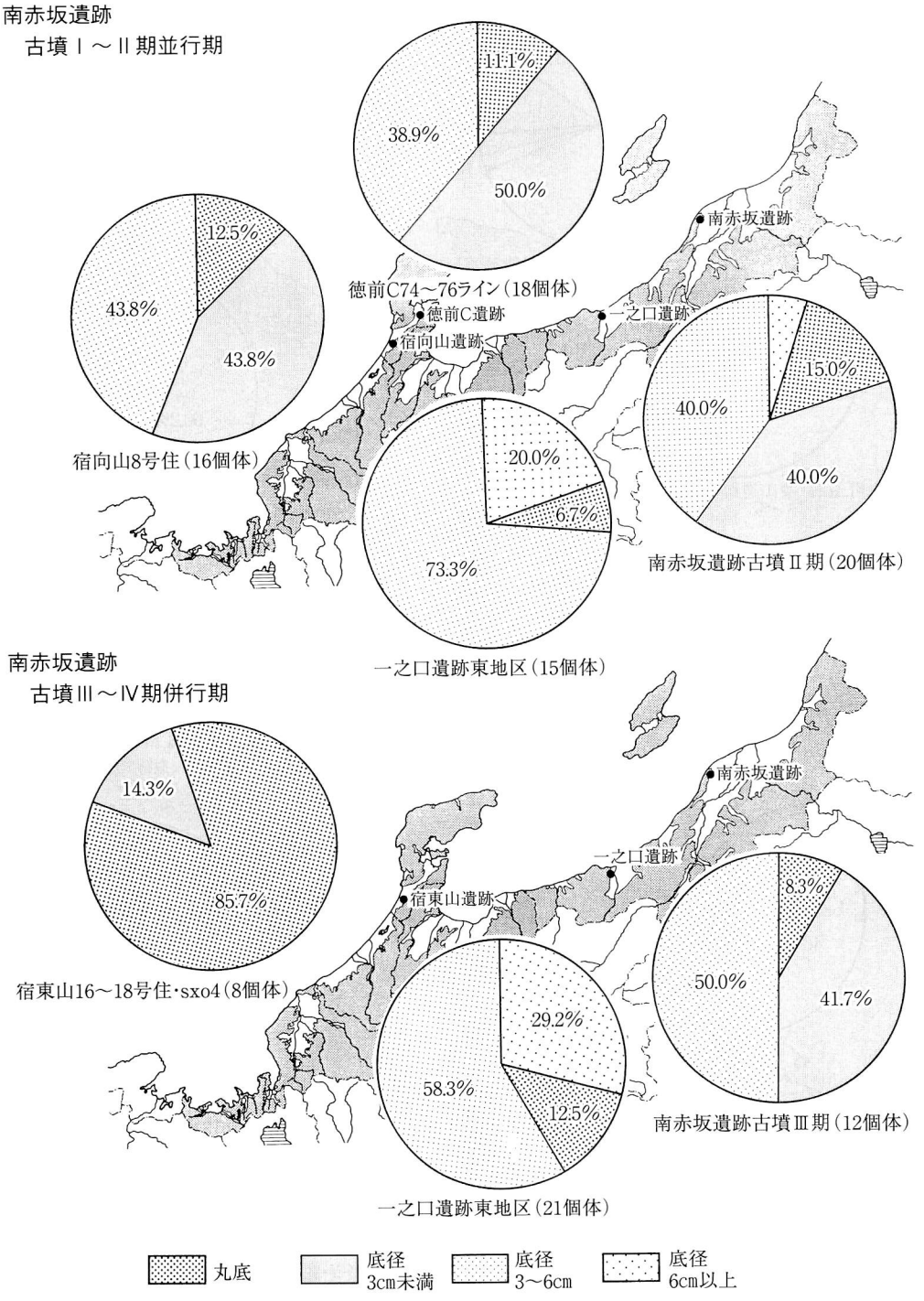
②器種構成比率

計測方法は口縁部残存率計測法を用いた。具体的な方法としては春日[1994ａ]に従い、同心円の直径は５㎜単位、放射線は角度が10度単位で36分割したものを用いた。

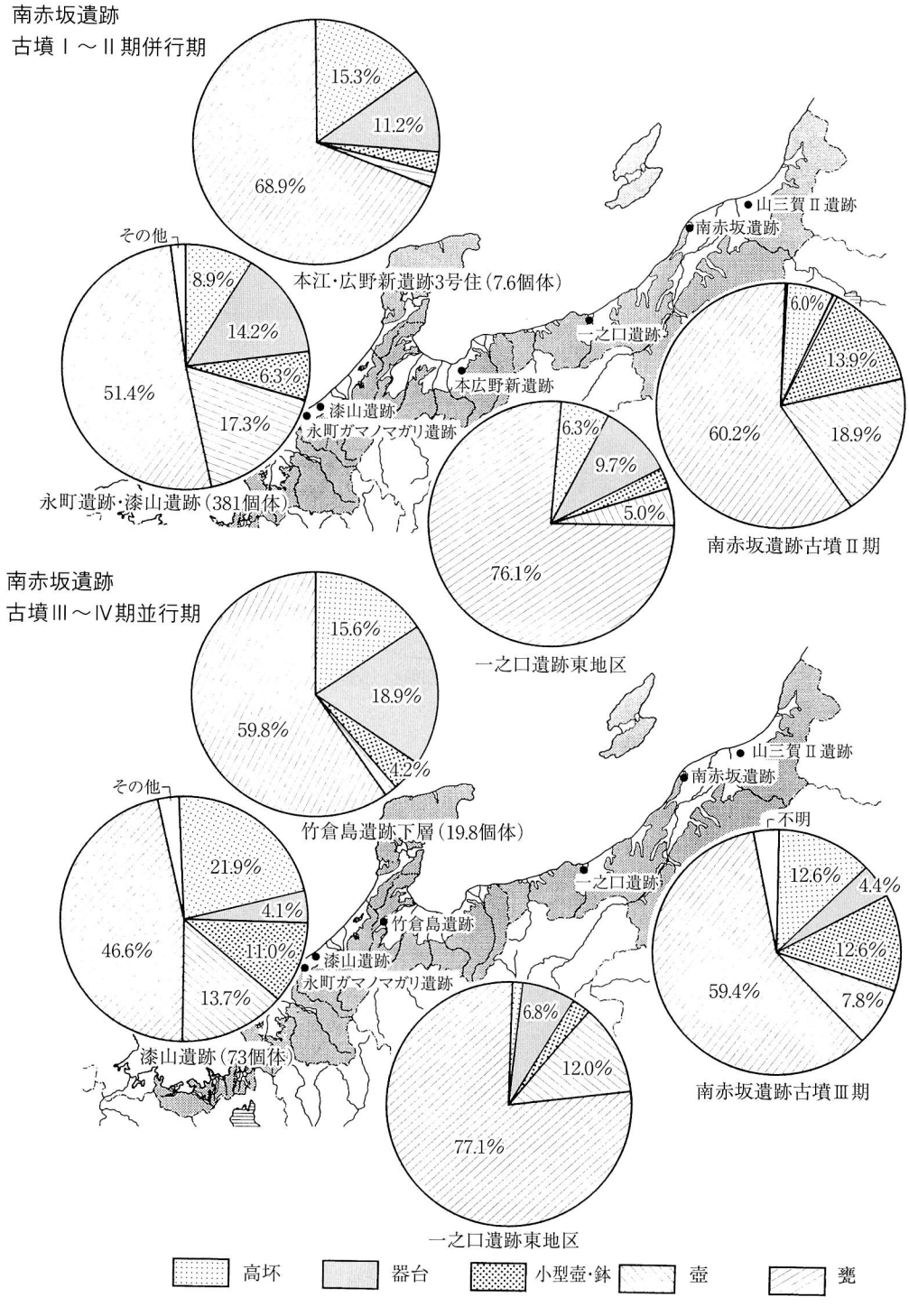
古墳Ⅱ期では一之口遺跡東地区と比較すると、器台の比率がかなり低い反面、小型壷・鉢、壷の比率が高い（第90図）。小型器種（高坏、器台、小型壷・鉢）全体の比率でみれば一之口遺跡東地区よりも能登や加賀と類似しているが、高坏や器台の比率では大きく異なっており、小型壷・鉢の比率もここまで高いところは見られない。また、壷の比率の高さは加賀に類似している。

遺構別にみれば、上段テラス下土坑群で極端に小型壷・鉢の比較が高い（第91図）。また下段テラスとテラスから転落したのが多くを占めると推測するテラス遺構周辺では壷の比率が高い。

古墳Ⅲ期では１号住居址と４号住居址で小型壷・鉢と壷の比率が大きく異なっているが（第９表）、いずれも一之口遺跡東地区に比べ高坏の比率が高い。また両者の合計値では、高坏が



第89図　北陸地方における甕の底部形態（春日［1994a］に追加・一部改変）



第90図　北陸地方における土師器の器種構成比率（春日［1994a］に追加・一部改変）

1号住居跡

器　種	口縁部計測値（破片数）	比 率
高　　坏	42（9）	13.8％
器　　台	16（5）	5.2％
高坏or器台	5（3）	
小型壷・鉢	53（7）	17.4％
小　計	111（21）	36.4％
壷	9（5）	3.0％
甕	174（52）	57.0％
不　明	11（7）	3.6％
計	305（85）	100.0％

西側テラス

器　種	口縁部計測値（破片数）	比 率
高　　坏	29（1）	17.2％
器　　台	0	0.0％
高坏or器台	0	
小型壷・鉢	15（7）	8.9％
小　計	44（8）	26.0％
壷	5（2）	3.0％
甕	120（11）	71.0％
不　明	0	0.0％
計	169（21）	100.0％

上段テラス下坑群

器　種	口縁部計測値（破片数）	比 率
高　　坏	0	0.0％
器　　台	0	0.0％
高坏or器台	0	
小型壷・鉢	39（4）	63.9％
小　計	39（4）	63.9％
壷	12（2）	19.7％
甕	8（3）	13.1％
不　明	2（1）	3.3％
計	61（10）	100.0％

4号住居跡

器　種	口縁部計測値（破片数）	比 率
高　　坏	13（5）	9.9％
器　　台	3（2）	2.3％
高坏or器台	1（1）	
小型壷・鉢	2（1）	1.5％
小　計	18（8）	36.4％
壷	25（2）	19.1％
甕	85（36）	64.9％
不　明	3（3）	2.3％
計	131（49）	100.0％

下段テラス

器　種	口縁部計測値（破片数）	比 率
高　　坏	12（4）	6.0％
器　　台	4（2）	2.0％
高坏or器台	0	
小型壷・鉢	32.5（6）	16.3％
小　計	48.5（12）	24.4％
壷	48（10）	24.1％
甕	102.5（18）	51.5％
不　明	0	0.0％
計	199（40）	100.0％

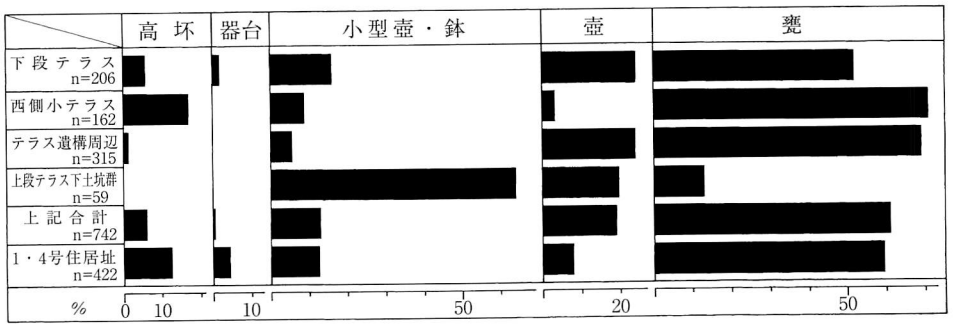
テラス周辺

器　種	口縁部計測値（破片数）	比 率
高　　坏	4（1）	1.3％
器　　台	0	0.0％
高坏or器台	0	
小型壷・鉢	17（6）	5.4％
小　計	21（7）	6.6％
壷	76（17）	24.1％
甕	218（30）	69.0％
不　明	1（1）	0.3％
計	316（55）	100.0％

第９表　器種構成比率

凡　例

1．各遺構の出土土器全点（ただし下段テラスの74は時期が異なると判断し除外した）を口縁部残存率計測法により計測した。
2．口縁部計測値は口縁部計測法によって得られた数値であり、°/10を示す。
3．比率は口縁部計測値による器種構成比率である。
4．高坏 or 器台の欄はどちらか判断出来なかったものであるが、判明している高坏と器台の比率に応じてそれぞれに割り振った。例えば高坏 or 器台が３で、高坏：器台が２：１なら、高坏に２、器台に１を加えた。表の高坏、器台の値はこのように加えた後の数値である。



第91図　遺構別の器種構成

多く器台が少ない点や小型壷・鉢の比率が高い点は加賀と類似している。

以上、古墳Ⅱ期には小型壷・鉢と壷の器種構成比率が他の遺跡と比べて高く、テラス遺構の器種組成が特殊である可能性がある。古墳Ⅲ期では比較的加賀の数値に類似するものの、高坏の割合が少ない点は異なる。また上越地域では器台の比率が高坏を上回っているが、当遺跡ではそのような状況は認められず注目される。

③土器形態

対象とする時期は住居址出土の資料がある古墳Ⅲ期を中心とする。

春日は田嶋の指摘［1994］をさらに進めて土器様相や竪穴住居址の平面形態から越後内部における地域差や他地域との関係などを考察している［春日1994b、1998、2001］。

以下、春日の成果を参考にしながら古墳Ⅲ期の南赤坂遺跡の土器様相を確認したい。

高坏はいわゆる畿内系屈折脚のＣ類が主体を占めるが、脚部が比較的短い点、調整不明なも

のが多いが４・38など坏部で横方向のヘラミガキを行う点など北陸系の高坏に該当する。ただし遺構外ではあるが193の高坏は、坏部が不明であるものの長脚である点や調整が非常に丁寧な点、赤色系に発色している点など山三賀Ⅱ遺跡のものに類似している。小型器台は受部が内湾する形態で越後では一般的なものである。また、口縁部のあまり発達しない小型丸底壷や頸部の屈曲が鋭い21・22などの「く」字口縁甕は能登との共通性が強いといえる［春日1998］。ちなみに古墳Ⅱ期ではあるが、100の甕は口縁部の形態など能登との強い類似性が認められる。壷は不明な点が多いが47の形態は山三賀Ⅱ遺跡でも認められる。また現在整理中の御井戸遺跡では、遺構に伴うものはないが該期と考えられる資料が定量認められる。それらを見ると、会津方面の影響と考えられる棒状中空の器台や北関東方面の影響と考えられる長脚の高坏が少量認められる点は注目されるが、小型丸底壷や高坏の主体は南赤坂遺跡と同様北陸系の範疇に入るものである。ちなみに表面採集試料であるが高見高島遺跡の古墳Ⅳ期と推測する高坏も脚部の短い北陸系のものである［相田2002］。また、御井戸遺跡では現時点で布留系の甕が１個体確認でき、蒲原平野では緒立遺跡につぐ２点目として注目される。布留系の甕は頸城で比較的多く確認でき、日本海経由で入ってきたと考えられる［春日1998、川村2000］。なお、上越地域でみられる径の大きな透孔をもつ高坏・器台の脚部［川村2000］は、南赤坂遺跡では確認できないが、御井戸遺跡では若干存在している。

以上古墳Ⅲ期の土器を中心に見てきたが、角田山麓周辺の該期の高坏・小型丸底壷は北陸系のものが主体で、県内の他地域に比べ関東北部の影響が希薄であることを確認できた。また頸城に比べ北陸南西部や信州的要素も少ない。このような角田山麓の土器様相は、海岸部に近いといった地理的条件の他に、弥生時代から続く在地の有力な基盤のあったことなどがその要因として考えられる。また甕は、古墳Ⅱ期・Ⅲ期とも能登に近いものが認められるが、底部形態はⅢ期以降丸底が増加する能登と違いが生じている。

④底部外面の木葉痕について

古墳Ⅱ期の資料が中心と考えられるが、底部外面に笹状の木葉痕を認めるものが確実なもので４点確認できる。形態からいずれも壷の底部と推測する。３点が下段テラス、１点はテラス周辺からの出土である。遺跡全体では壷・甕の1.9％、壷の5.3％と少ないが、下段テラスとテラス周辺、さらに同時期と推測した西側小テラスと上段テラス下土坑群を合計した中の比率としては、壷の20％を占めており少なくない（第10表）。

新潟県内の周辺市町村において、底部外面に木葉痕を残す古墳時代前期の土器としては、中条町大塚遺跡［中条町教育委員会2002］で平行脈の可能性のある資料が１個体報告されているのみである。これに対し、古墳時代後期に属する柿崎町大久保遺跡［室岡・関2001］・新発田市馬見坂遺跡［関2001］では網状脈の木葉痕を認める資料がまとまって確認されており、

1号住居跡

器種	割合	点数
壷	30.8%	4
甕	69.2%	9
不明	0.0%	0
総計	100.0%	13
1類	0.0%	0
2・5類	15.4%	2
木葉痕	0.0%	0

4号住居跡

器種	割合	点数
壷	30.8%	4
甕	61.5%	8
不明	7.7%	1
総計	100.0%	13
1類	0.0%	0
2・5類	0.0%	0
木葉痕	0.0%	0

テラス遺構・周辺、上段テラス下土坑群

器種	割合	点数
壷	34.5%	20
甕	58.6%	34
不明	6.9%	40
総計	100.0%	58
1類	1.7%	1
2・5類	8.6%	5
木葉痕	6.9%	4

遺跡全体

器種	割合	点数
壷	35.9%	75
甕	56.0%	117
不明	8.1%	17
総計	100.0%	209
1類	0.5%	1
2・5類	3.3%	7
木葉痕	1.9%	4

第10表　壷・甕の底部

凡　例

1．個体識別で集計した。土師器は底部が1/4以上残存のものに限ったが、北方系土器は1/4以下でも集計に含めた。
2．「総計」の上の欄は土師器・北方系土器の全てを含めた数値で、その中の北方系と木葉痕の割合は「総計」の下の欄で示した。

後期以降増加傾向を示す可能性を示唆している。また、長岡市の横山遺跡では、弥生時代後期に属する底部２点に網状脈の木葉痕が認められる［長岡市1993］。ただし関が指摘するように、県内の報告例では底部の観察を記したものが数少なく、また笹の葉圧痕はハケ目と誤認する恐れもあるため、全県的な状況は明確でないのが現状である。

一方角田山麓においては、山谷古墳下層遺跡と御井戸Ｂ遺跡で該当資料が確認されている。前者は弥生時代後期に属す１点である。後者は古墳時代前期の可能性が高く、整理途上の現時点で４点の存在が明らかになっている。いずれの資料も本遺跡と同様に平行脈の圧痕である点が注目される。

この種の圧痕の性格を考える上で、本遺跡該当資料の胎土に北方系土器との類似性を認めること、御井戸Ｂ遺跡においての北方系土器が出土していること［前山1999］は留意される。しかし、本遺跡の北方系土器の中に木葉圧痕は存在しておらず、具体的な位置づけは差し控えておく。

D　下段テラスにおける土器の分布

下段テラスでは東側の土器の分布は稀薄で、北西部と南西部の端側に分布が偏る傾向があるほか、中央部でも定量認められる。このうち、北西部と南西部から出土した土器の多くは古墳Ⅱ期に比定できる。一方、中央部から出土した土器(63・65・67・74など)は、古墳Ⅱ期より新しい時期のものと推測される。それらは、テラスの中央部から東側にかけての建物想定範囲内（P103参照）で出土していることから、建物に関連した遺物である可能性が高いと考えられる。

以上のことからは、古墳Ⅱ期に利用した後しばらくして、中央部に建物を築いたと考えられ、さらに、古墳Ⅱ期の土器が建物想定範囲内で稀薄であることからは、建物を作る前にテラスの中央部を中心にある程度清掃のような行為を行ったことが推測される。また器種構成比率からは、古墳Ⅱ期に壷を主体とした何らかの祭祀的行為を行った可能性が考えられるが、壷の分布はテラスの南の端に比較的まとまっており、祭祀の際テラスの南辺に壷を配置していた可能性もあろう。

土師器観察表－1

凡例

1．法量に関してはcm単位である。また、「口」は口径、「底」は底径、「高」は器高を表す。
2．胎土の項目は「長・石」が長石と石英、「凝灰」が凝灰岩、「黒曜」が黒曜石を表す。また長石・石英、凝灰岩については含有量をA・B・Cの３分類で表した。Aは多い、Cは少ないもしくは無い、Bはその中間である。黒曜石については有無の2分類を行い、有のみ示した。
3．遺存については最も遺存率が高い箇所の径における残存率を示している。
4．整形の項目では、口縁部のヨコナデとナデについては省略した。なお手法と備考の項目では土器の部位、調整について下記のように略した。
高坏坏部→坏　器台受部→受　脚部→脚　口縁部→口　端部→端　体部→体　底部→底　内面→内　外面→外　上位→上　中位→中　下位→下
ヘラミガキ→ミガキ　ヘラケズリ→ケズリ　ハケメ→ハケ　赤色塗彩→赤彩　赤色塗彩はされていないが赤色系の発色を呈する土器→赤色系

１号住居址

No.	器種	法量	胎土			遺存	整形	備考	遺物No.
			長・石	凝灰	黒曜				
1	高坏	□18.0	C	C		坏1/2	坏外ミガキ　脚外ハケのちミガキ　脚内ハケ		1442
2	高坏		C	C		脚略完	坏・脚外ミガキ	赤色系	196　276
3	高坏	□15.4高15.5底12.0	C	C		脚略完	脚外ミガキ	赤色系	533
4	高坏	□18.2	C	C		1/4	坏内外ミガキ	赤色系	630ほか
5	高坏		C	C		1/6	坏内外ミガキ		1363
6	高坏		B	C		1/6			174
7	高坏		C	C		脚略完	脚外ミガキ	赤色系	3？5
8	器台	□12.0	C	C		1/8	受内外ミガキ		1112　1390
9	器台	□9.4	C	C		1/8	受内外ミガキ		1297
10	器台		C	C		1/4			39
11	器台	底11.1	C	C		3/4	脚外ミガキ　脚内指圧・ハケ・ミガキ		281ほか
12	小型壺	□12.0	C	C		略完		赤色系	536
13	小型壺		A	C		1/4	口内外ミガキ	削痕　赤色系	696
14	小型壺	□8.3高7.4	C	C		体略完	体外ハケ・ケズリ　体内ヘラナデ・指圧		597ほか
15	小型壺	□7.9高6.5	C	C		体略完	口内外・体外ミガキ　体内ヘラナデ・指圧		535
16	鉢	□9.5	C	C		□1/8	体外ミガキ？		432
17	甕	□12.9	C	B		□3/4	口内外・体外ハケ　体内ヘラナデ	体器壁薄	455
18	甕	□15.1	C	B		1/12			426
19	甕	□17.7	C	C		1/12			424
20	甕	□22.6	B	C		□1/4	体外ハケ　体内ヘラナデ	口・体穿孔	144ほか
21	甕	□15.4高20.6底3.4	B	B		口・体略完	体外ハケ　体内ヘラナデ		532ほか
22	甕	□17.4高19.5底3.5	B	A		体略完	体外ハケ　体内ヘラナデ		445　1437
23	甕	□18.0	C	C		1/4	体内外ハケ		1440
24	甕	□19.4	C	B		1/36			1050　1139
25	甕		B	B	有	1/3	体外ハケ　体内ハケ・ヘラナデ・ケズリ	体内上削痕	1438ほか
26	甕	□19.3	B	C		1/8			689
27	甕	□16.1	B	B		1/12			866
28	甕	□19.0	C	A		1/8	口外ハケ		1092
29	壺	□18.8	C	A				赤色系	235
30	壺	□	C	A				口内外・体外赤彩	963
31	壺		B	B	有	1/12	口内外ミガキ		1264　1400
32	壺	□26.5	C	C		1/9			681　1226
33	甕	底1.6	C	A		底完	外ハケ　内ヘラナデ		546
34	甕	底2.2	C	B		底完	体外ハケ　体内ヘラナデ　底内回転ハケ		275
35	甕	底3.3	C	B		底完			134
36	壺	底4.4	C	B		1/4	底内外ミガキ	体・底外赤彩	394
37	壺	底6.2	C	A		1/4			614

４号住居址

No.	器種	法量	胎土			遺存	整形	備考	遺物No. 出土区
			長・石	凝灰	黒曜				
38	高坏	□17.1	B	C		坏底略完	坏内外ミガキ		787ほか
39	高坏		C	C		1/12	坏内外ミガキ		355
40	高坏	底12.8	C	B		脚略完	脚外ミガキ　脚内ハケ		C-4-d③ほか
41	高坏		C	A		脚略完			268
42	高坏		B	A		脚略完	脚外ミガキ		477
43	器台	底12.1	B	C		1/6	脚外ミガキ　脚内ハケ		770ほか
44	鉢		C	C					533
45	小型壺	底1.8	C	C		底完	体・底外ミガキ　体内ヘラナデ	体・底外赤彩	289ほか
46	小型壺		C	C		1/4	体外・体内上ミガキ　体内下ヘラナデ		41
47	壺	□12.8	B	B	有	口略完	口・体外太ハケ・ヘラミガキ　口・体内ハケ		451ほか
48	壺		B	B		1/9	口内外ハケ		17
49	甕	□20.4	C	B		□1/6	口内ハケ　体内ヘラナデ		562
50	甕	□17.4	B	B		1/9			440
51	甕	□16.5	B	B		口・体1/4	口内外・体外太ハケ　体内ヘラナデ		478ほか
52	甕		B	B	有			口内削痕	396
53	甕	□17.2	C	B		1/6		口内削痕	332　376
54	甕	□17.9	B	B	有	体2/9	内外ハケ		850
55	甕	□19.2	B	C		1/12			115　187
56	甕	□26.0	C	B		1/6	口外ハケ		73ほか
57	壺	底5.1	C	C		底完	体・底外ミガキ　体・底内ハケ		86
58	壺	底7.1	B	A	有	底1/3	体内外・底内ミガキ　底外ケズリ	内黒色を呈する	446
59	壺	底5.6	B	C		底1/2	体外ミガキ　体内ヘラナデ・ハケ		239ほか
60	甕	底2.1	B	A		底完	外ハケ　内ヘラナデ		112
61	甕	底3.7	C	A		底1/2			117

土師器観察表－2

テラス遺構・上段テラス下土坑群

No.	器種	法量	胎土 長・石	胎土 凝灰	胎土 黒曜	遺存	整形	備考	遺物No. 出土区	遺構
62	高坏		C	B		略完			2141	西側小テラス
63	高坏		C	B		3/4	坏内ハケ		649ほか	下段テラス
64	高坏		C	A		1/2	脚外ミガキ		471	下段テラス
65	高坏		C	C		略完	脚外ミガキ		SB504	下段テラス
66	高坏		C	B		略完	脚外ミガキ		2058	西側小テラス
67	高坏		C	C		略完	脚外ミガキ　裾内ハケ		SB704	下段テラス
68	高坏	□20.8	C	C		略完	坏内外ミガキ	坏外赤彩　坏内口端赤彩一周	2784	西側小テラス
69	高坏		C	C		略完	坏内・脚外ミガキ　脚内ハケ		2612　G2b	上段テラス下土坑群
70	器台	□10.1	C	C		1/2		受内外・脚外赤彩	425　1623	下段テラス
71	器台		C	C			受内外ミガキ	受外赤彩	1654	下段テラス
72	器台		C	C		5/6	受内外・脚外ミガキ　脚内ハケ	受内外・脚外赤彩	2015	西側小テラス
73	鉢	□19.8高8.6	C	B		略完	口・体・底外ミガキ　口・体・底内ミガキか		690ほか	下段テラス
74	鉢	□10.9底3.0	C	B		□1/4	外ハケ　口内ケズリ　体内ハケ・ヘラナデ	口外削痕　赤色系	228ほか	下段テラス
75	鉢	□9.3高8.1底2.9	B	C		完	口・体外ミガキ　底外ハケ　体内ヘラナデ・ミガキ	86が被さった状態で出土	3102	上段テラス下土坑群
76	鉢		C	B		1/9			683	下段テラス
77	鉢	□13.3高9.9底2.6	B	B		体略完	体内外ケズリ		979	下段テラス
78	鉢	底3.0	C	B		底完	体外ケズリ	削痕　赤色系	1628ほか	下段テラス
79	鉢	□29.2	B	B		□1/6	口内外ハケ　体外ミガキのち一部ケズリ　体内ミガキ		3632	上段テラス下土坑群
80	鉢	□11.4	B	B		□1/6	外ハケ	赤色系	不明	下段テラス
81	小型壺	□9.8	C	C		1/6	内外ミガキ		SB341	下段テラス
82	小型壺		C	C		1/6	内外ミガキ		SB348	下段テラス
83	小型壺		C	C			外ミガキ　体内指圧	口内削痕　外・口内赤彩	2775	西側小テラス
84	小型壺	□9.6	C	A		口略完		内外赤彩	1996	西側小テラス
85	小型壺	底3.2	B	C		底略完	体外ハケ　体外下ケズリ　体内ヘラナデ	土坑4k内	不明	下段テラス
86	小型壺	□9.9高12.7底3.4	C	B		底完	体外ミガキ	内外赤彩　75に被さり出土	3102	上段テラス下土坑群
87	壺	□13.0	A	B		1/6	外太ハケのち一部ケズリ・ナデ		811	下段テラス
88	壺	□15.2	C	A		1/4		土坑3ｋ内	3K-103	下段テラス
89	壺	□12.1	C	C		口略完	口内外ハケ	137と同一個体か？	1387　1400	下段テラス
90	壺	□17.0	C	C		頸1/4			1578　1597	西側小テラス
91	壺		B	B		□1/6	体外ハケ　口内ハケ・ケズリ　体内ヘラナデ		370　737	下段テラス
92	壺	□21.8	A	C		体4/9	体外縦ハケのち上太横ハケ　体内ヘラナデ		1132ほか	下段テラス
93	壺	□20.0	C	A		頸2/3	頸・体内外ハケ	口・頸外・体内削痕　赤色系	SB86ほか	下段テラス
94	壺	□20.3	B	A		頸3/4	頸内外ハケ	赤色系	SB185	上段テラス下土坑群
95	壺	□15.8	A	C		略完	口内外・頸内ミガキ　頸・体外ハケのちミガキ　体内指圧	赤色系	1380①	下段テラス
96	壺	□22.6	B	C	有	□1/6	頸内外ミガキ　張出刻み部ハケ	頸内上にハケ状沈線　赤色系	SB186ほか	上段テラス下土坑群
97	壺		C	C		□1/4	体内指圧		F-1-wほか	下段テラス
98	甕	□24.3	C	C		□1/9	口内ハケ		900　997	下段テラス
99	甕	□13.3高10.9底2.2	C	A		略完	体外ハケ　体外下ケズリ　体内ヘラナデ		2785	西側小テラス
100	甕	□27.5高31.5底3.9	B	A		略完	体外ハケのちケズリ・ミガキ　体内ヘラナデ	体外中異色の粘土紐	2782	西側小テラス
101	甕	底4.9	B	A		体下2/3	内外ハケ		2359　2192	西側小テラス
102	甕	底3.0	C	B		底略完	外ケズリ　内指圧		860　SB663	下段テラス
103	甕	底1.9	C	C		底略完			1145	下段テラス
104	甕	底3.2	C	C		底完	底外ハケ		1561	下段テラス
105	甕	丸底	B	C		底5/6	内外ハケ		1547　1675	下段テラス
106	甕	底2.8	B	A		底完	内外ハケ		2126	西側小テラス
107	甕	□16.4高23.2底2.8	C	A		底略完	体外ハケ　体内ヘラナデ		2781	西側小テラス
108	甕	□14.8	C	C		口略完	内外ハケ		2052ほか	西側小テラス
109	甕	□16.1	C	B		□3/4	体外ハケ　体内ヘラナデ		2128ほか	西側小テラス
110	甕	□15.9	C	C	有	□5/9	体内外・口内太ハケ		2050ほか	西側小テラス
111	甕	□15.3	B	C		□1/4	体内外ハケ		482ほか	下段テラス
112	甕	□15.2	C	C		□1/4			261　424	下段テラス
113	甕	□19.4	B	C		1/8		硬質胎土	SB1095	下段テラス
114	甕	□16.9	C	B		□5/9	体内外ハケ		2242　2243	西側小テラス
115	甕	□12.2高11.1底2.5	C	B		底略完			3286ほか	上段テラス下土坑群
116	壺	底5.6	A	C		底3/4	体外ハケ　体内ヘラナデ	底外木葉痕	G-2-k	下段テラス
117	壺	底5.8	C	B		底2/3	体外ミガキ・ハケ　体内ヘラナデ・ハケ		2553ほか	上段テラス下土坑群
118	壺	底4.2	B	B		底3/4			3284	上段テラス下土坑群
119	壺	底7.0	C	B		底略完		赤色系	615	下段テラス
120	壺	底5.5	B	B		底完			862	下段テラス
121	壺	底6.2	C	C		底1/4	外ハケ	105と同一固体か？	1380②ほか	下段テラス
122	壺	底6.7	A	B	有	底完	体外ハケ　底内ハケ	底外木葉痕	967	下段テラス

テラス遺構周辺斜面

No.	器種	法量	胎土 長・石	胎土 凝灰	胎土 黒曜	遺存	整形	備考	遺物No. 出土区
123	高坏		C	B		脚略完	坏内・脚外ミガキ	坏内外・脚外赤彩	1031ほか
124	高坏		C	C		略完	脚外ミガキ		1181
125	高坏		C	B		略完	脚外ミガキ　脚内指圧	脚内外赤彩	1050
126	器台		B	B		1/9			E-2-y①
127	器台		C	B		1/4		装飾器台　受内外赤彩	E-2-y
128	器台		C	C		1/4		脚外赤彩	E-2-y①
129	鉢		C	C		□1/9		赤色系	1034　1041
130	鉢	□11.7高6.4	C	B		□1/4	外ハケ　内指圧		E-2-p①
131	鉢	□11.1	B	C		1/9			G-3-m

土師器観察表－3

テラス遺構周辺斜面

No.	器種	法量	胎土			遺存	整形	備考	遺物No. 出土区
			長・石	凝灰	黒曜				
132	小型壷	□13.3	B	C	有	1/4	内外ミガキ	内外赤彩	782
133	小型壷		C	B	有	体上略完	体内ヘラナデ	口内外赤彩	1934
134	壷	□24.2	C	A		1/12	外ミガキ	赤色系	781
135	壷	□13.7	B	C		□3/4	口内外ミガキ 体外ハケのちミガキ 体内上指圧 体内下ヘラナデ		E-2-xほか
136	壷		C	C	有	1/4	口内ハケ		E-2-r③④
137	壷	□17.0	B	C		1/5	口外ハケ		1267
138	壷	□30.0	B	C		1/8	外ハケ・ケズリ 内ハケ		E-2-v②
139	壷	□18.8	C	C		1/8	内外ミガキ	内外赤彩	E-3-o
140	壷		C	B	有	1/5	体外ミガキ 体内指圧・ヘラナデ		E-2-n④ほか
141	壷	□11.7	C	B		□1/4	口端ハケ 口内外・体外ミガキ		E-2-r③④ほか
142	壷	□18.1	C	C	有	□1/9	口外ミガキ		G-2-b
143	壷	□16.7	B	C		□1/5	外ハケ 頸内ハケ 体内ヘラナデ	110の口外に類似	1196
144	甕	□21.4	C	B		1/8			1055 1074
145	甕	□18.3	B	B	有	□略完	口・体内外ハケ		E-2-r③④ほか
146	甕	□18.8	C	A		□1/4	外ハケ 体内ヘラナデ	体器壁薄	E-3-h③
147	甕	□14.9	C	C		体1/4	体内外ハケ		1012
148	甕	□20.0	C	B		□1/4	体外ハケ 体内ヘラナデ		E-2-x
149	甕	□17.5	C	C		□2/9	口内ハケ		E-2-r④
150	甕	□20.4	B	C		1/3	口外ハケ	108の口外に類似 赤色系	1047
151	甕	□19.5	C	B		□2/9	口内外ハケ 体内ヘラナデ	口端折り返し	1922 1923ほか
152	甕	□18.4	C	C		□1/3	口内・体内外ハケ		G-1-s④
153	甕	□21.5	C	B	有	2/3	口内外ハケ		E-2-r①ほか
154	甕	□18.0	C	C		□1/5	体内外ハケ		E-2-x
155	甕	□20.0	A	C	有	2/9	体外ハケ 体内ヘラナデ	口内中くぼむ	E-2-w②
156	甕	□18.6	C	C		□1/8			E-2-k
157	甕	□16.6	C	B		1/5	内外ハケ		E-2-l④
158	甕	□18.1	A	B	有	□5/12	体内外ハケ	2568と同一個体か	G-2-a
159	甕	□15.9	C	C		□1/8			1867
160	甕	丸底	C	A		底完	底内ハケ		1041
161	壷	底3.2	A	C		底完	体・底外ミガキ 底内ヘラナデ	体外赤彩	F-3-f～k
162	鉢？	底3.2	C	B		底略完			1017
163	壷	底6.3	C	C		底1/3	体・底外ハケ 体内ヘラナデ		E-2-r③④ほか
164	壷	底6.2	C	B		底完	底外ハケのちミガキ 体内ヘラナデ・指圧	赤色系	1301
165	壷	底3.0	A	C		底完	体・底外ミガキ 体内ハケ 底内回転ハケ		1290ほか
166	壷	底7.2	B	B		底1/2	内ヘラナデ		E-2-s③
167	壷	底7.4	B	B		底完	外指圧 内ハケ・ヘラナデ	底外木葉痕	E-3-d②
168	壷	底5.2	C	C		底略完		底外赤彩	1925
169	壷	底7.3	C	B	有	底完	体内ヘラナデ		E-2-r④

遺構外

No.	器種	法量	胎土			遺存	整形	備考	出土区
			長・石	凝灰	黒曜				
170	高坏		C	C		1/6		内外赤彩	D-3-x
171	高坏		B	C		2/9	坏内外ミガキ	赤色系	D-2-y①
172	高坏		C	C		1/4	坏内外ミガキ	赤色系	D-3-u
173	高坏		C	C		1/3		赤色系	E-4-kほか
174	高坏		B	C	有	3/4	坏内外ミガキ	内赤色系	C-4-①ほか
175	高坏	□17.6	C	B		1/9	内外ミガキ	赤色系	E-4-l
176	高坏	□21.1	C	C			内外ミガキ	赤色系	D-3-c①ほか
177	高坏		B	C	有	略完	脚外ミガキ		D-2-x
178	高坏		B	B		略完	脚外ミガキ	透穴4	D-3-f
179	高坏		C	C	有	1/4	脚外ミガキ 脚内ハケ		B-2-o③
180	高坏		B	B		3/4	外ミガキ 内ハケ	中実脚	C-2-p①
181	高坏		C	C		略完			D-3-m
182	高坏		B	C		略完			C-2-p
183	高坏		A	C		脚略完	坏内外・脚外ミガキ		E-4-k①
184	高坏		B	B		略完	脚外・坏内ミガキ 脚内ハケ		C-4-m①
185	高坏		B	C		略完	脚外ミガキ		C-3-o②
186	高坏		C	C		略完	脚外ミガキ		E-4-a
187	高坏		C	C		3/4	脚外ミガキ		E-4-kほか
188	高坏	底13.4	C	C		略完	脚外ミガキ	脚外赤彩	C-4-f④
189	高坏		C	C			脚内外ミガキ	内外赤彩	C-2-j③
190	高坏		A	C		4/9	坏・脚内外ミガキ	坏・脚内外赤彩	E-4-f②
191	高坏		C	A		略完	脚外ミガキ		C-4-f④
192	高坏		C	B		略完	脚外ミガキ		E-3-u②
193	高坏		A	C		略完	坏内・脚外ミガキ	長脚	C-3-j④
194	器台	□18.0底13.7	C	C		受1/3	受内外・脚外ミガキ 脚内指圧・ハケ	受内外・脚外赤彩	D-3-bほか
195	器台		C	C		1/18	受外ミガキ 受内ハケ・ミガキ		E-4-f②
196	器台		C	C		1/6	受内・脚外ミガキ		D-2-u
197	器台		C	C		1/2	受内・脚外ミガキ		D-4-y
198	器台		C	C		1/2	受内外・脚外ミガキ 脚内ハケ		D-3-m③
199	器台		C	C		1/2	受内外・脚外ミガキ	受・脚内外赤彩	E-4-u③
200	器台		C	C		略完	受内外・脚外ミガキ 脚内ハケ	受内外・脚外赤彩	D-4-o④
201	器台		C	C		1/2	受内外・脚外ミガキ		D-3-u
202	器台		C	C			脚内外ハケ		E-4-a
203	鉢	□15.9	B	C		□1/6	口・体内外ミガキ	口内外体外赤彩	D-3-v③
204	鉢	□11.6	C	C		1/9	内外ハケ	赤色系	D-3-c④ほか
205	鉢	□11.1	C	B		1/9			D-3-t③

土師器観察表－4

遺構外

No.	器種	法量	胎土			遺存	整形	備考	遺物No. 出土区
			長・石	凝灰	黒曜				
206	鉢	□12.1	C	C		□1/6	外ハケ・ミガキ　口内ハケ・ミガキ　体内ヘラナデ		D-2-o①
207	鉢	□12.1	C	C		□1/12	外ハケ・ミガキ　内ミガキ		C-2-o④
208	鉢	□12.0	C	C		1/18	内外ミガキ		E-4-v
209	鉢	□15.8	C	C		1/12	内外ミガキ		E-3-k③
210	鉢		C	C		1/12	内外ハケ		C-4-h④
211	鉢		C	C		1/12	外ハケ		E-3-v
212	鉢	□14.4	C	C		1/9	体内外ハケ	口外削痕	D-2-g
213	鉢	□15.7	C	B		体1/3	外ハケ・ミガキ　内ミガキ	外赤彩　片口	C-4-i①ほか
214	鉢	□10.4高8.9	B	B	有	体下3/4	体外ハケ　底外ケズリ		D-2-i④
215	鉢		C	C		1/6			D-4-a②
216	鉢	□12.9	B	C		1/8	口内外ハケ		D-3-b
217	小型壷	□15.0	C	C		1/12	内外ミガキ		B-3-b②
218	小型壷		C	C		体1/2	口内外・体外ミガキ	口内外・体外赤彩	C-3-y③
219	小型壷		C	C		体1/8	外・口内ミガキ　体内指圧	口内外・体外赤彩	E-3-0
220	小型壷	□13.3	B	B		1/6	内外ミガキ	赤色系	D-3-u④
221	小型壷	□14.7	C	C		□4/9	口内外・体外ミガキ　体内ヘラナデ	赤色系	C-2-j④ほか
222	小型壷	□8.0高8.1	C	C		体3/4	口・体外ハケ　体外下ケズリ　体内ハケ・ヘラナデ	赤色系	D-3-d①ほか
223	小型壷		C	C		体1/6	体外・口内ミガキ		E-4-l
224	小型壷	底2.0	B	B		底完	外ミガキ		E-4-l④
225	壷	□24.6	B	B		□1/4	内外ハケ	赤色系	D-3-d①ほか
226	壷		C	C		体1/2	体外ハケのちミガキ　体内指圧・ハケ	外赤色系	E-2-d②
227	壷	□22.1	C	C		1/4		外赤色系	D-3-e②ほか
228	壷	□15.0	B	C	有	1/9			不明
229	壷	□22.8	C	C		1/12	内外ミガキ	口外赤彩	E-4-k①
230	壺	□12.6	C	C		□1/4	内外ハケ		C-2-n
231	壷		C	B			外ハケ		C-2-r
232	壷		C	C		1/3	口外ハケ・ミガキ　口内ハケ・ケズリ		D-3-e②
233	壷	□20.0	B	B		1/6	内外ミガキ		E-3-r①
234	壷	□20.3	A	C		1/9	口外ハケ　口内ミガキ		E-3-u②
235	壷	□22.0	C	C		2/9			D-2-g　D-2-w
236	壷		C	C				折り返し口縁	E-4-p
237	壷	□20.7	C	C		2/9	口外ハケ　頸外ハケ・ミガキ　内ミガキ	赤色系	D-3-bほか
238	壷		A	C		1/2	内外ミガキ	口内下沈線	D-4-d③
239	壷		C	C				刺突	D-2-e③
240	壷		C	C		1/6	外ハケ・ミガキ　内ミガキ		B-2-t①
241	甕	□17.2	C	B		□1/4	体内外ハケ		D-4-y
242	甕	□22.4	C	B		□1/4	外ハケ	体器壁薄	C-4-c④ほか
243	甕	□15.9	C	B		□1/4	口内ハケ		D-3-u③
244	甕	□17.9	C	C		□1/8	口内ミガキ　体内ハケ		C-2-p②
245	甕	□18·5	B	B		体1/4	口外・体内外ハケ		E-4-f③
246	甕	□20.6	C	A		□1/5	体内ハケ		C-2-j④
247	甕	□20.3	B	C		□1/12	口内外ハケ		E-4-g②
248	甕	□18.4	C	C		体1/5	体外ハケ　体内ハケ・ヘラナデ		D-4-a③
249	甕		C	B			内外ハケ		D-4-h
250	甕	□17.7	C	B		□1/3	口内外・体外ハケ　体内ハケ・ヘラナデ	体内中削痕	D-3-dほか
251	甕	□16.3	A	C		□1/5	口内外・体外ハケ　体内ケズリ		D-3-d①
252	甕	□14.8	C	C		□1/6	口・体外ハケ　体内ハケ・ヘラナデ		D-3-y③
253	甕	□19.0	B	C	有	□1/4	体内外ハケ	口端外ハケ状	C-2-g①ほか
254	甕	□17.8	C	A		□1/6	体外ハケ　内ハケ・ヘラナデ		E-3-h③
255	甕	□16.1	C	B		体1/3	体内ヘラナデ		E-3-h③
256	甕	□16.8	B	C		□1/3	内外ハケ		D-3-u　D-4-a
257	甕	□17.9	C	C	有	1/6	口内ハケ　体内ヘラナデ		E-3-o
258	甕	□16.0	C	B		□1/4	体外ハケ　体内ハケ・ヘラナデ		D-3-c①
259	甕	□21.2	C	B		□1/6			D-3-e②
260	甕	□19.4	B	C		1/12	口内ハケ		E-4-a③
261	甕	□21.8	C	A		□1/6	体外ハケ・ケズリ　体内ハケ		D-2-u
262	甕	□18.0	C	B		□1/9			D-3-d②
263	甕	□23.4	C	C	有	1/5	口内ハケ		D-3-b
264	甕	□14.7	C	C		□1/4			C-3-y③
265	甕		B	C	有	1/12	口内外ハケ		D-3-v③
266	甕	□17.0	C	B		1/6	口外・体内ハケ		C-2-o
267	甕	底2.2	C	C		底3/4	外ハケ　内ヘラナデ		D-3-p
268	甕	底3.4	C	B	有	底3/4	外ハケ		D-3-u④
269	甕	丸底	C	B		底完	体・底外ハケ　内ハケ・ケズリ		D-3-e②
270	甕		B	C		底略完	体・底外ハケ　体内ヘラナデ　底内ハケ	丸底　甕の転用？	D-2-k③
271	甕	底3.8	C	B		底3/4	体・底外ハケ	古墳時代後期？	D-5-e
272	甕	底2.7	A	B		底完	体・底外ハケ　体内ヘラナデ・ハケ	体外赤彩か	D-2-t②
273	甕	底3.0	B	B		底完	外ハケ　内ヘラナデ・ハケ		C-2-o
274	甕	底5.5	C	B	有	底1/2	体外・底内ハケ　底外ケズリ・ハケ		D-3-o②ほか
275	壷	底5.2	C	C		底5/9	外ミガキ		C-2-d
276	壷	底7.6	C	A		底略完		底外削痕	D-2-w
277	壷	底7.1	B	C	有	底略完		底外削痕	D-4-a
278	壷	底6.7	C	A		底3/4		体・底外赤彩	D-2-e③
279	壷	底7.2	C	B		底略完		体外赤彩　底外削痕	D-2-i
280	壷	底7.1	C	C		底5/9	内ハケ		C-2-v④ほか
281	壷	底6.5	C	C	有	底5/9	内ヘラナデ・ハケ		E-3-l
282	壷	底5.8	C	B	有	底完	体外ミガキ　体内ハケ	底外赤彩	C-4-h③
283	壷	底9.8	C	B		底1/4	内ハケ		E-4-u
284	壷	底6.4	C	B		底1/4	体外ミガキ　体内ハケ	底外木葉痕	F-1-x
285	手づく	底2.3	A	C		底5/9			E-3-p
286	ね		B	C	有	体1/2	内指圧		D-2-s④
287	手づく	□17.7	C	C		体1/9	内外ミガキ	古墳時代後期　内黒土器？	G-1-t④
288	ね	□16.5	C	C		□1/9	坏外ハケのちミガキ　坏内ミガキ	古墳時代後期　内黒土器	B-2-t①
289	坏	□16.6高7.2底8.6	C	C		1/3	外ハケ・ケズリ　内ハケ・ミガキ	古墳時代後期　内黒土器	F-2-e②

2　北方系土器

テラス遺構周辺と１号住居址覆土を中心に、土師器とは異質な土器群が出土した。いずれも何らかの形で北方地域との関連性が求められる資料である。出土量は両遺構での口縁部計測値で７％にとどまるが、その在り方は一様でなく、以下の７類に区分するのが適切である。

Ａ　分類

１類（第93図１～31）

続縄文土器の特徴をほぼ純粋に保持するグループ。個体識別をつうじた推定最大数は25～30個体、口縁部資料に基づく最少個体数は９を数える。地区別の内訳は、５・６・21が１号住居址、30が西側緩斜面採集の既存資料、これ以外がテラス遺構周辺からの出土である。

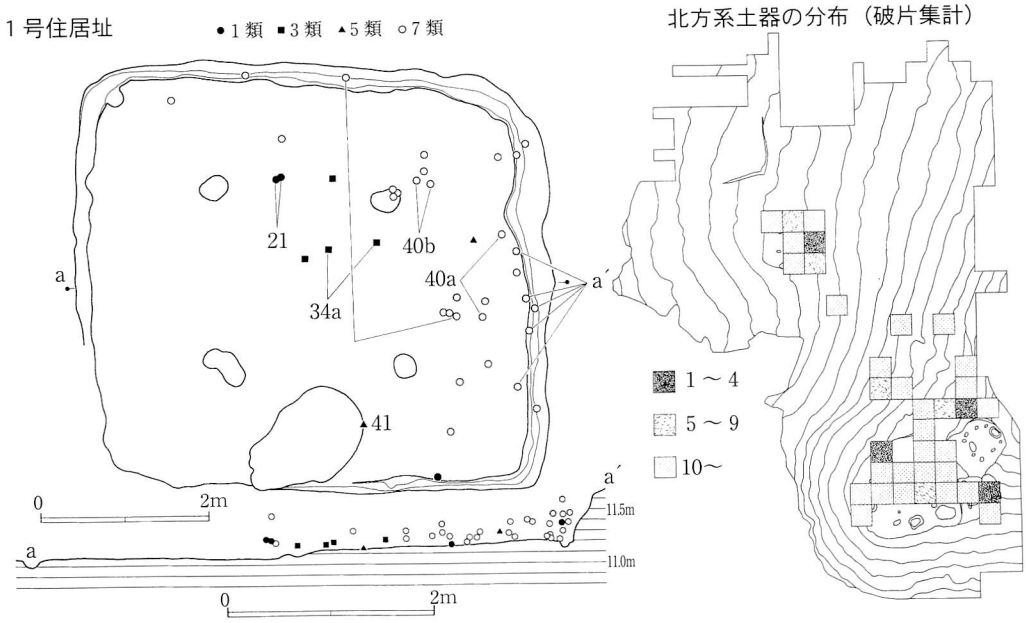
本類は深鉢と注口土器からなり、後者の確実な資料は30・31に限定される。前者の口端遺存資料４点では波状器形が確認できる。底部遺存個体は４例を数え、うち３例は内面に緩い膨みをもつ。使用胎土は、石英などの鉱物粒子を多量に含むもの（ａ種：１・３・７・８・14・23・27・28)、稀薄なもの（ｃ種：11・29・31)、両者の中間的なもの（ｂ種）に大別できる。ａ種の割合は27％で、土師器の全体集計数５％に較べ明らかに高い数値を示す。ｃ種は質感的にも土師器と同一の資料であるが、その割合は10％にすぎない。このほか黒曜石状の微細砕片を含むものがａ種で１点（１)、ｂ種で３点（19・20・26）確認された。

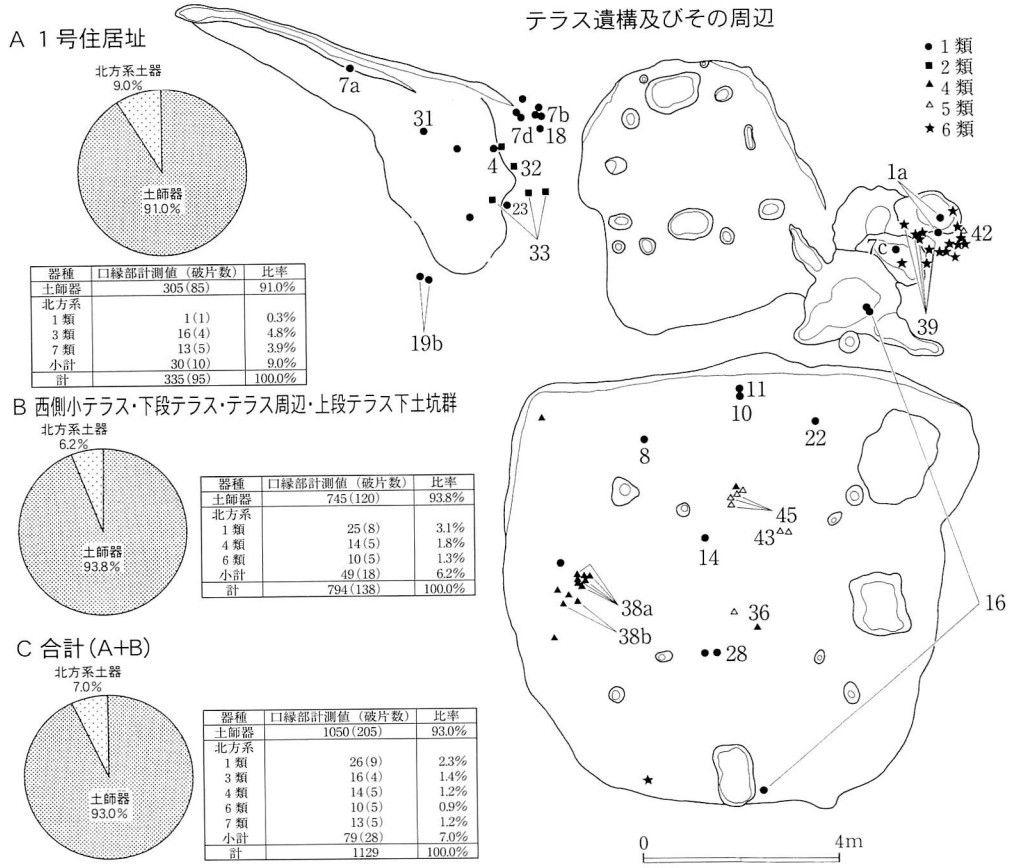
31は器面の劣化が著しいが無文の可能性が高い。これ以外の各個体には装飾的な文様が施される。口縁には１ないし２列の隆帯がめぐる。１～５は端部と隆帯上、６は隆帯上に刻目が加えられた資料である。体部は微隆起線・刺突・帯状縄文が施される。文様構成としては、器面を上下に二分し、上半部に装飾的な文様帯・下半部に縦位の帯状縄文だけを配すもの（７など)、全面に装飾文様を施し下半の縄文帯が欠落するもの（19）に大きく二分できる。上記３種の施文法としては、微隆起線の区画内に条の走行が同一の帯状縄文や刺突が充填されており、微隆起線のモチーフには縦位＋横位（17～22）と横位＋斜位（１・７）の２種がある。このうち９・20・22は、微隆起線にのみ白色粘土が使用されている。刺突は三角形を基本とする。爪形をなした18・19は２個体に限定された少数資料である。帯状縄文は後述の２類・３類を含め全点ＲＬ原体が用いられる。

２類（第94図32・33）

続縄文土器特有の「帯状縄文」と土師器的な「ハケ目」調整を併せもつもの。西側小テラスから２個体出土した。32は外面に帯状縄文、内面にハケ目が施される。33は径10cmの平底で、内面中央に緩い膨らみをもち、内外面にハケ目、外面に10単位の帯状縄文が施される。縄文施文はハケ目調整後による。ともに鉱物を多量に含み、33では黒曜石状粒子も微量に含有する。

３類（第94図34）



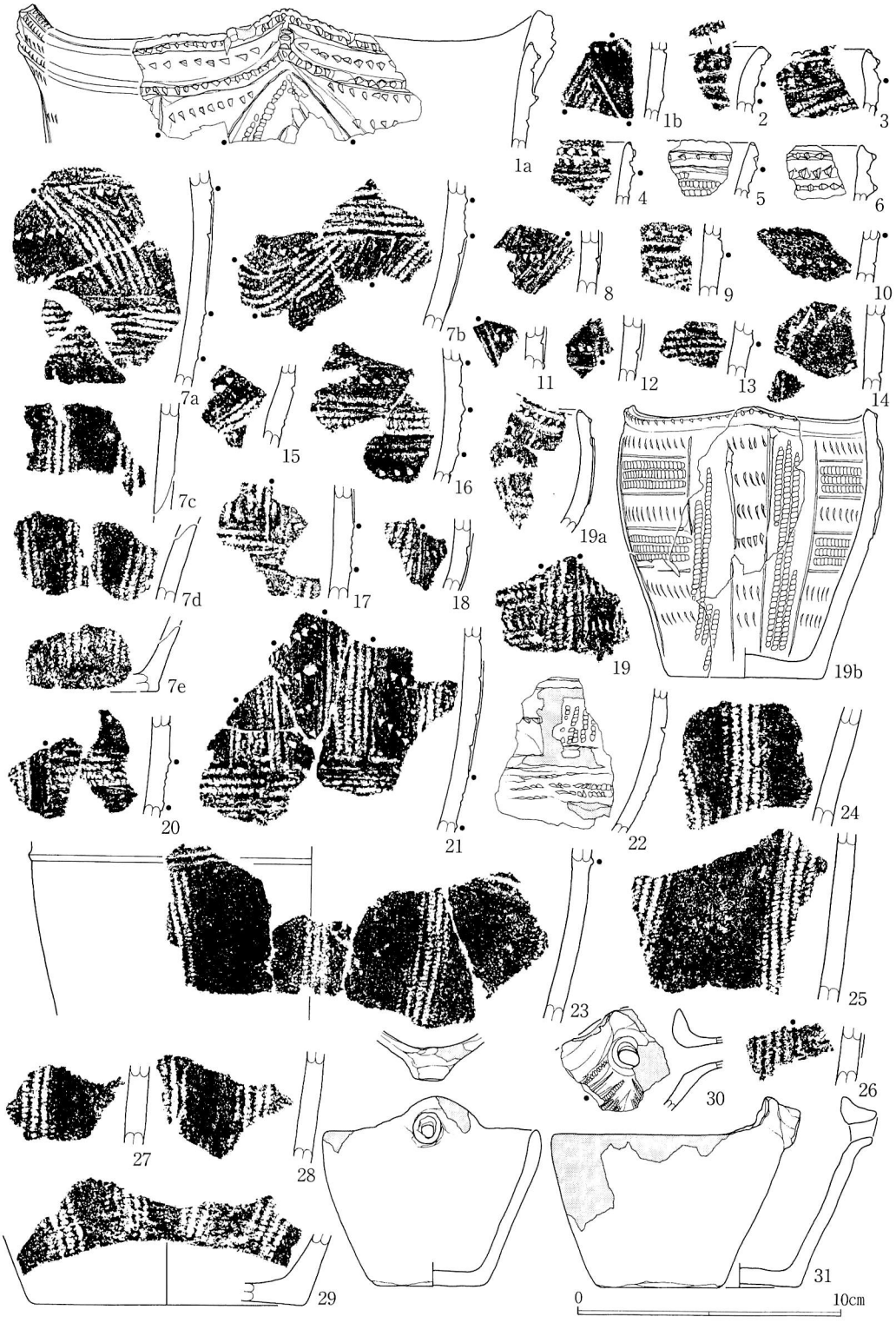


器種	口縁部計測値（破片数）	比率
土師器	305(85)	91.0%
北方系		
1類	1(1)	0.3%
3類	16(4)	4.8%
7類	13(5)	3.9%
小計	30(10)	9.0%
計	335(95)	100.0%

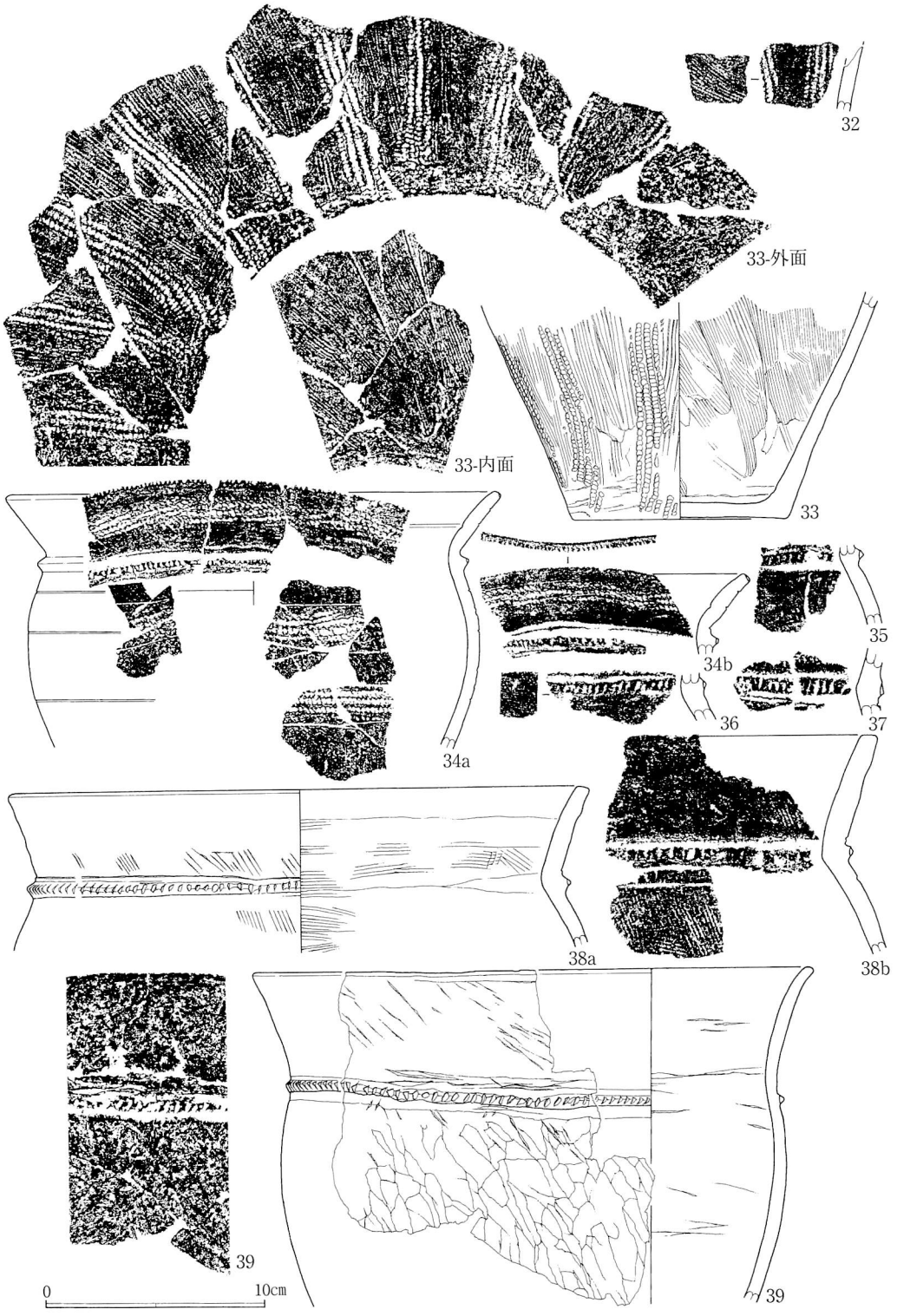
器種	口縁部計測値（破片数）	比率
土師器	745(120)	93.8%
北方系		
1類	25(8)	3.1%
4類	14(5)	1.8%
6類	10(5)	1.3%
小計	49(18)	6.2%
計	794(138)	100.0%

器種	口縁部計測値（破片数）	比率
土師器	1050(205)	93.0%
北方系		
1類	26(9)	2.3%
3類	16(4)	1.4%
4類	14(5)	1.2%
6類	10(5)	0.9%
7類	13(5)	1.2%
小計	79(28)	7.0%
計	1129	100.0%

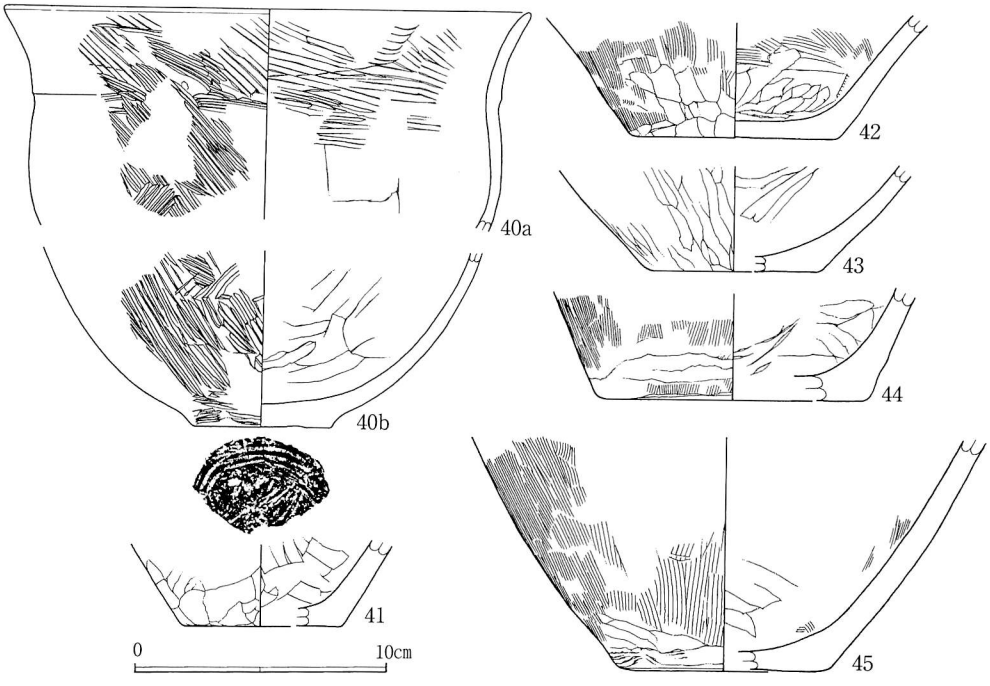
第92図　北方系土器の分布と数量



第93図　北方系土器１類（●:微隆起線・網点:剥落・欠損部）



第94図　北方系土器２類～４類・６類



第95図　北方系土器５類・７類

頚部に刻目隆帯がめぐる甕に刻目・ヘラ描沈線・帯状縄文を施すもの。１号住居址出土の34のみである。口端は平坦に面取され、浅い刻目が密に加えられる。口縁外面には、横ナデの後帯状縄文を全周に施し、横位のヘラ描き沈線を加える部分もある。口縁内面の中央部には、粘土帯の接合部が凹状をなしてめぐる。体部外面は横位のヘラ描沈線によって数段に区画され、無文帯と縄文帯が交互に配される。体部外面の一部にハケ目調整を認める。胎土には鉱物砕片を多く含む。外面全体と内面上部で炭化物の付着が著しい。

４類（第94図35～38）

甕または壷の頚部に刻目隆帯をめぐらすグループ。下段テラスおよび西側小テラスから３個体（34～36・38）、１号住居址南方斜面から１個体（37）出土した。37・38は隆帯下に横位沈線が加えられる。38は端部が平坦に面取されると共に、口縁内面に凹線がめぐる点において34と類似する。しかし本類の器壁はそれに較べ厚手であり、体部に最大径をもつ点にも異なりがある。各資料の整形は36・37の内面がハケ目、38は口縁部横ナデ・体部内外面がハケ目、35は内面ヘラナデ。いずれも鉱物砕片を多く含み、38では黒曜石状粒子も確認できる。

５類（第95図41～45）

４類の底部の可能性がある平底を本類とする。１類～４類同様、胎土には鉱物の砕片を多く含み、土師器に較べ器壁は厚手である。該当資料は図示の５個体で、42～45はテラス遺構周

辺、41は１号住居址覆土から出土した。器面の調整は土師器と変わりない。各資料の在り方は一覧のとおり。円盤状の粘土を底部に据えて成形されるため、底面はいずれも平坦である。立ち上りが緩やかで、底部内面に膨らみをもたない点は１類・２類と異なる特徴となる。

６類（第94図39）

黒色を呈し胎土に砂粒や黒曜石状の砕片を多量に含む異質な資料である。上段テラス下土坑群出土の39に限定される。外反する口端に最大径をもち、口縁下の緩やかな頚部に刻目隆帯がめぐる。口端は丸くおさまり、口縁部にはヘラ状工具によるケズリのちヨコナデが行なわれる。体部外面は縦位の粗いヘラミガキ、内面の一部にはヘラミガキを認める。口端から隆帯下にかけてヘラ状工具による斜位の擦痕が観察できる。内外面には炭化物の付着が顕著である。

７類（第95図40）

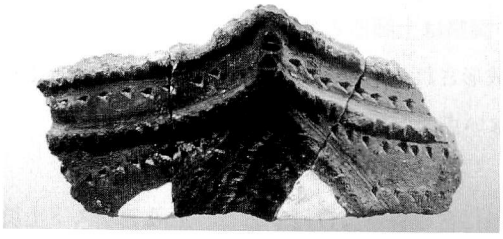
径の小さな平底、球状をなした体部、小段をもった外反口縁を特徴とする土器で、１号住居址覆土出土の40のみが該当する。底部を含む外面には粗いハケメが横位・縦位に施される。内面は体部上位以上に横位ハケメ、中位以下ではヘラナデが行なわれる。器形や調整手法が土師器と異質であり、北方系土器との関連性も想定されるため本グループとした。

B　北方系土器の位置づけ

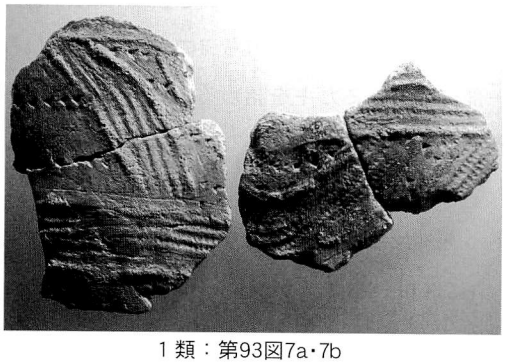
１類は北海道系の続縄文土器の中でも後半段階の「後北C2－D式」の範疇で理解できるもので、同型式の細分［大沼1982］による「一般的な段階」に該当する。この種の土器の従来の年代観としては、弥生時代の天王山系土器との共伴例が北海道～東北北部で確認される一方で古墳時代の初期段階まで下降する可能性も指摘されていた。これに対し、本遺跡では弥生土器が一切存在しておらず、古墳時代前期の土師器と明確な共伴関係をもって出土した。前項で詳述したように、本遺跡から出土した土師器の主体時期は、古墳Ⅱ期～Ⅲ期、新潟シンポ編年に従えば８期～９期に求められる。１類が中心的に出土した「テラス遺構」周辺ではⅡ期主体の構成をみせており、西側小テラスと上段テラス下土坑群ではこの時期に限定できる資料が得られている。１号住居址覆土の土師器はⅢ期に比定できるところから、本遺跡においては遺構単位で２時期にわたる共伴関係が確認されたことになる。

２類～５類は、土師器の特徴を併せもった「折衷土器」である。２類は宮城県大泉遺跡［佐藤1994］、４類は岩手県永福寺山遺跡［盛岡市教育委員会1997］で類例が確認されている。３類と同一の資料は知られていないが、沈線を文様要素とする例が東北地方で散見できるところから、本州的な地域性とする見方がある［大村1996］。なお、３類・４類に認める口縁内面の接合痕は土師器の中に１点しか存在しておらず（第80図155）、外来的な手法と考えるべきであろう。共伴土器に基づけば、２類はⅡ期、３類はⅢ期、４類はⅡ～Ⅲ期に位置づけられる。

１類～４類土器の性格を考える上で、使用胎土の在り方は重要な要素となる。１類の胎土が

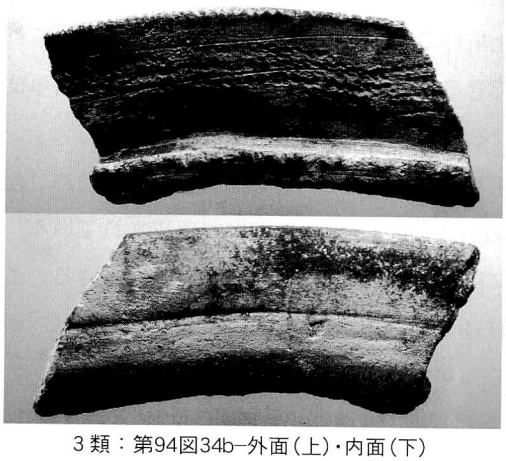


1類：第93図1a



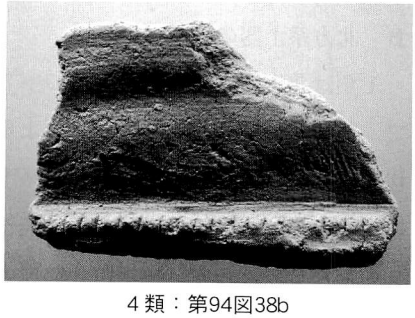
1類：第93図7a・7b

1類：第93図21

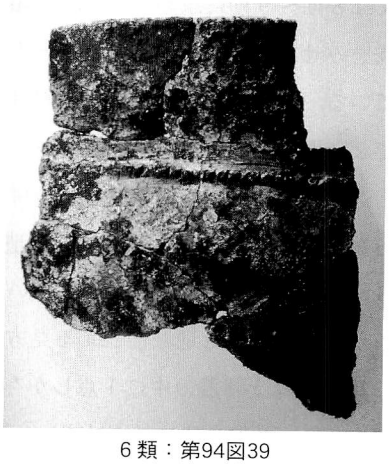


3類：第94図34b–外面（上）・内面（下）

2類：第94図33–外面



4類：第94図38b



6類：第94図39

第96図　北方系土器のバラエティー

バラエティーに富むことは前述のとおりである。鉱物粒子を多量に含む胎土ａ種は非土師器的な土器で、とりわけ１・７・18・19は一見して異質な資料と言える。このうち18・19の爪形刺突は、北海道で稀な手法であり、東北からの搬入品の可能性を考慮する必要がある。一方、鉱物が稀薄なｃ種は土師器に酷似する資料である。両者の中間的な在り方を示すｂ種も質感的には土師器に類似しており、全体的な胎土の様相は在地産土器に近似すると言ってよい。また、微量ながらも黒曜石状岩石を含有する個体が存在する点は重視すべき特徴である。前項でも指摘したように、これらは前時代の剥片を胎土混入物として再利用したものと考えられる。以上の諸点を総合すれば、続縄文系土器の大半は本遺跡内で製作された可能性が極めて高く、製作対象物に応じある程度の胎土選択が行なわれていたことをうかがわせる。

６類は胎土が明らかに異質であり、超遠隔地からの搬入品の可能性も指摘される注目の資料である。サハリンや沿海州に系譜を求める見解があるが［菊池1994・小嶋1996］、具体的な位置づけは今後の検討に委ねる課題としておく。本遺跡出土の土器のなかで、炭化物の付着が著しい資料が34と本例に限られる点は、使用法の面からも留意される特徴である。共伴土器に基づけば、Ⅱ期の所産とみなされる。

７類の位置づけも定かでない。在地土師器における有段口縁の鉢・甕などの特異な一形態の可能性も考慮される。所属時期はⅢ期である。

北方系土器観察表

No.	分類	出土区	遺構	胎土			文様	整形	備考
				長・石	凝灰	黒曜			
1	1類	F-2-e(月)	上段テラス下土坑群	A	C	有	刻目隆帯+刺突、斜位微隆起線+刺突+帯状縄文		
2	1類	E-2-y(火)	(テラス西斜面)	B	C		刻目隆帯+刺突、横位微隆起線		
3	1類	F-2-n(水)	下段テラス	B	C		刻目隆帯+刺突、横位微隆起線+帯状縄文		
4	1類	F-2-f(火)	西側小テラス	A	C		刻目隆帯+刺突、帯状縄文		
5	1類	D-3-x(日)	１号住居址覆土	B	C		刻目隆帯+刺突、帯状縄文		
6	1類		１号住居址覆土	B	C		刻目隆帯+刺突		
7	1類	F-2-f(日)ほか	西側小テラス	A	C		横位・斜位微隆起線+刺突+帯状縄文		
8	1類	F-2-r(水)	下段テラス	A	C		斜位微隆起線+刺突		
9	1類	FG-2～3排土	(テラス遺構)	B	C		刺突、横位微隆起線+帯状縄文		
10	1類	F-2-n(水)	下段テラス	B	C		横位微隆起線+刺突		
11	1類	F-2-n(水)	下段テラス	C	B		斜位微隆起線+刺突		
12	1類	D-3-y	(テラス西斜面)	B	C		横位微隆起線+刺突		
13	1類	E-3-e	(テラス西斜面)	B	C		横位微隆起線+刺突		
14	1類	F-2-x(月)	下段テラス	A	C		刺突		
15	1類	G-2-v	下段テラス	B	C		刺突、帯状縄文		
16	1類	F-2-j(日)ほか	上段テラス下土坑群ほか	B	C		横位微隆起線+帯状縄文		
17	1類	E-2-k(火)	(テラス西斜面)	B	C		縦位・横位微隆起線+帯状縄文		
18	1類	F-2-f(月)	西側小テラス	B	C		縦位微隆起線+刺突+帯状縄文		
19	1類	F-2-p(日)	(テラス西斜面)	B	C	有	刻目隆帯、縦位・横位微隆起線+刺突+帯状縄文		
20	1類	F-2-s+F-2-q	下段テラス	B	C	有	縦位・横位微隆起線+帯状縄文		
21	1類		１号住居址覆土	B	C		縦位・横位微隆起線+刺突+帯状縄文		
22	1類	F-2-o(火)	下段テラス	B	C		縦位・横位微隆起線+帯状縄文		
23	1類	F-2-k(月)	(テラス西斜面)	A	C		縦位・横位微隆起線+帯状縄文		
24	1類		下段テラス	B	C		帯状縄文		
25	1類	E-2-t(日)	(テラス西斜面)	A	C		帯状縄文		
26	1類	G-2-t(月)	(テラス東斜面)	B	C	有	縦位微隆起線+刺突		
27	1類	F-2-x	下段テラス	A	C		帯状縄文		
28	1類	F-3-e(月)	下段テラス	A	C		帯状縄文		
29	1類		下段テラス	C	C		帯状縄文		
30	1類	西側斜面採集		B	C		斜位微隆起線+帯状縄文		注口
31	1類	F-2-r(月)	下段テラス	C	B				注口
32	2類	F-2-f(水)	西側小テラス	A	C		帯状縄文	内ハケ	
33	2類	F-2-f(火)ほか	西側小テラス	B	B		帯状縄文	内外ハケ　外ケズリ	内深いハケ
34	3類		１号住居址覆土	A	C		口端刻目、刻目隆帯、沈線+帯状縄文	体外ハケ　口端平ら	炭化物多
35	4類	E-2-j	西側小テラス	C	C		刻目隆帯	外ハケ　内ヘラナデ	
36	4類	F-2-y(水)	下段テラス	A	C		刻目隆帯	内ハケ	
37	4類	D-4-w(火)ほか	(テラス西斜面)	A	C		刻目隆帯+沈線	内ハケ	
38	4類	F-3-c(月)	下段テラス	A	C	有	刻目隆帯+沈線	口・体内外ハケ　内ミガキ？　口端平ら	
39	6類	F-2-e(月)ほか	上段テラス下土坑群	C	C	有	刻目隆帯	体内外ミガキ	炭化物多
40	7類		１号住居址覆土	B	C	有		口内外・体・底外ハケ　体内ヘラナデ	口縁有段
41	5類		１号住居址覆土	A	C			体内外ヘラナデ	
42	5類	F-2-e(月)	上段テラス下土坑群	A	C			体内外・底外ミガキ	
43	5類	F-2-t(水)	下段テラス	A	C			体外ミガキ・ケズリ　底外ミガキ	
44	5類	E-3-d(月)ほか	(テラス東斜面)	A	C			体外ハケ　体内ミガキ	
45	5類	F-2-s(水)ほか	下段テラス	A	C			体外ハケ・ケズリ　体・底内ミガキ	

3　管玉と製作工程資料

緑色凝灰岩を石材とする管玉２点と1360点あまりの製作工程資料が出土した。前者は下段テラス面と上段テラス東斜面から得られたものである。後者は97％が上段テラス下土坑群の一角から出土しており、そのうち66％は土壌水洗をつうじて抽出された。残りの３％は下段テラスと西側斜面からの出土で、後者の資料は４点を数えるにとどまった。

使用される石材は、淡緑色の岩体に濃緑色の粗粒子を多く含むものが大多数を占める。至近距離に位置する越王遺跡はほぼ同時期と考えられる玉造遺跡であるが、混入物の少ない良質石材が多用されており（第97図右）、２遺跡間での著しい異なりが留意される。

A　分類

（1）管玉（第98図14・15）

ともに長さ2.0cm前後、径0.58cm～0.6cmを測る。２点の形状には大きな異なりがあり、端正な作りの14に対し、15の端部は不整形かつ丸みを帯びる。

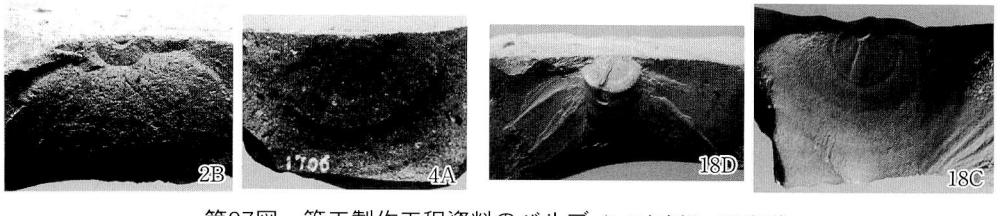
（2）管玉製作工程資料（第98図１～13）

上段テラス下土坑群出土資料の８割は、最大幅１cmに充たない微細剥片である。下段テラスの資料にも数量的な制約があり、製作工程を具体的に復元するには至らなかった。

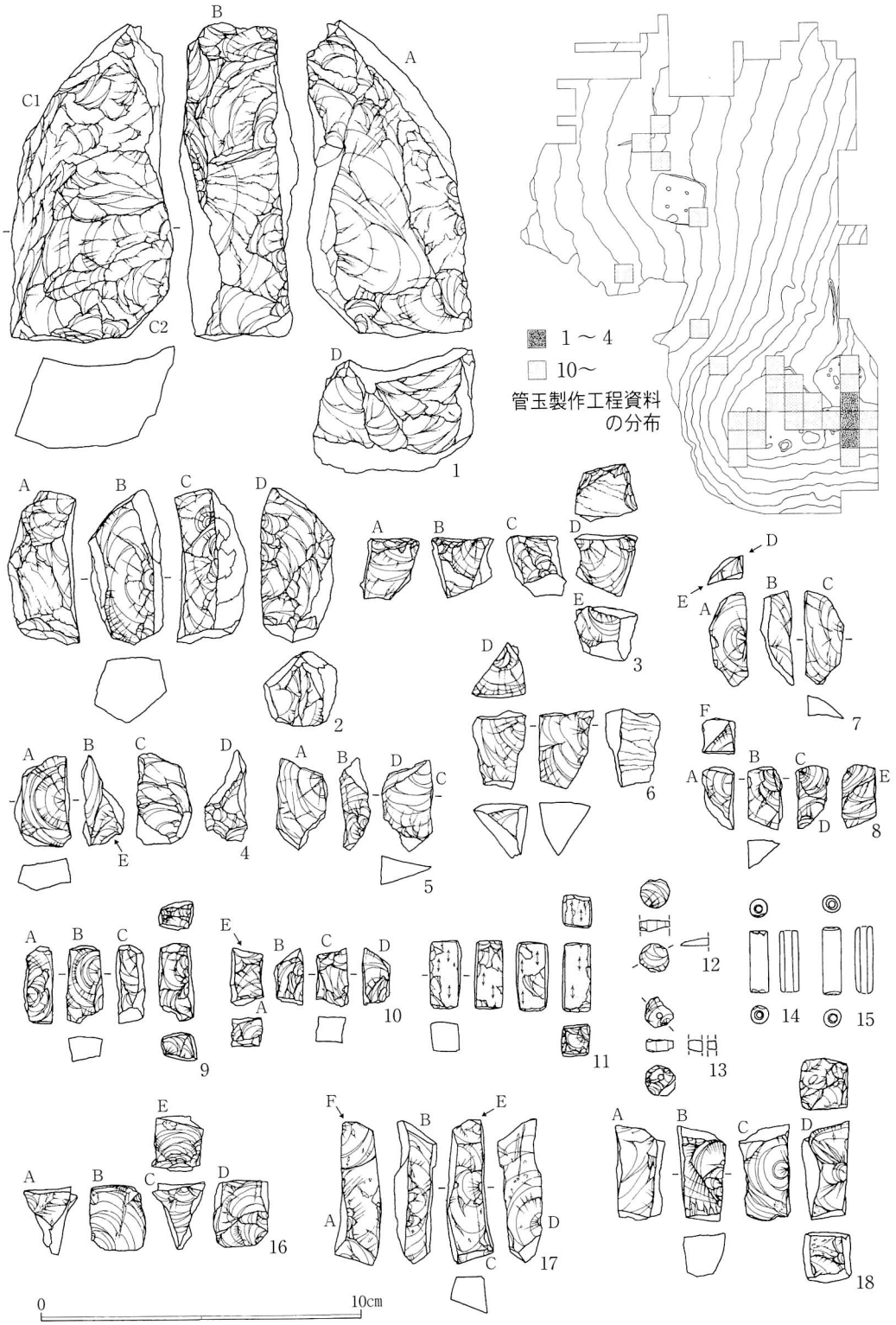
石核（１～３）　１は大型石核で、連続的な分割に先立つ初期工程の資料である。最大長10.2cm・厚さ3.5cmを測り、完成品の長さが厚さに確保されている。角柱状の２は、頻繁な打面転移が行なわれ、Ｂ面にのみポジティブバルブをもつ。形状は管玉素材に類するが、サイズからみて、さらに分割を意図した石核と考えられる。３は剥離が進行した最終的な姿である。

剥片（４～７）　極小のバルブと半円形のリングを有する資料が多数を占める。打点がピンポイントをなすため生じた特徴的な剥離で、石核の２や管玉素材の８・９にも同種の剥離が観察できる。越王（第98図16～18）や柏崎市行塚遺跡［伊藤1985］で類例がみられることから、古墳時代の玉造資料を特徴づける技法と考えられる。剥離法としては、先鋭な金属を打面に据えた間接打法が想定できる。越王に較べ本遺跡ではバルブが不顕著であるが（第97図）、この点は石材の異なりを考慮に入れる必要がある。

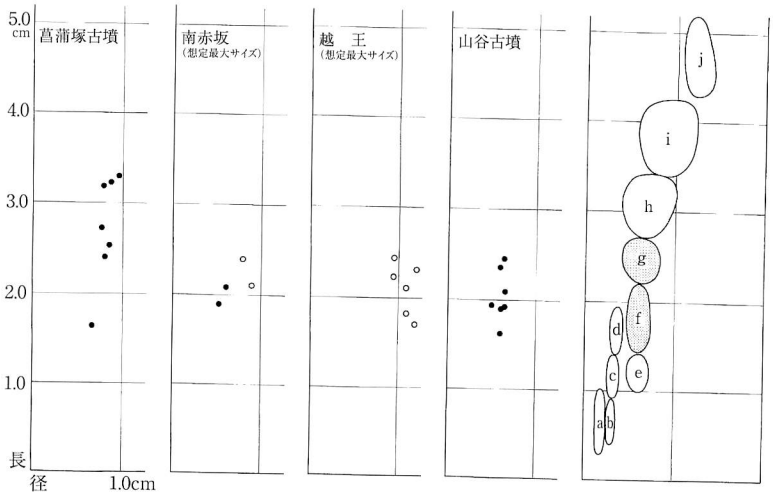
管玉未製品（８～13）　角柱状を呈する９・10は、剥離整形段階の管玉素材。後者は側面の押圧剥離時に折損したもの、前者は両端に微剥離が加えられた完存品である。８は管玉素材



第97図　管玉製作工程資料のバルブ（2･4:南赤坂・18:越王）



第98図　管玉と製作工程資料（1～15南赤坂・16～18越王）



第99図　管玉サイズ（白丸：未製品の想定最大サイズ）

の作出時に生じた分割残余。以上３点の断面最小幅は、0.6～1.0cmの範囲内に含まれる。11は一端を除く全面に粗い研磨が加えられており、その範囲と研磨方向を図中に示した。角柱状素材の段階から研磨作業が始まることを示す好資料である。断面幅は0.9cm。12・13は側面を８～９の多面体に研磨した後、端部の４mm前後を除去したもの。剥離面には極小バルブが観察できる。12は穿孔前に両端が折断され、13は穿孔後に一端が除去された資料である。

B　所属時期

北陸・新潟における弥生～古墳時代墳墓出土の管玉サイズ分類［荒木1989］を第99図に示した。図のごとく、本遺跡の完成品２点はｆ類の範疇に含まれる。２点の未製品は、最大長に基づけばｆ類の範囲内に分布し、同様の完成品サイズを意図したことがうかがえる。４点が該当するｆ類は、古墳時代前期の中葉に位置づけられており［荒木前掲］、テラス遺構の機能時期・上段テラス下土坑群の埋積時期と矛盾しない。また、近隣の山谷古墳や越王遺跡出土資料との間に認める類似性は、互いの近時関係を示唆する特徴といえよう。

管玉および製作工程資料観察表

NO	種　別	出土区	遺　構	石　材	剥離過程	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)
1	石核	F-3-j①	下段テラス	緑色砂質凝灰岩	C1→D→C2・A→B	10.3	4.8	3.2	221.0
2	石核	D-3-s③	１号住居覆土	〃	D→A→C→B	4.8	2.3	2.0	26.2
3	石核	F-2-e④	上段テラス下土坑群	〃	E→A・B→D→C	1.9	1.9	1.6	7.5
4	剥片	F-2-r③	下段テラス	〃	B・D→C→E→A	1.7	2.9	1.3	5.5
5	剥片	F-2-e④	上段テラス下土坑群	〃	D→C→B→A	1.7	2.9	0.9	2.7
6	剥片	F-2-w①	下段テラス	〃	C→B→A→D	2.4	1.7	1.7	5.9
7	剥片	F-2-e②	上段テラス下土坑群	〃	B・E→D→C→A	1.2	2.9	0.7	2.0
8	管玉素材分割品	E-3-t	(テラス西斜面)	〃	E・F→D→B・C→A	1.9+	1.0	1.0	1.9+
9	管玉素材	F-3-e①	下段テラス	〃	A・C→B→押圧	2.4	1.0	0.8	2.7
10	管玉素材	F-2-e①	上段テラス下土坑群	〃	E→A・C→B・D→押圧	1.8+	1.0	0.8	1.9+
11	粗研磨工程	C-4-j①		〃		2.1	1.0	0.9	3.3
12	粗研磨工程(端部折断)	F-2-x③	下段テラス	〃			径 0.9	0.3	0.1+
13	穿孔工程(端部折断)	F-2-x③	下段テラス	〃			径 0.9	0.3	0.1+
14	管玉	G-1-w	(テラス東斜面)	〃		1.9		径 0.5	0.9
15	管玉	F-3-n②	(テラス南斜面)	〃		2.1		径 0.6	1.0
16	剥片	越　王	――	緑色凝灰岩	A・C→B→D・E	2.2	1.8	1.4	5.1
17	管玉素材	越　王	――	〃	F→D→C→B→E	1.1	4.6	1.2	9.4
18	管玉素材	越　王	――	〃	B→A→D→C→押圧	1.4	2.9	1.6	9.3

4　打製石器

テラス遺構とその西側斜面を中心に古墳時代前期の所産とみなされる打製石器が45点出土した。石材の大多数は粒子の粗い流紋岩で、他に珪質流紋岩・頁岩・安山岩なども少量ながら使用される。全体に角礫素材が多い点も特徴である。遺構内からの出土は、下段テラス17点（北半部主体）・西側小テラス３点・１号住居址７点を数える。第100図右上は西側テラスにおける第103図22の出土状態、第55図右下は１号住居址東コーナー床面での第104図28の出土状態で、前者は折衷土器（第94図33）の内部からみいだされた。このほか、遺構外の14点が東側尾根の西側斜面から出土しており、本来的にはテラス遺構に伴う資料と考えられる。

製作関連資料としては、下段テラスからのハンマー１点（第100図１）と石核・剥片類があげられる。縄文時代遺物との峻別が困難なため後者の実数は不明であるが、ほぼ同質の流紋岩製剥片に限定した場合、テラス遺構周辺で50点程度、１号住居址で８点ほどを数える。より明確な資料としては、１号住居址覆土から第105図38との接合を認める剥片２点が出土した。

A　分類

形状と刃部位置に基づき、以下のような６類に区分できる。なお、図中の矢印は肉眼観察によって使用痕が明瞭に確認できる範囲、網点は自然面を表す。

１類（第100図２・３、101図４～８）

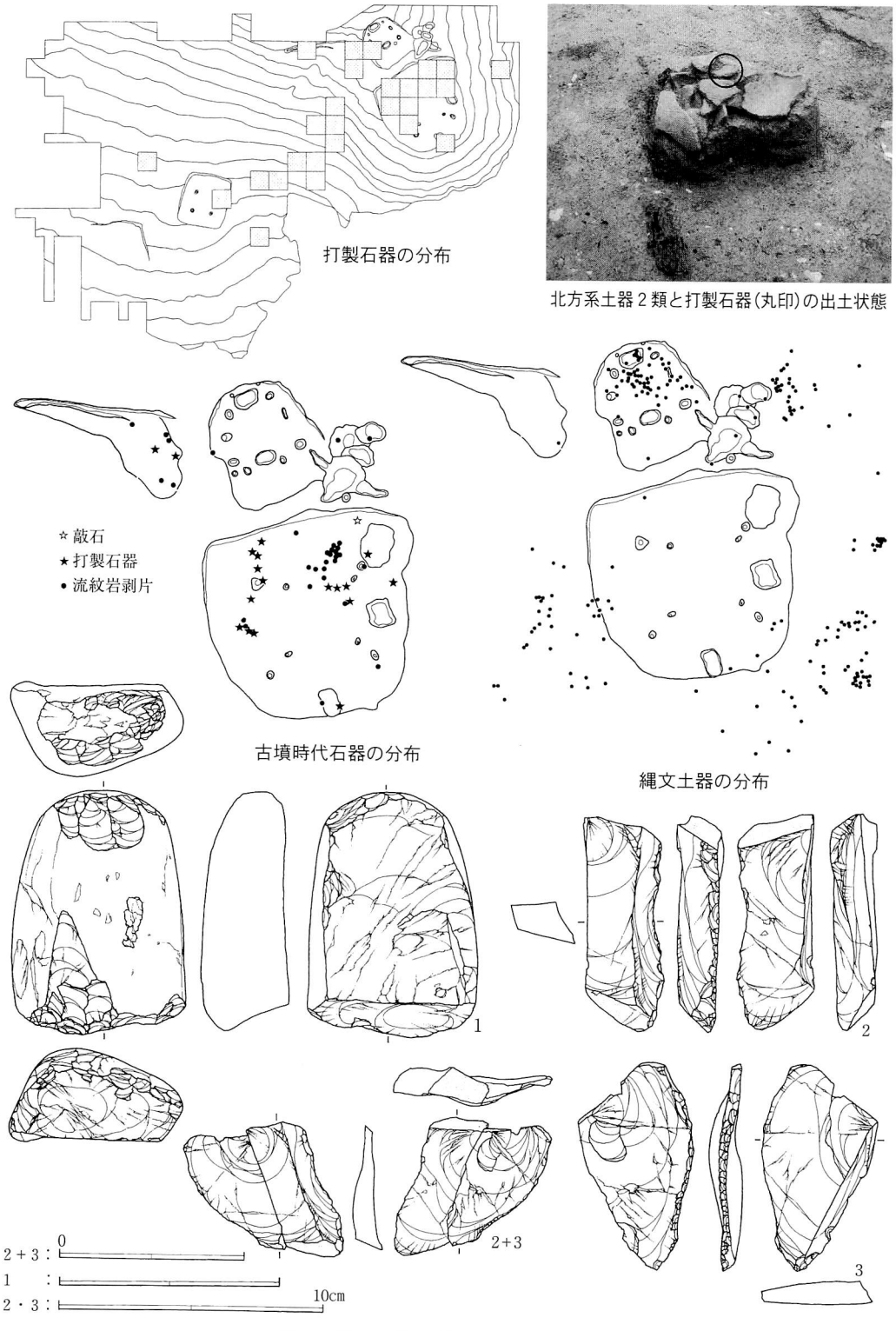
縦長・横長剥片（２～７）や節理面をもった扁平礫（８）を素材とし、一側縁に片面方向からの連続的な剥離を施すもの。以下４類まではスクレイパーにあたる。刃部角度はいずれも鈍角的で、70°にも達する８のような例がある。２・３は幅広い縦長剥片を中央から折断し、各々刃部加工が行なわれる。本類では６～８で顕著な使用痕が観察できる。６・７は刃部エッジの広い範囲、８は剥離面の稜に磨耗を認める。

２類（第101図９～11、102図12・13・15・16）

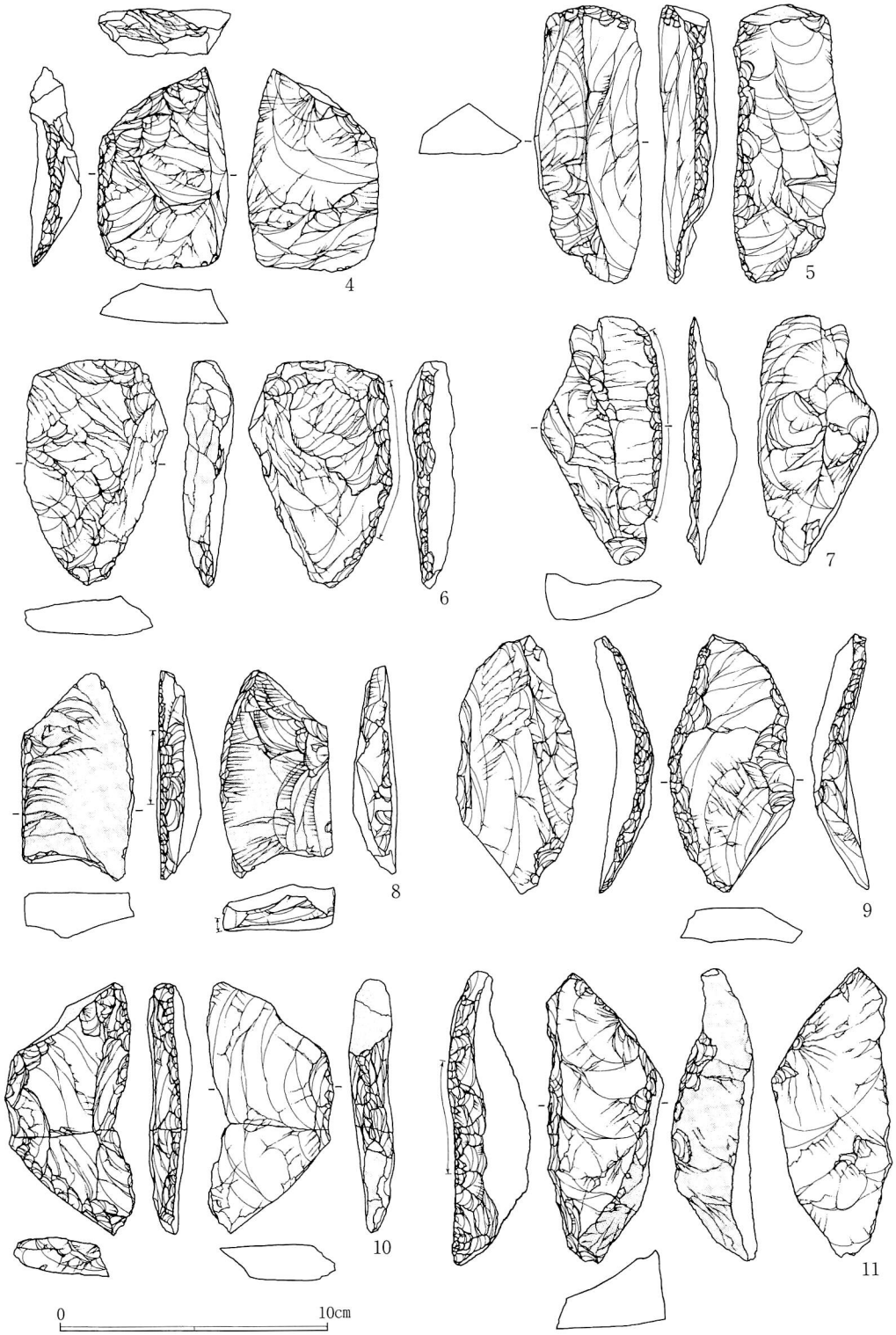
剥片の二側縁に剥離を加えるグループの中から定型的な資料を抽出した。該当する７点はいずれも横長剥片を素材とし、片面加工による鈍角的な刃部を一側縁、その反対側縁の中央付近に小範囲に限定された剥離をもつ。片側の限定剥離には、両面加工（９・10）と片面加工（11・12・15・16）の別があり、後者はさらに刃部との関係から同一面剥離（15・16）と錯向剥離（11～13）に分けられる。これらは何れも刃部とみなしがたく、手に保持する際の配慮（刃潰し加工）であろう。明瞭な使用痕を認める資料は、刃部中央や下半が磨耗する11・12の２点。

３類（第102図14・17～19、103図20～27）

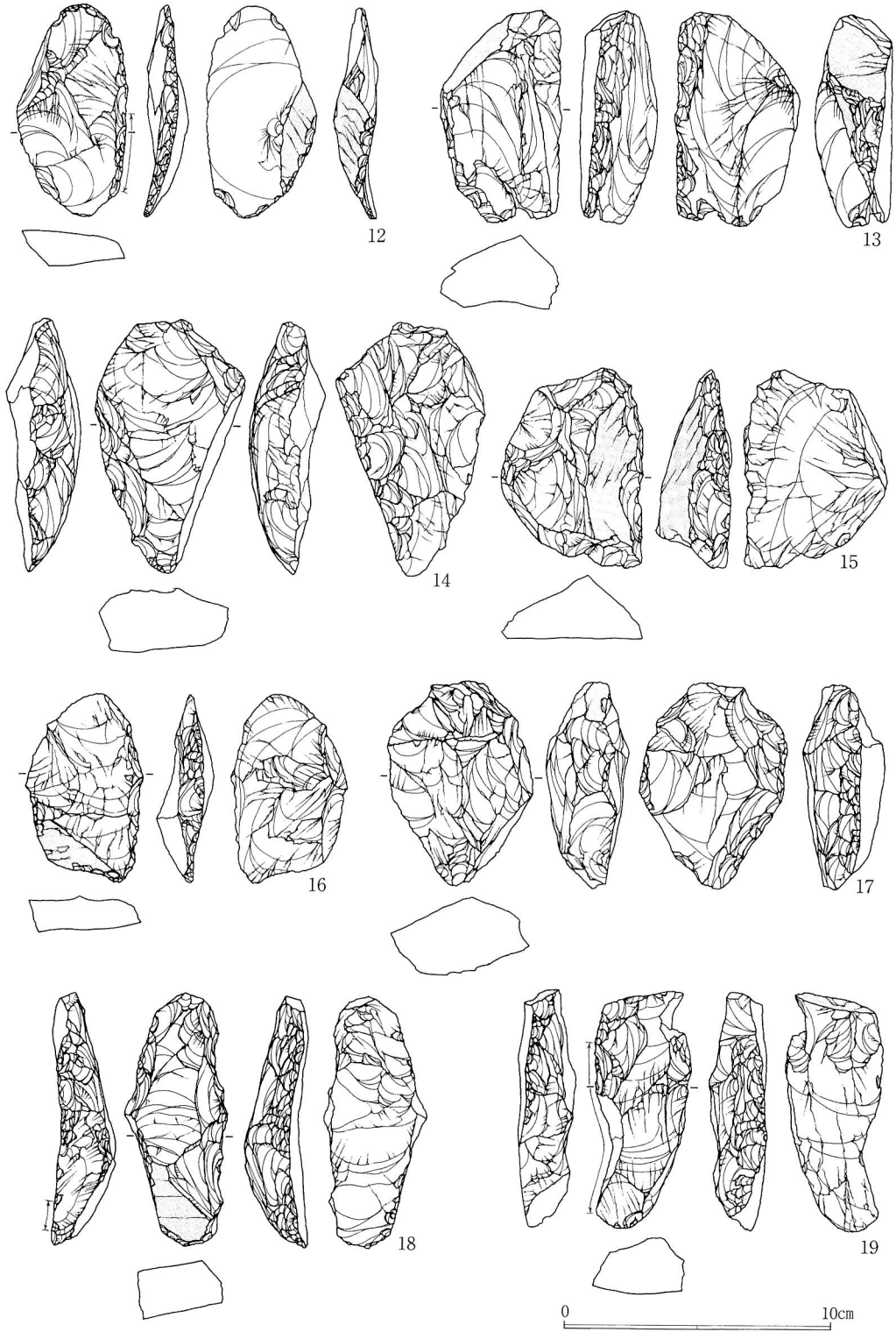
縦長・横長剥片の両側縁に刃部加工を行なうものである。本類には微細剥離を片面もしくは両面に行なう資料（20・23～27）が多い傾向にある。剥離方向は、同一面（18～20・22～26）と両面（21・27）の二者に分かれる。18・19・26のエッジで磨耗痕が観察できる。いずれも



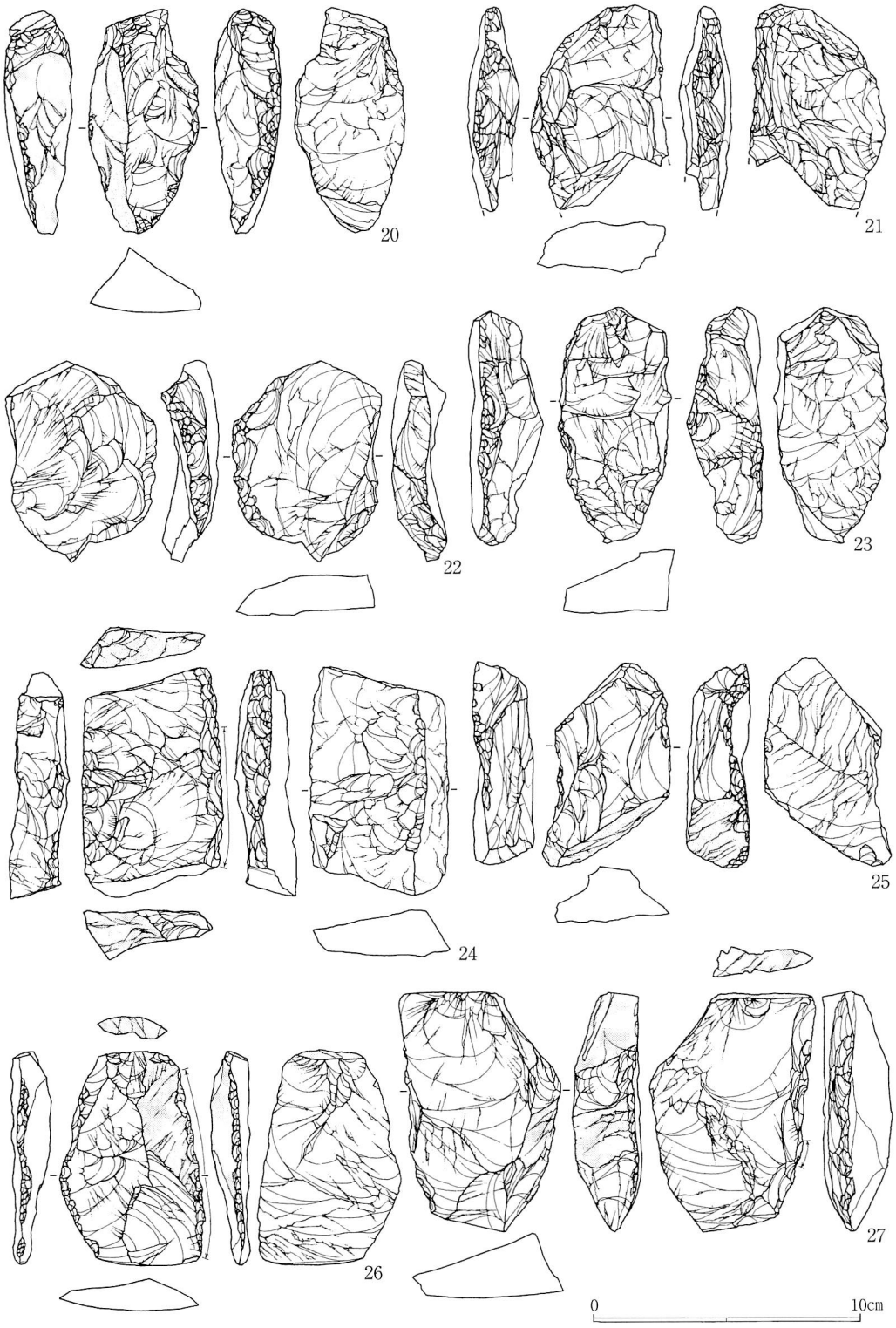
第100図　石器：敲石・打製石器－1



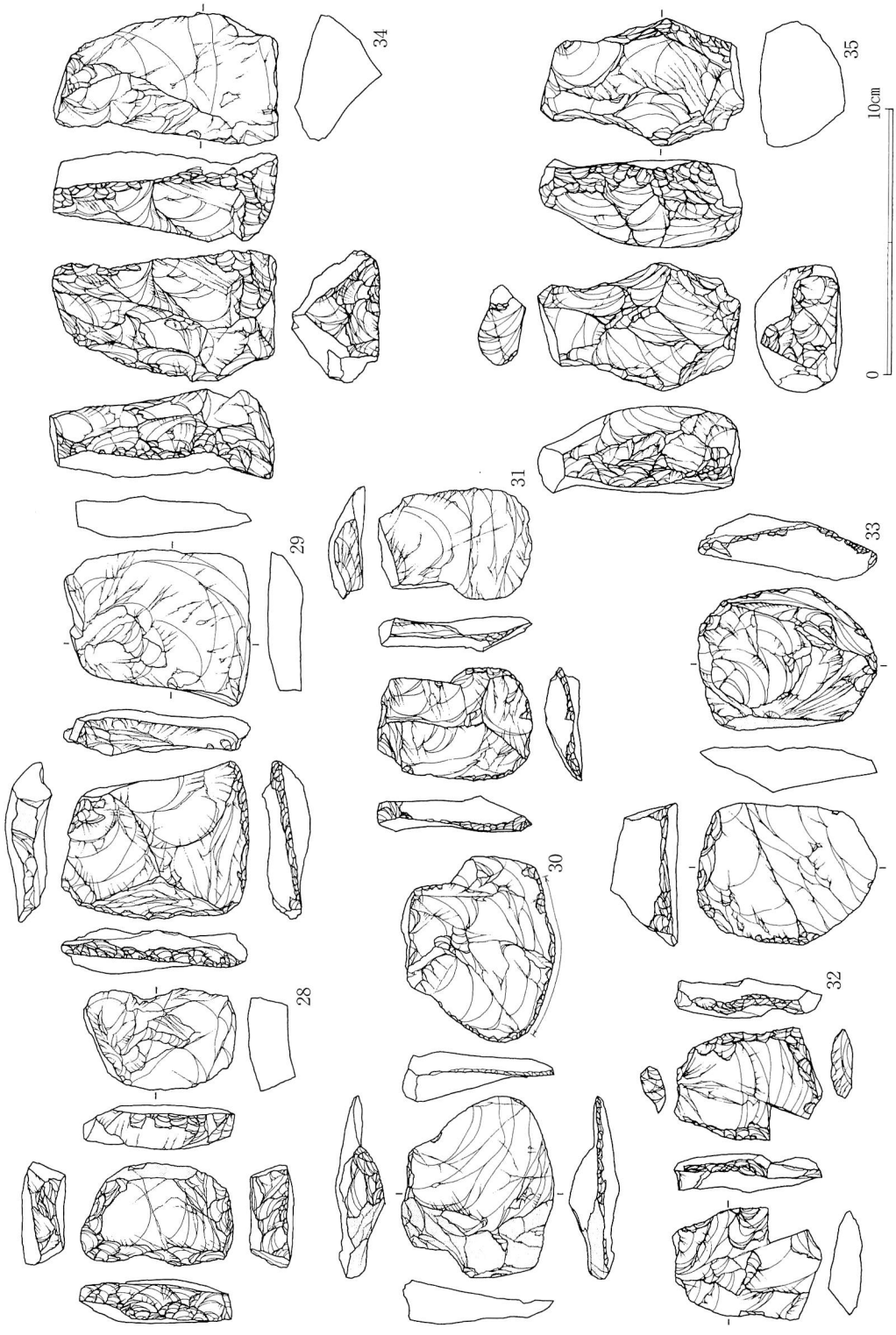
第101図　打製石器－2



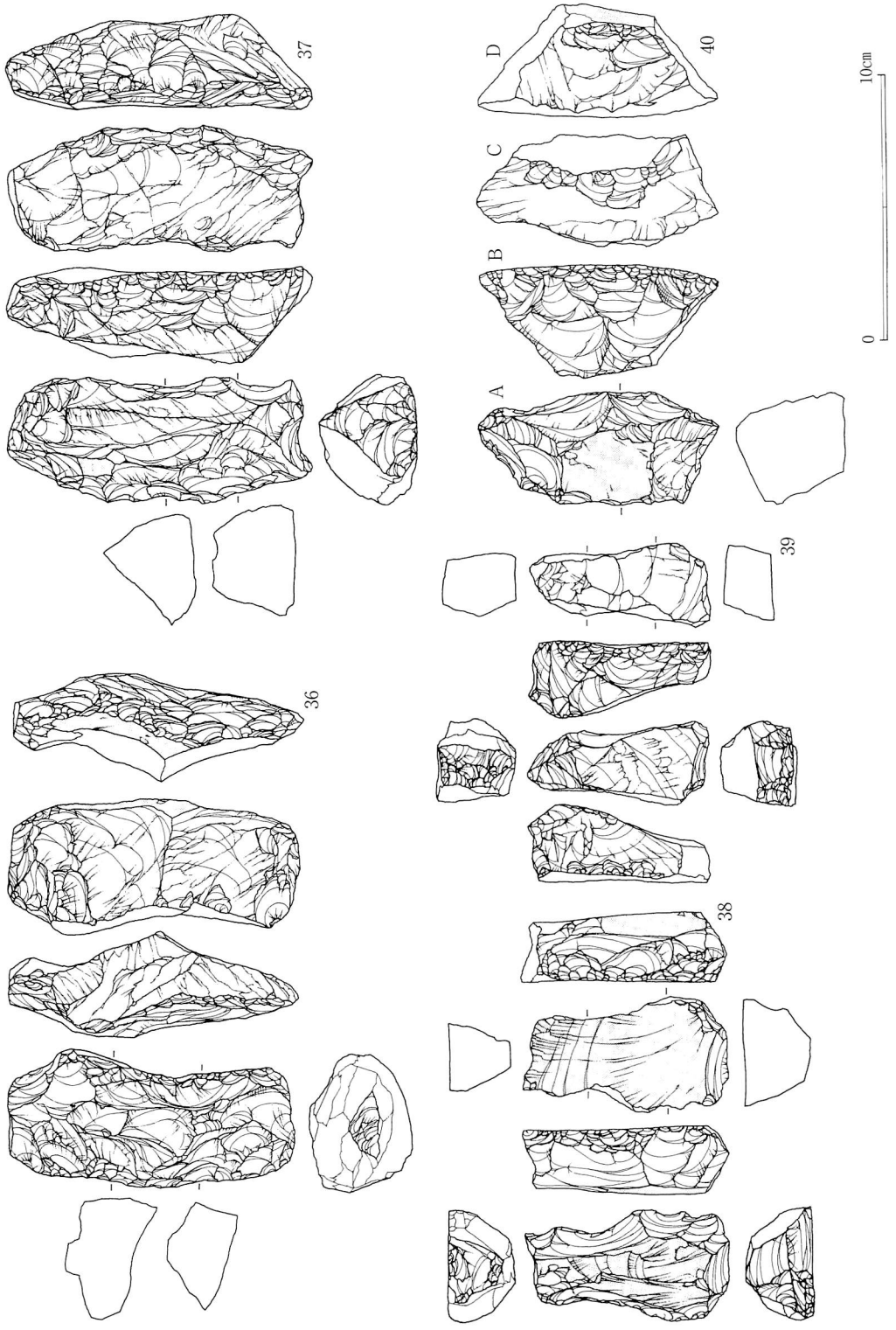
第102図　打製石器－3



第103図　打製石器－4



第104図　打製石器－5



第105図　打製石器－6

部位は片側に限定される。

4類（第104図28～33）

主として縦長剥片を素材とし、広い範囲に刃部加工を行なうグループ。剥離部位は、ほぼ全周にわたるもの（28）、打面や折断面を除く広い範囲に及ぶもの（29・32・33）、下半に限定されるもの（30・31）がある。3類と同様に微細剥離資料（29～31・33）が多い。30は一辺の広い範囲に強度の磨耗を認める。32・33は磨耗範囲が限定され、その程度も微弱である。

5類（第104図34・35、105図36～39）

全体形状が打製石斧に類似するものを本類とする。縄文時代草創期の片刃石斧に類したもの（37）も存在するが、刃部をなさない資料（35・38）も含まれており、それとは異なる性格を考えるべきである。節理面をもった扁平礫（38）と剥片素材の別があり、後者の形状がうかがえる資料は何れも縦長剥片（34・37・39）が使用される。側面加工は37の一側縁を除き片面に限られる。剥離のタッチはラフである。エッジに明瞭な磨耗を認める資料は後述の6類とともに見あたらない。使用痕と認定できるか否か不明であるが、38の一側面には幅6～11㎜範囲で表裏方向の線状痕が観察できる。

6類（第105図40）

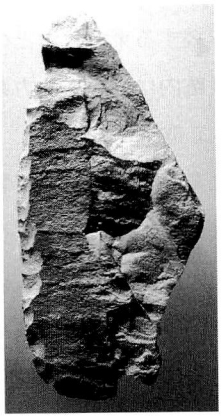
3面からの剥離によって角柱状に整形された特異な石器である。1点の出土に限られる。最大厚は4.3㎝と肉厚で、調整が入念なB面での刃部角度は70°を測る。

B 打製石器の位置づけ

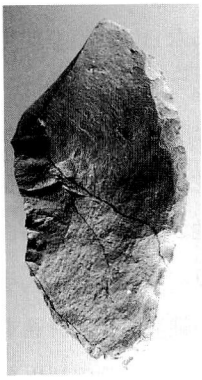
以上の位置づけにあたり、先ず問題となるのは所属時期である。前述のように、これらはテラス遺構を中心に分布しており、中でも下段テラスの遺構面からの出土が最も多かった。尾根上に造成されたテラス遺構では、下段テラスで大規模な削平が行なわれている。縄文土器は下段テラス面にほとんど存在しておらず、削平を免れた周辺斜面や上段テラスの覆土（高域部からの流れこみ）に分布がほぼ限定される（第100図）。この点は、縄文時代遺物の混入の疑いを否定的に導く重要なポイントとなる。

形態に目を転じると、現在までのところ周辺一帯の縄文時代遺跡において類例の出土は知られていない。一部の資料に古様相を考慮すべき特徴は認めるが、縄文時代草創期の石器群で本遺跡のような片面加工スクレイパーの卓越組成が確認された例も皆無である。以上のような状況に基づけば、本遺跡の打製石器を縄文時代の遺物と考えるのは困難で、必然的に古墳時代前期の所産と判断せざるをえない。

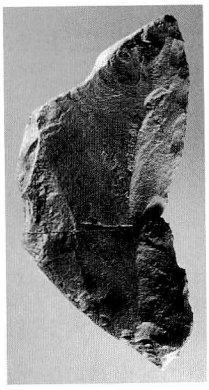
新潟平野周辺における打製石器（スクレイパー類）の使用下限は、従来弥生時代後期中葉に求められてきた。近隣の御井戸B遺跡では、1997年の調査で古墳時代前期の遺物が大量に出土しているが、打製石器は確認できず、在地の伝統の中で南赤坂を位置づけるのが困難であるこ



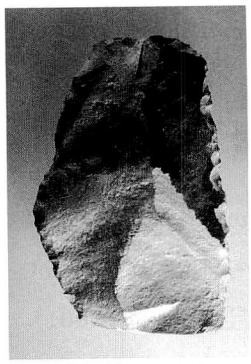
1類：第101図7



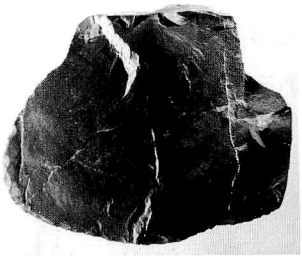
2類：第101図9



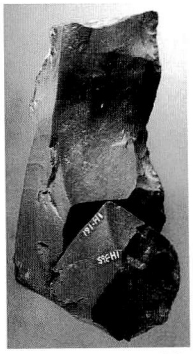
2類：第101図10



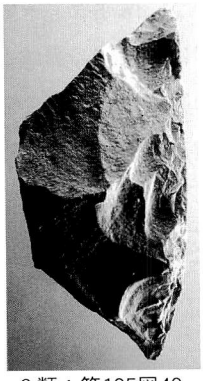
3類：第103図26



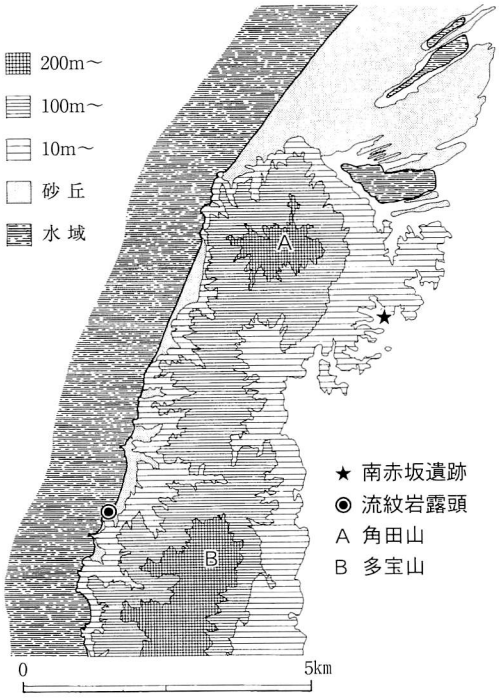
4類：第104図30

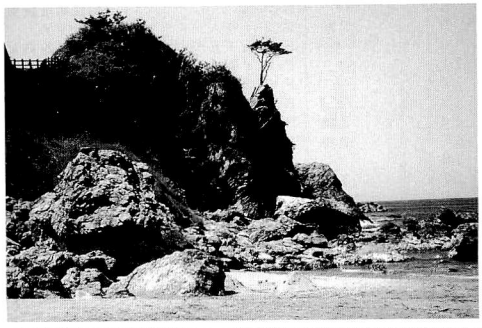


5類：第105図38（刃部作出剥片の接合状態）



6類：第105図40





岩室村間瀬海岸の流紋岩露頭

第106図　南赤坂遺跡の打製石器と流紋岩露頭

とを明確にした。したがって現時点で系譜を求めるならば、石器使用が存続する東北日本とのつながりを想定するのが自然な見方である。関連して興味深いのは、本遺跡内において北方系土器が相似た分布を示す現象である。両者の密接な関係を示す在り方として重視したい。

外来的な性格を考えた場合問題となるのは、東北地方の続縄文系石器に多用される黒曜石製のラウンドスクレイパーが欠落する点である。同地の石材には、４世紀代に遠隔地産の黒曜石も利用されているが、量的主体は在地産石材であり、５世紀代に入るとその傾向が鮮明化する［吉谷・高橋2001］。これに対し、県内下越地方の縄文遺跡に流通する板山産黒曜石は、原石サイズが極小なため石鏃素材の確保が可能な程度であり、その利用も弥生時代に入り終息に向かう。南赤坂で多用される流紋岩は在地産石材で、南西７kmに位置する岩室村間瀬海岸においてほぼ同質の露頭と転石が確認できる（第106図）。しかし石質は良好と言い難く、小型石器の製作には不向きである。本遺跡の打製石器が大型スクレイパーに偏ることは、そうした石材調達事情を背景とした地域的な変異形態と考えることができるであろう。

古墳時代石器一覧

図No	分　類	出土区	遺　構	石材	素材	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）
1	敲　石	F-2-o②	下段テラス	ホルンヘルス	円　礫	11.2	7.7	4.0	542.9
2	打製石器１類	F-2-t④	下段テラス	流紋岩	円　礫	7.8	2.8	1.5	42.0
3	〃	G-2-p②	下段テラス	流紋岩	—	7.8	4.2	1.1	28.3
4	〃	E-2-y③	（テラス西斜面）	流紋岩	—	7.4	4.9	1.6	60.1
5	〃	F-2-r④	下段テラス	頁　岩	亜角礫	11.5	3.8	2.0	85.0
6	〃	G-2-n④	（下段テラス東斜面）	流紋岩	角　礫	8.5	5.2	1.7	75.7
7	〃	F-2-k	西側小テラス	流紋岩	亜円礫	9.3	4.4	1.9	51.1
8	〃	D-3-x	１号住居址表土	頁　岩	角　礫	7.8	4.1	1.6	59.2
9	２類	F-2-r④	下段テラス	流紋岩	—	9.6	4.6	1.2	60.0
10	〃	E-3-e＋E-3-n③	（テラス西斜面）	流紋岩	亜円礫	9.4	4.6	1.4	69.6
11	〃	F-2-r④	下段テラス	玢　岩	亜円礫	10.9	4.2	2.5	117.2
12	〃	F-2-t③	下段テラス	頁　岩	角　礫	7.9	4.1	1.5	43.9
13	〃	E-3-d	（テラス西斜面）	流紋岩	角　礫	7.9	4.6	2.8	99.5
14	３類	D-3-s④	１号住居址覆土	珪質流紋岩	—	9.5	5.6	2.6	114.5
15	２類	F-2-r④	下段テラス	流紋岩	角　礫	7.5	5.2	2.6	93.4
16	〃	E-2-y③	（テラス西斜面）	流紋岩	亜角礫	7.1	4.4	1.6	49.1
17	３類	F-2-x①	下段テラス	無斑晶質安山岩	角　礫	7.7	5.3	2.8	124.9
18	〃	E-3-e①	（テラス西斜面）	頁　岩	角　礫	9.5	3.8	2.1	79.4
19	〃	D-3-v④	１号住居址覆土	流紋岩	角　礫	9.1	3.6	2.1	76.0
20	〃	E-3-j	（テラス西斜面）	流紋岩	角　礫	8.3	4.1	2.5	71.0
21	〃	E-3-d	（テラス西斜面）	流紋岩	角　礫	7.4＋	5.1	1.8	73.2＋
22	〃	F-2-f④	西側小テラス	流紋岩	角　礫	7.2	5.9	1.5	78.0
23	〃	F-3-d①	下段テラス	流紋岩	—	8.7	4.6	2.8	96.3
24	〃	E-4-f		流紋岩	角　礫	7.6	5.2	2.0	105.4
25	〃	G-2-k	下段テラス	流紋岩	角　礫	7.8	4.2	2.3	83.3
26	〃	F-2-w④	下段テラス	流紋岩	角　礫	8.0	5.2	1.4	52.7
27	〃	F-2-t④	下段テラス	流紋岩	亜円礫	9.0	5.8	2.5	138.9
28	４類	D-3-s②	１号住居址床面	流紋岩	亜円礫	5.7	3.8	1.5	48.2
29	〃	G-2-f③	下段テラス	流紋岩	角　礫	6.9	5.8	1.6	70.0
30	〃	F-2-o③	下段テラス	頁　岩	亜角礫	5.9	6.7	1.8	53.7
31	〃	E-3-j	（テラス西斜面）	流紋岩	—	5.8	4.2	1.1	27.5
32	〃	E-3-i	（テラス西斜面）	流紋岩	—	5.4	4.1＋	1.2	30.0＋
33	〃	E-2-h	西側小テラス	流紋岩	角　礫	6.8	5.4	1.7	68.6
34	５類	F-2-r②	下段テラス	流紋岩	角　礫	8.4	4.7	2.7	118.1
35	〃	E-3-j	（テラス西斜面）	流紋岩	角　礫	7.5＋	4.8	3.2	130.3＋
36	〃	E-3-r①	（テラス西斜面）	流紋岩	円　礫	10.8	4.7	3.5	182.5
37	〃	F-2-f③	西側小テラス	流紋岩	角　礫	11.3	4.7	3.5	224.2
38	〃		１号住居址覆土	頁　岩	角　礫	7.7	4.2	2.5	97.6
39	〃	E-3-e	（テラス西斜面）	流紋岩	—	6.9	3.2	2.9	63.0
40	６類	D-3-x	１号住居址表土	流紋岩	角　礫	9.0	3.9	4.2	157.6
—	１類	G-2-k③	下段テラス	流紋岩	亜角礫	7.0	3.4	2.3	34.9
—	３類	E-3-s④		流紋岩	亜円礫	7.7＋	3.8	1.4	43.6＋
—	４類	C-3-o	（テラス西斜面）	流紋岩	亜円礫	7.4	5.0	1.4	72.9
—	（１類）	F-3-d①	下段テラス	流紋岩	角　礫	—	—	—	—
—	—	D-4-c②	１号住居址覆土	流紋岩	角　礫	—	—	—	—

5　生業関連資料

生業に関わる資料の出土は僅少で、少量の炭化種子と籾痕土器を確認したにとどまる。

A　炭化種子

上段テラス下土坑群からクルミ、１号住居址からヒシ・モモが出土した。

クルミ（第107図Ｂ）　管玉製作剥片の集中域で実施した土壌水洗に伴い、堅果破片40点がえられた。いずれも細片で、１個分の可能性もある。近隣の御井戸Ｂ遺跡では、古墳時代前期を主とする包含層から多量のクルミが出土しているが、利用の形跡が明確な資料は確認できず完形品やネズミの食痕を有するものが大半を占めていた。したがって、本遺跡の場合も補助的食料の一部にとどまると考えるべきであろう。

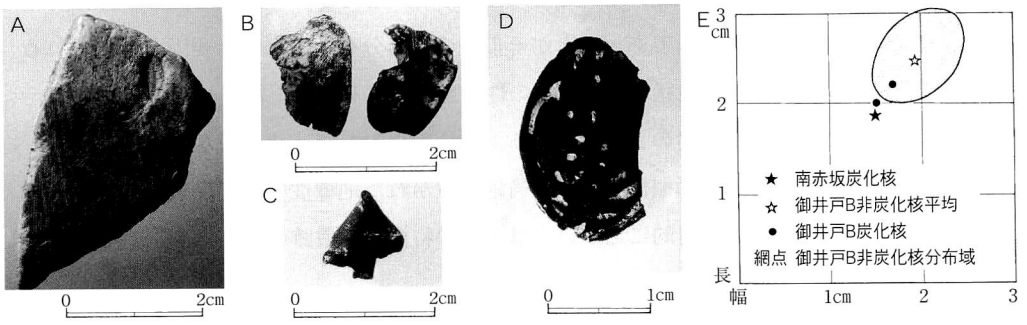
ヒシ（第107図Ｃ）　覆土から刺針１点が出土した。角田山麓においては５遺跡目の出土例である。うち４遺跡が縄文時代に属しており、弥生時代以降では初例となる。

モモ（第107図Ｄ）　住居床下（貼床）から核（内果皮）の一側縁にネズミの食痕をもつものが２個体出土した。ともに長さは1.9cm、推定幅は1.5cmである。御井戸Ｂ遺跡ではモモも多量に出土しているため、核サイズを第107図Ｅで比較した。御井戸の数値は、ランダム抽出50個体に基づいている。このうち２点の炭化物は、本遺跡の出土例と同様小型サイズに該当する。いずれも被熱による収縮が原因と考えられ、本来的には一般サイズに該当するものであろう。

比較対象とした御井戸Ｂ遺跡では、南部の低湿地から大量の土器と共に勾玉・管玉・ガラス小玉が出土した。多量のモモはこれに共伴したものである。古代のモモには呪術的な性格が備わることが知られている（大山1994）。御井戸や本遺跡の出土状態は、そうした観点からの検討も必要であろう。

B　籾痕土器

第107図Ａは、籾の全体形がうかがえる圧痕を外面にとどめる資料である。圧痕の大きさは、長さ6.4mm・幅3.9mmを測る。長幅比は1.6で、いわゆる「円粒」タイプに該当する。角田山麓の弥生～古墳時代遺跡では、御井戸Ｂ・穴口に続く３例目の稲作関連資料となる。



第107図　籾痕土器と炭化種子

Ⅲ 結 語

古墳時代の南赤坂遺跡は、西側緩斜面と東側の尾根にまたがる2800㎡程度の範囲と推定される。その広がりは縄文時代集落と重複し、前者に竪穴住居、後者の先端に大規模な削平によって平坦面を造成した「テラス遺構」が構築されていた。土器の出土量は、土師器の口端遺存資料で430個体ほどを数える。うち99％が前期に属すものである。これらは概ね４期に区分され、数量的にはⅡ～Ⅲ期（新潟シンポ編年：８期～９期）が大半を占める。

弥彦・角田山の周辺には、所属時期がある程度明らかな古墳時代集落が本遺跡を含め５箇所存在する。形成期間に着目すると、緒立・御井戸・蒲田・奈良崎の４遺跡が長期継続型、本遺跡が短期型にあたり、高見高島は両者の中間タイプとみることもできる（第５図）。継続期間の異なりは集落規模とも密接な関連があるようで、長期継続型の典型例と言える御井戸遺跡では20000㎡以上の広がりをもつことが確実である。

対照的に、本遺跡で確認された住居址数は２軒にすぎない。ともに９期に属すもので、両者に認める土器様相の異なりに基づけば、微妙な時期差も考えられる。９期における同時存在戸数は、単独もしくは多くて２～３軒というのが南赤坂の実態であろう。８期の住居については緩斜面の西半が既に失われていることを考慮に入れる必要はあるが、この時期の土器がテラス遺構とその周辺に偏る点からすれば、本来的に存在しなかった可能性もある。

古墳時代に入ると集落立地の中心は沖積地に移る。御井戸遺跡の古墳時代地区は、台地下の谷と低湿地にはさまれた微高地上に展開する。蒲田遺跡は沖積地内の微高地（埋没自然堤防）上に立地する例である。高見高島の詳細は不明であるが、やはり山麓下の沖積地に位置する点で共通する。こうした動きが水田耕作との密接な関わりのもとに進行したことは容易に推測できるところである。一方、本遺跡は縄文時代集落と同一立地を踏襲した唯一のケースに該当する。長期にわたり中心的な居住域として利用された山麓台地が、本遺跡の廃絶をもって機能を失うことは興味深い現象である。角田山東麓台地の末端斜面は急傾斜をなして沖積面に下降し、台地下一帯に後背低地（旧沼沢地）を発達させる。いわゆるガツボの堆積を認める深田の地であり、水田耕作に不向きな場所であっことがその後の集落分布を規制した要因と考えられる。南赤坂に備わる非稲作的な立地状況は、遺跡の性格を検討する上で重視すべき特徴である。

土師器の様相については前述のとおりである。遺構別にみた組成比の異なりは別として、総体的な在り方は北陸地方との類似性が強く、当地が置かれた地域性を良く反映した内容といえる。ただし異系列の資料が相対的に乏しい点は一つの特徴で、遺跡の性格に由来する現象として理解できる。

テラス遺構周辺では、８期を中心に緑色凝灰岩を石材とする管玉製作が行なわれていた。大

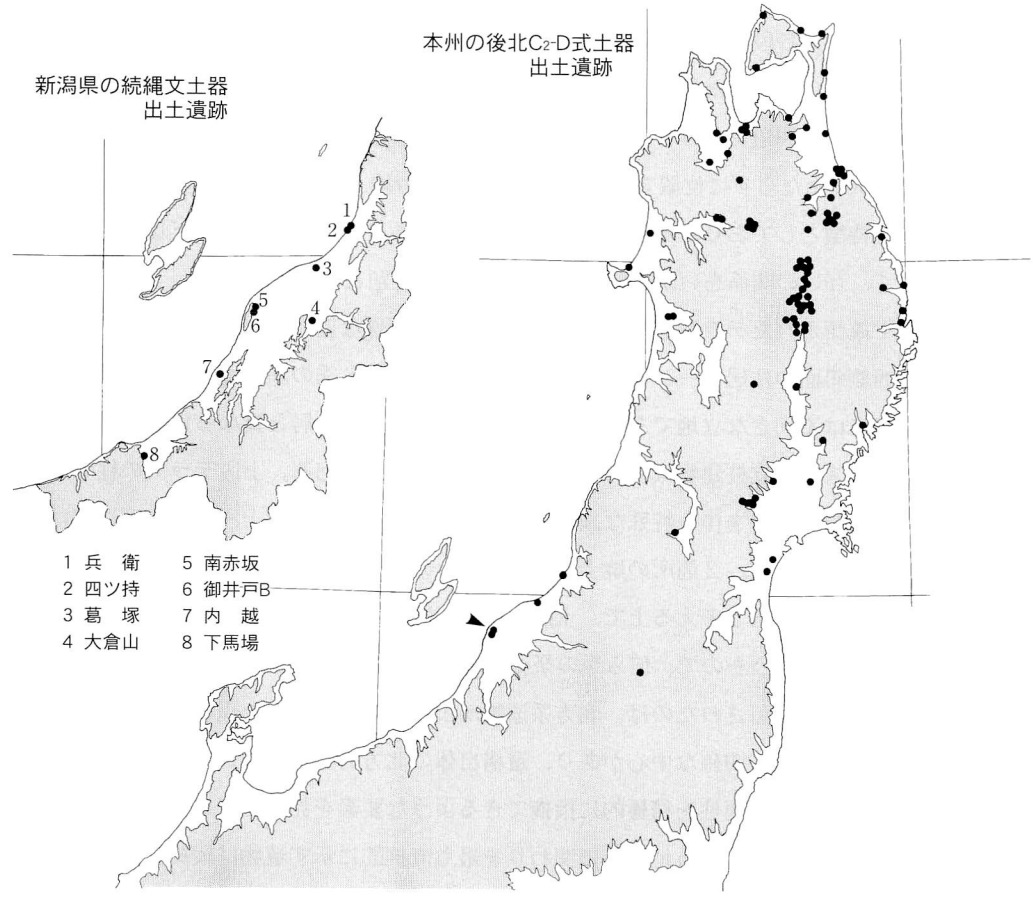
半は微細な剥片で、各段階の工程資料も数量的に限定されている。現時点では同一石材の製品が他の集落や墳墓で出土した例は確認されておらず、自給生産の枠を出るものではかろう。南赤坂は弥彦・角田山周辺における古墳時代前期の管玉製作遺跡として２箇所目の遺跡となる。他の一例は東500mたらずに位置する越王遺跡である。台地上（海抜25m）の立地と土器の極端な乏しさを特徴としており、本遺跡と時期を同じくする可能性がある。ただし使用石材の異なりは著しく、互いの関係をいかに解釈するかが今後の課題となる。

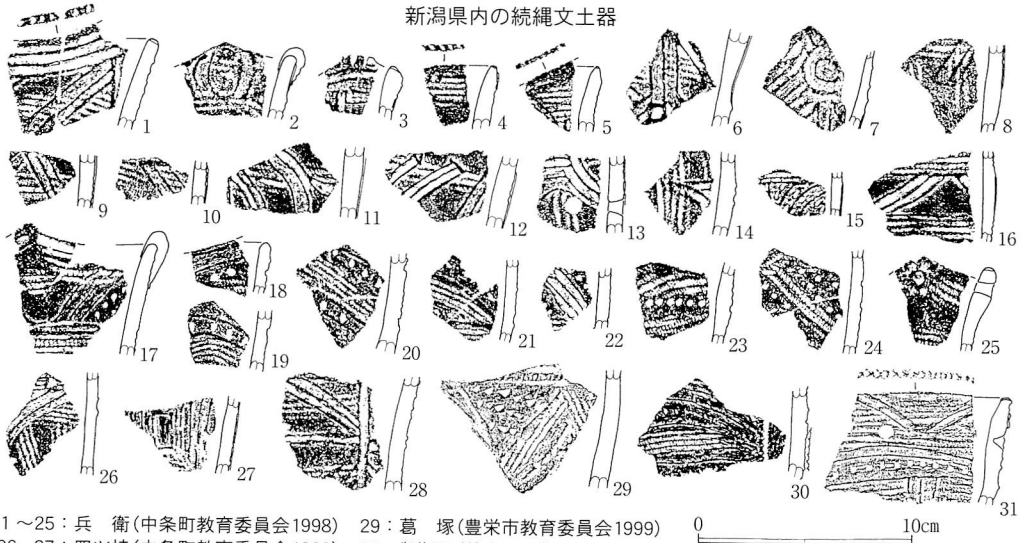
東側尾根で確認されたテラス遺構は、他に類例のない特殊な施設である。遺構が位置する尾根先端は、西側斜面の住居ゾーンとは居住環境を異にする。冬季の季節風はとりわけ厳しく、通年的な利用には不向きな立地である。２つの平坦面には一般住居と異なる建物が構築されていた。下段テラスの掘立柱建物は１号住居の規模を明らかに上回る。上段テラスの柱５対の柱穴群も２基の土坑（墓）を伴う特殊な施設である。後者の土坑埋土や上段テラス周辺では木炭が集中的に分布していた。２箇所の焼土坑を含め、火の使用が活発に行なわれる点も大きな特徴といえる。遺構の性格を考える上で、土師器の組成は重要である。小型壷・鉢・壷が目立って高い割合を示すというもので、何らかの祭祀行為が執り行われたことをうかがわせる。

今回の調査で最も注目されたのは、北方系遺物がまとまって出土した点にある。それらの分布はテラス遺構の周辺に明確な中心があり、遺構自体の北方的要素についても問題となる。しかし現時点では北との関連性を積極的に指摘できるような要素を見いだすに至っておらず、今後の検討課題としておく。北方地域との関わりを最も直接的に示す遺物は続縄文土器である。近年新潟県内ではこの種の資料の出土が相次いでいるが、東北地方で一般的な後北Ｃ２－Ｄ式中葉の土器は意外に数少なく、本遺跡を除けば豊栄市葛塚遺跡［豊栄市教育委員会1999］と近隣の御井戸遺跡で数個体が確認されているにすぎない。ともに搬入品とみられる資料である。

続縄文土器や土師器との折衷土器の主たる製作地が本遺跡内に求められることを北方系土器の項で指摘した。主体を占める１類土器は、後北Ｃ２－Ｄ式の型式的な特徴をほぼ純粋に保持するグループである。その文様要素「帯縄文」は特殊な手法によって施される。縄文の施文伝統が途絶えた当地において、間接情報だけでこれを再現するのは到底困難であり、製作手法をマスターした作り手自身との接触があったことは確実である。その在り方は、本遺跡の形成過程をつうじ長期に及んだものと推測される。続縄文土器の胎土に認めるバラエティーや折衷土器にみられる３通りもの複合パターンは、そうした状況に由来する現象であろう。３類・４類の口縁形態が在地の土師器にほとんど存在しない点からすると、折衷土器の作り手もまた北方民であった可能性が高い。

北方系土器と類した分布を示す遺物に、スクレイパーを主とする打製石器がある。石器使用の不連続性からして、これも北方文化の系譜によって理解が可能な資料である。所属時期につ





1～25：兵　衛（中条町教育委員会1998）
26・27：四ツ持（中条町教育委員会1998）
28：大倉山（前山1999）
29：葛　塚（豊栄市教育委員会1999）
30：御井戸B（前山1999）
31：内　越（新潟県教育委員会1983）

第108図　周辺の続縄文土器

いては出土状況から疑問の余地はなく、黒曜石の欠落や形態的な異なりも在地産石材の調達事情から自然に説明できる。沢田敦の教示によれば、第101図７・８では乾燥皮特有の使用光沢面が観察できるといい、打製石器の主たる使用目的が皮革製品の製作であった可能性を示唆している。時期的には若干下降するが、５世紀代の宮城県内ではラウンドスクレイパーの多出遺跡が古墳社会と接近しながら分布しており、皮革製品と鉄器等の交換をつうじた異文化交流が推定されている［吉谷・高橋2001］。本地域における鉄の供給実態は定かでないが、太平洋側と相似た形態の初期的交渉があったことも考えられる。

北方系土器や打製石器が西側緩斜面の１号住居址に弱いながらも集中する点も重要な特徴である。床面～覆土出土の土師器は９期に限定されており、テラス遺構から１号住居址への使用廃棄空間の移動が指摘できる。１号住居址出土の北方系遺物は、土器６個体と打製石器７点である。遺跡全体に占める割合は極めて低率にとどまるが、前者が17％～14％、後者が14％と近似することは注目に値する。１号住居址の保存状態は良好で、空間利用の在り方が床面遺存遺物の分布によってうかがえるほどであった。こうした状況を重視すれば、上記の数値が限定された期間における使用量をある程度反映するのではないか、という見方も成立する。

集落外への持ち出し行為がなかったと仮定すると、これに基づく本遺跡内での使用・廃棄量は６～７単位分に相当することになる。南赤坂が主として営まれた８～９期の存続期間は明らかでないが、仮に60年間前後（７期と12期の開始を３世紀後半と５世紀初頭とし、各時期の継続年数が均一であったと仮定して算出）と想定した場合、10年間程度を平均サイクルとした使用・廃棄行為を推測することもできるであろう。以上の試算から導きだされる接触形態は、北方民の長期にわたる移住といった恒常的なものでなく、数次にわたる断続的な交渉であった可能性をうかがわせる。こうした見方は、遊動性に富んだ社会とされる後北Ｃ２－Ｄ集団の居住形態［石井1997］とも調和しており、テラス遺構の立地特性をこれに関連づけて理解するすることもできるのではなかろうか。本遺跡が営まれた２時期をつうじ、北方系遺物の使用・廃棄空間が限定される点も興味深い。空間利用の変化が起こりうるほどの継続的な居住が行なわれておらず、利用目的も限られていたことが要因とも考えられるためである。遺跡が置かれた非稲作的な立地、住居軒数の乏しさ等の特異性もこれによってスムーズな解釈が可能となる。

南赤坂は、北方文化の担い手との直接的な接触を示す本州南端の遺跡である（第108図）。至近距離に位置する山谷古墳（８期）・菖蒲塚古墳（９期）は、日本海側における北限の前期古墳群にあたり、その造営は南赤坂の形成と時期を同じくする。甘粕健が指摘するように、本遺跡の成立に角田山麓の首長の積極的な関与があったことは確実であろう［甘粕1997］。しかし本地域の社会的な位置づけを具体的に論じうるほどの基礎的資料の蓄積には至っていないのが現状である。周辺遺跡の調査をつうじ、南赤坂の理解に努めることが今後の課題となる。

参考文献

相田泰臣　2002　「岩室村高見高島遺跡採集の土師器について」『越佐補遺些』第7号　越佐補遺些の会
甘粕　健　1994　「古墳時代」『巻町史　通史編上巻』　巻町
荒木勇次　1989　「11号墳の玉類について」『保内三王山古墳群』　三条市教育委員会・新潟大学考古学研究室
石井　淳　1994　「東北地方北部における続縄文土器の編年的考察」『筑波大学先史学・考古学研究』第5号
石井　淳　1997　「北日本における後北C２－D式期の集団様相」『物質文化』63　物質文化研究会
伊藤恒彦　1985　「行塚遺跡の玉造り関連遺物について」『吉井遺跡群』　柏崎市教育委員会
稲場塚古墳測量調査団　1993　「新潟県弥彦村稲場塚古墳測量調査報告」
『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』
大潟町教育委員会　1988　『丸山遺跡発掘調査報告書』
大山真充　1994　「桃」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅣ
春日真実　1994a　「古墳時代前期の土器」『一之口遺跡東地区』　新潟県教育委員会
春日真実　1994b　「山三賀Ⅱ遺跡出土の古墳時代前期土師器について」
『新潟考古学談話会会報』第14号　新潟考古学談話会
春日真実　1998　「北陸北東部の土器様相」『前期古墳から中期古墳へ』　東北・関東前方後円墳研究会
春日真実　2001　「新潟県大洞原C遺跡の弥生時代末から古墳時代初頭の土器」
『研究紀要』第３号　新潟県埋蔵文化財調査事業団
金原正明　1996　「古代モモの形態と品種」『考古学ジャーナル』№409　ニューサイエンス社
川村浩司　2000　「上越市の古墳時代の土器様相－関川右岸下流域を中心に－」『上越市史研究』　上越市
菊地徹夫　1994　「越後平野の北方系土器」『考古学ジャーナル』№371　ニューサイエンス社
木村　高　1996　「青森市玉清水（１）遺跡出土の後北式土器」『青森県考古学』第９号　青森県考古学会
黒崎町教育委員会　1983　『緒立遺跡発掘調査報告書』
小嶋芳孝　1996　「古代日本海と渤海」『考古学ジャーナル』№411　ニューサイエンス社
坂井秀弥・川村浩司　1993　「古墳出現前後における越後の土器様相」
『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』
坂井秀弥　1989　「第Ⅳ章　まとめ」『山三賀Ⅱ遺跡』　新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所
佐藤信行　1994　「東北地方南部の続縄文文化と研究史」『北日本続縄文文化の実像』　縄文文化検討会
三条市教育委員会・新潟大学考古学研究室　1989　『保内三王山古墳群』
関　雅之　2001　「新潟県新発田市馬見坂遺跡出土の土師器－阿賀北地域の7世紀の土器様相とその意義－」
『北越考古学』第12号　北越考古学研究会
田嶋明人　1986　「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人　1994　「北陸南西部の古墳確立期の様相」『東日本の古墳の出現』　山川出版社
豊栄市教育委員会　1999　『葛塚遺跡』
中条町教育委員会　1998　『兵衛遺跡・四ツ持遺跡』
中条町教育委員会　2002　『大塚遺跡第2次』
新潟県教育委員会　1983　『内越遺跡』
新潟県教育委員会ほか　1989　『新潟県埋蔵文化財調査報告書第53集』　山三賀Ⅱ遺跡
長 岡 市　1993　『長岡市史　資料編１考古』
前山精明　1999　「続縄文」『新潟県の考古学』　高志書院
巻町教育委員会・新潟大学考古学研究室　1993　『越後山谷古墳』
室岡博・関雅之　2001　「新潟県中頸城郡柿崎町大久保遺跡出土の古墳時代後期の土器－土師器の製作技法と
編年的位置について－」『柿崎町の歴史(町史研究)』第一集　柿崎町史編さん委員会
盛岡市教育委員会　1997　『永福寺山遺跡』
吉谷昭彦・高橋誠明　2001　「宮城県における続縄文系石器の意義と石材の原産地同定」
『宮城考古学』第3号　宮城県考古学会
吉田町　2000　「夷塚遺跡」『吉田町史　資料編１　考古・古代・中世』
日本考古学協会新潟大会実行委員会　1993　『東日本における古墳出現過程の再検討』

古　代

前平野窯跡出土の須恵器

古代の概要

●形成時期　奈良・平安時代（８世紀末～９世紀前半主体）

●主な遺構　カマドをもたない竪穴住居址（８世紀末～９世紀前半）１軒

●遺　　物　土師器：煮炊具（甕・鍋）主体
須恵器：占有率が低く、在地窯主体

●遺跡の性格　８世紀末～９世紀前半は散村的形態の居住地として利用された。
利用目的は山麓部ならではの活動に限定された可能性が高い。
11世紀後半～12世紀前半の小皿が小範囲からまとまって出土し、
非日常的な空間として再利用されたことがうかがえる。

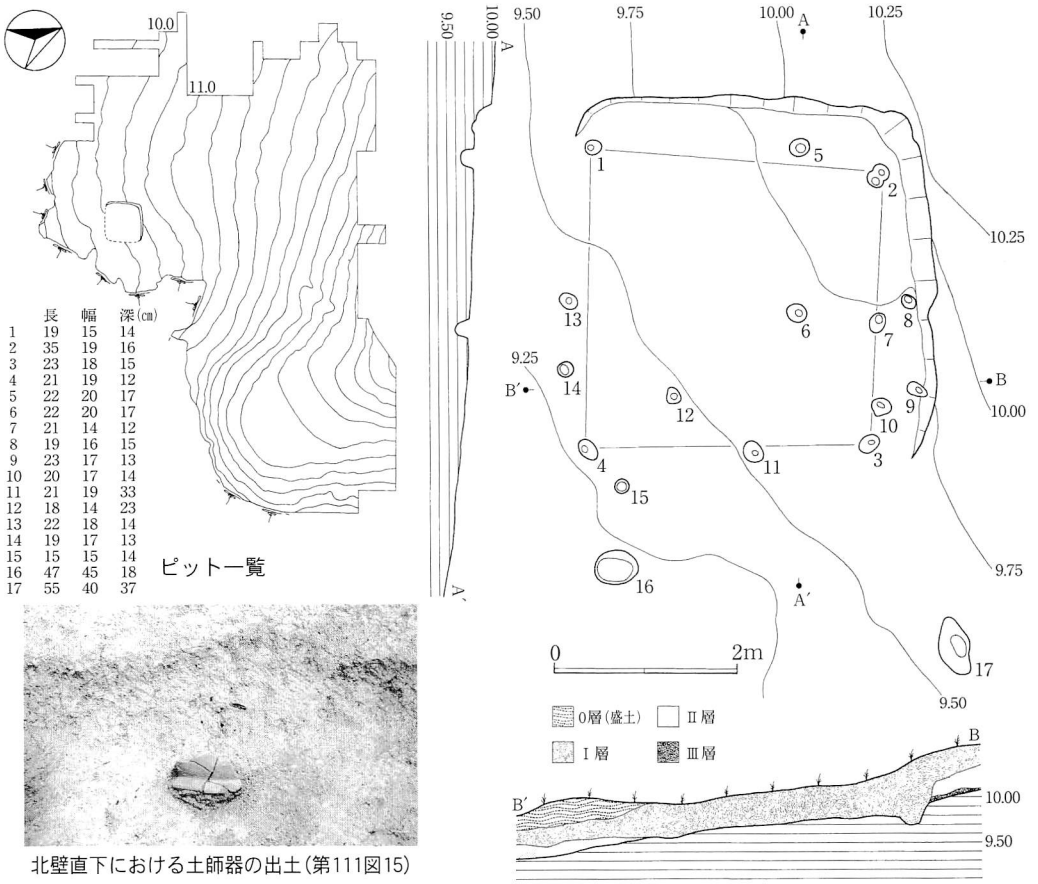
カマドをもたない竪穴住居（２号住居址）

Ⅰ　遺　構

西側斜面の東端付近、海抜９m～10mの緩傾斜地から竪穴住居址１軒とピット２基を確認するにとどまった。これらは互いに５m以内に近接しており、単独もしくは２軒程度の住居からなる散村的な居住地形態をなした可能性を示唆する。

２号住居址（第109図）

方形プランの住居である。西壁と北壁のみが遺存しており、前者は一辺3.6m、後者は3.3m以上を有する。壁面の最大高は、北壁で40cm、西壁で20cm程度を測る。内部には小ピットが分布するのみで、炉址やカマドは確認できなかった。小ピットの深度は何れも10cm台である。このうち、南西・北西コーナーのNo.１・２と東側の３・４が柱穴と考えられる。柱の間隔は、東西3.1m～3.4m・南北3.2mほどで、住居の全体規模は一辺4.5m程度と推定される。なお、本遺構の覆土にⅡ層は存在しておらず、土壌の堆積環境が遺跡内で変化したことを物語る。



	長	幅	深(cm)
1	19	15	14
2	35	19	16
3	23	18	15
4	21	19	12
5	22	20	17
6	22	20	17
7	21	14	12
8	19	16	15
9	23	17	13
10	20	17	14
11	21	19	33
12	18	14	23
13	22	18	14
14	19	17	13
15	15	15	14
16	47	45	18
17	55	40	37

ピット一覧

北壁直下における土師器の出土（第111図15）

第109図　２号住居址と周辺ピット

Ⅱ 遺 物

該期の遺物としては土師器と須恵器があり、口端遺存個体集計にして土師器70個体、須恵器７個体の出土がある。また土師器小皿を除いた口縁部計測値では、土師器が87.3％、須恵器が12.6％である。２号住居址に伴う資料としては、甕１個体（15）が出土している。他はすべて包含層からの出土であるが、遺物の分布は２号住居址の東に集中して認められる（第110図右上)。また、小皿がＥ-４区からまとまって12個体分出土している。

１．土器各説

A 土師器（第110・111・113図）

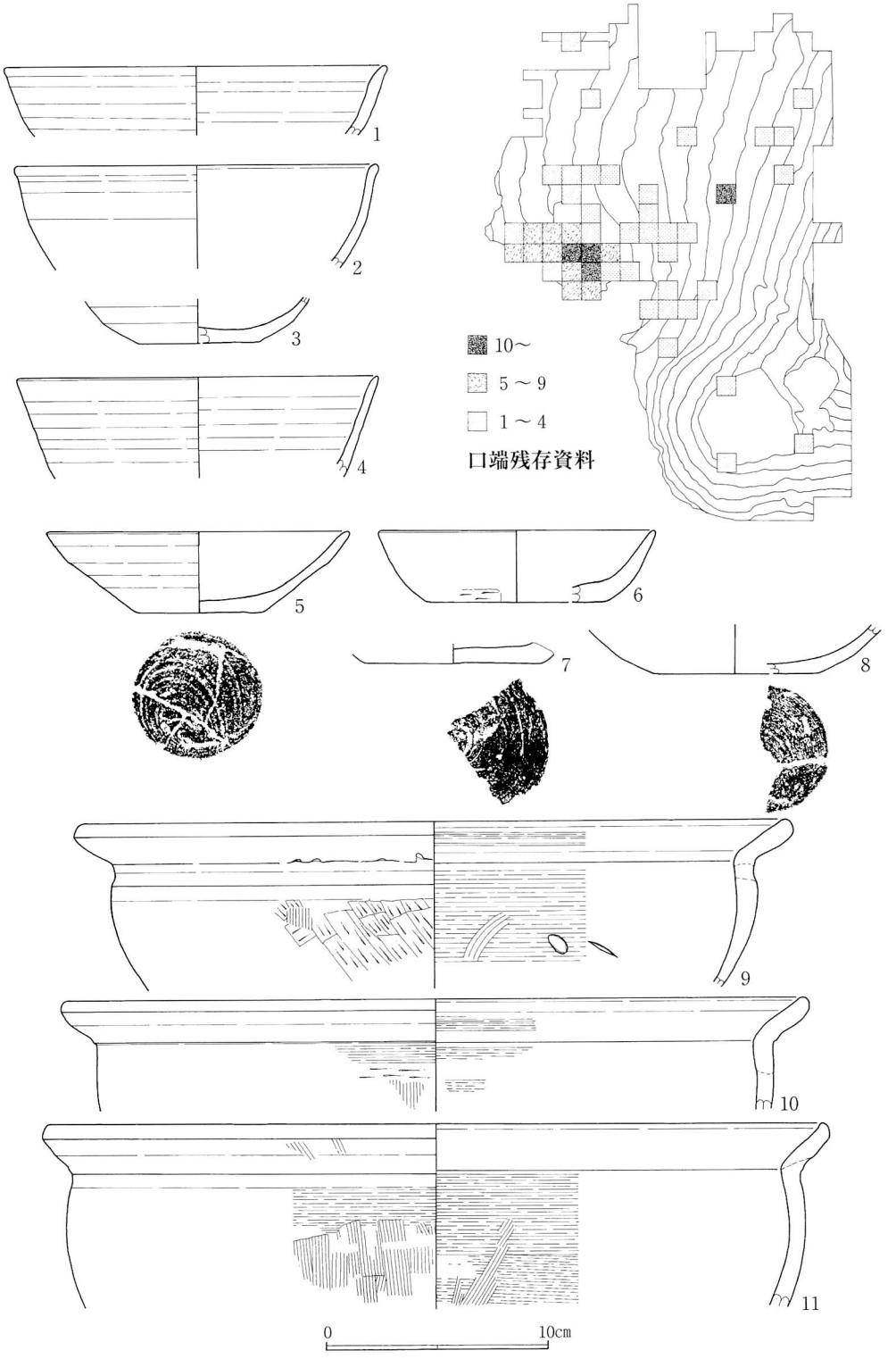
無台椀（第110図１・４～８）　１は内湾気味の体部から口縁端部がわずかに外傾する。内外面ロクロナデ。４は体部から口縁端部まで直線的にのびる。内外面ともロクロナデはしっかりしている。５は直線的な体部から屈折したのち短い口縁部が直線的に外側へのびる。底部は回転糸切り痕を残す。外面のロクロナデはしっかりしている。ロクロは右回転。６は身の浅いもので、大きな底部から体部は内湾して立ち上がる。外面の体部下位から底部にかけてヘラケズリ。７は底部ヘラ切り。８は回転糸切り。ロクロ方向は右回転。

黒色無台椀（第110図２・３）　２・３ともに外面はナデのち横位のヘラミガキ、内面は横位のヘラミガキのち黒色処理される。２の口縁端部は若干肥厚して短く外にでる。２・３は同一個体の可能性が高い。

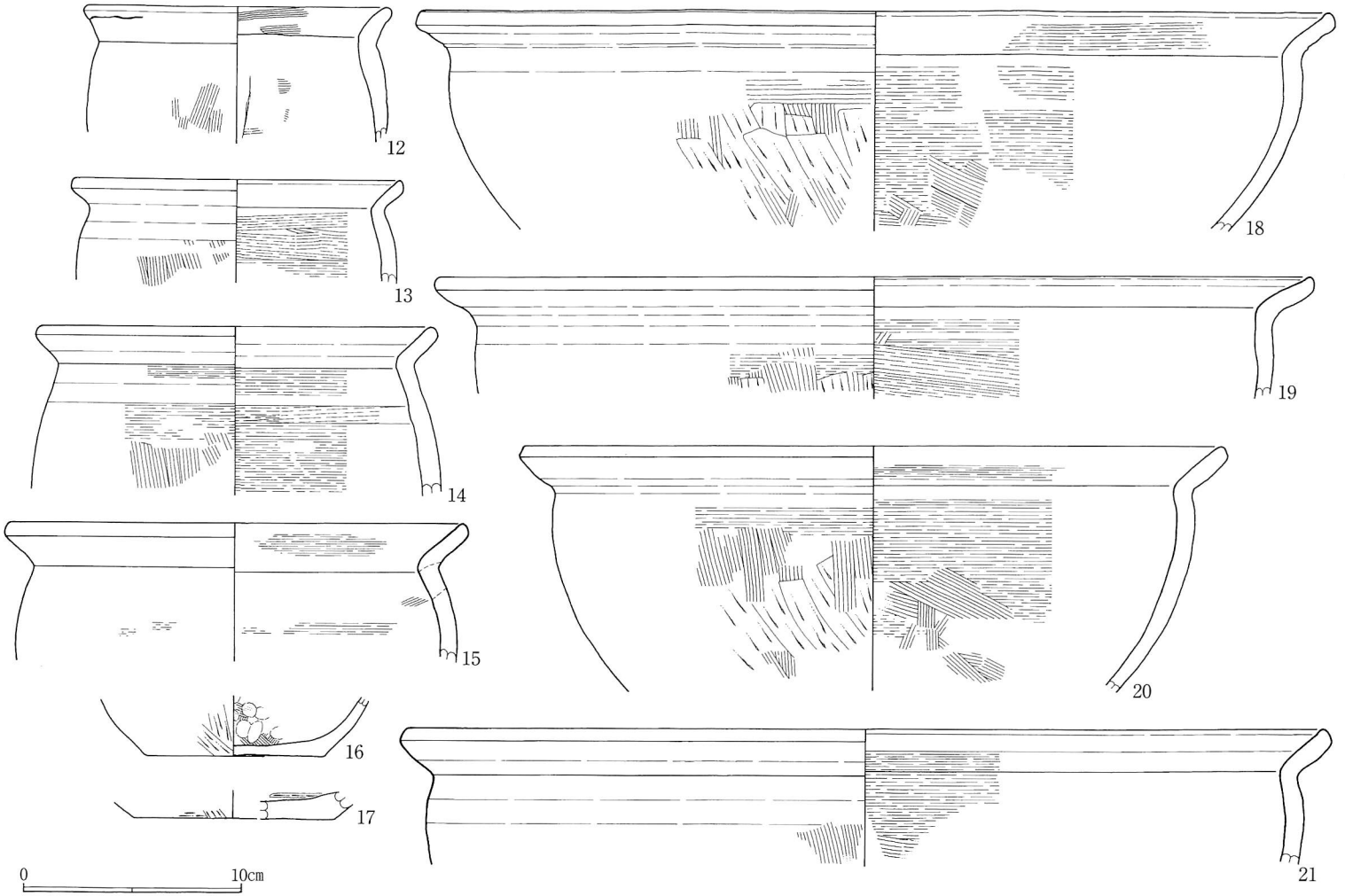
鍋（第110図９～11・第111図18～21）　９・11・18・19・20はいずれも内外面カキ目のち外面はハケ・ヘラケズリ調整、内面はハケ調整が施される。口縁部はすべて内湾する短いもので、口縁端部が上方に摘み上げられるように収まるもの（９・11・18・19・21）が多い。図示していないものの口縁部も大半が同様の形態である。

甕（第111図12～17）　ロクロ成形のもの（13～15）とロクロを使用していないもの（12）とがある。底部は16・17ともに体部の下位外面でヘラケズリが確認できる。15は器面の磨滅が激しいが、内外面にカキ目が認められる。２号住居跡の床面からの出土である。16の器壁は薄く、内面はハケ調整ののち指頭で調整されている。

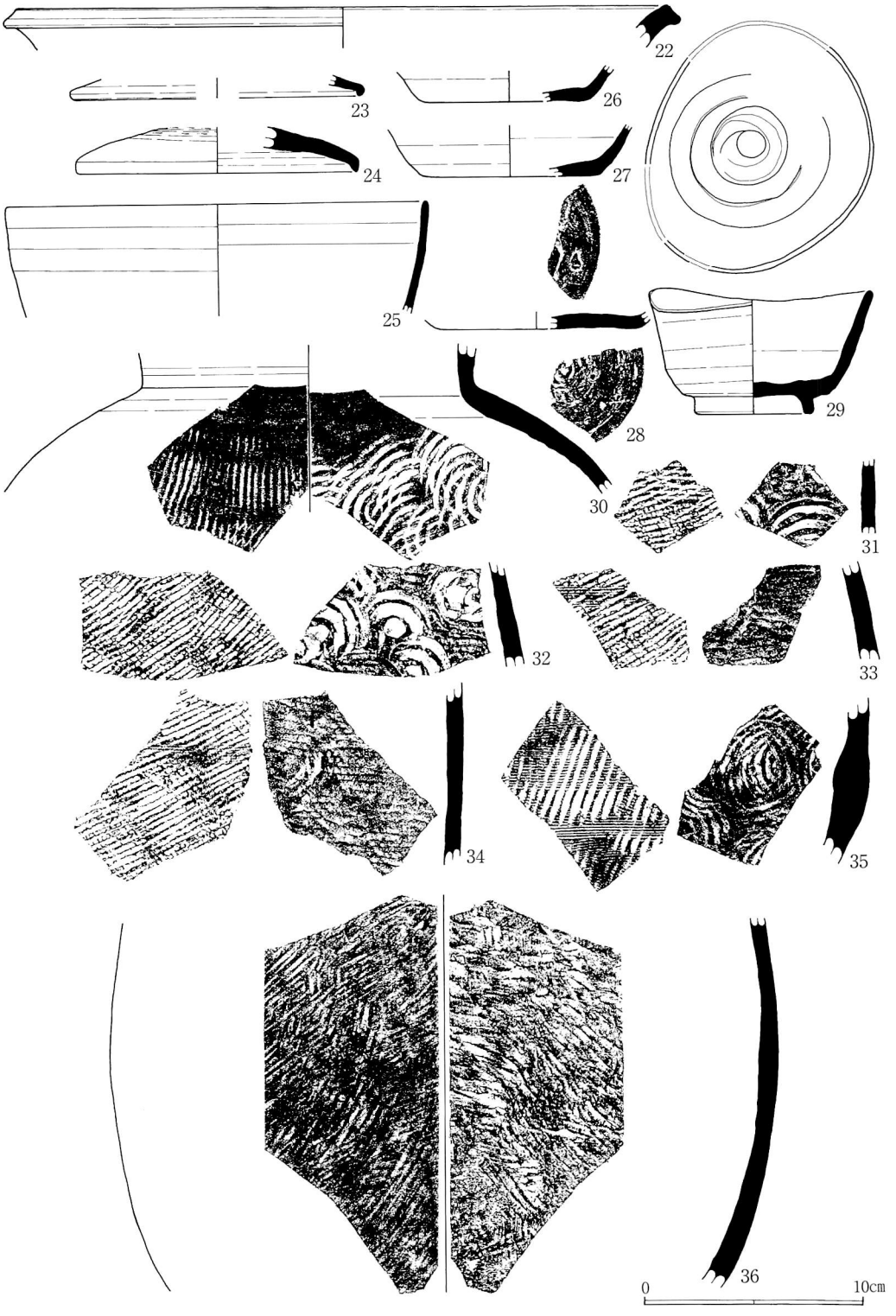
小皿（第113図37～45）　いずれもロクロ成形で、回転糸切りのちナデ調整が行われている。37は口径11.4cmで底部を欠損する。38は口径10cm、器高2.3cmを計る。41、42、44は柱状の高台が付くもので、高台の裾部は若干外へ広がりを持つ。また42と43の底部外面には５～10㎜程の不定形な穴が認められ、品田がロクロ台上の突起物の痕跡と推測した小孔［品田1992］にあたる可能性がある。このような痕跡は分水町の有馬崎遺跡でも確認できる（第113図46)。



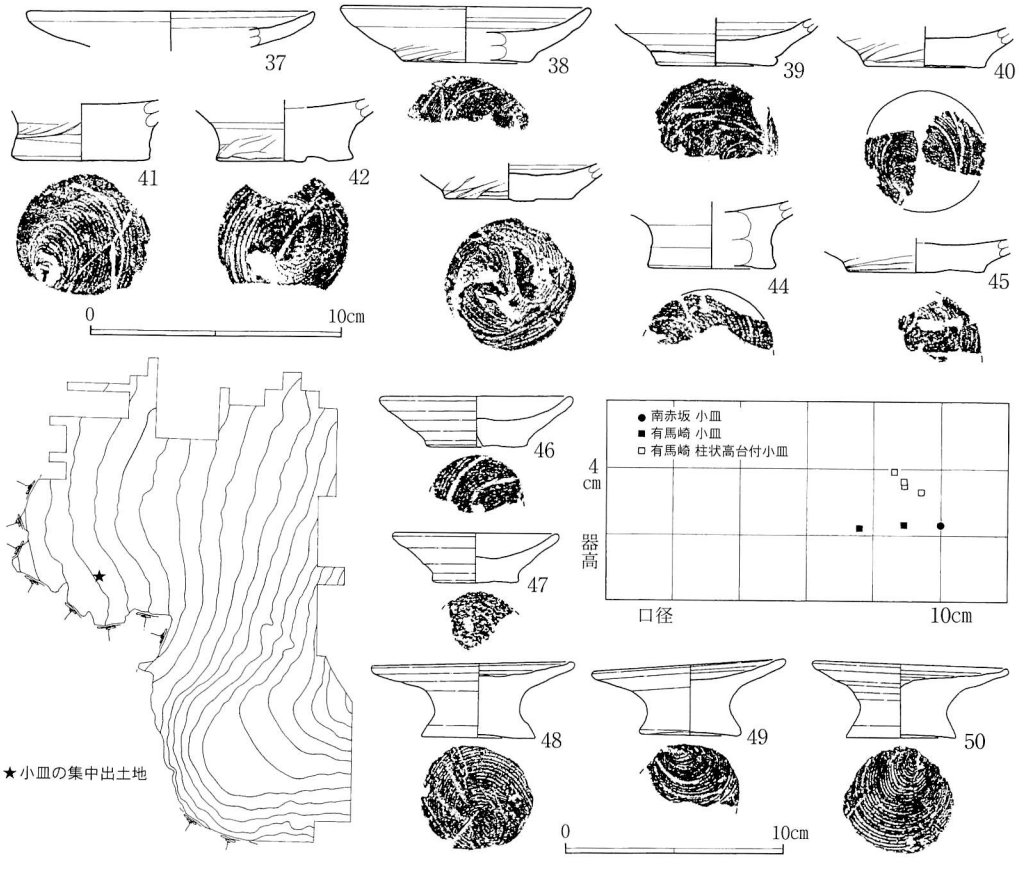
第110図　土師器－1



第111図　土師器－2



第112図　須 恵 器



第113図　土師器－3　(46～50：有馬崎遺跡出土)

なお41の皿部内面は黒色処理が行われている。

B　須恵器（第112図22～36）

坏蓋（23・24）　23・24ともに端部は丸みをもって収まる。24の天井部は確認できる範囲では約7㎜と比較的幅の狭い回転ヘラケズリを行う。

無台坏（26～28）　26・27は回転ヘラ切りで、その後ナデ調整を行っている。27は底部内面にもナデが認められる。28は白色の色調で2次焼成前のものである。回転ヘラ切り。

有台坏（25・29）　25は底部を欠くが、体部・口縁部の形態から深身の有台坏と考えられる。29は器形の歪みが激しいが、径高指数は約54と小振りで器高は高めである。体部上・中位外面はロクロナデ、体部下位外面はヘラケズリ痕が確認できる。底部外面は回転ヘラ切り痕を残す。内面は器面の磨滅が激しい。また、比較的高い高台が中央よりに付いている。高台は方形を呈し、内端が比較的シャープで外端は丸みを帯びる。内外面には自然釉が付着している。ロクロは右回転。

甕（22・30～36）　30の外面は格子タタキを縦方向に移動しており、上方はロクロナデに、

中は帯状のナデに切られている。内面は時計回方向で同心円の当て具痕が認められる。また内面では体部と口縁部の色調が異なっており接合が明瞭にわかる。31～36の外面はいずれも格子文のタタキ目が認められる。内面は同心円文ののち平行線文の当て具痕を残すものが多い。

2．土器の位置づけ

ここでは、出土遺物の年代について述べる。年代の比定にあたっては巻町を含む西蒲原郡の資料を用いた春日の編年案［春日2000］に沿って記述を行う。

須恵器では24の坏蓋と29の有台坏が形態から古代Ⅳ２期から古代Ⅴ期に比定できる。また全体の形態はわからないが、25の有台坏や26・27の無台坏も古代Ⅴ期の古い時期を中心とした時期のものと推測される。土師器では甕・鍋ともに西古志型のものが多く認められる。それらは口縁部の形態がおおむね類似することから、それほど時期幅は無いと推測される。西古志型甕は古代Ⅳ１期にその原型が出現し、古代Ⅵ期以降減少していくと考えられており［春日2001］当遺跡の煮炊具の大半も古代Ⅳ２期から古代Ⅴ期に位置付けられよう。また、６の無台坏は形態から古代Ⅴ期頃と推測される。

以上、出土した資料の多くは古代Ⅳ２期から古代Ⅴ期を中心とする時期に比定できる。なお須恵器では、26・27以外で確実に小泊窯産に比定できるものは無く、その低い割合もその時期と矛盾しない。２号住居址出土の甕（15）も口縁部の形態からこの時期のものであると推測する。ただし、２の内面黒色処理の椀は形態から古代Ⅴ期の後半から古代Ⅵ期の前半頃の間に、４の無台坏は器壁が薄く直線的

	春日(2000)	春日(1999)	田嶋(1988)	坂井(1989)
	古代Ⅳ１期	Ⅳ１期	Ⅳ１期	Ⅱ２期
800	古代Ⅳ２期	Ⅳ２期	Ⅳ２期(古)	Ⅲ１期
		Ⅳ３期	Ⅳ２期(新)	Ⅲ２期
	古代Ⅴ期	Ⅴ１期	Ⅴ１期	Ⅳ１期
		Ⅴ２期	Ⅴ２期	Ⅳ２期
	古代Ⅵ１期	Ⅵ１期	Ⅵ１期	
	古代Ⅵ２期	Ⅵ２期	Ⅵ２期	
900	古代Ⅵ３期	Ⅵ３期	Ⅵ３期	
	古代Ⅶ期	Ⅶ１期	Ⅶ１期	
		Ⅶ２期	Ⅶ２(古)期	
1000		Ⅶ３期	Ⅶ２(新)期	
	古代Ⅷ期		中世１-Ⅰ期	
		Ⅷ期(古)	中世１-Ⅱ1期	
1100		Ⅷ期(新)	中世１-Ⅱ2期	
	中世Ⅰ期		中世２-Ⅰ期	
1200				

第11表　古代編年対応表（春日2000から一部抜粋）

にのびる深めの形態から古代Ⅴ期の後半以降と考えられる。また、５の無台坏は口縁部中程で屈曲する点や、切り離しが糸切りで行われている点などから古代Ⅶ期頃と推測される。このように、少数ではあるものの古代Ⅴ期以降と考えられるものも存在する。

また土師器の小皿は、いずれもロクロ成形で回転糸切りのちナデ調整が行われており北陸系のものである［品田1991．1997］。口径が小さく器高が低い形態や、柱状高台の小皿が定量認められる点などは、古代Ⅷ期に位置付けられている有馬崎遺跡の様相に近い。ただし有馬崎遺跡の資料と比べ、口径が若干大きく（図113）、柱状高台の裾の広がりが弱い。

土器観察表

凡　例

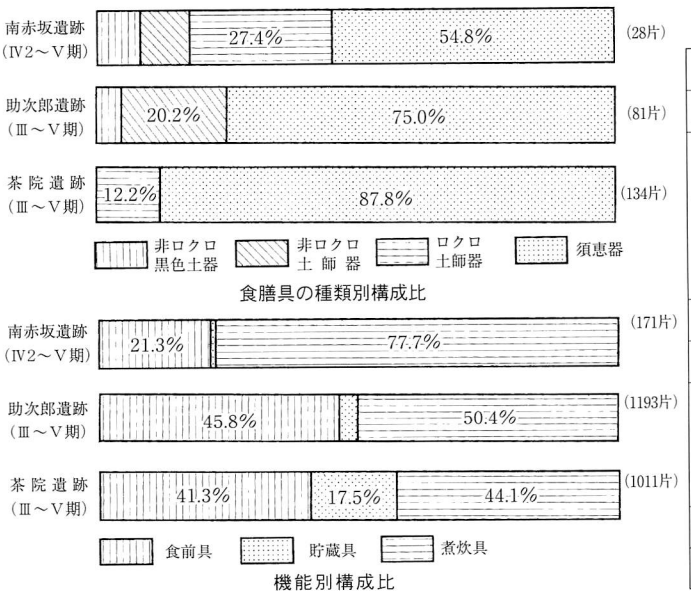
1．法量に関してはｃｍ単位である。「口」は口径、「底」は底径、「高」は器高を表す。
2．遺存については最も遺存率が高い箇所の径における残存率を示している。
3．手法の項目では土器の調整を中心に示した。手法と備考の項目では土器の部位、調整について下記のように略した。
　口縁部→口　体部→体　底部→底　内面→内　外面→外　上位→上　中位→中　下位→下　ﾍﾗﾐｶﾞｷ→ﾐｶﾞｷ　ﾍﾗｹｽﾞﾘ→ｹｽﾞﾘ　ﾊｹﾒ→ﾊｹ

No.	種別	器種	法量	遺存	手法	備考	出土区
1	土師	無台椀	口16.7	1/12	内外ロクロナデ		E-4-m
2	土師	無台椀	口15.9	1/18	内ミガキ　外一部赤色塗彩	292と同一個体か　内黒色	E-4-q①
3	土師	無台椀	底7.1	底1/4	内ミガキ	291と同一個体か　内黒色	E-4-q②
4	土師	無台椀	口15.9	1/9	内外ロクロナデ		E-4-u①ほか
5	土師	無台椀	口13.3高3.6底5.6	底略完	底内ミガキ	回転糸切り	E-4-m
6	土師	無台椀	口12.3高3.1底8.0	底1/4	体部下ケズリ	ヘラ切り？	E-4-f
7	土師	無台椀	底7.9	1/6		回転ヘラ切り	D-5-j
8	土師	無台椀	底5.3	底1/2		回転糸切り	D-4-w③
9	土師	鍋	口31.2	体1/12	体外ケズリ一部ハケ　内カキ目後ハケ		D-4-r②
10	土師	鍋	口32.8	口1/12	体外カキ目・ハケ　体内カキ目		D-4-o④
11	土師	鍋	口34.5	1/8	外ﾊｹ目のち縦ハケのち一部ナデ　内カキ目後ハケ		E-4-k④
12	土師	甕	口13.5	体1/6	口・体内外ハケ	非ロクロ	E-4-k
13	土師	甕	口14.7	口1/6	体外ハケ一部ナデ　体内カキ目		E-4-g①ほか
14	土師	甕	口17.6	口2/9	体外カキ目のちハケ　体内カキ目		E-4-b③ほか
15	土師	甕	口20.5	口1/5	口内・体内外カキ目	2号住居址床面出土	D-2-y
16	土師	甕	底8.1	底1/4	外ケズリ　内ハケのち指圧	非ロクロ	E-4-p②
17	土師	甕	底8.9	1/4	外ケズリ　内ケズリ・ナデ	非ロクロ	E-4-l
18	土師	鍋	口40.6	体1/6	体外カキ目のちハケ・ケズリ　口・体内カキ目のちハケ		D-4-o①ほか
19	土師	鍋	口39.1	1/12	体外カキ目のちハケ・ケズリ　体内カキ目のちハケ		E-4-f
20	土師	鍋	口31.3	口1/6	体外カキ目・ケズリのちハケ　体内カキ目のちハケ		E-4-k③
21	土師	鍋	口41.1	体1/12	体外ハケ　体内カキ目のちハケ		E-4-k
22	須恵	甕	口30.0	1/9	内外ロクロナデ		E-4-u②
23	須恵	坏蓋	口13.2		内外ロクロナデ		E-5-a
24	須恵	坏蓋	口12.7	1/6	内外ロクロナデ　天井部ロクロケケズリ		C-2-h
25	須恵	有台坏	口19.3	1/12	内外ロクロナデ		E-4-m
26	須恵	無台坏	底7.6	底1/4		底外回転ヘラ切りのちナデ　小泊産	D-5-eほか
27	須恵	無台坏	底8.1	底2/9	底内ナデ	底外回転ヘラ切りのちナデ　小泊産	E-4-u　E-5-d・f
28	須恵	無台坏	底9.2	1/6	底内ナデ	回転ヘラ切り　１次焼成	D-2-q
29	須恵	有台坏	口10.3高5.6底5.4	底完	外体下ロクロケズリ	歪み大　内外自然釉	C-2-t①ほか
30	須恵	甕		口1/6	外平行タタキのち帯状ナデ　内同心円当て具		G-2-k
31	須恵	甕			外格子タタキ　内同心円当て具・平行当て具		D-4-p
32	須恵	甕			外格子タタキ　内同心円当て具		E-4-u　E-5-d・f
33	須恵	甕			外格子タタキのち一部カキ目　内平行当て具		D-4-j①
34	須恵	甕			外格子タタキのち一部カキ目・ナデ　内同心円当て具のち平行当て具		E-4-u　E-5-d・f
35	須恵	甕			外格子タタキのち一部カキ目　内同心円当て具のち平行当て具		不明
36	須恵	甕		1/6	外平行タタキ　内同心円当て具のち平行当て具		G-2-k
37	土師	小皿	口１１．４	口1/6	体内外ロクロナデ	底外回転糸切り	E-4-k③
38	土師	小皿	口10.0高2.3底5.0	口1/6	体内外ロクロナデ	底外回転糸切り	E-4-k③
39	土師	小皿	底4.6	底1/4	体内外ロクロナデ	底外回転糸切り	E-4-k③
40	土師	小皿	底４.７	底1/8	体内外ロクロナデ	底外回転糸切り	E-4-p
41	土師	柱状高台小皿	底５.４	底5/6	体内外ロクロナデ	底外回転糸切り	E-4-k③
42	土師	柱状高台小皿	底５.４	底5/6	体内外ロクロナデ	底外回転糸切り	E-5-f
43	土師	小皿	底５.２	底5/6	体内外ロクロナデ	底外回転糸切り	E-4-k③
44	土師	柱状高台小皿	底５.１	底1/12	体内外ロクロナデ	底外回転糸切り	E-4-p
45	土師	小皿	底５.４		体内外ロクロナデ	底外回転糸切り	E-4-p

Ⅲ 結 語

確認された住居址は１棟である。住居址は低い台地の先端部のなだらかな斜面に位置している。これに伴う遺物は床面から出土した甕１個体であり詳細な時期比定は困難であるが、周辺から出土した土器からは８世紀末から９世紀前半頃のものと考えられる。遺物の分布からは２号住居址の東側に他の竪穴住居址が存在した可能性もあるが、いずれにせよ立地や出土した遺物量からして小規模な集落であったことが推測される。中郷村の横引遺跡でも台地先端部の局所的な部分に規模は不明であるものの住居址が２棟認められており［小池1996］、遺跡の立地や規模など類似した様相をもっている。また、２号住居址の復元面積は約20㎡の竪穴住居でカマドを持たない。県内の該期の竪穴住居ではカマドを持つものが一般的であるが、カマドを持たない竪穴住居も少数ながら認められる。ちなみに山三賀Ⅱ遺跡ではカマドを持たない竪穴住居は20㎡以下の小型のものに限定されている［坂井1989］。

口縁部計測値における出土土器の構成比率に関しては、食膳具中で須恵器の占める割合は54.8％である。また機能別に見ると、煮炊具（甕・鍋）が全体の77.7％を占め、食膳具は21.3％である。大半が包含層出土のものであるため、ある程度の年代幅が推測されるものの、前述したようにその多くは古代Ⅳ２期から古代Ⅴ期を中心とした時期に収まるものと考える。近隣で該期の器種組成をうかがえる例としては、平野部に位置する助次郎遺跡と茶院遺跡がある［春日2000］。これらと比較した場合、食膳具における須恵器の占める割合が低いことや、煮炊具



114図　土器の構成比

	口縁部計測値(破片数)	割合
土師器		
坏	31(14)	7.9%
非ロクロ内黒坏	7(3)	1.8%
ロクロ甕・鍋	301(141)	76.4%
非ロクロ甕	5(2)	1.3%
小　計	344(160)	87.3%
須恵器		
坏身	39(7)	9.9%
坏蓋	7(3)	1.8%
甕	4(1)	1.0%
小　計	50(11)	12.7%
計	394(171)	100.0%

第12表　南赤坂遺跡器種構成比率

の比率の高いことなどが当遺跡の特徴としてあげられる（第114図参照）。

以上のような小規模な居住形態や立地、カマドを持たない住居址、土器の構成比率などは、山麓部の集落の特徴として捉えることができる。と同時に新たな流通体制への過渡期における角田山麓の在来の集落の一端をも示していると推測され、その在り方が注目される。また、西古志型の煮炊具が角田山北麓の砂丘地や平野部同様、山麓部でも定量認められ、島崎川周辺地域との関係をうかがうことができる［春日2000、2002］。

他では土師器小皿のまとまった出土が注目される。同時期の似たような出土例としては、当遺跡と地形的に類似した国上山麓の分水町有馬崎遺跡があげられる［分水町教育委員会1997］。報告者は何らかの使用行為の後一括して廃棄された資料と考えている。土師器皿を非日常的なものとする考え［河野1986など］からは、当遺跡や有馬崎遺跡など山麓部からまとまって廃棄したと考えられる出土状態は当時の習俗を考える上で注目される。

参考文献

春日　真実　1999　「土器編年と地域性」『新潟県の考古学』　高志書院

春日　真実　2000　「第５章　まとめ」『吉田町史　資料編１　考古・古代・中世』　吉田町

春日　真実　2001　「第Ｖ章　Ｃ．土器群の変遷と年代」『梯子谷窯跡』　新潟県教育委員会

春日　真実　2002　「古代古志群の考古学的検討―在地勢力の動向を中心に―」『新潟考古学談話会会報』第24号　新潟考古学談話会

河野真知郎　1986　「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古』21　神奈川考古同人会

小池　義人　1996　「第Ⅵ章　まとめ」『横引遺跡　籠峰遺跡　柳平遺跡』　新潟県教育委員会

坂井　秀弥　1989　「第Ⅳ章　まとめ」『山三賀Ⅱ遺跡』　新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所

品田　高志　1991　「越後の中世土師器－編年的研究の現状と課題－」『新潟考古学談話会会報』第８号　新潟考古学談話会

品田　高志　1992　「柏崎市・北田遺跡出土土器をめぐって－中世成立期における土器の一様相－」『新潟考古学談話会会報』第９号　新潟考古学談話会

品田　高志　1997　「越後国における土師器の変遷と諸相」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』　北陸中世土器研究会

田嶋　明人　1988　「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』　北陸古代土器研究会

分水町教育委員会　1997　『有馬崎遺跡』

報告書抄録

ふりがな	みなみあかさかいせき
書名	南赤坂遺跡　－縄文時代前・中期・古墳時代前期を主とする集落跡の調査－
シリーズ名	
編著者名	前山精明・相田泰臣
編集機関	巻町教育委員会
所在地	〒953-0041　新潟県西蒲原郡巻町大字巻甲2690-1 TEL　0256-72-3131
発行年月日	2002年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南赤坂遺跡	新潟県西蒲原郡 巻町大字竹野町 字南馬坂4348番地	39	38	37° 45′ 52″	138° 51′ 46″	19930412 ～ 19971227	1154㎡	農地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南赤坂遺跡	集落跡	縄文時代前・中期 古墳時代前期 奈良・平安時代	縄文時代 掘立柱建物１棟 陥穴状土坑１基 埋設土器　２基 古墳時代 竪穴住居址２棟 テラス遺構 古代 竪穴住居址１棟	縄文時代 縄文土器 礫石錘 磨石・敲石類 磨製石斧 砥石 の字状垂飾 古墳時代 土師器 北方系土器 管玉 打製石器 古代 土師器・須恵器	縄文時代 磨製石斧・垂飾の製作 古墳時代 続縄文文化との接触確認

2002年3月発行

南赤坂遺跡

—縄文時代前期～中期・古墳時代前期を
主とする集落跡の調査—

発　行　新潟県西蒲原郡巻町
巻町教育委員会

印　刷　新潟県西蒲原郡巻町
北洋印刷株式会社